鹿首モリガフチ遺跡

能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書II

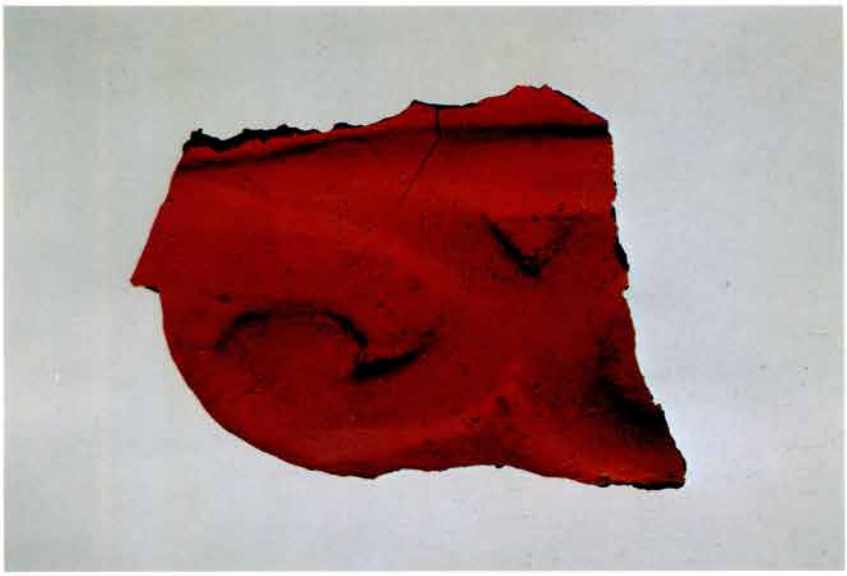
1984

石川県立埋蔵文化財センター

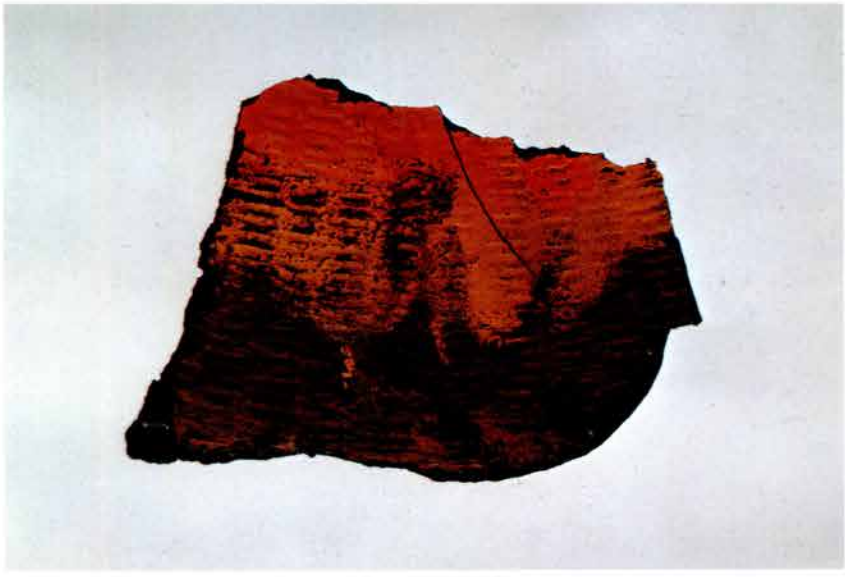
鹿首モリガフチ遺跡

能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書II

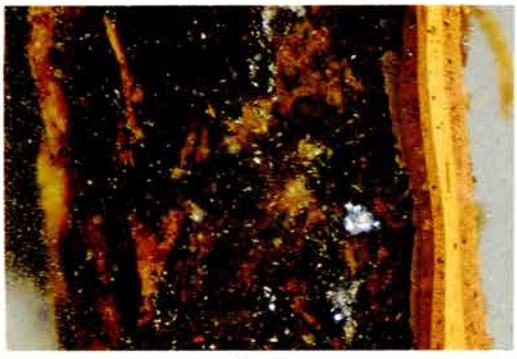
石川県立埋蔵文化財センター



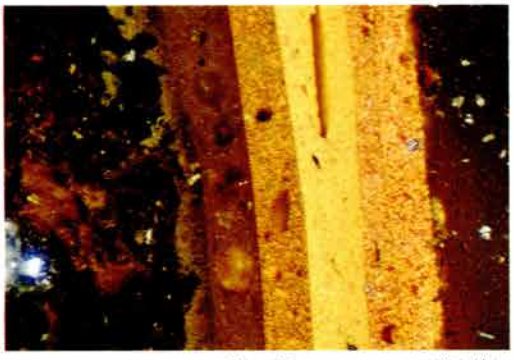
文様面



裏　面



断　面　（50倍）



断　面　（200倍）

鹿首モリガフチ遺跡Ｐ４Ｇ区出土籃胎漆器　　撮影：奈良国立文化財研究所

T 18区出土
台付鉢

P 4 G区出土
高杯

鹿首モリガフチ遺跡出土彩文土器

例　　言

1　本書は、能登海浜道建設工事に関する埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書第II集である。

2　本書に収録したのは、石川県羽咋郡志賀町に所在する鹿首モリガフチ遺跡の遺構と遺物（自然遺物・木器をのぞく）である。

3　調査は、石川県土木部有料道路課の委託を受けて、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

4　調査はセンター職員中島俊一・谷内尾晋司・浜野伸雄が担当し、全般にわたって土肥富士夫氏（石川考古学研究会会員）の指導を受けた。

5　調査にあたって、次の諸機関および個人の指導と援助を受けた。記して謝意をのべる。

石川考古学研究会・志賀町教育委員会・志賀町上棚地区・同矢駄地区・同倉垣地区・同安津見地区・石川県有料道路建設事務所・高堀勝喜・桜井甚一・浜岡賢太郎・雄谷助市郎・中越照次・津田耕吉（以上石川考古学研究会々員）・田中孝典・橋本郁也（以上大阪経済法科大学生）・木村昌宏・長沢豊文（以上奈良大学生）・越坂一也（国学院大学生）・木立雅郎（立命館大学生）・垣内光次郎（立正大学生）・久田正弘（明治大学生）・坂下隆光（奈良大ＯＢ）

6　遺物の整理は石川県埋蔵文化財協会に委託した。（担当―河村裕子・浅野豊子・森岡かがり・宮本洋子・松田智恵子・浦照子・土井真知子・正木直子・大藤雅男・勝島栄蔵・滋井　真）

7　本書の作成にあたっては、センター職員および桜井甚一氏をはじめとする石川考古学研究会々員各位の指導・助言を受けて、次のように分担執筆し、また編集は、各担当者の協議のうえ谷内尾・中島が担当した。

第１章　第２章――谷内尾 晋司、第３章――中島俊一、第４章　第１節――田中孝典

第４章　第２節――中島、第４章第３節――谷内尾・栃木英道

第５章　第１節――谷内尾、第５章　第２節――中島、土 器 観 察 表――栃木・山津康義

8　本書の遺構・遺物挿図の指示は次のとおりである。

(1)　挿図の縮尺は図内に標示した。

(2)　方位はすべて磁北を示す。

(3)　グリッド名称は北東隅杭で代表する。

(4)　水平基準線レベルは海抜高を示す。

(5)　土器実測図の断面は、土師器は白抜き、須恵器およびその他の土器類は黒塗りで示す。

9　本書の文章表現については、あえて統一をとらなかった。

目　　次

第1章　調査の契機と経過……1
　第1節　調査の契機……1
　第2節　調査の経過……2
第2章　遺跡をめぐる環境……6
　第1節　位置と地理的環境……6
　第2節　周辺の遺跡……8
第3章　調査の方法と遺跡の概要……11
　第1節　調査区の設定と呼称……11
　第2節　遺構の分布と調査区の基本的層序……12
第4章　遺構と遺物……15
　第1節　台地部調査区の遺構と遺物……15
　　(1)　竪穴住居跡……15
　　(2)　掘立柱建物……37
　　(3)　土　壙……39
　　(4)　溝状遺構……47
　第2節　水田部調査区の遺構と土器……50
　　(1)　はじめに……50
　　(2)　Ⅰ期の遺構と遺物……52
　　(3)　II期流路と出土土器……56
　第3節　T 18 調査区の遺構と遺物……97
　　(1)　層序と遺物包含状況……97
　　(2)　遺物の出土状態について……98
　　(3)　出土遺物……103
第5章　考　察……142
　第1節　鹿首モリガフチ遺跡出土土器の様相と占める位置
　　(T 18 調査区出土土器を中心に)……142
　　(1)　はじめに……142
　　(2)　一括遺物と式の設定……142
　　(3)　土器の類型と分析……144
　　(4)　まとめ……153
　第2節　鹿首モリガフチ遺跡の遺構とその性格について……156
土器観察表……161

挿 図 目 次

第１図　遺跡周辺の地質図 …… 7
第２図　位置と周辺の遺跡 …… 9
第３図　調査区の位置 ……13
第４図　調査区割と遺構配置図 ……13
第５図　第１号竪穴住居跡 ……15
第６図　第２号　〃 ……16
第７図　第２号　〃　出土遺物 ……16
第８図　T12区・P７G区・T13区遺構配置図 17
第９図　P６G遺構配置図 ……19
第10図　第３号竪穴住居跡 ……21
第11図　〃　出土遺物 ……21
第12図　第４号竪穴住居跡 ……22
第13図　〃　出土遺物 ……23
第14図　第５号竪穴住居跡出土土器 ……25
第15図　第５・６号竪穴住居跡出土土器 ……26
第16図　第７・８号　〃 ……27
第17図　第７・８号住居跡出土土器 ……28
第18図　〃　遺物 ……29
第19図　P７G・T11・T12調査区出土土器 30
第20図　P６G調査区出土土器 ……31
第21図　〃 ……32
第22図　〃 ……33
第23図　〃 ……34
第24図　〃 ……35
第25図　第７・８号竪穴住居跡炉址 ……36
第26図　第１号掘立柱建物 ……37
第27図　第２号　〃 ……38
第28図　第３号　〃 ……38
第29図　第４号　〃 ……38
第30図　第１号土壙 ……39
第31図　〃　出土遺物 ……39
第32図　第２号土壙 ……40
第33図　第３号　〃 ……40
第34図　第４号土壙・第５号土壙 ……41
第35図　第６号土壙 ……43
第36図　第７号　〃 ……43
第37図　第８号　〃 ……43
第38図　第９号　〃 ……44
第39図　第10号　〃 ……44
第40図　〃　出土遺物 ……44
第41図　第11号土壙 ……45
第42図　〃　出土遺物 ……45
第43図　第12号土壙 ……46
第44図　第13号　〃 ……46
第45図　第14号　〃 ……46
第46図　第１号溝 ……47
第47図　〃　出土遺物 ……48
第48図　第２号溝 ……48
第49図　第３・４号溝 ……49
第50図　第５号溝出土遺物 ……49
第51図　水田部調査区の遺構等推移想定図…50
第52図　水田部（流路）堆積推移基本層序断面図 ……51
第53図　P５G調査区 ……52
第54図　P４G調査区 ……53
第55図　Ⅰ期の出土遺物 ……54
等56図　P５G調査区第２層出土遺物 ……59
第57図　〃　第３層出土土器 ……60
第58図　〃　〃 ……61
第59図　〃　第３層下部出土土器…62
第60図　〃　〃 …63
第61図　P５G拡張調査区出土土器 ……64
第62図　P４G調査区第４層出土土器 ……65
第63図　〃 ……66
第64図　〃 ……67
第65図　〃 ……68
第66図　〃 ……69
第67図　〃 ……70

第68図　P４G調査区第４層出土土器……71
第69図　P４G調査区第３層出土土器……72
第70図　〃　……73
第71図　P４G調査区第４層出土土器……74
第72図　〃　……75
第73図　〃　……76
第74図　〃　……77
第75図　〃　……78
第76図　〃　……79
第77図　〃　……80
第78図　〃　……81
第79図　〃　……82
第80図　P４G調査区第３層下部出土土器　…83
第81図　〃　…84
第82図　〃　…85
第83図　P４G調査区第３層出土土器……86
第84図　〃　……87
第85図　〃　……88
第86図　〃　……89
第87図　〃　……90
第88図　〃　……91
第89図　P４G調査区第３層出土土器……92
第90図　P４G調査区第３層・第４層（溝埋土）出土土器……93
第91図　P４G調査区出土土器……94
第92図　〃　……95
第93図　〃　……96
第94図　T18調査区遺物出土状……99
第95図　T18調査区南壁断面土層図および土器出土層位模式図 ……101
第96図　T18調査区出土甕形土器形式分類一覧図 ……105
第97図　T18調査区出土壺形土器形式分類一覧図……108
第98図　T18調査区出土高杯・器台形土器形式分類一覧図……110
第99図　T18調査区出土鉢形土器式分類一覧図……112
第100図　T18調査区出土土器 ……115
第101図　〃　……116
第102図　〃　……117
第103図　〃　……118
第104図　〃　……119
第105図　〃　……120
第106図　〃　……121
第107図　〃　……122
第108図　〃　……123
第109図　〃　……124
第110図　〃　……125
第111図　〃　……126
第112図　〃　……127
第113図　〃　……128
第114図　〃　……129
第115図　〃　……130
第116図　〃　……131
第117図　〃　……132
第118図　〃　……133
第119図　〃　……134
第120図　〃　……135
第121図　〃　……136
第122図　〃　……137
第123図　〃　……138
第124図　〃　……139
第125図　〃　……140
第126図　〃　……141
第127図　鹿首モリガフチ遺跡T18調査区出土の標式的土器……150
第128図　〃　……151

表　目　次

第１表　T18調査区出土土器器種別構成比…103
第２表　器種別個体数と出土層位……146
第３表　器種別組成比率表……147
第４表　遺跡別甕形土器口縁形態構成比表…155
第５表　遺構等推移関係対応想定表……157

図　版　目　次

図版１　鹿首モリガフチ遺跡俯瞰
図版２　遺跡の遠景（上―南より、中―東より、下―西より）
図版３　上―台地部調査区全景（東より）
下―Ｐ７Ｇ調査区全景（東より）
図版４　上―Ｐ７Ｇ調査区全景（西より）
下―Ｐ７Ｇ調査区全景（北より）
図版５　上―第１号掘立建物跡（西より）
下―Ｐ７Ｇ調査区遺構群
図版６　上―第２号竪穴住居跡（南より）
下―第３号竪穴住居跡（北より）
図版７　上―第４号竪穴住居跡（検出前）
下―第４号竪穴住居跡（検出後）
図版８　上―第５号竪穴住居跡（南より）
下―第５号竪穴住居跡床面よりの土器
図版９　上―第６・７・８号竪穴住居跡（北より）、下―第６・７・８号竪穴住居跡（南より）
図版10　上―Ｐ６Ｇ調査区全景（東より）
下―第５・６・７・８号竪穴住居跡（西より）
図版11　上―第８号竪穴住居跡石皿出土状態、下―第８号竪穴住居跡炉址
図版12　上―第１号土壙、中―第２号土壙
下―第３号土壙
図版13　上―Ｐ７Ｇ調査区（南より）　下―Ｐ６Ｇ調査区西側（北より）
終版14　上―Ｐ６Ｇ調査区西部分（南より）
下―Ｐ６Ｇ調査区中央部南側（西より）
図版15　Ｐ６Ｇ調査区溝跡
図版16　上―Ｐ５Ｇ区（手前）・T18区（左中）・Ｐ４Ｇ区（奥）発掘作業風景、
下―同上調査作業風景（台地上より）
図版17　上―Ｐ４Ｇ調査区流路跡の発掘風景（西より）、下―同上流路遺物出土状態
図版18　上―Ｐ４Ｇ調査区遺物の検出作業風景、下―同上流路底部での遺物等混在状態
図版19　上―Ｐ４Ｇ調査区全景（西より）
下―Ｐ４Ｇ調査区全景（南より）
図版20　上―Ｐ４Ｇ調査区底面部の状況（東より）、下―Ｐ４Ｇ調査区底面部出土遺物
図版21　上―Ｐ４Ｇ調査区実測風景（西より）、中―同上流路土層（東壁）、
下―同（北壁）
図版22　上―Ｐ３Ｇ調査区試掘確認作業風景（東より）、下―Ｐ４Ｇ調査区最下部面の土壙
図版23　遺跡からの遠望
図版24　上―T18調査区上層土器出土状態
下―同上
図版25　T18調査区上層土器出土状態
図版26　上―T18調査区下層土器出土状態、
下―同上
図版27　上―T18調査区下層遺物出土状態、
下―同上
図版28　第２・３・４・５号竪穴住居跡出土土器
図版29　第５・６号竪穴住居跡出土土器

図版30　第７・８号竪穴住居跡出土土器
図版31　〃
図版32　Ｐ６Ｇ調査区・第５号溝出土土器
図版33　Ｐ６Ｇ調査区出土土器
図版34　〃
図版35　Ｐ６Ｇ調査区出土土器
図版36　〃
図版37　Ｐ４Ｇ調査区出土土器
図版38　〃
図版39　Ｐ４Ｇ・Ｐ５Ｇ調査区出土土器
図版40　〃
図版41　〃
図版42　〃
図版43　〃
図版44　〃
図版45　Ｔ18調査区出土土器
図版46　〃
図版47　〃
図版48　〃
図版49　〃
図版50　〃
図版51　〃
図版52　〃
図版53　Ｔ18調査区出土土器
図版54　〃
図版55　〃
図版56　〃
図版57　〃
図版58　〃
図版59　〃
図版60　〃

第1章　調査の契機と経過

第1節　調査の契機

県都金沢および金沢港・北陸自動車道と能登半島を結ぶ高速ネットワークの幹線道路として、能登海浜道（現能登有料道路）の建設計画が立案された。その第Ⅰ期事業として、金沢市粟崎地内から羽咋市柳田（猫の目）地内までの道路が、昭和45年に着工され、昭和49年12月に完成・開通した。第II期事業は、能登海浜道（第Ⅰ期）と連絡し、田鶴浜町大津地内で能登半島縦貫道路と接続する計画である。

この第II期事業に関して、昭和47年6月13日付けで、県有料道路課から県教育委員会文化室に対して、予定路線内における埋蔵文化財の有無についての調査依頼があった。しかし、路線が確定されていない段階でのものであり、『遺跡地図』登載の周知の遺跡を中心とした協議がなされているにすぎない。協議が進行をみせるのは、第II期建設計画が具体化した、昭和50年以降である。羽咋市域の路線の決定に伴い、昭和52年には路線内の分布調査が実施され、寺家遺跡（向田地区）の発掘調査が県文化財保護課の手により開始されている。昭和53年には、寺家（祭祀）遺跡、不動院跡遺跡が発掘調査された。とりわけ、寺家（祭祀）遺跡の発見は、その性格から、全国的な反響をうみ、県内外の保存要望の大きなうねりに伴ない、「石川県能登海浜道関連埋蔵文化財調査委員会」が組織され、保存に対する審議が行なわれた。この結果、主要部分を史跡公園として保存整備することを条件として予定地の工事は貫行され、それに関わる遺構の破壊を最小限にとどめる〝苦肉の策〟として、遺構を発泡性硬質ウレタン樹脂で梱包し、工事後、それを元位置に戻して保存するという方法がとられた。

昭和54年には、羽咋市域の調査が本格化し、寺家遺跡（砂田地区）、柳田シャコデ遺跡が発掘調査されたが、志賀町地内の路線については、一部地主の強い反対運動があり、現地での分布確認調査が実施できない状況にあった。路線が決定し、関連遺跡の分布調査が実施しえたのは翌昭和55年の5月中旬である。この結果、志賀町地内では、鹿首モリガフチ遺跡、上棚中村畑遺跡が予定路線内に係ることが明らかになった。第II期事業に関わるこの間の経緯と問題点については『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』に詳しくふれているので参照されたい。

さて、鹿首モリガフチ遺跡は、昭和49年刊『石川県遺跡地図』に登載されている（県遺跡番号2331）周知の遺跡であるが、開田されている台地緩傾斜面に土器片の散布がわずかにみとめられる程度で、その性格、規模は不明であった。このため、予定路線敷内を中心に、遺跡の範囲を把握するための分布調査を実施した。調査方法は、台地部については1m幅のトレンチを橋脚ボックス基礎部に4箇所、水田部については1.5m×1.5mの試掘壙を8箇所に設定、遺物包含層の状況を観察した。この結果、遺跡は台地上および安津見川左岸の水田部分に拡がっていることが判明した。また、台地部分では、竪穴住居跡と推定される遺構が検出され、性格的には、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた集落遺跡と予想された。

このため、分布調査を実施した県立埋蔵文化財センターは、依頼主の県有料道路課に対して、本遺跡の事前発掘調査が必要である旨を回答した。調査対象区域については、遺跡に係る路線敷全域とする県埋蔵文化財センター案と、橋脚基礎部に限定するという県有料道路課案との意見の相違があった。しかし、昭和57年度内の供用開始を至上目的に事業計画を強行したいという開発側の強い要望があり、結局、直接的に遺跡が損われる橋脚基礎部分を中心とした約1,700 m² について発掘調査を実施することで合意した。

第2節　調査の経過

発掘調査は、県有料道路課からの委託事業として県埋蔵文化財センターが担当した。現地調査は、工事計画とのかねあいから、昭和55年9月末までに終了することとし、同年6月16日から約3ケ月間の予定で開始した。しかし、水田部分の調査区において、予想外の遺物の出土などがあり、さらに、深2m以上の掘削が必要となるなど発掘調査は難行し、予定以上の日数を要することとなり、結局、現地調査が終了したのは10月24日であった。この間の経過については、調査日誌抄で詳述する。

出土品整理事業は、遺物の洗浄・選別・記名・復元・実測・トレースおよび遺構実測図トレースの一部について、石川県埋蔵文化財協会に委託した。事業は昭和55年から昭和57年の3ケ年度にわたって実施された。また、調査報告書の作成・刊行事業は昭和58年度に実施した。

調査日誌抄

5月12日　路線用地の決定・買収の完了をうけて、遺跡の分布（試掘）調査を実施する。(担当、県埋蔵文化財センター職員、小嶋芳孝・垣田修児)

水田部調査区発掘調査風景

5月15日　分布調査結果をもとに、遺跡の取扱いについて県有料道路課と協議。橋脚基礎部分を中心とした約17,000m² について事前調査を実施することで合意。

5月26日　埋蔵文化財発掘通知を文化庁に提出。

6月12日　調査計画書に基づき、委託契約を締結。

6月16日　現地調査開始。発掘機林の搬入後、谷内尾、中島、土肥と有料道路課担当職員で調査区域の確認などの打合せを行う。また、調査作業員の手配を、志賀町教育委員会および矢駄区長に依頼する。

6月17日　倉垣区長および石川考古学研究会員雄谷助市郎氏に、調査作業員の手配を依頼する。

6月18日　調査作業員の手配が整い、本日より実質的な現場作業を開始する。台地部調査区の設定および雑草伐採。

6月19日　P6G・P7G調査区の表土除去作業開始。包含層までは比較的浅く、遺物がP6G区を中心に出土しはじめる。

6月21日　P6G・P7G区を中心に遺構の検出があいつぐ。溝状遺構および竪穴住居跡4棟の存在を確認。

6月22日　台地部の調査と併行して、水田部に調査区（P5G）を設定、耕土除去を開始。

6月25日　P4G区の耕土除去開始。P6G区で竪穴住居跡検出、第7号住居跡とする。

7月5日　P6G区を南に拡張、第7号住居跡のプランを確認。P5G区を第3層まで掘下げる。完形品を含む土器多数出土。大規模な自然流路跡とみられ、自然木片を中心とした自然遺物の出土が多い。

P4G調査区発掘調査風景

7月15日　先日来の長雨で作業は進捗せず。今日より、P4G区とP5Gの間に設定したT18トレンチの調査に着手。

7月17日　久々に太陽が顔を見せる。台地部調査区の遺構検出がほぼ完了、遺構の発掘に着手する。

7月21日　石川考古学研究会学生会員の橋本郁也・田中孝典が本日より参加。

7月22日　金沢気象台梅開け宣言するも朝より激しい雷雨。予定していたP5G区の写真撮影不能。

7月25日　本日より本遺跡と併行して、中村畑遺跡の調査を開始。北陸中日新聞紙上に本遺跡の発掘調査記事が報道される。羽咋高校地歴部OB関谷勝紀参加。

7月27日　朝方よりの豪雨で安津川氾濫寸前。遺跡への往来路としていた木橋崩壊流失。調査区全面水没、壁崩壊、調査員啞然、前途暗し。

7月30日　本日より木村昌宏（奈良大学生）参加。石川考古学研究会副会長桜井甚一氏・橋本澄夫氏来訪現場指導。石川考古学研究会学生会員の夏休暇中の参加協力を依頼する。

8月2日　P4G区は第3層まで掘進する。自然流路跡と考えられる大規模な落込み内より自然流木とともに完形品を含む多量の土器が出

土器群の発掘作業 →

土。足の踏み場もないような状態である。現存深度、現地表下約2.5m。涌水が激しくなる。

8月6日　T18区より、多量の完形土器が列状に据置かれた状態で出土。P4G区の遺物取上げのため、遣り方を設定する。本日より、石川考古学研究会学生会員長沢豊文・木立雅郎が参加。また、地元出身の大学生の参加もあり、現場が賑やかになる。

8月7日　T18区・P4G区の遺物出土状態の実測図作成作業を開始する。

8月11日　P4G区平面実測図（第1回目）完了、レベルをおとしつつ遺物の取上げを開始する。下層にはまだ遺物が多量に存在する模様で先が長い。

8月18日　8月13日から17日まで旧盆で作業中止。P4G区の掘下げ開始。T18区より勾玉状の赤彩文を脚全面に施文した台付鉢出土。

8月20日　T18区・P4G区で続々遺物出土。実測と併行して掘り進める。午後より、高堀勝喜・桜井甚一・橋本澄夫氏現場指導のため来跡。

8月25日　水田部の主力を集中するため、中止していた、台地部の調査を再開。本日より、石川考古学研究会学生会員、越坂一也、久田正弘、高田秀樹参加。

8月29日　本日より古墳群分布調査（鹿島町鍋山古墳実測）のため、9月2日まで学生会員が抜ける。

9月3日　夏休暇あけで大半の学生会員が帰る。本日より、女郎塚遺跡調査にまわっていた垣内光次郎が参加。

9月4日　工事用道路を作っていた業者ブルドーザーが、台地の一部を損壊。工事を中止させる。

9月5日　昨日の件を、有料道路課および工事業者に厳重抗議する。逆に、工事施工者側より調査迅速化を要請され、現場の雰囲気は極めて険悪。

P6G調査区発掘調査風景

9月8日　発掘調査の中間記者発表。どのテレビ局のアナウンサーも例外なく〝鹿首（カシクビ）〟を〝シカクビ〟と発音。

9月17日　11・12日の台風来襲などにより調査の進行が大幅に遅れたため、併行して実施していた中村畑、女郎塚両遺跡の発掘調査を一時中断、調査員を集中する。

9月19日　P4G区自然流路埋没以前の遺構を検出。台地調査区の遺跡実測開始。

9月24日　本日より坂下隆光（奈良大学OB）参加。中村畑・女郎塚両遺跡の発掘調査再開。

9月30日　P4G区写真撮影。3回目の平面実測開始。

10月3日　T18区実測終了。写真撮影後遺物取上げ。

10月6日　遺物を県埋蔵文化センターに搬入する。P3G区の発掘調査開始。

10月8日　P4G区の実測完了。遺物取上後補足調査。以下は青灰色シルト層となり涌水著

しく、調査不能。自然遺物を含む土器片などの人工遺物は発見されず、本日で調査を終了することに決定。

10月15日　11日から15日まで台風のため調査作業中止。排水作業で１日が終了。

10月16日　自然流路の北端を確認するため、Ｐ５Ｇ区を北側に拡張する。開田期の近世水路により攪乱され、北端ははっきりせず。傾斜より失杭列が検出されるが所属時期不明。土器多数出土するが破片が多い。Ｐ３Ｇ区青灰青色砂層まで掘るが遺構なし。

10月17日　Ｐ５Ｇ区完掘。写真撮影。午後より発掘器材の後片付け。本日で作業員終了。

10月20日　台地部調査区実測終了。写真撮影。

10月23日　Ｐ５Ｇ実測終了。補足調査。

10月24日　発掘器材の搬出およびプレハブ撤去。本日をもってすべての現地作業完了。

鹿首モリガフチ遺跡発掘調査協力者名簿

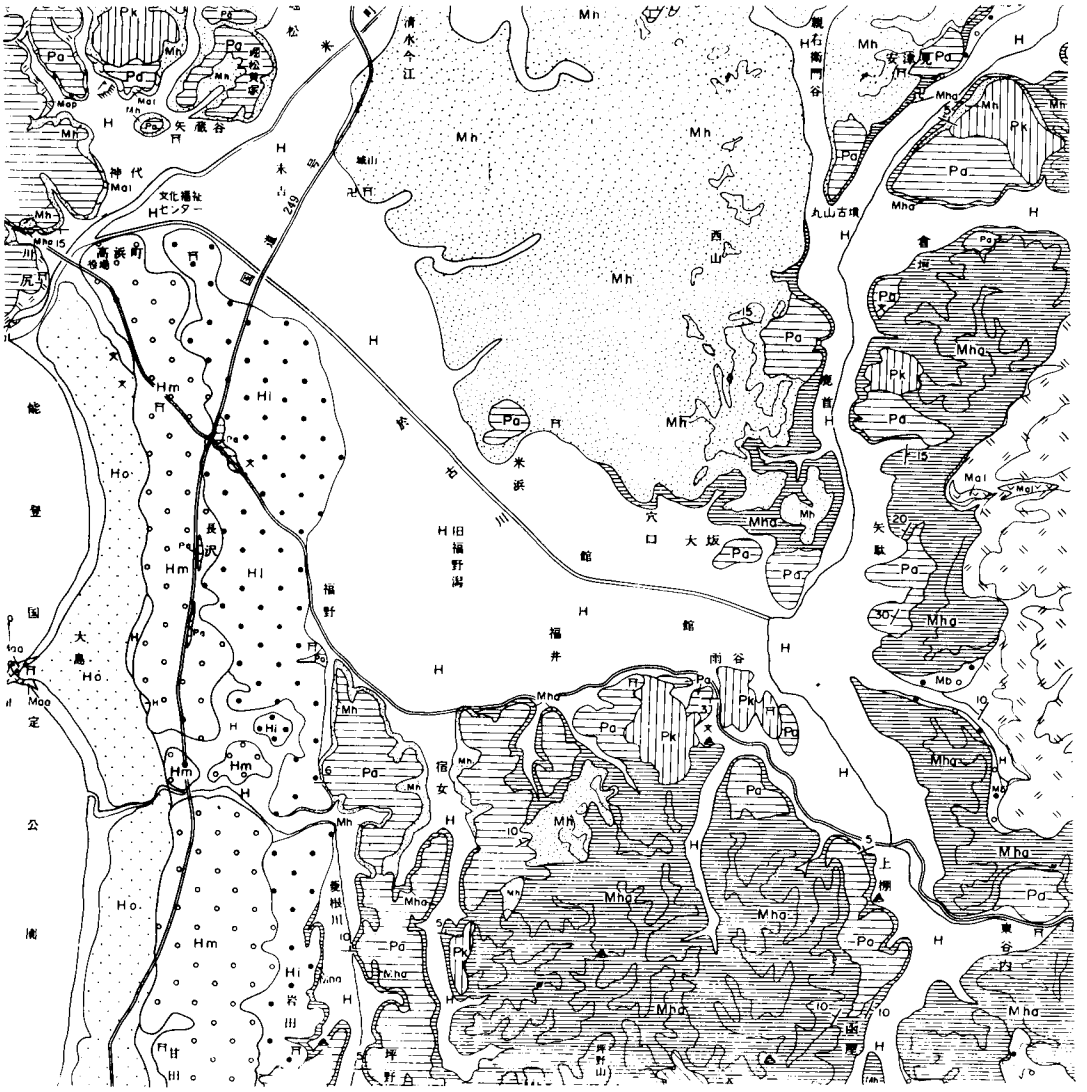
新明トミ子・西村テル子・平野千代・諏藤芳子・井上きく・山崎富枝・花島敏枝・細川良江・細川小夜子・井上一郎・上島みつい（以上倉垣地区）不動勝二・白山彦四郎・白山きくい・不動はる子・西村はつい・西村　猛・西村ツヤ・西村助松・南　丞太郎・大谷はな子・池端ひさ子・池端つや・池端嘉一郎・井坂良一・不動まつ・小池みゆき・政氏徳松・政氏千代・白山田鶴・池端朔平・吉野多嘉雄・酢谷菊太郎・白山美子・酒井きくい・泉　孫次郎・酢谷きくの・干場とよ・中家仁作・多橋弘之・吉野まき・多橋きよ・泉　惣吉郎（以上矢駄地区）細川すえ・丸田きくい・新明操子・清水儀平・山岸長松・干場とよ・宮島みつえ・大矢　昇（以上安津見地区）

第２章　遺跡をめぐる環境

第１節　位置と地理的環境

〝能登はやさしや土までも〟とうたわれるように、能登半島は、その大部分が200m 以下の丘陵地からなる日本海側最大の半島である。その位置から古くより、日本海文化のアンテナ的な役割を果してきた。長年の海進・海退やその後の開析作用よりその地形は複雑に入り込み、海岸では入江や潟を形成し、内部ではさまざまな河谷平野が発達し、人々に生活の場を提供してきた。半島中央部の西海岸に位置する志賀町の町域南部に旧福野潟低地が存在する。口能登にあっては、邑知地溝帯平野につぐ穀倉地帯であり、かっての潟線上をとりまくように、神代・末吉・米浜・大坂・鹿首・矢駄・上棚・二所宮・福野などの集落が点在している。この旧福野潟はかっては日本海に開らく入江であった。その汀線は、南北約３～４km、東西約１～２km、周囲約12km の広がりをもっていたと推定されている。北に西山丘陵、東に矢駄丘陵、南に雨谷丘陵が広がり、西には外・中・内の３列からなる海岸砂丘が発達し、四方はこれらの丘陵・砂丘に取り囲まれている。この旧福野潟低地を北西に貫流する於古川は、眉丈山系の鹿西町後山に源を発する日詰川と、安津見の奥山峠に発する安津見川が二所宮付近で合流、神代をへて日本海に至る。この両河川の開析・沖積作用によって形成されたのが、安津見・矢駄・倉垣および上棚低地である。この両河谷平野は、古来より外浦・内浦を結ぶ交通の要路でもあり、日詰川上流の後山・花見月ルートは邑知地溝帯中央部・七尾地区を結び、安津見川ルートは奥山峠をへて二宮川流域平野から七尾西湾に至る。

鹿首モリガフチ遺跡は、志賀町矢駄わの部47の１他、すなわち矢駄地区の小字鹿首地内通称モリガフチに所在する。遺跡は、西山丘陵から安津見川左岸に突出する台地緩傾面および直下の沖積地一帯に広がっている。この地点で、安津見川の河谷平野は幅約200m と最も狭く、その上流の倉垣・安津見地内では谷が３筋に分岐して開け、狭小な盆地状の地形となる。この地形的に要所を占める隘路に遺跡が立地するのである。標高は、台地端部で約10m、水田面で約６m を測る。かつての福野潟の汀線は、現海抜の約５m 以下の線を結ぶものとされ、現在の矢駄および鹿首集落あたりまで及んでいたと推定されることから、現於古川流域で約6.5km もさかのぼったあたりまで湖水が及んでいたことになる。現在、我々がいだく遺跡立地のイメージと大きく異なるもので、水田下で確認された生活面の標高が海抜４m～５m であったことを考慮するなら、周辺の環境は、まさに、入江（潟）の最も奥まった地点での汀と考えられ、当時の鹿首モリガフチ集落は奥深い入江（潟）を介して外洋と直結していたといえよう。また、旧福野潟から七尾西湾を結ぶ線は、能登半島が最も狭まった所（約13km）であり、海上交通を主とした古代にあっては、外浦と内浦を結ぶ交通路としての最短距離が、鹿首を陸路の起点とする安津見川ルートであったことは想像にかたくない。この地は陸路・海路共に要衝の地であったのである。それはまた、この地に海神ナヅミヒメを祭神とする奈豆美比咩神社が鎮座することとも無関係とも思えない。さらに



第1図　遺跡周辺の地質図（藤則雄原図改作転載）

は、安津見は古代海上交通の統制者とされる「阿曇氏」との関りの深い地名とする説もあり、極めて興味深い。

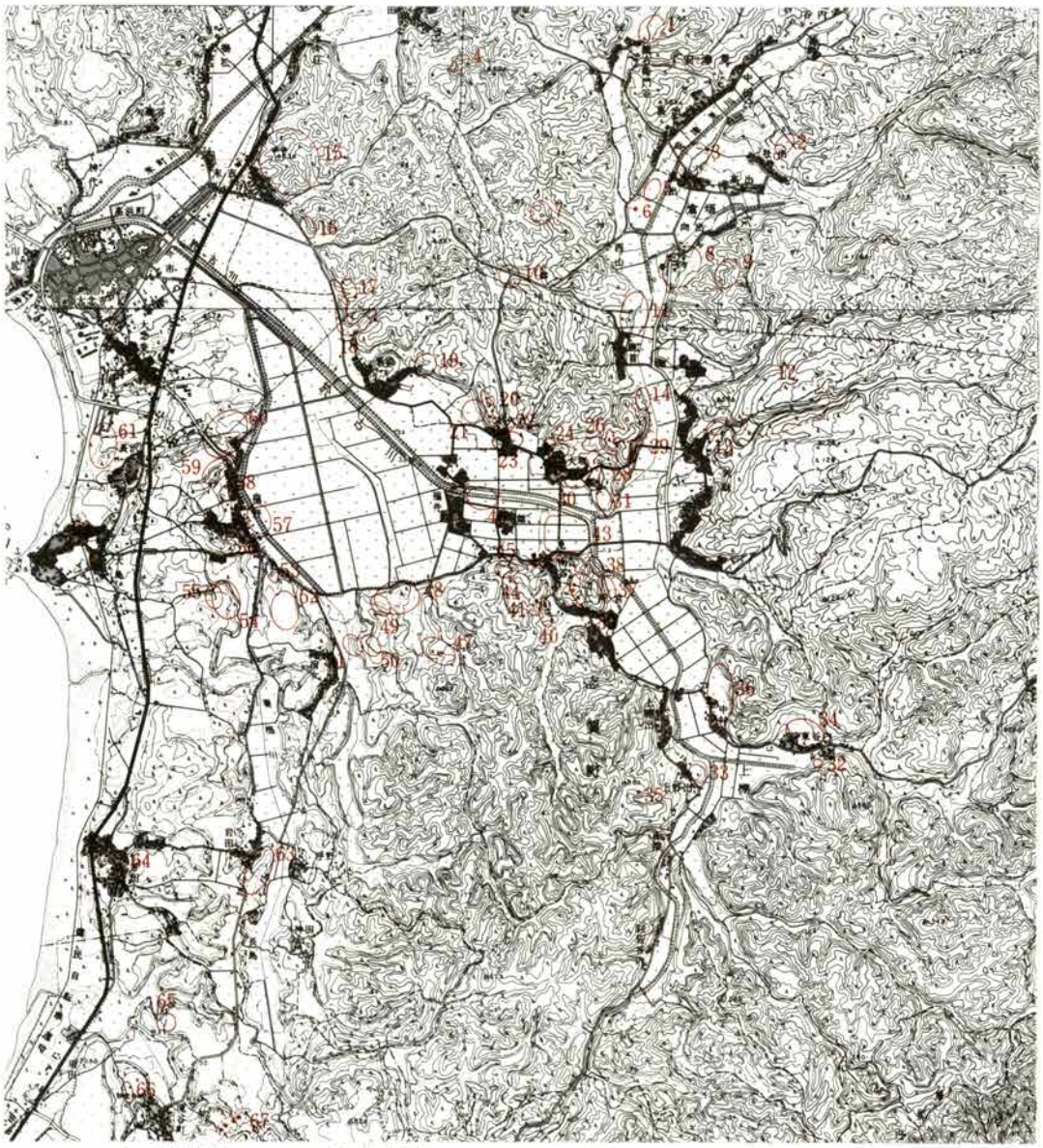
第2節　周辺の遺跡

旧福野潟周辺の自然環境は、古来より格好の生活の場を人々に提供してきたものと思われ、数多くの遺跡が分布し、県下でも有数の遺跡密集地帯となっている。こうした歴史的土壌から、明治41年には、県下の地域誌の先駆をなすものと高く評価されている『志賀瑣羅誌』が尾佐竹猛氏よって世に送られ、さらに、戦後の昭和29年には、県下の研究者を総動員して旧福野潟週辺の総合調査が実施されている。その『調査報告書』は、一地域を対象とした総合調査報告書としては当時の最高水準をしめるもので、以後の地域誌研究の指針をなした。

こうした、先学の業績に導かれながら、周辺の遺跡を概観することとする。

縄文時代　周辺には、第四紀更新世中期から後期にかけての所産される小浦段丘・安部屋段丘などが発達しているが、現在のところ旧石器時代の遺跡は発見されていない。縄文時代の遺跡としては、川尻なべんたか遺跡（前期初頭）を最古に、神代遺跡・神代貝塚・堀松貝塚・長沢堂ケ谷内遺跡・長沢オオクボ遺跡・福井まんだらじA遺跡・上棚東谷内遺跡・上棚中村畑遺跡・大坂オバタケ遺跡・矢駄瀬戸山遺跡・安津見西山・上野畑・川の中・親右衛門遺跡・倉垣上野ケ原遺跡などが知られる。なかでも堀松貝塚は、能登地方で最初に発見され調査された貝塚として学史に残るもので、中期前葉の新崎式期から中期後半の古府式期に至る各期の土器群とともに出土した豊富な自然遺物類は、当時の福野入江における生活環境を考える上で貴重な資料を提供するものであった。他に旧福野潟周辺総合調査では、縄文中期後半古府期の単純遺跡である東谷内遺跡、中期中葉後半から後葉にわたる長沢堂ケ谷内遺跡、中期前葉新崎期を中心に後・晩期にまで長期間にわたって断続的に営まれた大坂オバタケ遺跡などが発掘調査されている。このように周辺に縄文中期を中心とした多くの縄文集落が立地していることは、この期における日本海側の海進・海退作用が福野入江を基盤とした生活の適地を生み出した結果によるものであろう。

弥生時代　於古川および米町川流域に集落遺跡が点在するが、発見遺跡数は縄文時代に比較して少ない。昭和35年ごろに実施された米町川改修工事で発見された北吉田米町川遺跡は県下でも数少ない中期初頭柴山出村式土器を出土した遺跡として著名である。於古川流域では、中期小松式土器が採集された福野マエガワ遺跡、上棚中村畑遺跡、後期の矢田遺跡、大坂坊の下・古屋垣内遺跡、二所宮日詰遺跡、倉垣（加茂小学校）遺跡などが知られる。倉垣遺跡は、鹿首モリガフチ遺跡とは安津見川を隔った対岸に隣接して営まれた集落遺跡である。昭和26年の加茂小学校増改築工事で発見され、昭和54年に同様な契機で志賀町教育委員会により発掘調査された。この時の調査では、古墳時代中期の宮地式土器ともに、多くの弥生後期の土器が出土し、時期的にも鹿首モリガフチ遺跡と極めて密接な関係にある集落遺跡と考えられている。また弥生後期には、於古川、米町川両水系を紐帯とした地域集団が形成されつつあったものと推定され、堀松・清水の丘陵尾根には2基以上からなる月影期の方形台状墓が造営されている。



1	安津県遺跡	18	米浜遺跡	35	上棚火の塚古墳	52	長沢おおくば遺跡
2	安津見上野畑遺跡	19	米浜はげの下遺跡	36	上棚中村畑遺跡	53	福野経塚
3	倉垣上野ケ原遺跡	20	穴口古墳群	37	二所宮日詰遺跡	54	長沢堂ケ谷内遺跡
4	北吉田横穴	21	米浜藤の森遺跡	38	二所宮日詰用水遺跡	55	大島神主山遺跡
5	安津見川の中遺跡	22	穴口宮の下遺跡	39	二所宮宮山遺跡	56	福野高野坂遺跡
6	丸山古墳	23	穴口貝塚	40	二所宮小学校裏遺跡	57	福野前川遺跡
7	安津見西山遺跡	24	大坂おばたけ遺跡	41	下廿田小学校古墳群	58	福野上野遺跡
8	倉垣遺跡	25	大坂遺跡	42	二所宮古墳群	59	福野横穴
9	倉垣１号窯跡	26	大坂寺畑遺跡	43	大坂舟の町遺跡	60	福野大念寺跡
10	矢駄おはい山遺跡	27	大坂坊の上遺跡	44	おお干在古墳	61	長沢中世遺跡
11	**鹿首モリガフチ遺跡**	28	大坂やちだ遺跡	45	館遺跡	62	大島氏館跡
12	矢駄横穴墓群	29	大坂城ケ墓古墳群	46	館泉田跡	63	坪野中世墳墓群
13	矢駄瀬戸山遺跡	30	大坂坊の下遺跡	47	福井二塚１・２号墳	64	甘田くるみ谷古墳
14	鹿首遺跡	31	大坂古屋塩内遺跡	48	福井まんだらじA遺跡	65	滝谷八幡社遺跡
15	末吉城跡	32	東谷内垣内遺跡	49	福井まんだらB遺跡	66	滝谷中世墓
16	末吉瓦畠遺跡	33	上棚遺跡	50	宿南山遺跡	67	滝谷古墳群
17	米浜クルマダン遺跡	34	東谷内遺跡	51	宿女遺跡		

第２図　位置と周辺の遺跡（縮尺 1/50,000）

古墳時代　こうした地域集団が、両水系流域の適所に墓域をもとめ、古墳時代前・中期には堀松古松古墳群、二所宮古墳群、大坂城ケ墓古墳群が、後期には、上野伊豆山古墳、北吉田古墳群、下甘田小学校裏古墳群、倉垣丸山古墳、安津見親右衛門谷古墳などが造営される。堀松古墳群は、土砂採取のため一部破壊され、昭和54年から3ケ年度にわたって緊急調査された。全長約30mの前方後円墳を盟主する6基より構成され、その造営年代は5世紀前半から中葉と推定されている。また、1号墳は現在のところ外浦最北端に位置する前方後円墳である。二所宮古墳群は6基から構成され、3号墳とされる車塚古墳は、径約30m、高さ約5.5mを測り、葺石を有する立派な円墳である。この古墳付近より朝顔形埴輪の一部かと推定される埴輪片が採集されており、5世紀前半代の造営が想定される志賀町地域では第一級の首長墓である。大坂城ケ墓古墳群は於古川を眼下に望む標高50mの尾根筋上に立地する円墳14基以上からなる古墳群である。群最大の3号墳は径30m以上を測り、於古川・安津見川流域では車塚古墳に先行する首長墓と目されている。安津見親右衛門谷古墳、倉垣丸山古墳はともに横穴式石室を有することが確認されており、後者は旧福野潟周辺総合調査で発掘調査された。倉垣丸山古墳は安津川左岸の丘陵端部に造営された推定約30m以上を測る大円墳で、能登地方でも第一級の後期古墳である。さらに、石室は盗掘により既に破壊されていたが、現存玄室長約5.5m、奥壁部幅3.3mを測る大型のものである。築造年代は石室内に残存していた須恵器から6世紀末と推定される。この古墳の出現背景には、この地域の水系を基盤に成長した共同体首長による造墓として単純に把握しきれないものがあり、その性格が注目される。先述したように、海路・陸路の要衝の地を扼するがごとく位置することを考慮するなら、この地の首長が、6世紀後半期の日本海沿岸地域での政治的な緊張関係を背景に、海人族の統制者として特殊な性格をもったとされる古代阿曇氏と擬制的な同族関係を樹立し、その記念碑的産物がこの古墳造営であったとも考えられる。それはまた、この地に残る海神ナヅミヒメ信仰とも無関係ではない。

歴史時代　奈良・平安時代の遺跡としては、米浜遺跡、大坂ヤチダ遺跡、大坂寺田遺跡、倉垣コマクラベ窯跡などが知られる。米浜遺跡は、昭和54年に農地整備に関わる排水路工事に伴ない緊急発掘調査され、土器製塩遺跡であることが明かにされた。大坂ヤチダ遺跡でも製塩土器の散布が認められ、奈良・平安時代にいたってもこの地が入江状をなす内湾であった可能性が考えられている。倉垣コマクラベ窯跡は、志賀町史編纂にあたって試掘調査され、平安中期初頭の築窯であることが明らかにされ、県下の須恵器編年基準資料となっている。大坂舟の町遺跡は、この地の生活環境を最も端的に物語る遺跡である。昭和36年の土地改良工事で、櫂、ウキ、梯子とともに2艘(そう)の独木舟が発見され、桜井甚一氏によって調査・報告されている。中世では、果敢な宗教文化が展開し、多くの造形文化資料が残る。福野中世墳墓群を中心とする石造遺物、矢駄観音堂旧蔵の仏像群、矢駄横穴状遺構群などが代表的な遺産として知られる。また、安津見には海神ナヅミヒメを本来の祭神とする式内奈豆美比咩神社が鎮座し、古代・中世を通して宗教文化の中核をなしてきた。

参　考　文　献

石川考古学研究会編『石川県羽咋郡旧福野潟周辺総合調査報告書』昭和30年
『志賀町史（資料編・第1巻）』

第３章　調査の方法と遺跡の概要

第１節　調査区の設定と呼称

南北に細長い谷平野を形成する当地区を、東西に横断して建設されることとなった能登海浜道（縦貫２期）は、標高約45mの東側丘陵と約30mの西側丘陵とを結ぶ約250m間の台地～水田部に、８基の橋脚を設置して高架で通過する計画であった。石川県遺跡地図（石川県教育委員会1974）ではかつて石鏃等が出土したとの記載があり、縄文期の遺跡として当該地の周知化が行われてきた地点であったが、協議段階での事前踏査では、台地上畑地で僅かではあるが土師器細片数点が確認され、また台地基部（西側丘陵との接点）の北側裾の農業用小用水路中では弥生末葉ないし古墳時代初頭頃かとみられる土器片がかなり集中的に散布するのが認められたことにもより、複合遺跡ともみられる台地部分を中心にこれをとりまく周辺水田部でも遺構の広がりが予想されるものとなった。

加えて、海浜道関係遺跡の調査は数年来より計画的に実施されてきているが、来年度完成を目指した実質的最終年度にあたり、羽咋市域での１万m^2を越える遺跡をはじめとして当遺跡を含む４遺跡がこれに当該する過密的状況であったことも加味し、当遺跡に限っては確実に掘削破壊される必要最少範囲にほぼ限定して発掘することとなり、以下の方向でのぞむことになった。

①橋脚８基中の丘陵斜面に設置される２基については工事併行による確認作業（重機による上部層除去―遺構無き場合は工事即着手）をすることとし、台地～水田にかかる６基の設定範囲を基本的調査区とする。

②また、橋脚区内遺構等関連状況を把握するために必要部分では連結的なトレンチを設ける。

③基本的調査区内で検出された単一遺構が、完結性をもちえるよう最少限の部分拡張を行う。

④削平が行なわれる丘陵上については古墳状隆起は認められないが、若干の平坦部をもつ西側丘陵（山林）には伐採整理後に試掘確認を行う。ということで着手した。

結果的に調査対象地内で発掘を行った個所は、地形上の位置関係により、①丘陵部分・②台地部分・③沖積平地（水田）部分に三大別することができ、また、遺構のあり方（分布及び性格的状況）からも分割の可能なものとなった。

発掘面積は総計約1,500m^2であるが、当初より橋脚設置部分を主たる発掘区に設定して状況に応じた部分拡張で対処する方向で着手しているので、各グリッドやトレンチ等の区画割に長短が生じて不整一のままとなったが、この点からも上記の地形的三大別地区名を冠して各調査区画を順呼することにした。この各区画名の呼称については、橋脚設置部の基本調査区枡を東側より西側に向って１区（G）～８区（G）とし、トレンチ部分は西側→東側に折り返して９～18トレンチ（T）と称することにしている。従って、調査地区と各区画名の対応関係は次のとおりである。

（丘陵部調査区）東西両丘陵斜面部での橋脚設置個所にあたる（１G・８G）と西側丘陵平坦部でのトレンチ（T．９）が充たる。

（台地部調査区）西側丘陵裾より、標高約11m前後のほぼ平坦な舌状的台地約90m間にある、西側より（T－10～12・7G・T－13～15・6G・T－16～17）である。

（水田部調査区）台地との比高約3～4mの、東側丘陵裾までの沖積平地部分にあたる各調査区で、台地裾に接して西側より（5G・T－18～19・4G）と現流の安津見川を挟み、続いて（3G・2G）とである。

なお、トレンチの設定に関しては台地と水田部を直線で通す、道路敷センター杭STA129＋80とSTA129杭を結ぶ延張線を軸線とし、北側に1m平行移動する基準線に沿って配置した。よって測量用0点を、軸線に直交するSTA129＋80の北側1mの位置に置いている。

第2節　遺構の分布と調査区の基本的層序

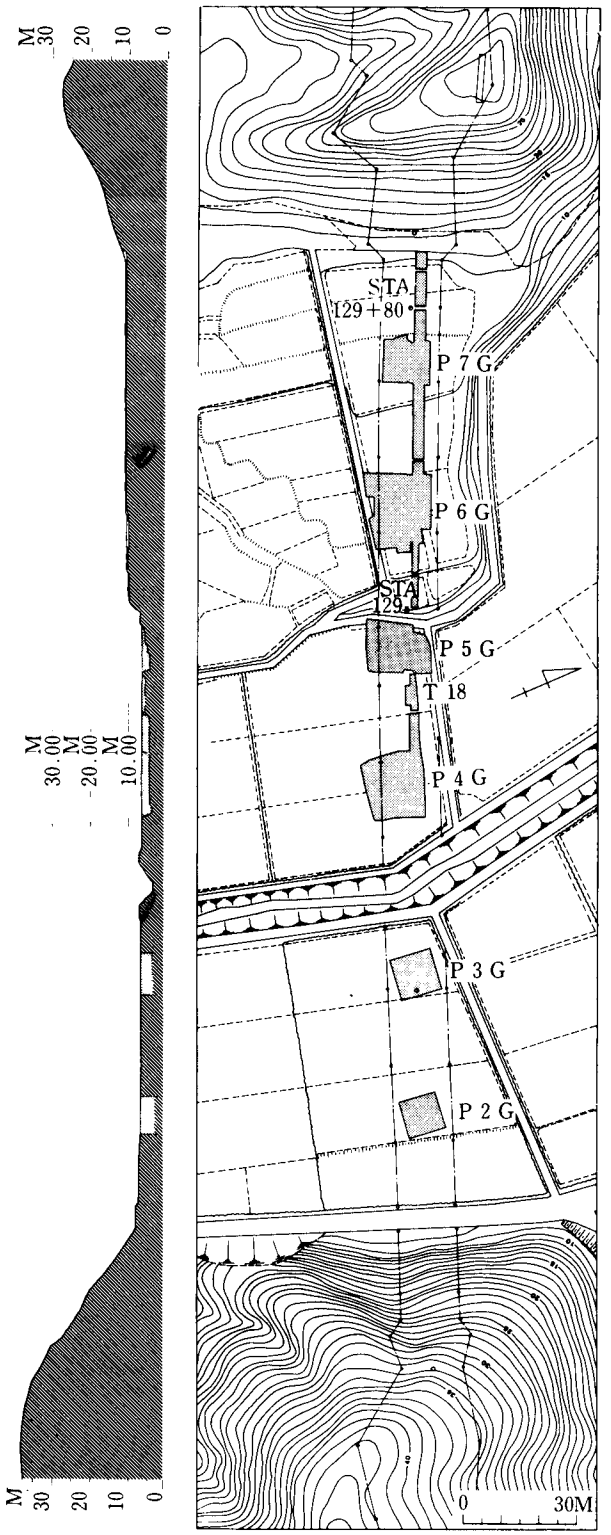
〈丘陵部調査区〉

発掘調査に先だつ現地踏査の段階では、台地と台地基部北側裾で弥生時代末葉～古墳時代初頭頃の土器片の散布が認められたので、台地を中心とした集落跡の予想がもたれた一方で、路線敷延張部での谷平野に望む東西丘陵部（地目山林）においても該期中の墳墓群が存在しないかの危惧がもたれた。幸に、両丘陵先端部とも古墳状隆起地形は認められず、殊に東側丘陵上では平坦部の乏しい狭尾根からなり、造作が伴わぬ自然地形と考えられたので調査区から除外することとし、若干の平坦部がみられる西側丘陵先端の頂部に任意のトレンチ（巾1.5m・長約12mのT－9）を入れた。表土層約10cm下ではすぐに砂質性の強い洪積層地山面（きれいな黄白色）となり、遺構・遺物は全く検出されなかった。また、一応の丘陵部調査区に包めた1G・8G区についても当初より可能性の薄い部分であったが重機による上部層除去（工事併行とした）後に点検確認を行ったが、暗黄褐色の流土を挟む他は向も発見しえなかった。従って、当該丘陵部分では遺構が存在しないものと判断した。

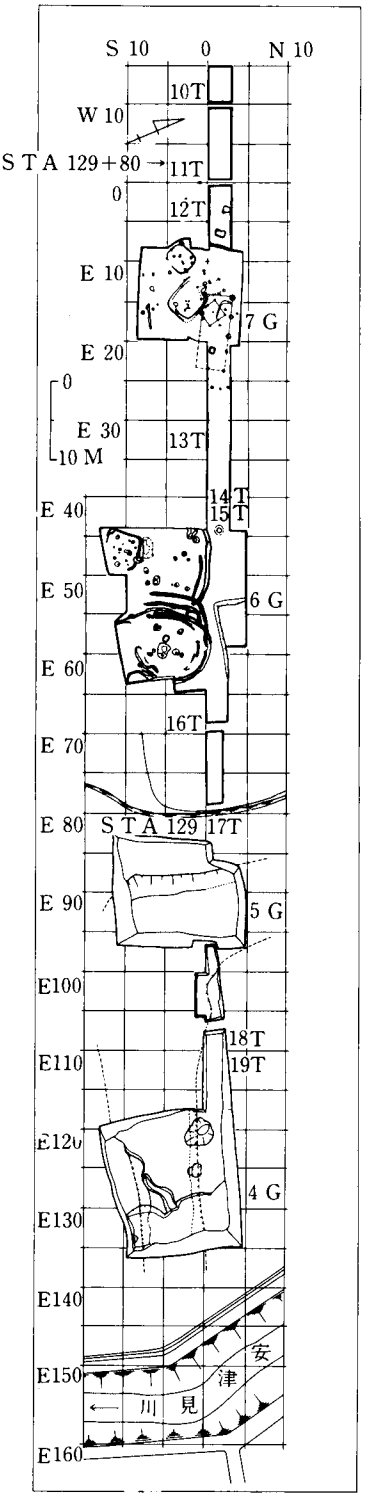
〈台地部調査区〉

当地区では2基の橋脚部分6G・7G区を中心的調査区に捉え、台地上を連結させる補足的なトレンチを配して遺構の検出にあたった結果、比較的小型の竪穴住居跡4棟と少なくとも3度の建て替えを行ったと考えられる大型竪穴住居跡の他、土坑14基・溝状跡7条・掘立柱建物4棟（内1棟については不確定要素を含む）等を発見した。これらの遺構は、丘陵斜面～台地にかかるT－10と台地先端部でのT－17を除いて全般的に検出されたことから、隣接未調査区でもかなりの密度で遺構が分布しているものと考えられる。調査区での基本的層序は、現状で畑地として利用されていた耕作土と床土の計約15cmの上部層を除けば丘陵部と同様の砂質性の強い地山面となり、検出した遺構のほとんどが耕作等に伴う上面部の削平・攪乱を蒙って遺存するものであった。なお丘陵裾部のT－10～T－12にかけては開墾時の平坦地化に際したとみられる客土（移動土）層の上覆がある。

この路線敷となった台地部分は、細長い小谷平野を形成する当地域間ではほぼ中央部に位置し



第3図　調査区の位置



第4図　調査区割と遺構配置図

て最も舌状的に張り出す地点であり、路線敷調査区の南方部分は現状では水田として段状地形をもち南斜を強めて沖積部と接するが、地形構造的には背後丘陵部から派生した台地の一角を占めるものとみなされるので、この部分も含めた集落の延びも可能性として存在する。

〈水田部調査区〉

突出的台地によって挟まりをもつ沖積部ではほぼ中央に安津見川が流下しているが、ここではまず、台地下から安津見川間までのトレンチを通して様子を探ることから開始した。途中、T—18区の地表下約70cmで自然木片を混じえかなりの土器片を確認したが、両サイド延張部分では全く遺物が出土せず、極めて不整で腐蝕物を含む不順層が続くため、T—18区を保留して地山面と想定しうる安定層までの掘り下げを行った。現地表面下約2.1mで微細粘土の無遺物層(青白色と部分では黒色粘土がこれに乗る)に達したが、この上面に接しては径約40cmを越える大木と夥しい自然木が出現し、沖積地の生成を感じさせるものがあった。この生成的状況とT—18区遺物群の存在との問題の追求は、上記トレンチを一部併用した橋脚枡4G・5G区によって検討することとし、面的に掘り下げを行っていった。

この結果、現安津見川流に直交する流路跡を確認することができ、T—18区はこの肩部にあたるものと判断されるに至ったが、この流路内底部でも多量の自然木類に混在して完形にちかい土器群が発見されるに続いて、実測整理後の最下部面では土坑状遺構2基と小溝状跡が検出され、多量の土器群を内包した流路に先行する遺構の存在も確認しえることとなり、また、これらとは別に4G区北東隅では当発掘区中の最終段階にあたる流路痕も追認され、発掘初期段階での自然生成的な単一イメージを一変させる何がしかの人的係わりも介在することが判明した。調査区の基本的層序については耕作土・床土の約15～20cmと約10～15cmの黄茶褐色砂質土の上覆層以下では、地点ごとに極めて異なりがみられる流路跡内等の不整堆積層が続いている。

なお、安津見川より東側での2G・3G区では鋼矢板設置後に重機による掘削を行い、4・5G区での流路切込面の対応層を追求したが、第1層の耕作土・床土約15cm、第2層暗茶褐色砂質土の約30cm、第3層暗茶褐色粘質土の若干の自然小木を含む約100cm、第4層濁暗灰色粘質土40cm以上と濁る粘性土が続き、安津見川の東と西側では堆積組成に異なりがみられるとともに遺構等は発見できなかったので、以下での層堆積の追求を断念した。

第4章　遺構と遺物

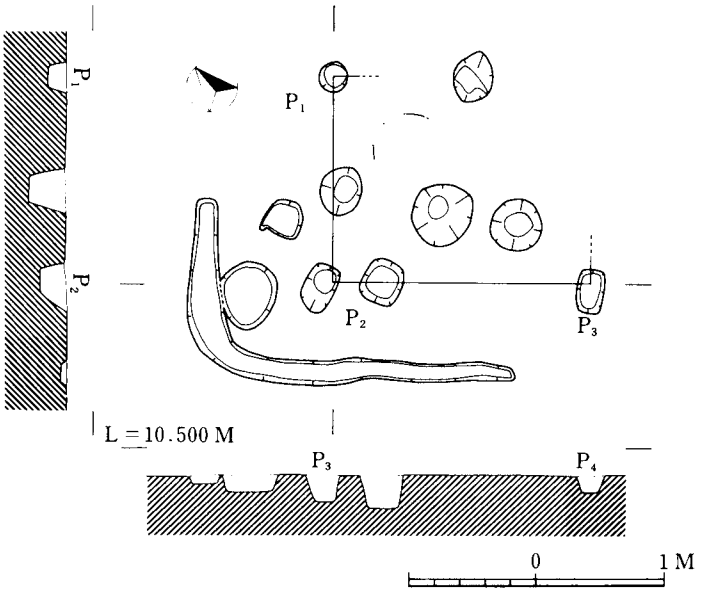
第1節　台地部調査区の遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

1　第1号竪穴住居跡（第5図・図版5）

遺構　P－7G区北東部に位置する。南西方向約165cmで第2号住居跡、西方向約580cmで第3号住居跡の竪穴上端に達する。遺構の残存状態は悪く、周壁はすでに削平を受けており東辺周溝も残存しない。なお、遺構の北側部分は調査範囲外であるため発掘は実施していない。検出確認されたのは、南辺、西辺の周溝の一部と柱穴である。平面プランは、隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は周溝と主柱の関連から長径約421cm、短径約325cm。軸方向N—51°—W。遺存する周溝の辺長は南辺で約242cm、西辺で約138cm。主柱穴は3個検出したが、4本の主柱があったと推定できる。P_1は径22cm、深さ15cm、P_2は長径39cm、短径25cm、深さ22cm、P_3は長径35cm、短径22cm、深さ13cmを測る。各柱間距離はP_1—P_2間約162cm、P_2—P_3間約203cm。周溝は南辺で幅約13～20cm、深さ5cm、西辺で幅約18～30cm、深さ7cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土の単一層で周溝内では微量の炭火物が混入する。

遺物　遺物は覆土中より土師器が出土しているがいずれも細片のため器種、器形は不明で図示できる資料はない。

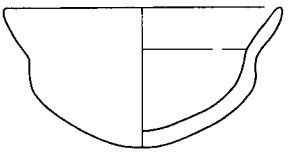


第5図　第1号竪穴住居跡（S=1/60）

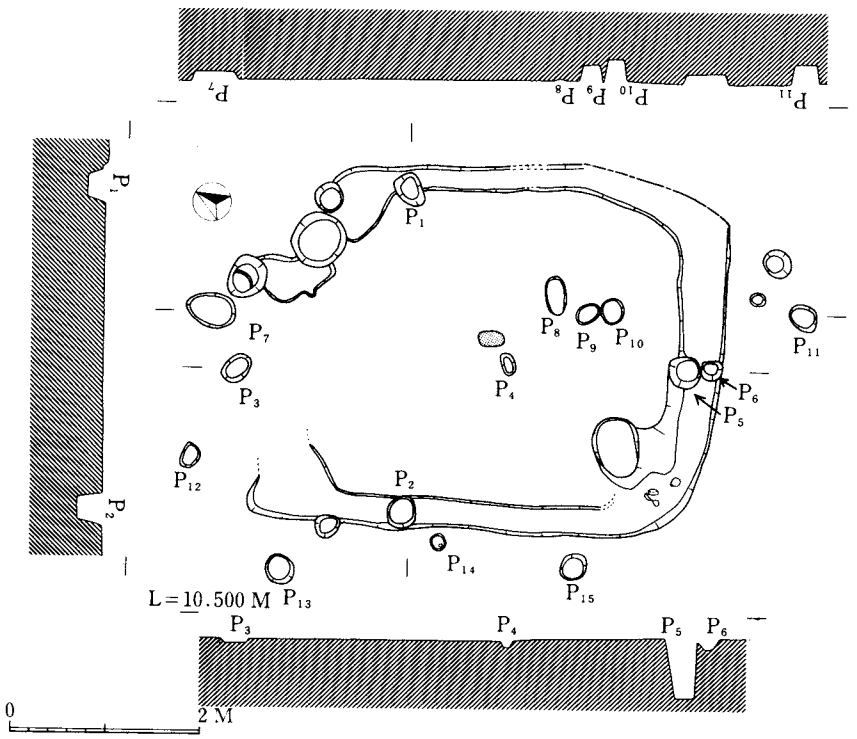
2　第2号竪穴住居跡（第6図・図版6）

遺構　P－7G区中央部に位置する。西方向約65cmの近距離で第3号住居跡の竪穴上端に至る。周壁は第1号住居跡に同じくすでに削平されており、周溝と柱穴を検出するにとどまる。周溝の北辺は不明瞭である。平面プランは隅丸長方形を呈する。規模は長径約470cm、短径約380cm。軸方向はN－27°－W。周溝は南辺で幅約48～62cm、深さ約5～10cm。東辺で幅約28cm前後、深さ約4～8cm。西辺で幅約34cm前後、深さ5～10cmを測る。主柱穴と確定できるものは不明であるが、P_1—P_2、P_3—P_5、P_6、P_7—P_{11}のように主軸方向と平行線上、または垂直線上に対をなし各柱穴が存在しており、推測すれば2本の主柱が竪穴の真中の長軸に沿って立ち、屋根を左右へ葺き降ろす構造をもつものと思われ、西辺と北辺の周溝と並行するように存在するP_{12}、P_{13}、P_{14}、P_{15}は左右に葺き降ろした屋根を支える柱穴ではないかと考えている。重複関係は東側周溝の一部が第4号掘立柱建物によって切断されており、北側周溝も一部が第1号掘立柱建物の桁行南側柱列西第1柱穴によって切断されており、第1号掘立柱建物、第4号掘立柱建物に先行し構築されている。覆土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

遺物　覆土中より土師器が出土しているが、図示可能なものは1点だけである。1は小型鉢、口径10.9cm、現器高5.5cm、丸底、口縁部は内湾気味に開き、頸部はしまりがなく段は不明瞭である。調整は磨耗が著しく不明。焼成は良好。外面、淡赤褐色、内面、赤褐色を呈する。



第7図　第2号竪穴住居跡出土遺物（S＝1/3）



第6図　第2号竪穴住居跡（S＝1/80）

第8図　T 12区・P 7G区・T 13区　遺構配置図（S＝1/100）

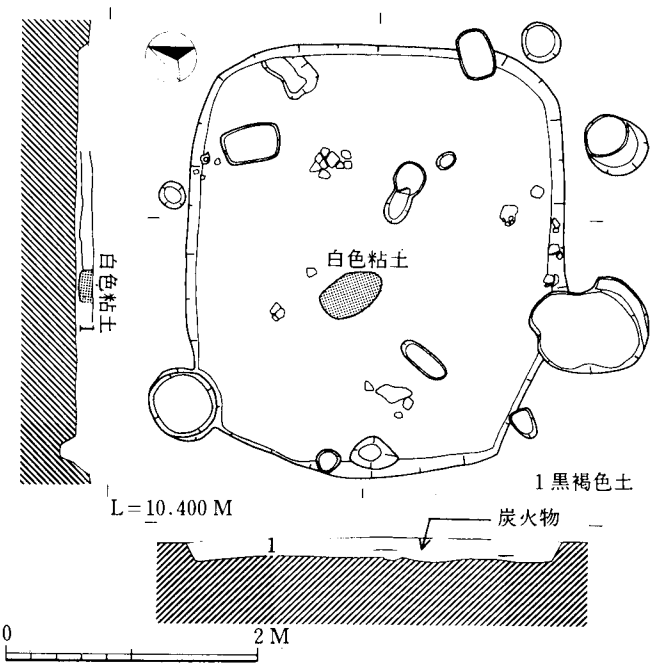
1 耕土
2 床土
3 濁淡茶褐色砂質土
4 濁黒褐色土
（1～5層砂質土）
5 濁茶褐色土
6 濁淡茶褐色砂質土
7 濁暗褐色土
8 濁黒色土

8号土壙
5号溝
7号住居跡
9号土壙
6号溝
10号土壙
A
B
C
D
焼土塊
粘土
8号住居跡
5号住居跡
6号住居跡
炉址
焼土
7号溝
11号土壙
焼土
12号土壙
焼土・灰層の広がり
粘土
粘土
13号土壙
14号土壙
E
F
L＝9.500 M
A
B
L＝9.500 M
C
D
4号住居跡
0
5 M

第9図　P6G区遺構配置図（S＝1/100）

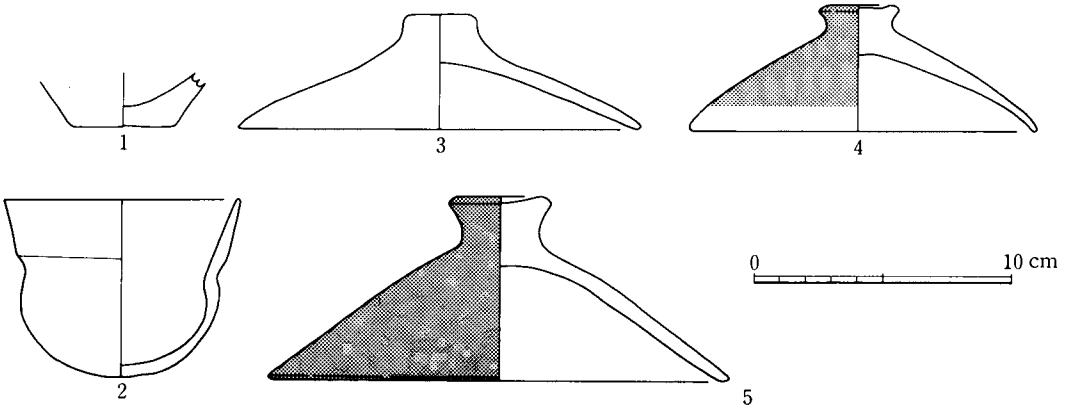
3　第３号竪穴住居跡（第10図・図版６）

遺構　Ｐ－７Ｇ区南西部に位置する。台地調査区で検出した住居跡の中で最も西側にあたる。遺構の検出段階で調査範囲外に遺構の伸びが認められ、Ｐ－７Ｇ区で検出した竪穴住居跡の中で最も遺構の保存状態が良好であると判断し、調査区を拡張し全体形をとらえることにした。平面プランは隅丸方形を呈する。長軸約342cm、短軸約296cm。軸方向Ｎ－65°－Ｅ。壁高は南辺で約16cm、北辺で約14cm、東辺で約８cm、西辺で約９cm。周溝は存在していない。柱穴は不規則に並びいずれが主柱穴になるかは判断できない。覆土は黒褐色土で床面より約５cm程のレベルで厚さ0.5～0.8cmの炭火物の堆積が見られる。



第10図　第３号竪穴住居跡（Ｓ＝1/60）

遺物　出土遺物は全て覆土中からであり床面上からの出土遺物はない。１は甕型土器の底部で底部径4.0cm、平底、現器高2.1cm。調整は磨耗が著しく不明。焼成は良好、内外面とも赤褐色を呈する。２は口径9.2cm、器高7.1cm、丸底。頸部は緩やかにくびれ稜を作る。調整不明。焼成は並である。３～５は蓋型土器。３はつまみ径2.9cm、口径16.0cm、器高4.5cm。天井部は平坦で体部は内湾気味に開く。つまみ部～体部は内外面ともにヘラ磨き。４はつまみ径3.2cm、復元口径13.6cm、現器高4.5cm、天井部は凹む。体部は内湾して広がる。調整は内外面ともにヘラ磨きに

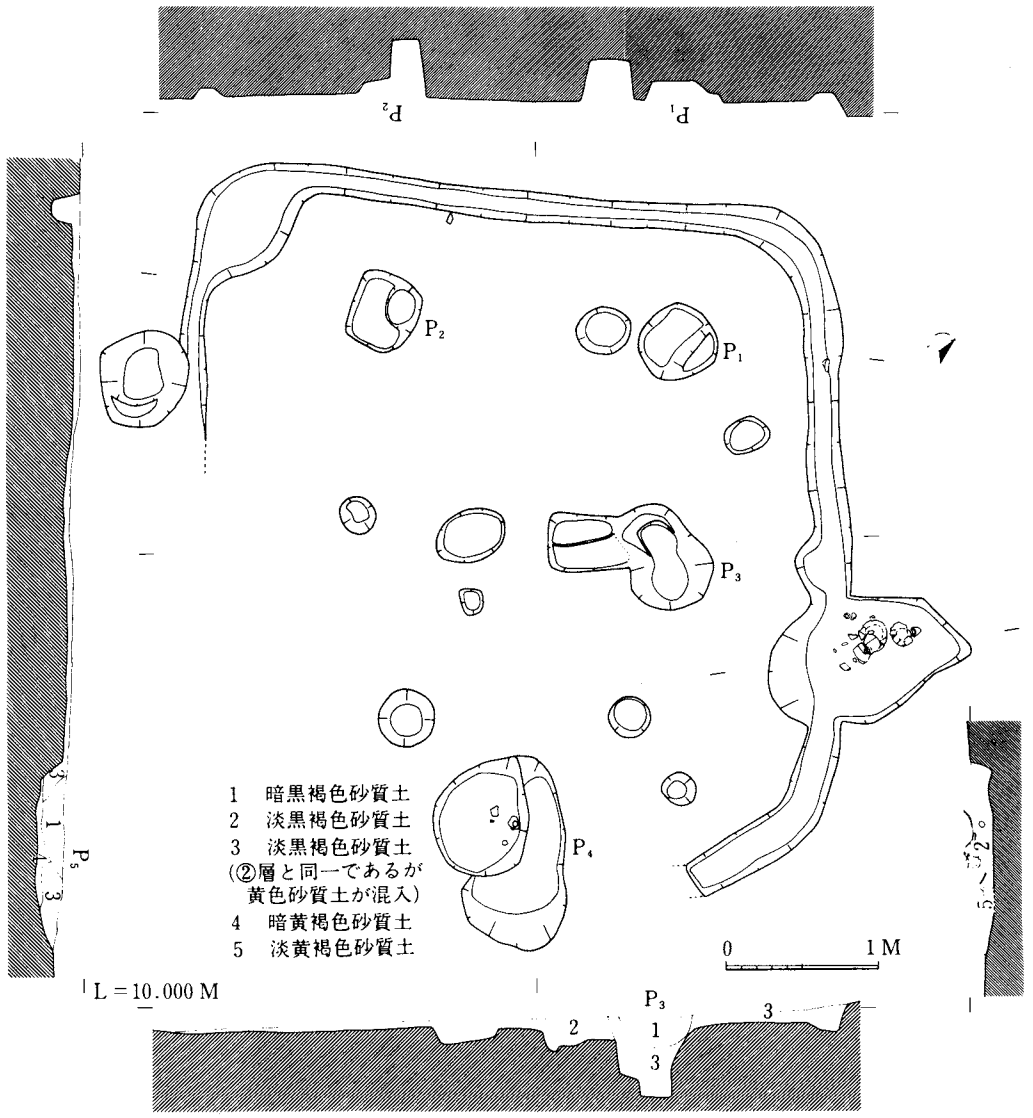


第11図　第３号竪穴住居跡出土遺物（Ｓ＝1/3）

よる。外面は赤彩を施す。5はつまみ径4.1cm、口径18.3cm、器高7.4cm。体部は内湾して広がる。内外面ともにヘラ磨きされる。外面は赤彩を施す。

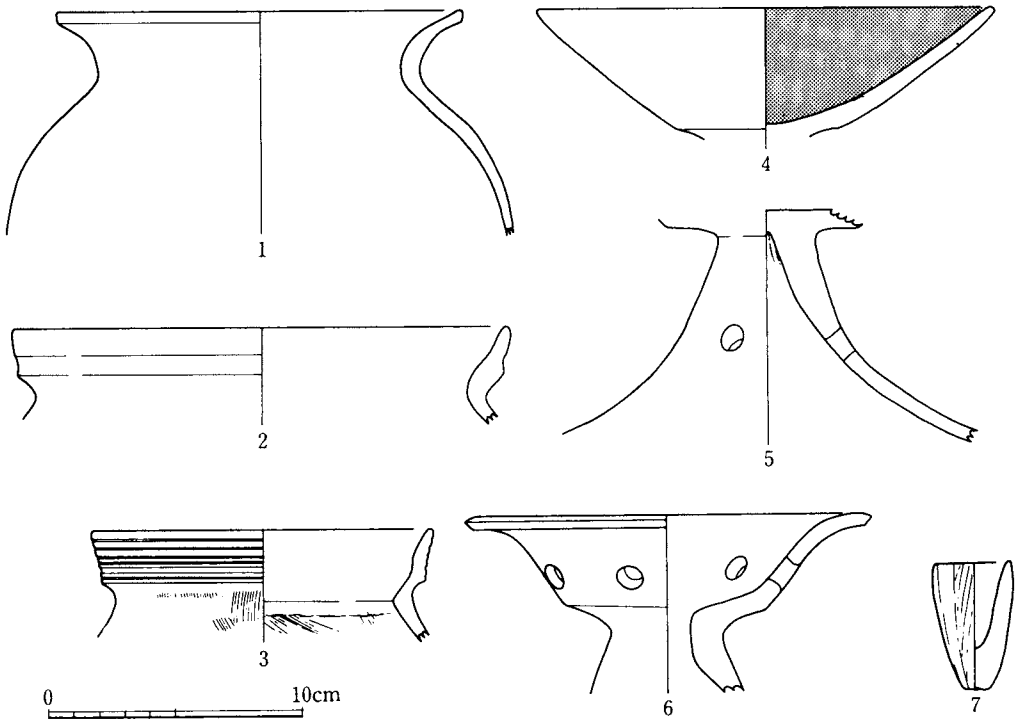
4　第4号竪穴住居跡（第12図・図版7）

遺構　P－6G区南西部に位置する。平面プランは隅丸方形を呈する。南辺、東辺は大半が削平のため遺存しない。規模は長径約455cm、短径450cm、軸方向はN－50°－W。壁高は北辺で10cm、西辺で5cm。周溝は幅15cm～30cm、床面からの深さは5～13cmを測る。北辺では一部北東方向に突出する部分が見受けられるか、本遺構に直接付くものが、遺構が切り合っているものかは不明である。主柱穴は2個検出しており、P_1は径50cm、深さ15cm、P_2は長径50cm、短径45cm、深さ38cm、柱間距離約180cmを測る。住居跡内の覆土は3層に分層でき、第1層、暗黒褐色砂質土、第2層、淡黒褐色砂質土、第3層は第2層と似た土であるが黄色砂質土を混入する。



第12図　第4号竪穴住居跡

遺物　周溝内より出土したものが大半で同溝の底面レベルよりやや浮いた状態で出土している。図示可能なものは７点である。１は「く」の字口縁を有する甕型土器で端部は面取りを行う。口径16.0cm 調整は磨耗のため不明。２・３は有段口縁の甕型土器で、２は口縁帯は無文で口径19.8cm、３は口縁帯に６条の擬凹線を巡らす。内外面ともにハケ調整を施す。４・５は高杯型土器。４は口径18.0cm、杯部底面は小さく口縁部が大きく開く形態を取り、内面には赤彩痕が残る。５は裾部が大きくラッパ状に開き、碗状の杯部をもつものと思われる。透孔は３個、地色は淡橙褐色を呈する。６は器台形土器、口径16cm、現器高７cm を測る。外反した器受部に円形透孔７個をもつ。類品として古府クルビ遺跡拡張区Ⅰ出土土器を揚げることができるが、頸部から口縁部の形態に若干の差異を感じる。調整は口縁部内外面ヘラ磨きによる。焼成は並、地色は淡橙褐色を呈する。７は P_4 からの出土遺物である。手捏土器で器高5.cm、口径3.0cm を測る。



第13図　第４号竪穴住居跡出土遺物（S＝1/3）

５　第５号竪穴住居跡（第８図・図版８）

遺構　P－６G区中央部に位置する。検出部分は北辺と西辺の一部である。平面プランは隅丸方形を呈するものと考えられる。北辺長約350cm、壁高10～30cm、周溝幅30～46cm、深さ８～17cm を測る。西辺周溝の南側で２ケ所の焼土面を検出するが、薄い焼跡が見受けられる程度である。覆土は３層に分層でき、第１層、茶褐色砂質土、第２層、黄褐色砂質土、第３層、暗茶褐色砂質土の堆積を示す。重複関係は確実なものとしては、第５号溝、第６号溝を切断し構築されており第14号土壙に切断されている。

遺物　1～4は壺型土器である。1は東海系のパレススタイルの壺である。外面はヘラ磨き調整を行っており、内面調整は口縁部がヘラ磨き、体部は刷毛調整を行う。外面肩部には貼り付けの凸帯痕がみられる。外面は赤彩される。2は体部中央に最大径をもち25.2cmを測る。3も2と同じく体部中央に最大径をもち18.2cmを測る。外面はハケ調整後、ヘラ磨きを行う。内面はヘラ削り調整。外面は赤彩により飾られる。4は「ハ」の字形に開く口縁をもつ。5・6は体部が内湾的に開く鉢型土器で5は外面に赤彩を施す。7は台付鉢で口縁部は有段を呈する。円錘状の脚をもつ。内外面ともに赤彩を施している。8・9は細口長頸壺の蓋と考えられるもので、天井部は凹むつくりとなり笠部は外反的に開くものと内湾的に開くものがある。外面は赤彩により飾られている。

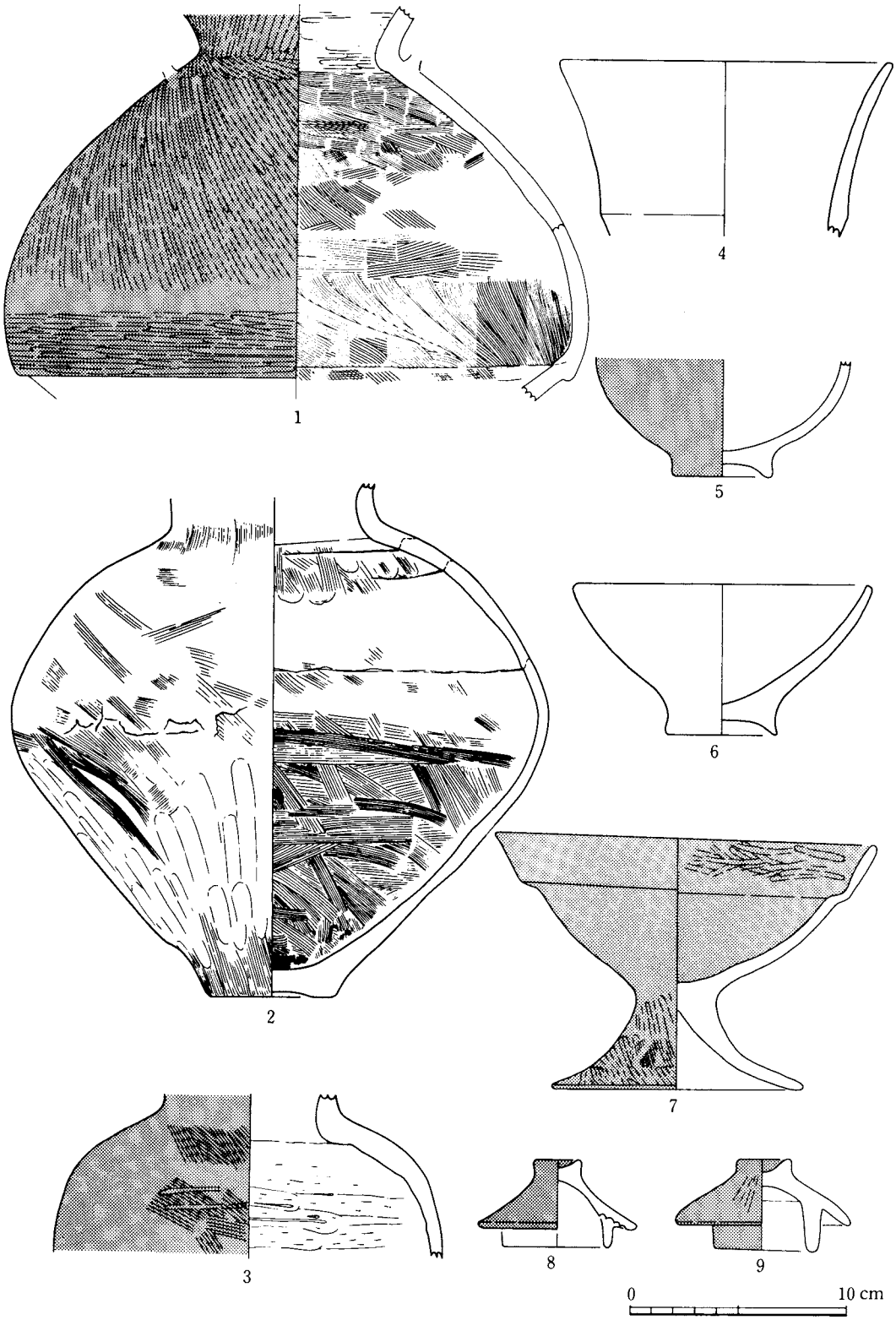
6　第6号竪穴住居跡（第9図・図版9）

遺構　第5号住居跡の内側に位置する。軸方向は第5号住居跡とほぼ同一方向である。平面プランは隅丸方形と思われる。検出部分は第5号住居跡と同じく北辺と西辺の一部にとどまっており、北辺長約200cm。周壁は存在しない。周溝幅28cm、深さ12cm前後。西辺長約660cm壁高約9cm、周溝幅25～60cm、床面からの深さ9～17cmを測る。西辺周溝の床面で長さ20～26cm、幅12～18cm、厚さ7～10cmの焼土塊を2個検出する。覆土は3層に分層され、第1層、明黄褐色粘質土、第2層、茶褐色砂質土、第3層、暗褐色砂質土の堆積を示す。

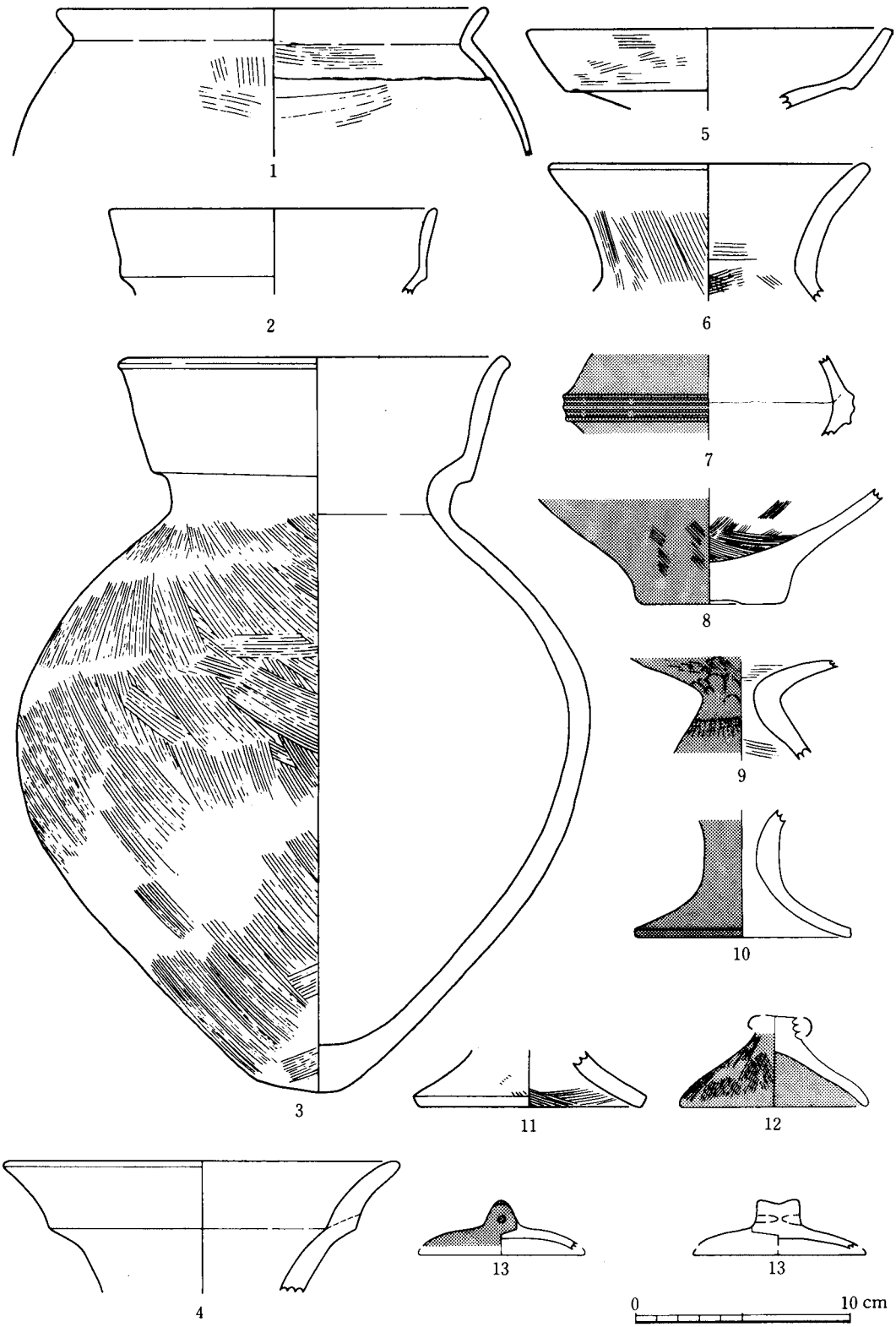
遺物　第5・6号住居跡からの出土遺物であるが、どちらに付くものか判断できない資料が13点あり本住居の中で同一に扱うものとする。1、2は甕型土器で1は「く」の字口縁を呈する。体部に比較し口縁が短いつくりとなる。2は有段口縁を呈する。3～7は壺型土器で3は現器高34.5cm、口径18.5cmを測る。口縁端は面取りが行われている。口縁部外面はヘラ磨き、体部はハケ調整、口縁部内面はヨコナデ、体部はヘラ削り調整を行う。4は内面の屈曲が明瞭ではない。5は有段口縁を呈する。6は〝ハ〟の字形に開く口縁をもち内外面ともに刷毛調整を行う。7は台付細口壺の胴部で貼り付け凸帯に2条の擬凹線を巡らす。外面はヘラ磨き調整で赤彩により飾られる。8は壺型土器の底部で径7.0cmを測る。外面は赤彩により飾られる。9は器台形土器で現器高4.7cmを測る。外面は赤彩を施す、10・11は高杯か器台の脚部と考えられる。脚部端は面取りがされている。10は外面に赤彩を施す。12、13は蓋型土器で12は口径8.8cm、現器高4.3cmを測る。13は口径8.0cm、現器高2.6cm、つまみ部に穿孔をあけた後が見られるが貫通はしていない。

7　第7号竪穴住居跡（第9図・図版9）

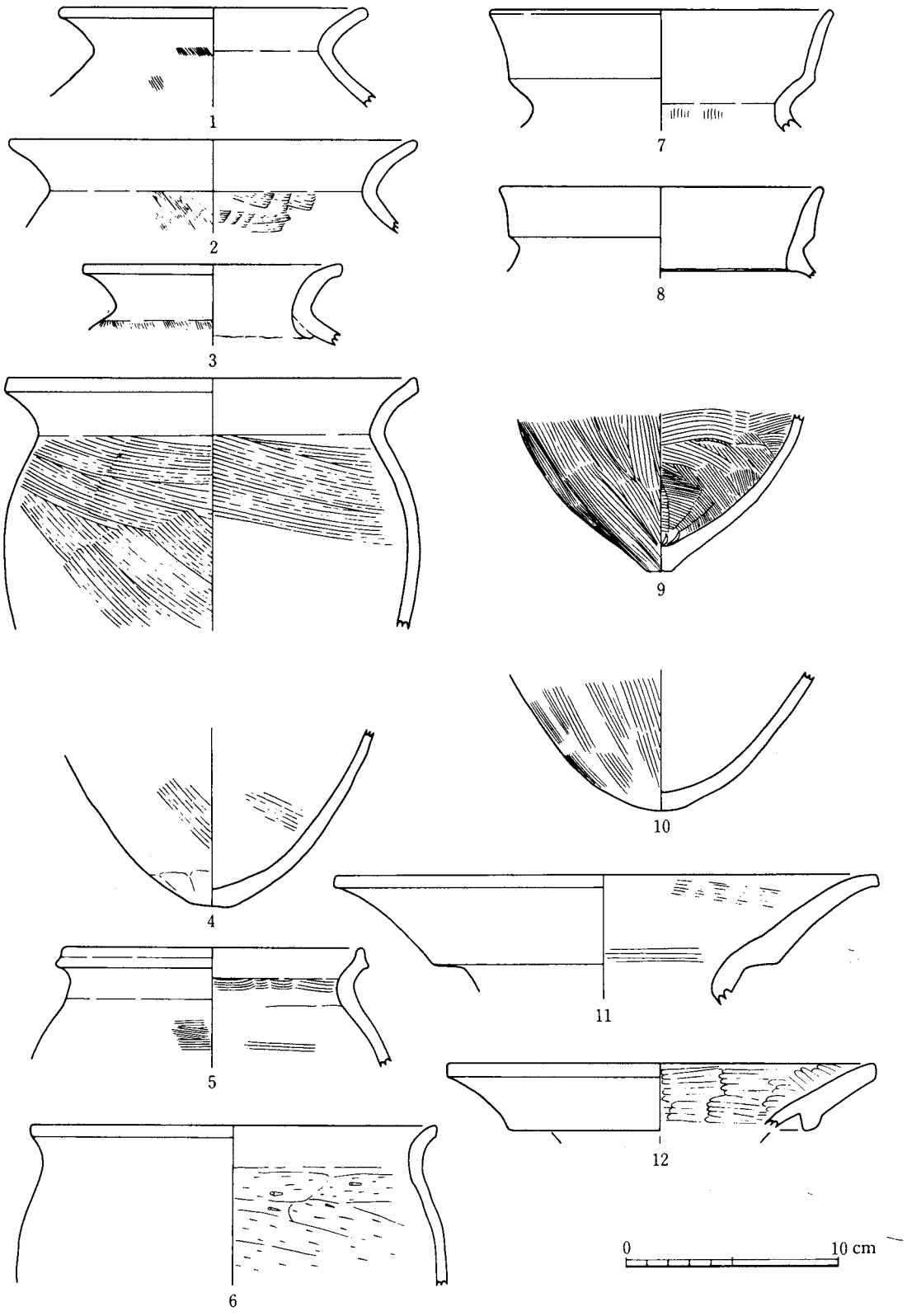
遺構　大型の竪穴住居跡で平面プランは胴張の楕円形を呈する。東辺は一部未調査区に位置しており、南辺は存在しない。長径約10mと推定され短径約9.4mを測る。西辺では壁高約30～46cm、周溝幅約32～70cm、深さ約9～14cm。東辺では壁高約32～39cm、周溝幅約35～68cm、深さ約5～10cm。北辺では壁高約53～58cm、周溝幅約55～75cm、深さ約5～14cmを測る。主柱と考えられるものは、第8号住居跡と床面レベルが同一であることも含め、確定できるものはないが、6本主柱の可能性が高い。覆土は基本的には3層に分層でき、第1層、濁淡茶褐色土、第2層、濁黒褐色土、第3層、濁茶褐色土の層序を示す。



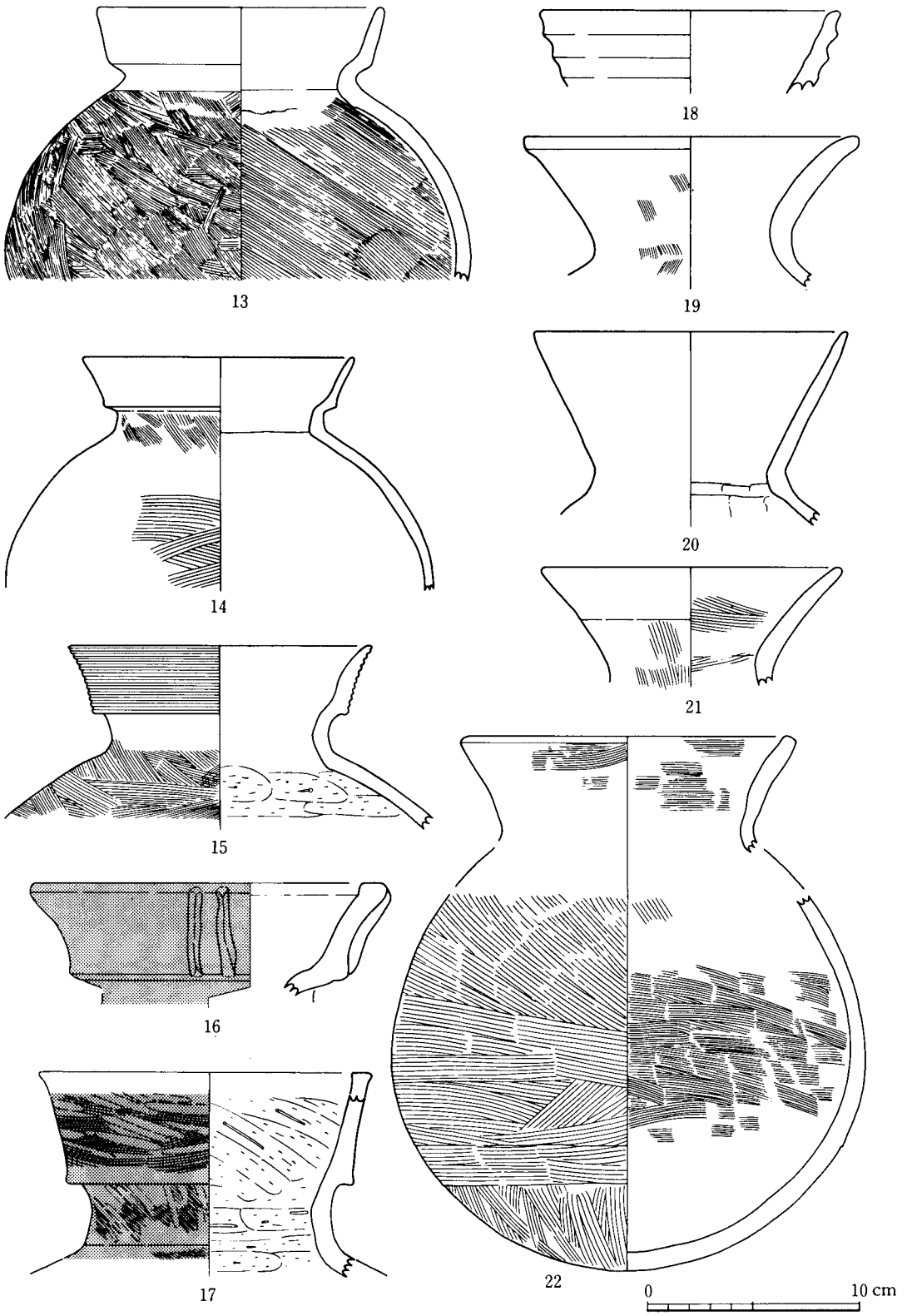
第 14 図　第 5 号竪穴住居跡出土土器



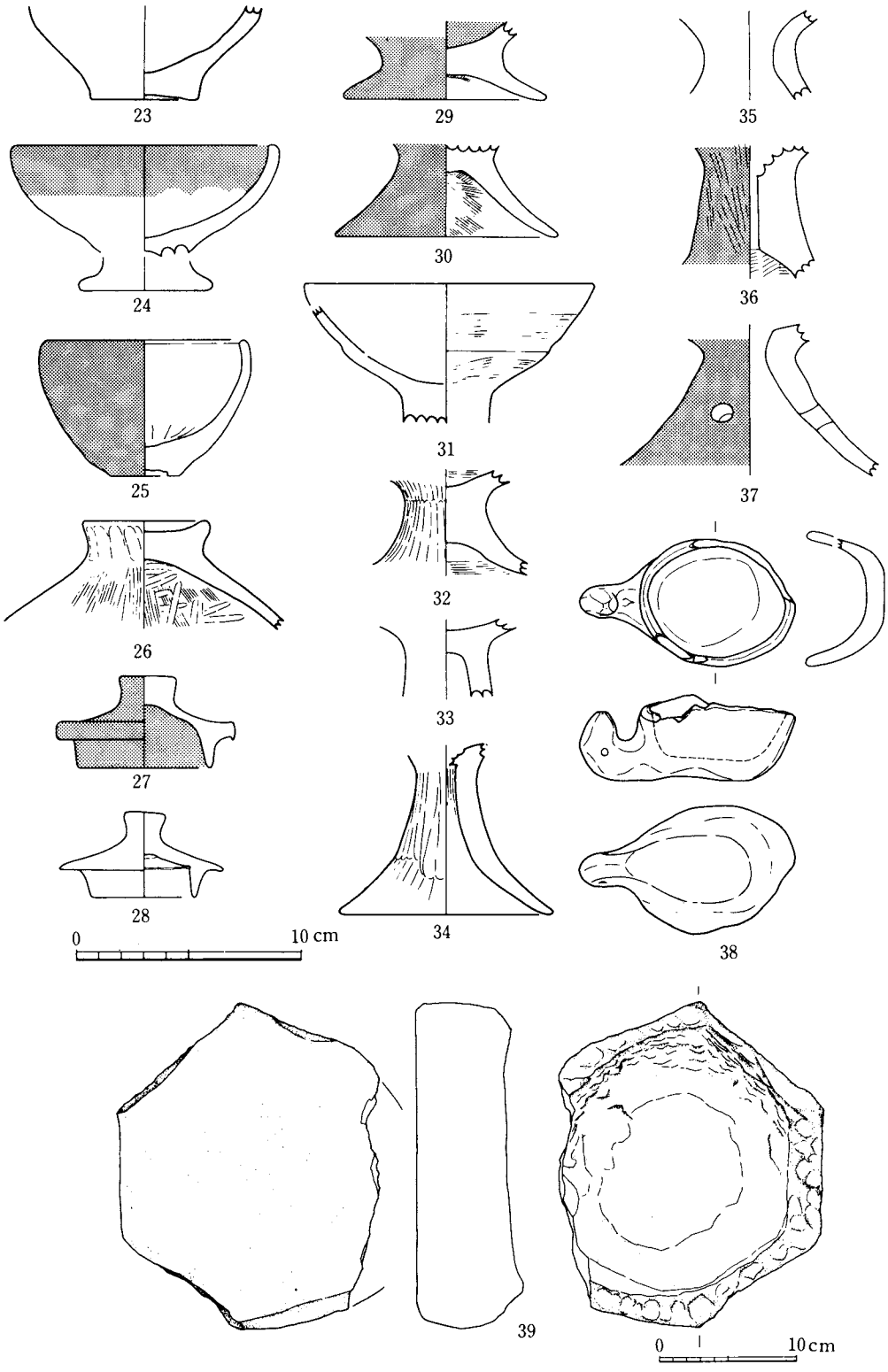
第15図　第5・6号竪穴住居跡出土土器



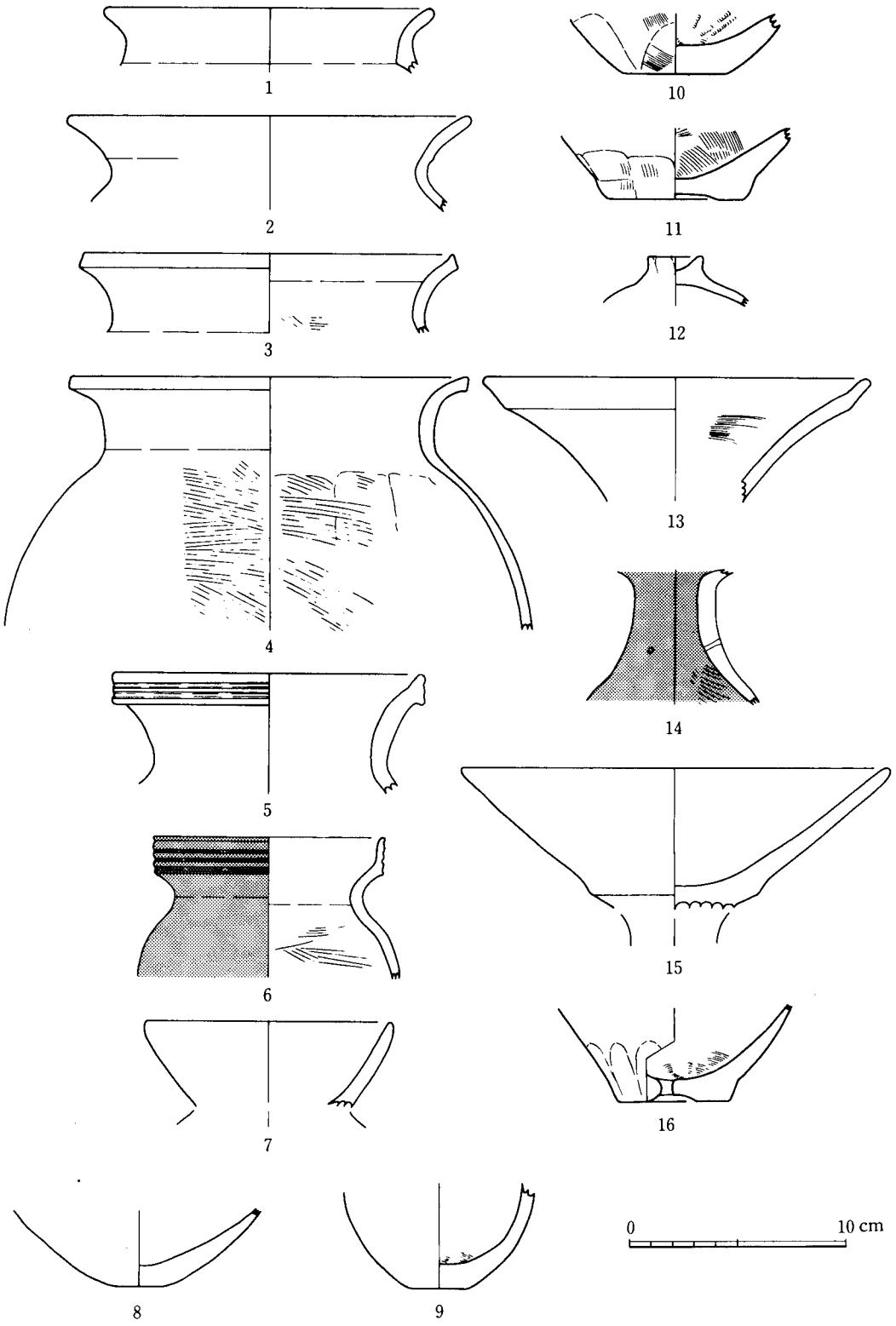
第16図　第7・8号竪穴住居跡出土土器



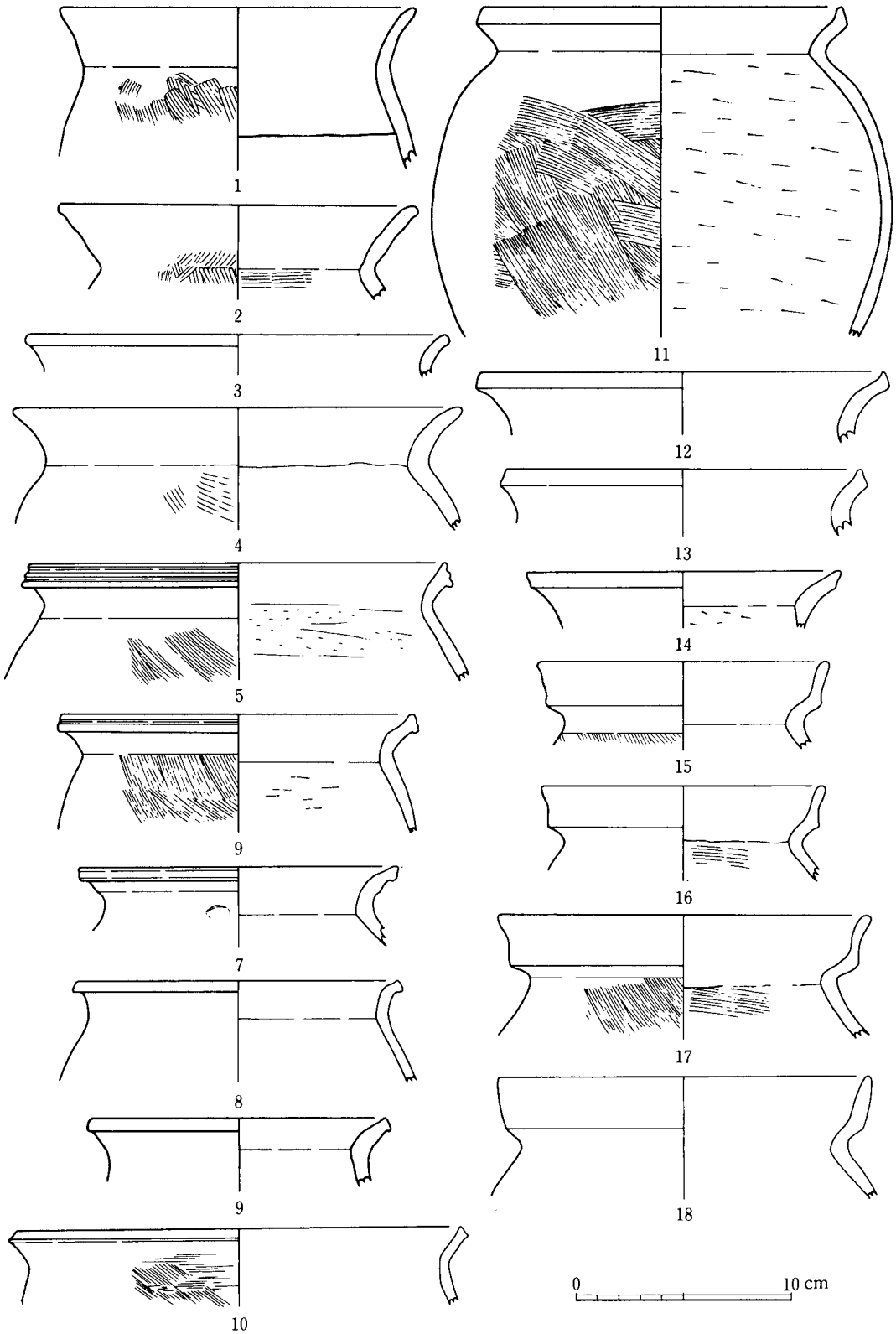
第17図　第7・8号竪穴住居跡出土土器



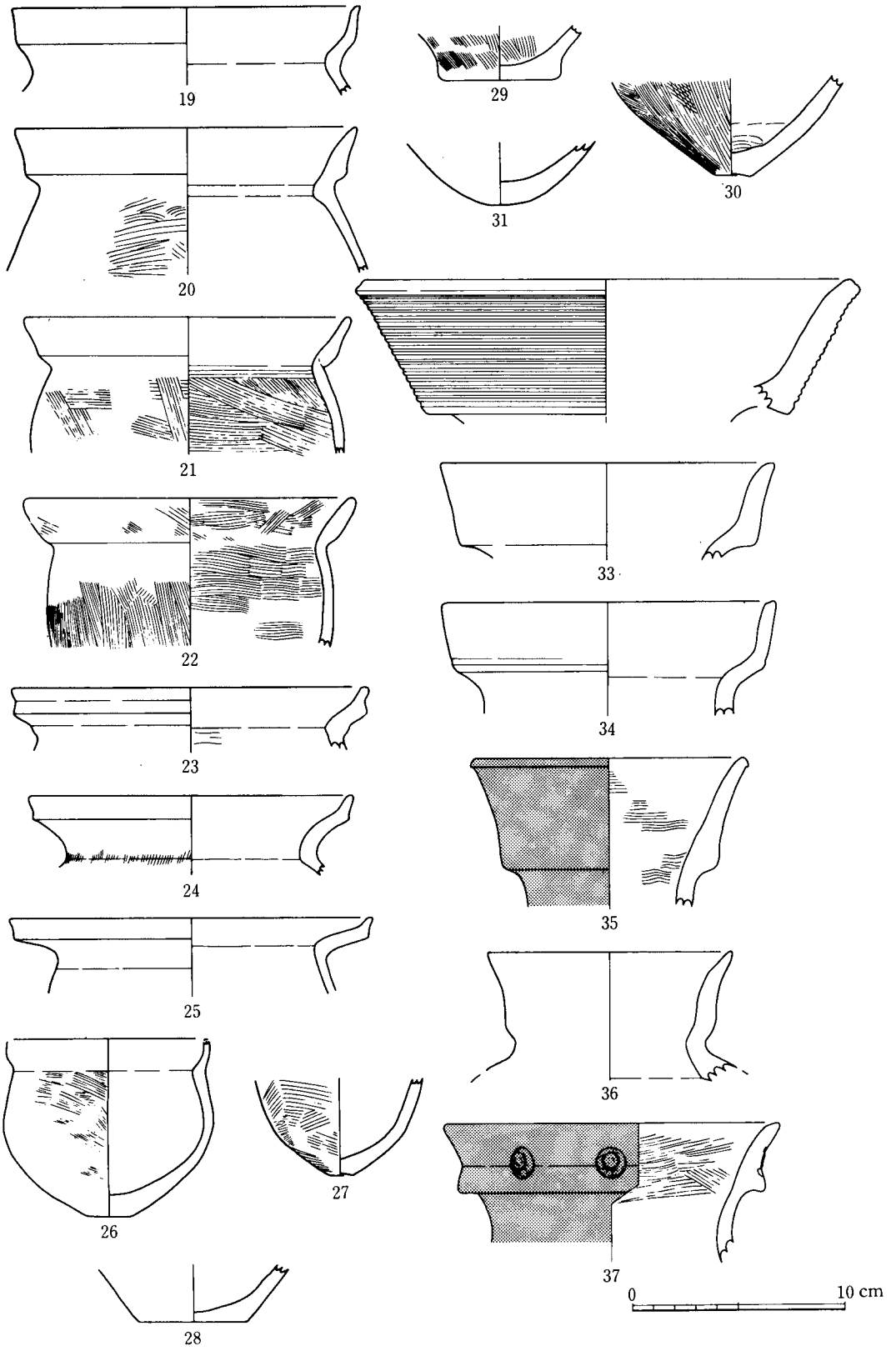
第18図　第7・8号竪穴住居跡出土遺物



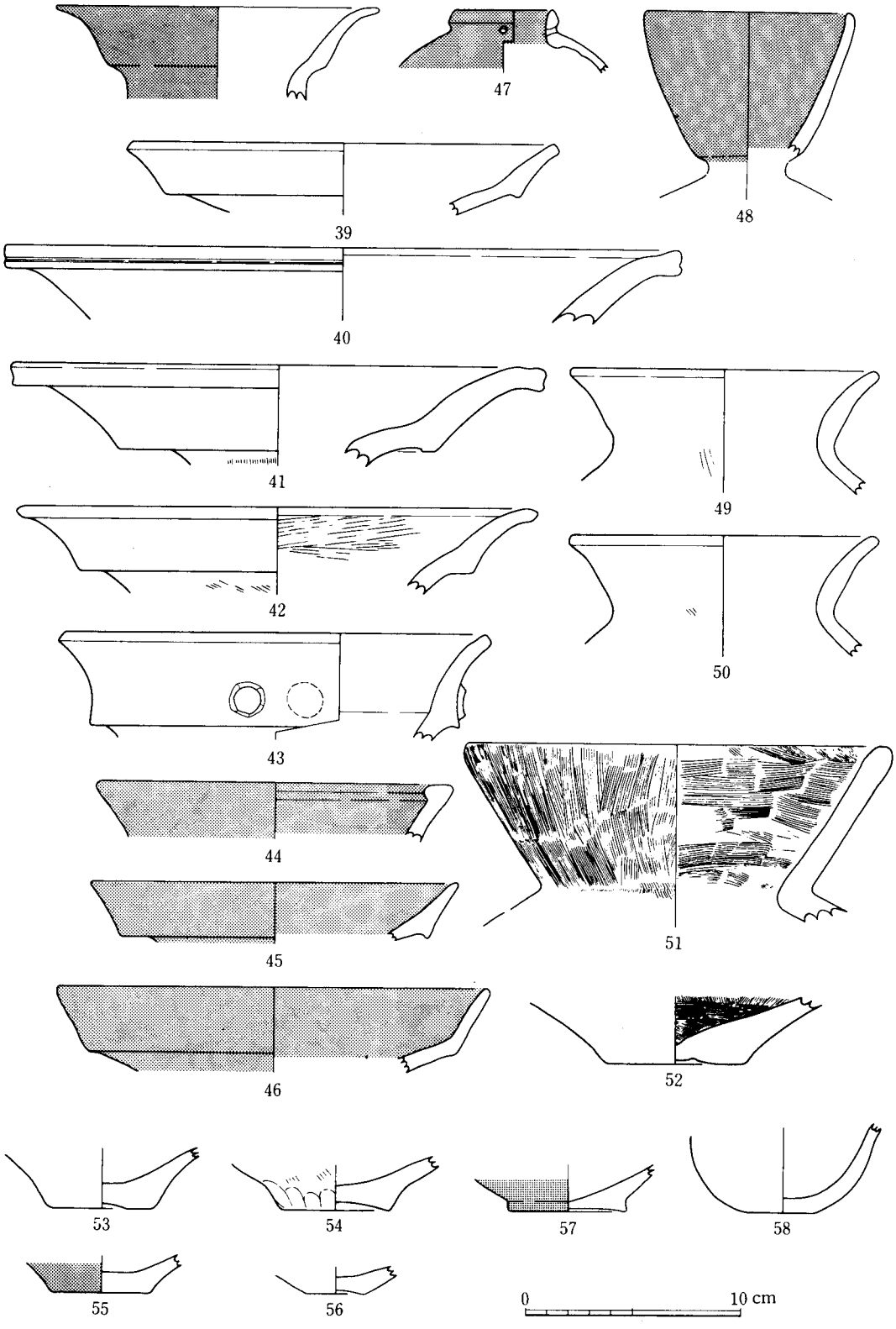
第19図　P 7 G・T 11・T 12 調査区出土土器



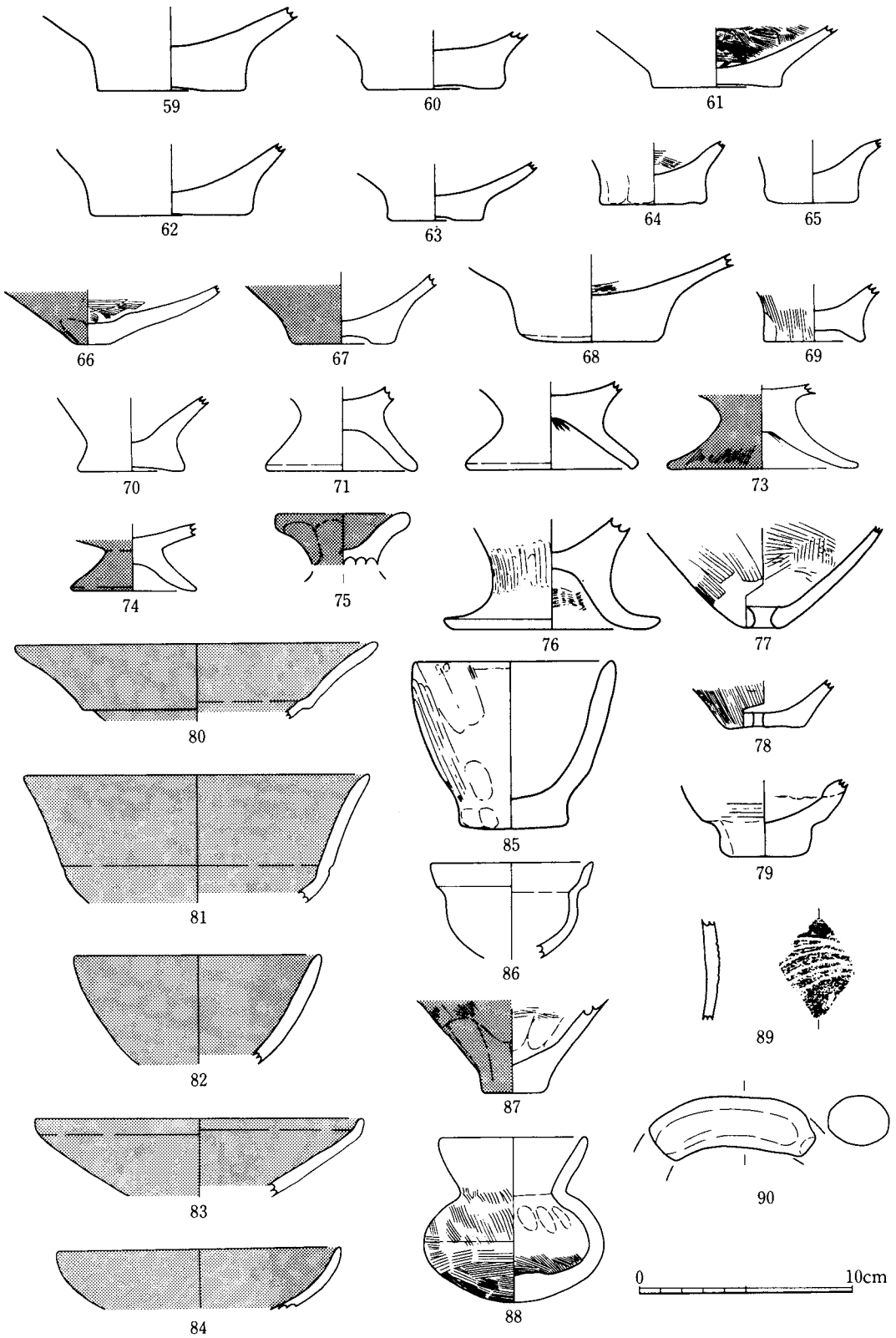
第20図　P 6 G調査区出土土器



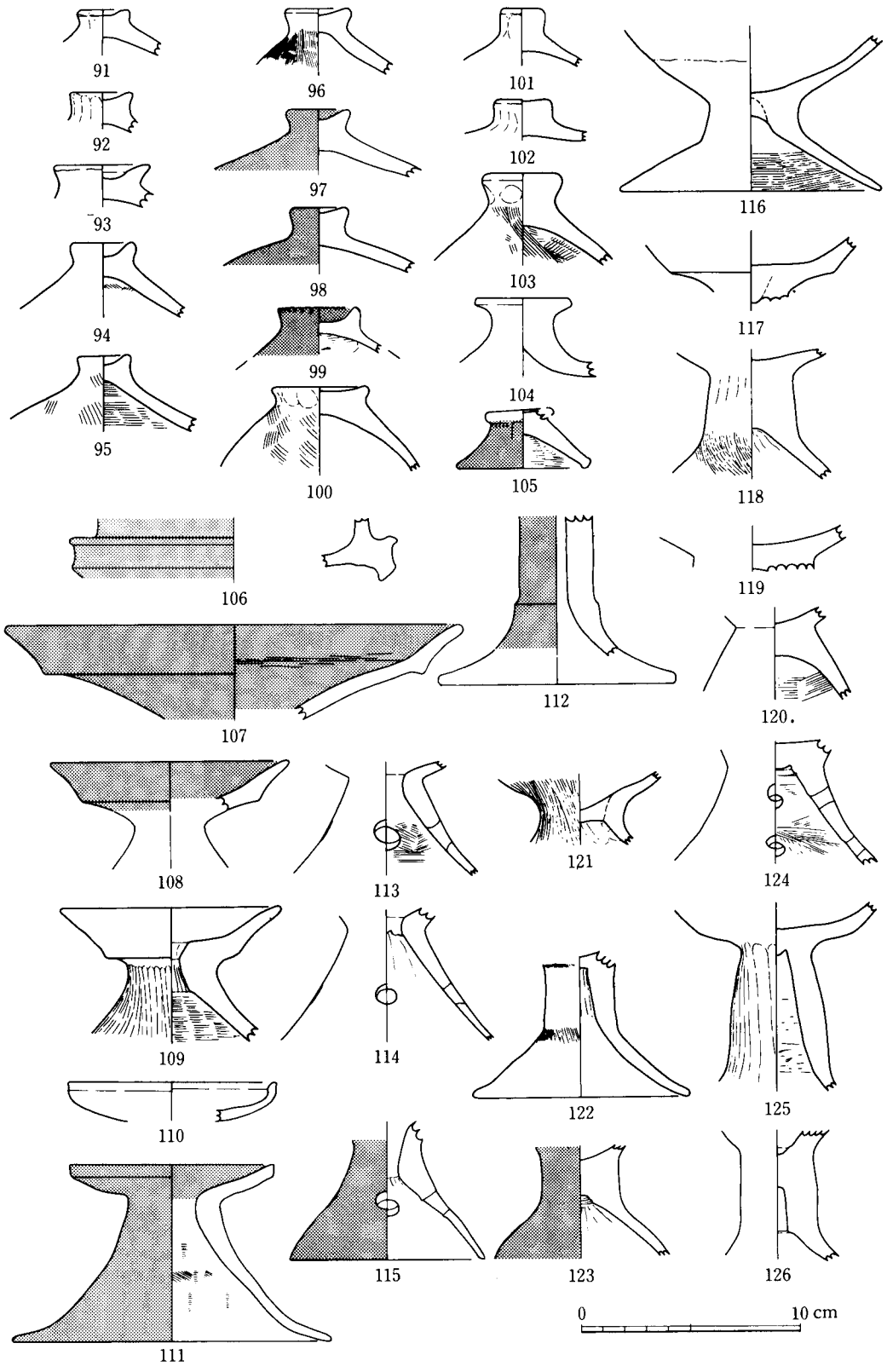
第21図　P 6 G調査区出土土器



第22図　P6G調査区出土土器



第23図　P6G調査区出土土器



第24図　P6G調査区出土土器

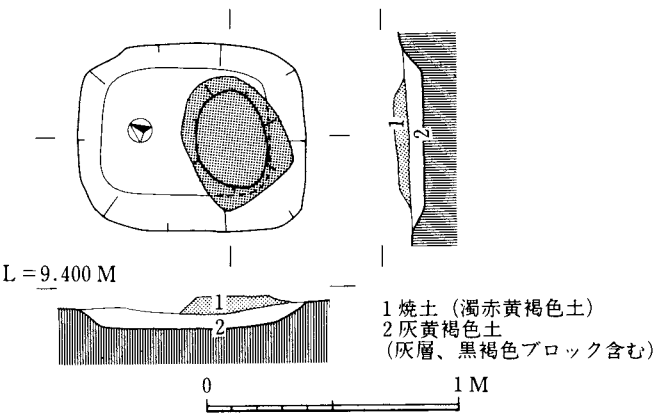
遺物　覆土中より出土しているが、床面が第８号住居跡とほぼ同一レベルであることから本遺構と第８号住居跡出土遺物をまとめて取り扱うことにする。

８　第８号竪穴住居跡（第９図・図版９）

遺構　第７号住居跡の内側に位置している。所々、周壁、周溝がとぎれており、遺構の依存状態は良好とは言えない。平面プランは胴張の楕円形を呈する。長径約8.05m、短径約7.25m を測る。本遺構の中では大型の竪穴住居跡である。西辺では周溝幅20～32cm、深さ６～13cm、北辺では壁高約９cm、周溝幅85cm 前後、深さ約５cm、東辺では壁高約６cm、周溝幅約30cm、深さ10cm、南辺では壁高約８cm、周溝幅約85cm、深さ約25cm を測る。本遺構の北西部分で工作用特殊ピットと思われる長軸110cm、短軸98cm、深さ16～25cm の遺構を検出しており、床面では一辺23～28cm の方形の白黄色粘土塊が見られる。覆土は淡茶褐色砂質土の単一層である。

遺物　１～３は〝く〟の字口縁の甕型土器で端部は丸くおさめる。４・６は口縁端に面取りが見られる。５は口縁端がナデ調整により若干肥厚し、短い口縁帯をもつ。７・８は有段口縁の甕型土器で７は内面の屈曲は明瞭で８は内面が〝く〟の字を呈する。９・10は甕底部である。11～21は壺型土器である。11、12は口縁部が大きく外反する。11は内面は刷毛調整、12は内面ヘラ磨きによる調整である。13・14・15は口縁形態だけを見ると月影期の甕型土器のつくりと同一である。15は口縁帯に11条の擬凹線を周らす。13は体部内外面ともに刷毛調整、14・15は外面刷毛調整、内面はヘラ削りを行う。16・17は有段口縁を呈し16は口縁帯に棒状浮文（２本）が見られ外面は17と同じく赤彩により飾られる。18～21は〝く〟の字口縁を呈する。頸部から緩やかに外反する19、21と20のように直線的に開くものがある。22は球形に近い胴部をもつものと考えられる。内面ともに刷毛調整を行う。23は壺の胴下半から底部。24・25は体部が内湾的に開く形態をもち24は内外面、25は外面に赤彩を施す。26～28は蓋型土器で27・28は細口壺の蓋と考えられる。29・30は脚（台）部である。31～34は高杯型土器で31は口径13.0cm を測る。35～37は器台形土器で現器高は4.0～6.7cm を測る。36・37は外面に赤彩痕が見られる。38は把手付土製品で全長9.5cm、現器高3.8cm、底径6.0cm を測る。調整は不明、39は石皿で六角形を呈する全長24.4cm、深さ0.8cm、厚さ6.7cm を測る。（石質は角閃石安山岩である。）

炉跡　平面プランは隅丸方形を呈する。規模は長径91cm、短径75cm、深さは検出面から約10cm を測る。底面は平坦である。覆土は２層に分層でき、下層は灰黄褐色土（灰層）、上層は焼土塊（焼土の堆積を示す）。焼土塊は楕円形を呈し、長径48cm、短径40cm、厚さ７cm 前後を測る。本遺跡は第７号、第８号住居跡のいずれか、または第７号住居跡が拡張されているこ



第25図　第７、８号竪穴住居跡炉址（S＝1/30）

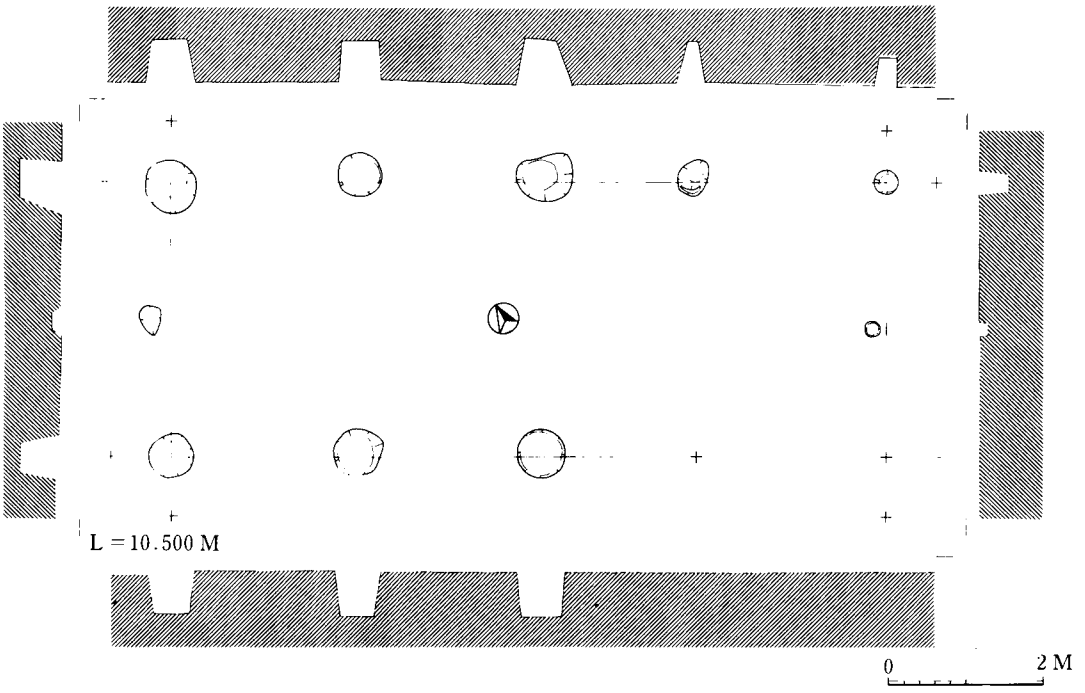
ともあり、双方に付随する可能性も考えられる。

(2) 掘立柱建物

1 第1号掘立柱建物（第26図・図版5）

遺構 P－7区、T－13区にかけて検出する。規模は4間×2間(9.36×3.60m)。面積は33.67m²。棟方向N－62°－W。一応東西棟とする。柱間距離は桁行北側柱列西第1柱より東方向へ、2.4m、2.5m、2.0m、2.46mを測る。同柱列第3柱と第4柱間が狭少となるが他はほぼ近似した数値をもつ。桁行南側柱列西第1柱より東方向へ、2.4m、2.5mを測る。同柱列の第4柱と第5柱は、未調査区に位置するため検出していない。梁行西側柱列北第1柱より南方向へ、1.8m、1.8mを測る。梁行東側柱列北第1柱より南方向へ、1.9mを測る。掘り方のプランは大部分が円形、又は楕円形を呈しており、径は約20～75cmを測る。深さは約11～60cmを測る。底レベルは桁行列はほぼ一定であるが、梁行列は妻柱の底レベルが高い。覆土は黒褐色粘質土の単一層である。次に重複関係は、桁行南側柱列西第1柱が第2号竪穴住居跡の北東辺周溝の一部を切断し構築されている。又桁行南側柱列西第3柱は第5号土壙が埋没後掘り込まれており、本遺溝は第2号竪穴、第5号土壙に後出する。

遺物 本遺構からの出土遺物はない。



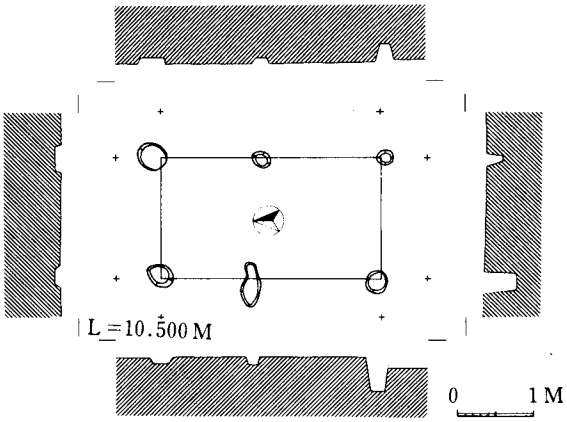
第26図 第1号掘立柱建物（S＝1/100）

2 第2号堀立柱建物（第27図・図版5）

遺構 P－7区で検出する。規模は2間×1間（2.90×1.60m）面積4,640m²。棟方向はN－2°－E。南北棟である。柱間距離は桁行東側柱列北第1柱より南へ、1.34、1.5mを測る。桁行

西側柱列北第１柱より南へ、1.2m、1.7mを測る。梁行北側柱列間1.6m、梁行南側柱列間1.6mを測る。掘り方のプランは大部分が円形または楕円形を呈する。規模は径22～40cm、深さ８～42cmを測る。底レベルは一定ではない。

遺物　本遺跡からの出土遺物はない。

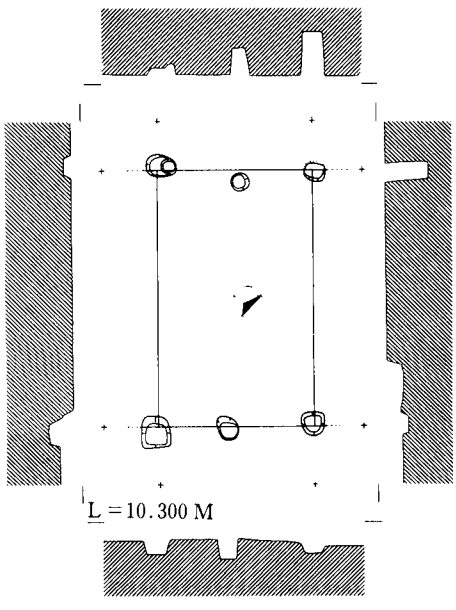


第27図　第２号掘立柱建物（S＝1/100）

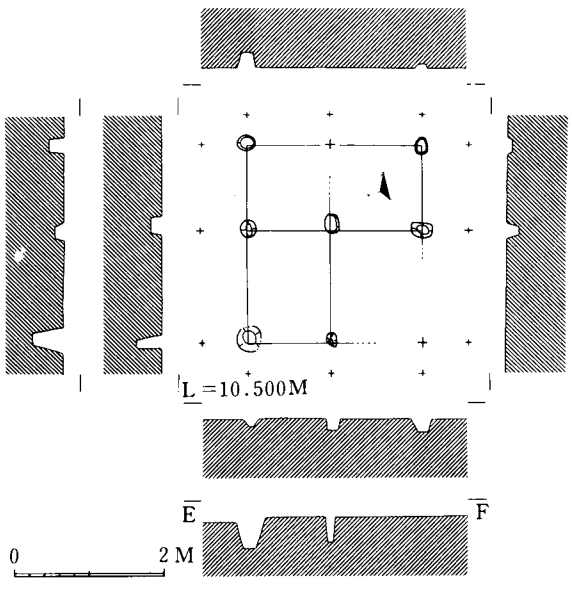
３　第３号掘立柱建物（28図・図版５）

遺構　T－13区で検出する。遺構の大半が未調査区に位置しており、建物規模については全く推測の域を出ないが、東西柱列を桁行にとる建物とは考えにくく、梁行と考えたい。検出部分の規模は２間以上×１間(2.06以上×3.38m)。軸方向はN－22°－E。一応南北棟とする。柱間距離は桁行西側柱列南第１柱より北方向へ、1.1m、0.96m、桁行東側柱列南第１柱より北方向へ0.90m、1.16mを測る。梁行南側柱列間3.38m梁行北側柱列間3.38mを測る。掘り方は大部分が、方形または楕円形で、長径28～42cm、短径23～30cmを測る。深さは10～58cm。底レベルは一定でない。桁行東側柱列の検出面より、約14～20cm下がった所で検出されており、上部は既に削平を受けていた。

遺物　本遺構からの出土遺物はない。



第28図　第３号掘立柱建物（S＝1/100）



第29図　第４号掘立柱建物（S＝1/100）

4　第4号掘立柱建物（29図・図版5）

遺構　P－7G区北東部に位置する。規模は2間×2間（2.60×2.28m）。面積5.928m² の総柱建物である。棟方向はN－11°－W。南北棟である。桁行東側柱列第3柱と梁行北側柱列第2柱は存在しない。柱間距離は桁行西側1.13、1.47m、桁行東側1.13m、梁行北側2.28m、梁行南側1.08mを測る。柱穴の掘り方は径16～33cm前後の円形または楕円形を呈しており、深さは10～40cm。底レベルは一定ではない。桁行西側柱列の北第3柱は第2号住居跡の東辺周溝を切断しており、桁行東側柱列北第3柱は第4号土壙によって切断されており、本遺構は第4号土壙に先行、第2号住居跡に後出するものと考えられる。

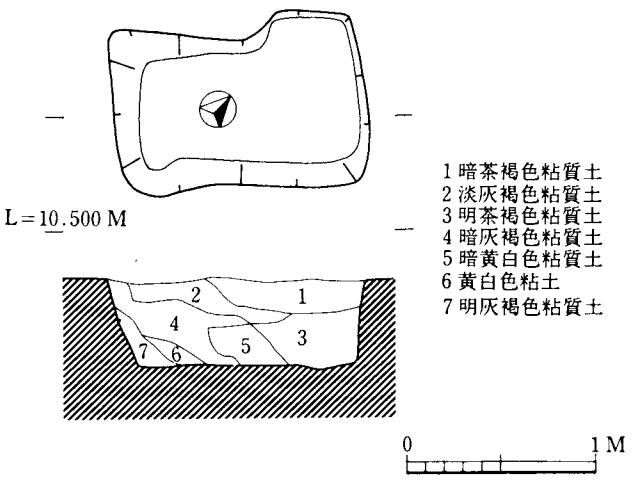
遺物　本遺構からの出土遺物はない。

(3)　土　　壙

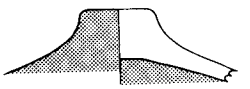
1　第1号土壙（第30図・図版12）

遺構　T－12区東側部分に位置する。平面プランは西辺の一部が突出するが、基本的には長方形である。北西方向に約205cmで第2号土壙の南辺に南東方向に約100cmで第1号溝の北辺に達する。規模は長径133cm、短径76cm、底面長径115cm、底面短径56cm、深さは検出面から約47cmをはかる。底面は平坦につくられている。壁の立ち上がりは、北壁、南壁ともに垂直に近い傾斜角度をもつ。土壙内の覆土は7層に分層され、第1層、暗茶褐色粘質土、第2層、淡灰褐色粘質土、第3層、明茶褐色粘質土、第4層、暗灰褐色粘質土、第5層、暗黄白色粘質土、第6層、黄白色粘土、第7層、明灰褐色粘質土の堆積を示している。

遺物　覆土中より蓋型土器（第20図　1）が出土している。つまみ径2.9cm、現器高3.0cmを測る。天井部は平坦な作りとなっている。焼成は並。内外面ともに赤彩されている。



第30図　第1号土壙（1/40）

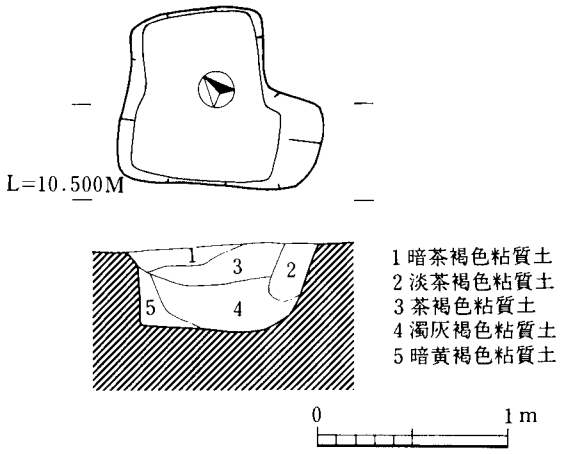


第31図　第1号土壙出土遺物（S＝1/3）

2　第2号土壙（第32図・図版12）

遺構　T－12区西側に位置する。平面プランは東辺の一部が突出するが、基本的には方形に近いプランである。規模は長径106cm、短径93cm、底面長径88cm、底面短径62cm、深さは検出面から約45cmを測る。底面は平坦につくられている。壁の立ち上がりは、東壁、西壁ともに垂直に近い傾斜角度をもつ。土壙内の覆土は5層に分層され、第1層、暗茶褐色粘質土、第2層、淡茶褐色粘質土、第3層、茶褐色粘質土、第4層、濁灰褐色粘質土、第5層、暗黄褐色粘質土の堆積を示している。

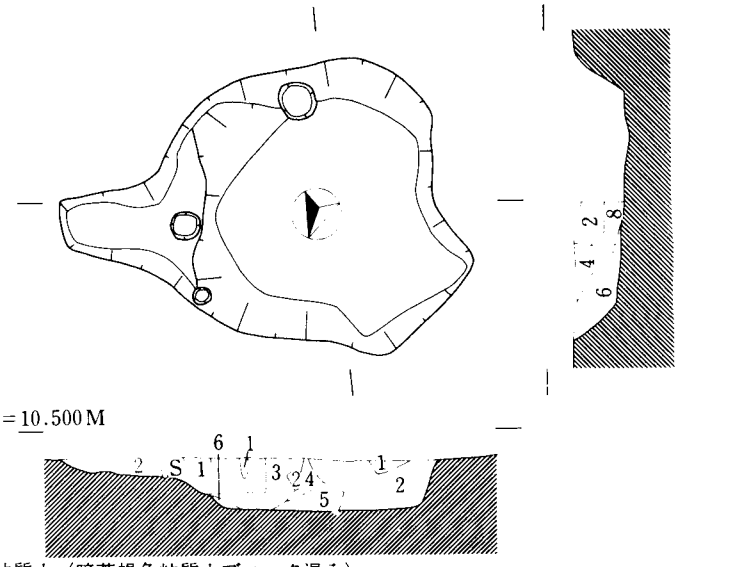
遺物　本遺構からの出土遺物はない。



第32図　第2号土壙（1/40）

3　第3号土壙（第33・図版12）

遺構　P－7G区北西部に位置する。北西方向に約50cmで第1号溝の南辺に達する。平面プランは不整形である。規模は長径約298cm、短径約218cm。底面長径204cm、底面短径190cm、深さは最も深い所で約14cmを測る。底面は平坦につくられている。壁の立ち上がりは西壁では垂直に近



1暗黄褐色粘質土（暗茶褐色粘質土ブロック混入）
2暗黄褐色粘質土（暗茶褐色粘質土ブロック混入）
3濁茶褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック混入）
4濁茶褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック混入）
5暗茶褐色粘質土
6暗黄褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック混入）
7暗黄褐色粘質土（地山ブロック少量混入）
8明黄褐色粘質土

第33図　第3号土壙（S＝1/60）

い傾斜角度をもち、北、南壁では傾斜角度50～55°を、東壁は2段掘り込みで底面から約35°の傾斜角度をもち切り込み面に至る。1段目の平担面では径24cm、深さ25cmの Pit を検出しており、北側、南側斜面でも径15、19cmの Pit を検出している。土壙の覆土は8層に分層され、第1層、第2層、暗黄褐色粘質土、第3層、第4層、濁茶褐色粘質土、第5層、明茶褐色粘質土、第6層、第7層、暗黄褐色粘質土、第8層、明黄褐色粘質土の堆積を示す。

遺物　本遺構からの出土遺物はない。

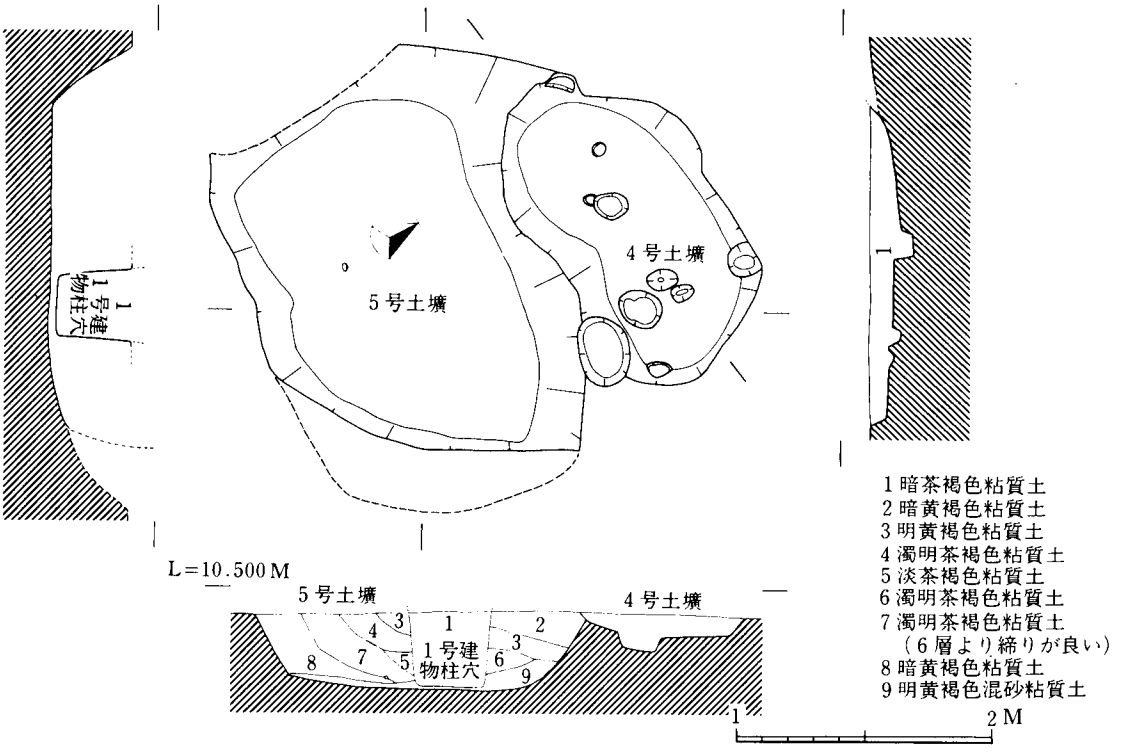
4　第4号土壙（第34図・図版5）

遺構　P－7G区北東部に位置する。本遺構は第5号土壙の西辺の一部を切断して構築されている。平面プランは楕円形を呈する。規模は長径252cm、短径135cm、底面長径226cm、底面短径92cm、深さは検出面から約20cm。底面は舟底状を呈しており、同面で径12～35cmの PiT を6個検出する。土壙内の覆土は、暗茶褐色粘質土の単一層で微量の炭火物が混入する。本遺構は、第5号土壙に後出する。

遺物　覆土中より土師器が出土しているが、いずれも細片のため図示できる資料はない。

5　第5号土壙（第34図・図版5）

遺構　P－7G区中央部より東側寄りに位置する。遺構の西辺は第2号住居跡の東辺周溝によって切断されており、東辺は調査範囲外にあたるため検出していない。平面プランは隅丸長方



第34図　第4号土壙、第5号土壙

形に近いプランを呈するものと見られる。規模は推定長径約358cm、短径約246cm、深さは検出面から約61cmを測る。底面は平坦につくられている。壁の立ち上がりは、南壁で傾斜角度60°、北壁では約50°である。本遺構は第1号掘立柱建物、第2号住居跡、第4号土壙に先行する。土壙内の覆土は9層に分層され、第1層、暗茶褐色粘質土、第2層、暗黄褐色粘質土、第3層、明黄褐色粘質土層、第4層、濁明茶褐色粘質土、第5層、淡茶褐色粘質土、第6層、第7層、濁明茶褐色粘質土、第8層、暗黄褐色粘質土、第9層、明黄褐色混砂質土の堆積を示している。第1層は第1号掘立柱建物の桁行南側柱列西第3柱の掘り方の覆土である。

遺物　第7層と第8層の境、底面より約8cmのレベルで土師器が出土しているが、図示できる資料ではない。

6　第6号土壙（第35図・図版5）

遺構　T—13区西側に位置する。平面プランは方形を呈する。規模は長径約85cm、短径72cm、底面長径72cm、底面短径59cm、深さは検出面から約10cm、底面は西側が若干高く東側へ緩やかな傾斜をもつ。壁の立ち上がりは東壁は垂直に近い傾斜をもち、西壁は傾斜角度約50°である。

遺物　本遺跡からの出土遺物はない。

7　第7号土壙（第36図・図版5）

遺構　T—13区東側に位置する。本遺構の北辺部分は調査範囲外に位置しており、検出していない。平面プランは方形と思われる。検出部分の最長径64cm、最短径34cm、検出面からの深さ38cm。底面は西側が若干高く東側に緩やかな傾斜をもつ。壁の立ち上がりは西壁は垂直に近く、東壁は2段掘り込みとなっており、底面から垂直に近い傾斜をもち立ち上がった後、幅6cmの平坦面を形成し、再び垂直に近い角度で切り込み面に至る。土壙内の覆土は3層に分層され、第1層、黒褐色粘質土、第2層、暗黒褐色土、第3層、淡黄褐色土の堆積を示す。

遺物　本遺構からの出土遺物はない。

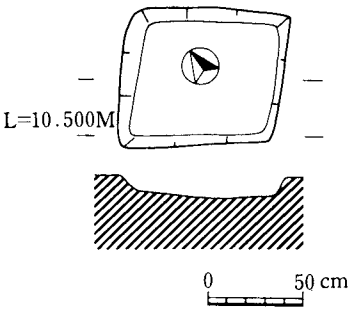
8　第8号土壙（第37図・図版14）

遺構　P—6G区北西部に位置する。南方向へ約80cmで第5号溝の北辺に至る。平面プランは不整形である。規模は長径110cm、短径82cm、底面長径76cm、底面短径62cm、深さは検出面から約74cmを測る。底面は激しくないが凹凸が見受けられる。断面は袋状を呈している。土壙内の覆土は8層に分層され、第1層、暗黒褐色土、第2層、淡黒褐色土、第3層、黄褐色粘質土、第4層は第2層と同一層であるが黄色粘土が混入せず、第5層、暗黄褐色粘質土、第6層、黒褐色粘質土、第7層、黄色砂質土、第8層、灰褐色砂質土の堆積を示す。

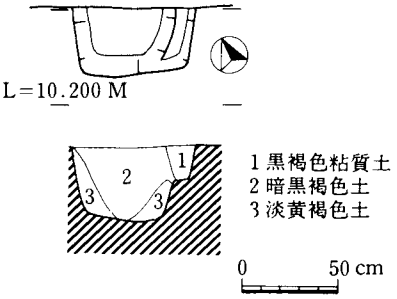
遺物　本遺構からの出土遺物はない。

9　第9号土壙（第38図）

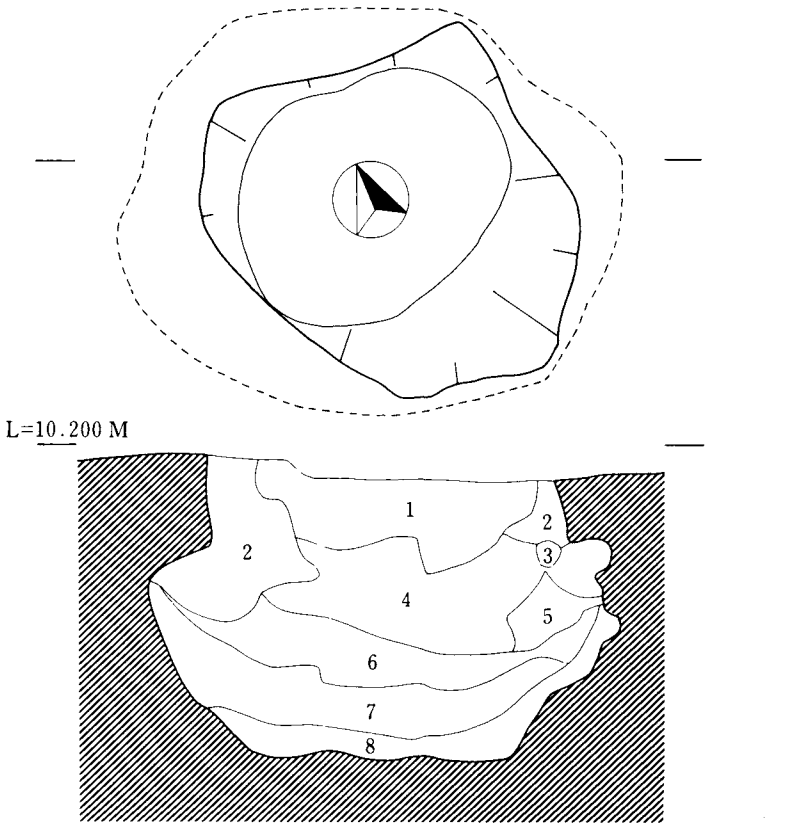
遺構　P—6G区西側に位置する。北方向へ約190cmで第8号土壙に東方向へ約105cmで第10号土壙に達する。遺構の西辺部は調査範囲内外にあたるため検出していない。検出した部分での長径165cm、短径約114cm、深さは最深部で約67cmを測る。底面は平坦でなく南北断面はU字型を呈する。壁の立ち上がりは南、北壁ともに垂直に近い傾斜角度をもち、東壁は二段掘り込みで底面から垂直に近い角度で立ち上がった後、幅約13cmの平坦面を形成し再び垂直に近い角度で



第35図　第6号土壙（1/40）



第36図　第7号土壙（1/40）



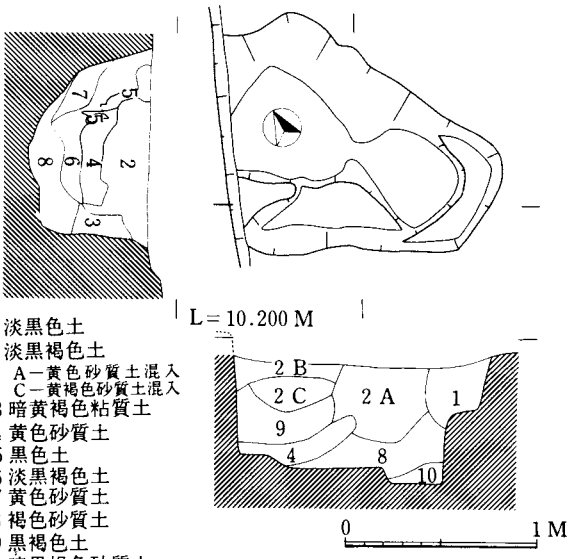
第37図　第8号土壙（S＝1/40）

切り込み面に達する。本遺構は第７号溝に後出して築かれており、土壙内の覆土は10層に分層される。

遺物　本遺構からの出土遺物はない。

10　第10号土壙（第25図・図版14）

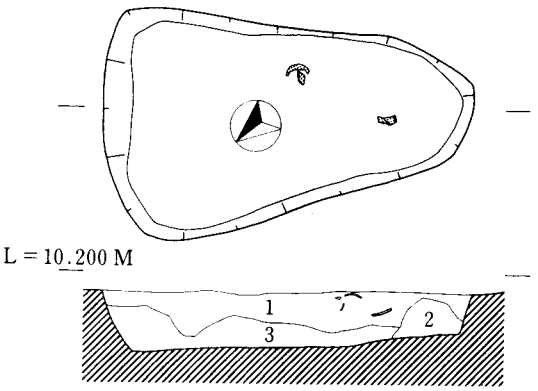
遺構　Ｐ－６Ｇ区北西部に位置する。平面プランは不整形を呈する。規模は長径147cm、短径75cm 前後、底面長径130 cm、短径67cm 前後、深さ16～24cm を測る。底面は南側が北側より７cm 高く緩やかな傾斜をもつ。土壙内の覆土は３層に分層され、第１層、淡黒褐色土、第２層、黄褐色粘質土、第３層、淡黒褐色土（黄褐色砂土と同粘質土ブロックを含む）。



1 淡黒色土
2 淡黒褐色土
　A－黄色砂質土混入
　C－黄褐色砂質土混入
3 暗黄褐色粘質土
4 黄色砂質土
5 黒色土
6 淡黒褐色土
7 黄色砂質土
8 褐色砂質土
9 黒褐色土
10 暗黒褐色砂質土

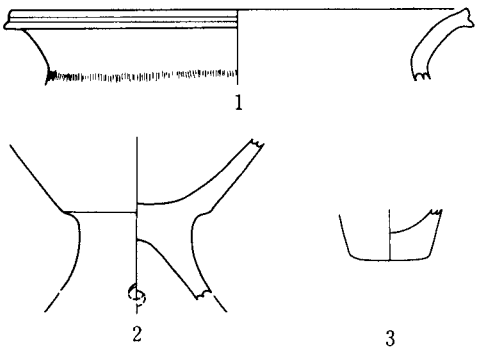
第 38 図　第９号土壙（Ｓ＝1/40）

遺物　遺物は第１層から出土しており、図示可能なものは３点である。１は甕型土器〝く〟の字口縁で端部は面取りを施している。口径18.0cm、現器高3.0cm を測る。口縁端に１条の疑凹線が巡る。調整は口縁部内外面、横ナデ、頸部以下外面、刷毛目調整。焼成は不良である。２は高杯型土器、現器高6.8cm、椀形の杯部に大きくラッパ状に開く脚をもつものと考えられる。穿孔は４ケ所で内外面とも赤彩によって飾られている。３は小型壺（手捏土器）、底部径3.2cm、現器高2.0cm、平底、調整は不明、焼成は良好で内外面とも黄褐色を呈する。



1 淡黒褐色土
2 黄褐色粘性土
3 淡黒褐色土
（黄褐色砂土と粘質土ブロック含む）

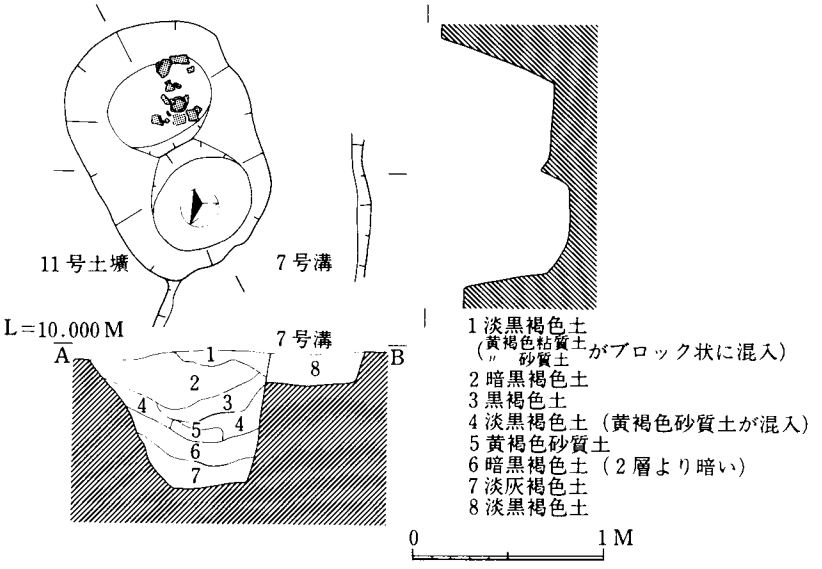
第 39 図　第 10 号土壙（Ｓ＝1/30）



第 40 図　第 10 号土壙出土遺物（Ｓ＝1/3）

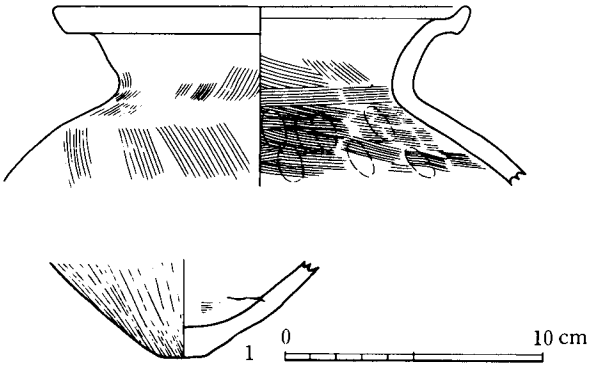
11　第11号土壙（第41図・図版14）

遺構　P－6G区中央部で検出する。東方向へ約85cmで第5号住居跡西辺に至る。平面プランは長方形で長径172cm、短径92cm、検出面からの深さ最深部で77cmを測る。底面は中央部で突出し、西一東に落ち込む、西側底面レベルは東側に比べ約10cm下がる。断面によると、2つの遺構が切り合い存在したものと考えられるが、本遺構と第7号溝の切り合いを掴むための断面観察用ベルトを残したのみで、東西方向のベルトを設けなかったため不明である。土壙内の覆土は7層に分層される。



第41図　第11号土壙（S＝1/40）

遺物　覆土中より土師器が出土しているが、図示可能なものは2点である。1は甕型土器の底部、底部径2.0cm、現器高3.9cmを測る。調整は内外面、刷毛、地色は淡橙褐色で焼成は並である。2は壺形土器、口縁部内外面ともに横ナデ調整、体部内外面は刷毛目調整、地色は茶褐色を呈する。



第42図　第11号土壙出土遺物（S＝1/3）

12　第12号土壙（第43図・図版14）

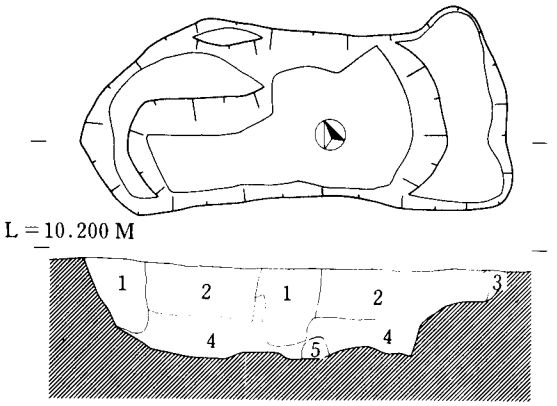
遺構　P－6G区西側に位置する。平面プランは西辺部でやや形が崩れるものの長方形を呈する。規模は長径282cm、短径107cm、深さは最深部で約66cmを測る。壁の立ち上がりは西壁は傾斜角度約50°で立ち上がっている。東壁は2段掘り込みとなっており底面から垂直に近い角度で立ち上がった後、幅30cmの平坦面を形成し再び傾斜をもち切り込み面に達する。底面は激しい凹凸が見受けられる。土壙内の覆土は5層に分層でき、第1層、淡黒褐色土、第2層、黒色土、第

3層、淡灰褐色土、第4層、暗黒色土、第5層、淡黒褐色土（若干黄色味がかる）の堆積を示す。

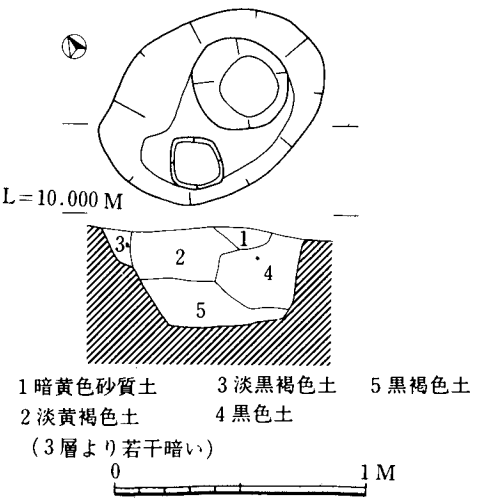
遺物　本遺構からの出土遺物はない。

13　第13号土壙（第44図・図版14）

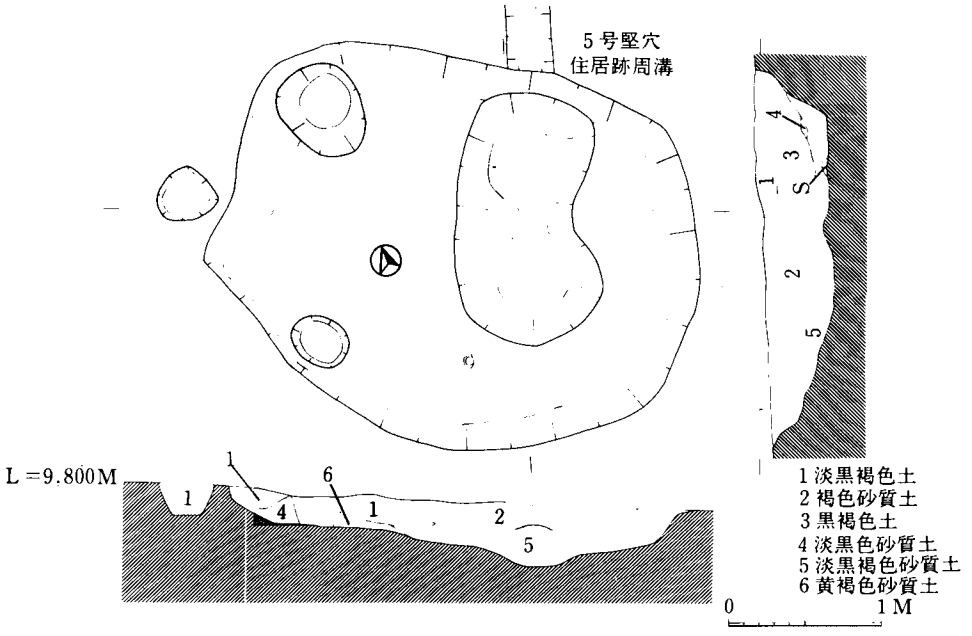
遺構　P－6G区中央部よりやや西側に位置する。平面プランは楕円形を呈する。規模は長径90cm、短径69cm、検出面からの深さ39cmを測る。底面は東側がやや高く西側へ緩やかな傾斜をもつ。壁の立ち上がりは東壁は垂直に近く、西壁は比較すれば緩やかな角度で立ち上がる。土壙



第43図　第12号土壙（S＝1/50）



第44図　第13土壙（S＝1/30）



第45図　第14号土壙（S＝1/50）

内の覆土は5層に分層され、第1層、暗黄色砂質土、第2層、淡黒褐色土(3層より暗い)、第3層、淡黒褐色土、第4層、黒色土、第5層、黒褐色土の堆積を示す。

遺物　本遺構からの出土遺物はない。

14　第14号土壙（第45図・図版14）

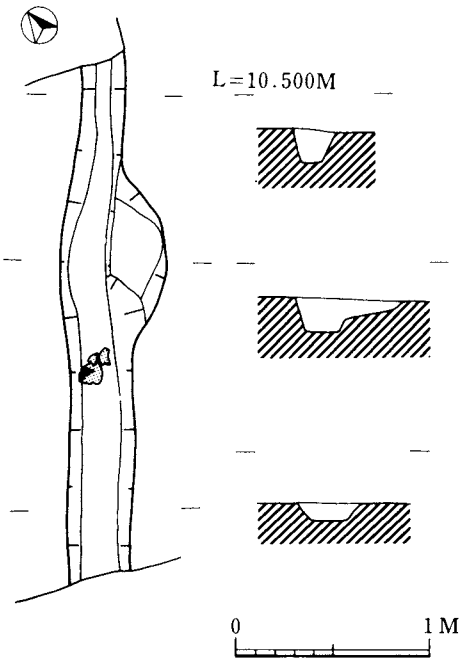
遺構　P－6G区中央部に位置する。平面プランは楕円形を呈する。規模は長径317cm、短径257cm、検出面からの深さは最深部で約51cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかな傾斜で立ち上がっている。底面は平坦でなく若干の凹凸が見られる。覆土は6層に分層され、第1層、淡黒褐色土、第2層、褐色砂質土、第3層、黒褐色土、第4層、淡黒色砂質土、第5層、淡黒褐色砂礫土、第6層、黄褐色砂質土の堆積を示す。

遺物　本遺構からの出土遺物はない。

(4)　溝状遺構

1　第1号溝（第46図・図版15）

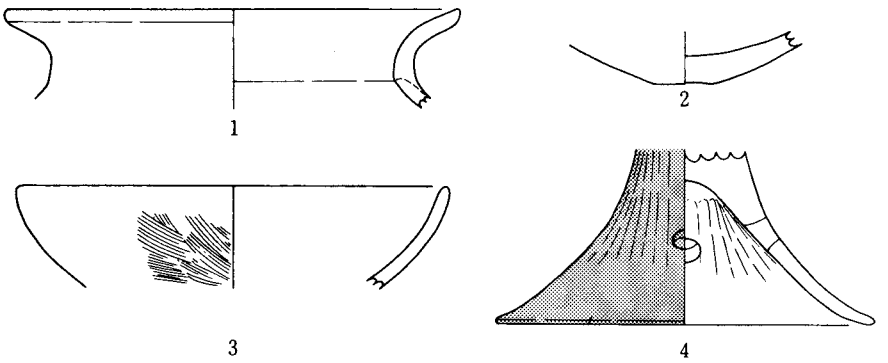
遺構　T－12～P－7G区北西部で検出する。溝はトレンチを設定した幅一杯にかかっており大半は未調査区に位置する。軸方向はN－40°－Eを測る。全長は検出部分で284cm、幅は、23～32cm前後、深さ9～17cm、中央部より北東寄りで東肩部が一部張り出し、幅56cm、深さ17cmを測る。断面はU字形を呈するが南西部ではU字形が崩れる。溝の底面レベルは北東部が南西部より2cm高く、北東部と中央部の比高差は約4cmで中央部で若干凹む。調査区内での軸方向は北東－南西方向であるが、北東部が軸方向を変えることなく伸びる場合、P－7G区北西部分で本遺構の延長が検出されるはずだが同地区では検出されておらず、未調査区で軸を北方向に変えるものと思われる。同様に南西部でも軸方向を変えないで伸びる場合、P－7G西区拡張の際、遺構の一部が検出されるはずだが確認されておらず、未調査区で軸を西方向に変えるものと考えられる。溝の覆土は茶褐色粘質土の単一層で微量の炭火物を含む。



第46図　第1号溝（S＝1/40）

遺物　覆土中より土師器が出土しており、図示可能なもの4点である。1は甕形土器、口径18.0cm、現器高39cmを測る。〝く〟の字口縁。調整は摩耗のため不明、地色は淡茶褐色を呈する。2は甕型土器底部で径2.5cmの平底である。内面はナデ調整、胎土は粗砂がやや多く焼成は不良である。地色は赤褐色を呈する。3は鉢型土器、口径17.2cm、現器高4.1cmを測る。口縁内外面はヘラ磨き調整、体部は外面刷毛調

整、内面は刷毛調整後ヘラ磨きを施す。焼成は良好で地色は赤褐色を呈する。4は高杯型土器。底径15.0cm、現器高7.0cmを測る。脚部はラッパ状に大きく開く。穿孔は4ケ所。内外面ともにヘラ磨き調整。外面は赤彩によって飾られている。杯部は古府クルビ遺跡（古府クルビ遺跡第62図255）で出土しているような椀形の形態をもつものと考えられる。



第47図　第1号溝出土遺物（S＝1/3）

2　第2号溝（第48図・図版15）

遺構　P－7G区南東部で検出する。全長325cm、幅24cm前後、深さ5cmの浅い溝である。軸方向はN－70°－Eを測る。床面は西側が東側に比べて高く緩やかな傾斜をもつ。壁の立ち上がりは両壁とも垂直に近い角度で立ち上がる。

遺物　本遺構からの出土遺物はない。

3　第3号溝（第49図・図版15）

遺構　T－14区で検出する。溝方向が大きく変化する。平面プランはN字形を呈する。西側部分、北側部分では両肩部が存在するが、東側では一部二段切り込みの土壙状の広がりをもつ。西側の幅26～48cm、深さ12cm、北側の幅21～35cm、深さ36～48cmを測る。東側部分は深さ30cmを測る。溝内の覆土は淡黄褐色砂質土の単一層である。

遺物　本遺構からの出土遺物はない。

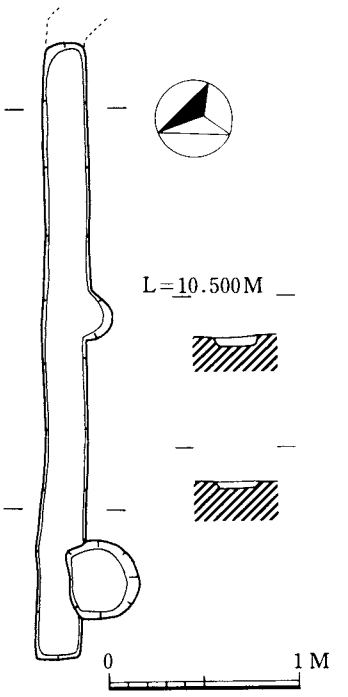
4　第4号溝（第49図・図版15）

遺構　T－15区で検出する。軸方向はN－14°－Eを測る。全長は不明、幅28cm、深さ7cmの浅い溝である。南側は未調査区にあたる。第3号溝が本遺構に先行する。

遺物　本遺構からの出土遺物はない。

5　第5号溝（第9図・図版15）

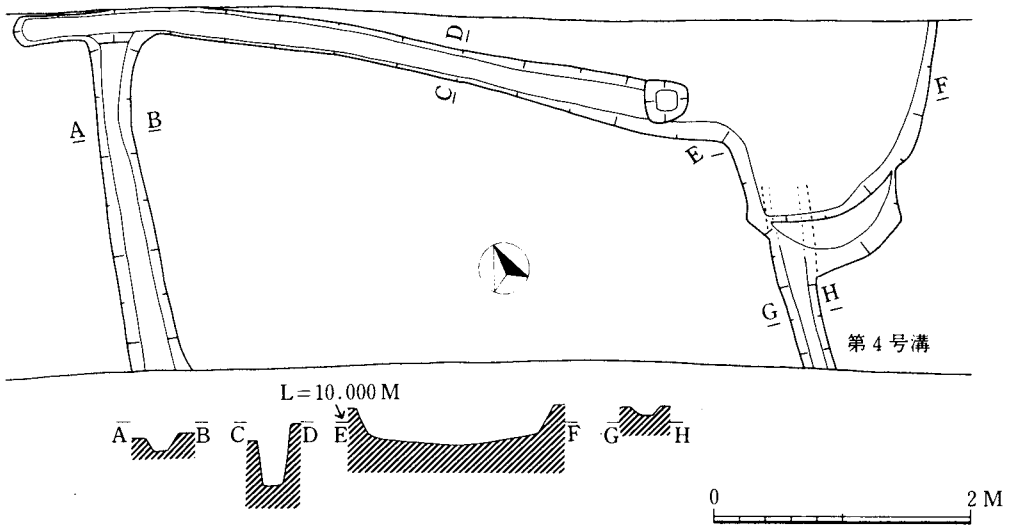
遺構　P－6G区北側に位置する。本遺構の西側は未



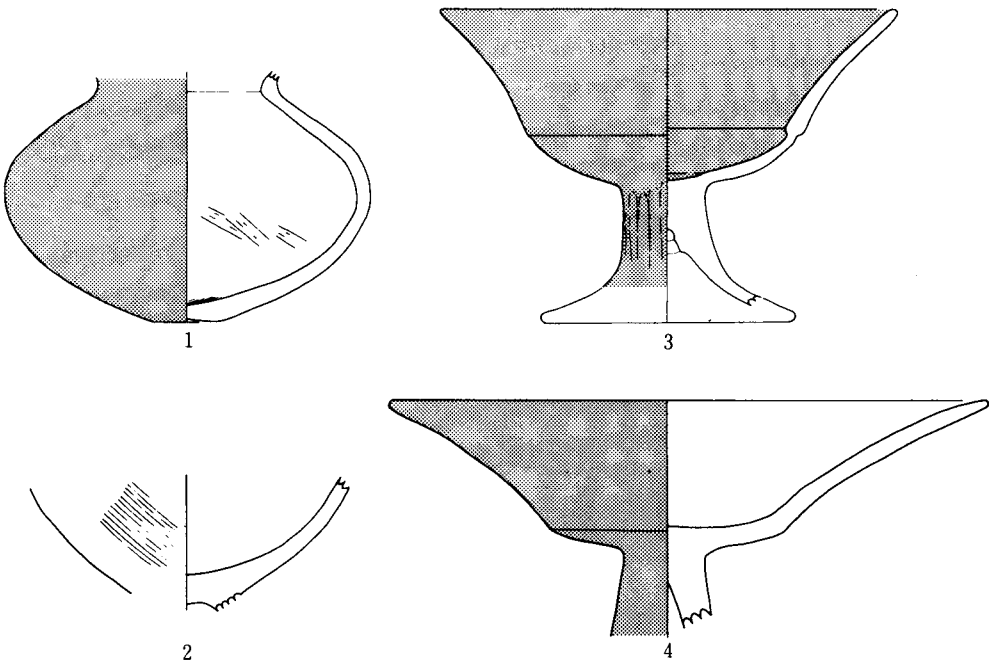
第48図　第2号溝（S＝1/40）

調査区に位置しており、東側は第5号住居跡の西辺周溝に切断されている。平面プランは弓状を呈し、幅44～75cm、深さ6～16cm前後を測る。西側の肩部は一部二段切り込みとなる。溝内は黒褐色土の単一層である。(本遺構は溝として報告するが、その形態から竪穴住居跡の周溝と考えることもできる。)

遺物　底面より約10cm浮いたレベルで土師器が出土している。1は壺形土器。現器高10.0cm、底部径2.5cm、体部最大径は胴央に位置し、14.4cmを測る。外面はヘラ磨き調整、内面はヘラ削



第49図　第3、4号溝（S=1/60）



第50図　第5号溝出土遺物（S=1/3）

り後、ヘラ磨きを施す。外面は赤彩により飾られている。2は現器高5.4cm、碗状の体部に台が付くものと思われる。外内面はヘラ磨き調整で外面の一部に一次調整の刷毛が見られる。3、4は高杯型土器。3は口径17.8cm、復元器高12.5cmを測る。内外面ともにヘラ磨き調整。内外面全体に赤彩を施す。4は口径23.6cm、現器高9.4cm、大きく外反する口縁部をもち、脚部が小さくなる形態をもつ。内外面ともにヘラ磨きによる調整を行なっており、外面は赤彩を施す。

6　第6号溝（第9図・図版15）

遺構　第5溝と並行する形で存在する。北西部は第10号土壙の東辺部手前で止まっており、南東部は第5号溝と同じく第5号住居跡の西辺周溝に切断されている。平面プランは弓状を呈し、幅20～30cm、深さ7cm前後を測る。一部本遺構の北側肩部が南側に比べ高く竪穴住居跡の周壁に似た形をとる。本遺構は竪穴住居跡の周溝の一部と考えられる。

遺物　本遺構からの出土遺物はない。

7　第7号溝（第9図・図版15）

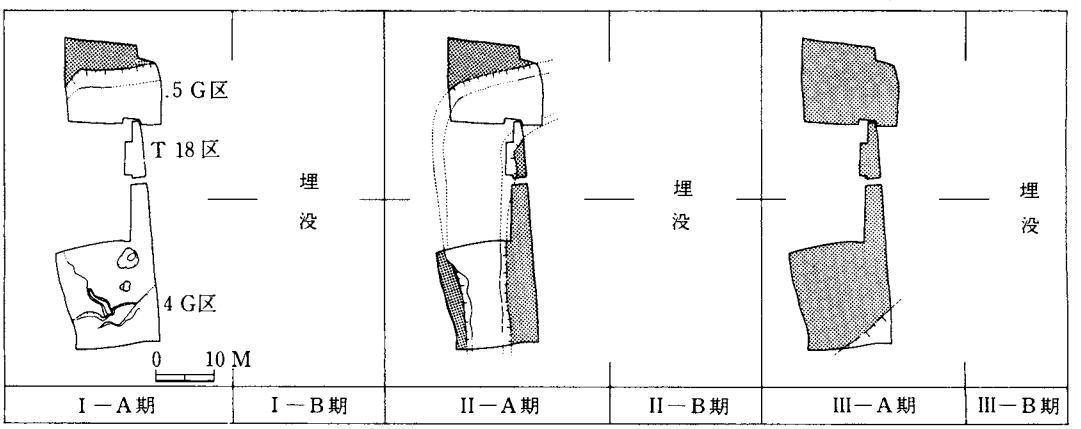
遺構　P－6G区北西～中央部に位置する。北西部は第9号土壙に、南東部は第11、第14号土壙に切断されている。軸方向はN－37°－Wo。幅70～125cm、深さ9～19cmを測る。溝覆土は3層に分層され、第1層、淡黒褐色土、第2層、黒褐色土、第3層、淡灰褐色土の堆積を示す。

遺物　本遺構からの出土遺物はない。

第2節　水田部調査区の遺構と土器

(1) はじめに

当調査区で検出した遺構等は主に、自然の生成による現沖積部の形成過程をかいまみる如くであるが、発掘区の限定も加味してその細部にわたる検証には大自然的状況の前に被覆した感を免れ得ないものとなった。ただ、調査区内の最下部とする遺構面から現状的景観に至る様相的推移については大まかながらも、第1－A期とする現地表下約2mの灰白色粘質土を主体とす層面中

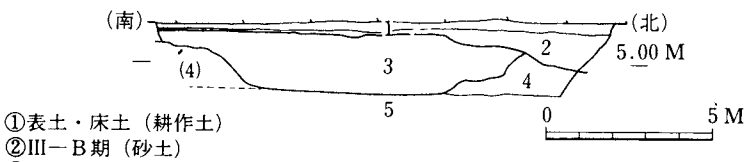


第51図　水田部調査区の遺構等推移想定図

に土坑2基等(最下部)が設営されて在り、これを埋没させる厚い堆積土(約1～1.5m)のI－B期があり、この後のII－A期では前段階の堆積層を抉って流路が出現し、この流路も多量で急激な流入土によって自然埋没(II－B期)に至り、その後では、現安津見川流にちかい上流域からの貫流に定着したものと考えられる流路痕(III－A期)が、現流に最も近接した4G区東北端で確認され、このIII－A期の埋没(III－B期)によりほぼ現状的な景観に到来したものと考えられ、現耕作土に床土即下で薄く広範に認められる砂土層は、高位から低位への順流当該期においても周辺部への冠水と急激な土砂の運搬を伺わせている。この変遷の概略的推移は下図のごとくに想定される。

各期における埋没時の層堆積は、いずれも砂質土を主体とする複雑で極めて錯綜的なレンズ状の互層堆積をなし、特にI－B・II－B期では地点ごとに異なりをもつが、経約40～60cmの大木を含む多量の自然木を混じえたうねり状の堆積を示し、急激で短期間的な埋没状況が想定され、またII－B期の4G区西側断面中では寸断された細かな草木と籾殻を混じえた厚い堆積があり、表層面をも洗う濁流によった過激な禍害も推測するに足る様相をもつものといえる。

この水田部調査区より出土した土器等の遺物では、1期の埋没層最下部(灰白色粘性土直上で自然木の下に埋もる)4G区中で、縄文晩期の文様もチーフをもつ籃胎漆器片と条痕状の表面調整が施こされた口唇部に刻み目をもつ甕形土器片(弥生中期前半頃か)に胴部片数点が同時性下の埋没状態で検出され、この後の遺物ではII期流路に係わる土器群が多量に出土した。この土器群は、流路底部から出土した一部木器片と極めて多量の自然木中に入り組んで混在する一群と、流路肩部にあたるT－18区より出土し、比較的目立って赤彩を施こす一群とがある。いずれも器形的に豊富で完形にちかい形態を保つものが多く、遠く上流域から流失し運搬されてきたものとは考えにくいもので占められる。この流路底での土器群は、ほぼ弥生時代末葉頃とみられる土器群が大半を占めると考えられるが、この中に古墳時代前半頃の土師器も混在状態で出土したため層序別の分割が不可能な一群として一括的な取り上げを行っている。これとは別にT－18区では、流路に洗われて混在した可能性の比較的乏しい肩部分での出土であり、また年代的にも大まかに弥生末葉頃の一時期性も看取されるので、同節第3項ならびに第5章第3項によって詳説されると思うが、I期中遺物とII期中土師器の一部については次項で補説を行いたいが、その他のII期流路中土器の検討は上記T－18区内遺物の分析・整理によって代用としたい。



①表土・床土(耕作土)
②III－B期(砂土)
③II－B期(砂土＋自然木等)
④I－B(砂土＋自然木等)
⑤青白色粘性土

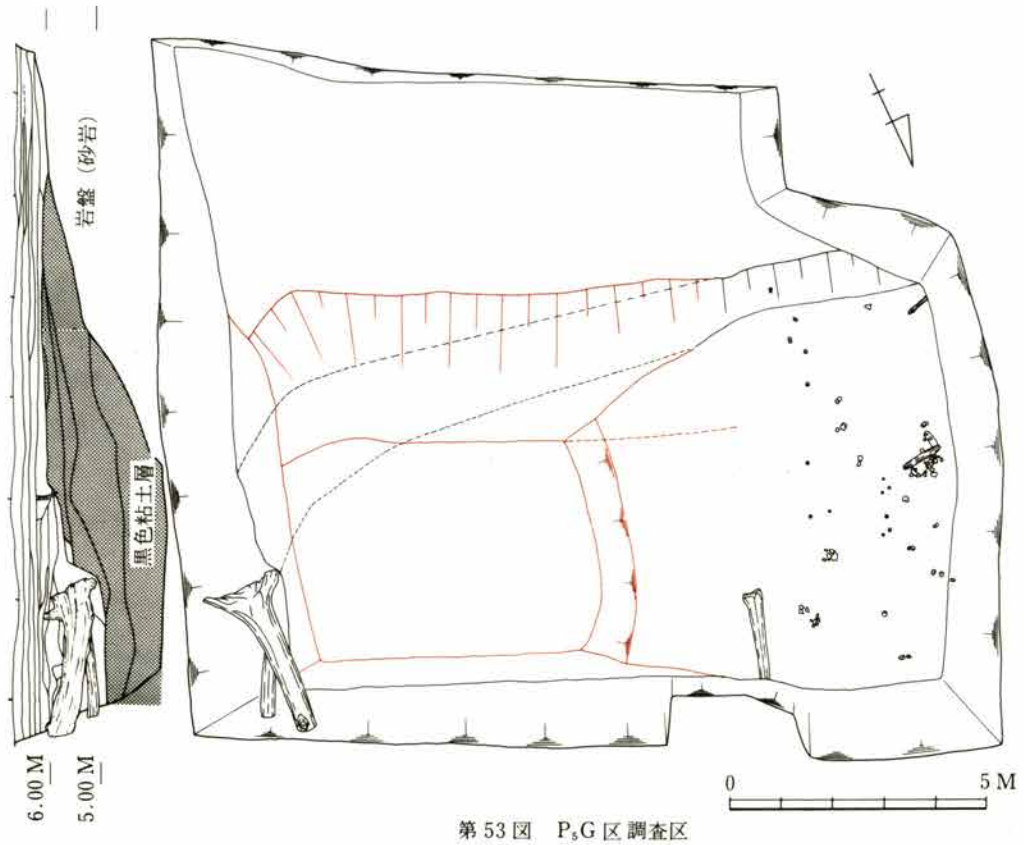
第52図　水田部(流路)堆積推移基本層序断面図

(2)　Ⅰ期の遺構と遺物

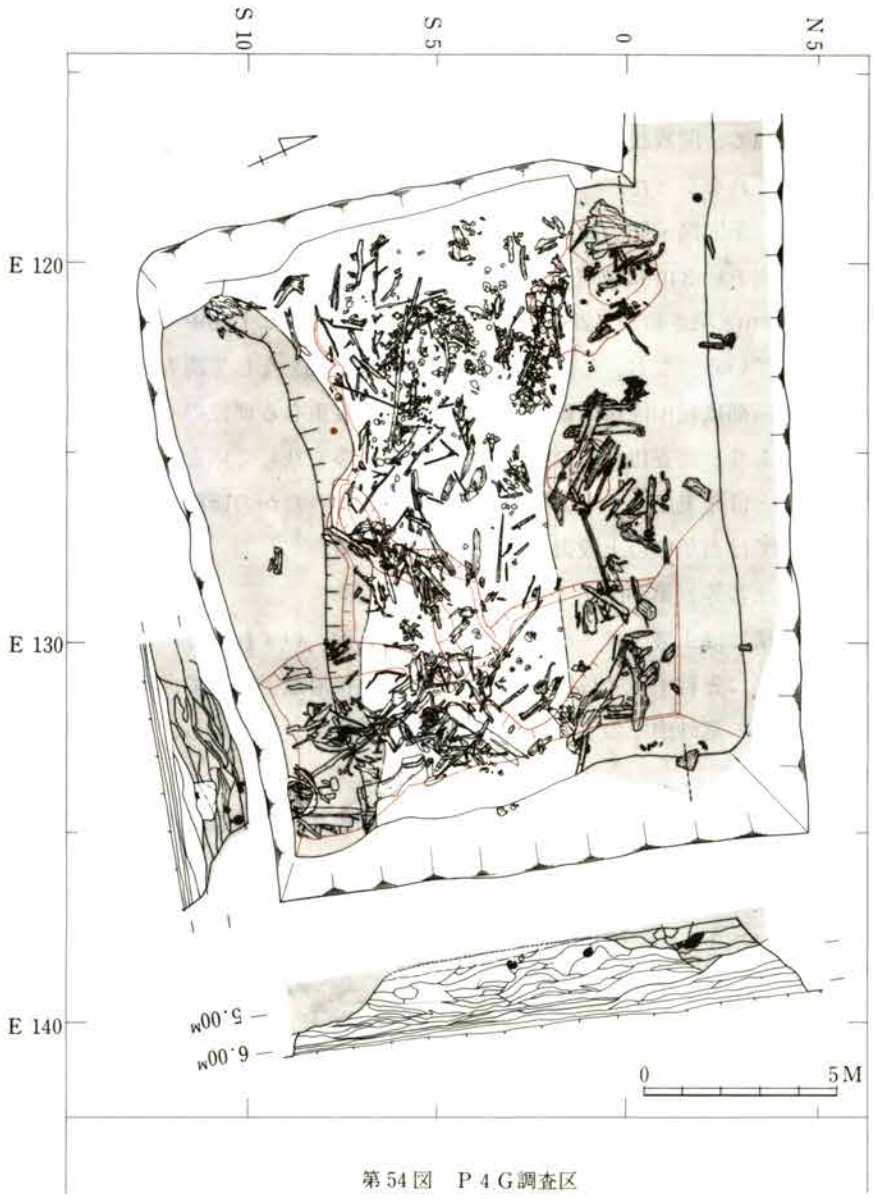
該期の遺構と考えるものは、4G区北半部の現地表下約2.1mで検出した土坑2基と南側のII期流路底部での溝状跡1条である。ただ、2基の土坑についてはⅠ－B期の被覆層によって埋没していたため確証を得ることができるが、溝状跡はII期流路に洗われて在るもので、しかも浅い溝中にはII期の土器片と自然小木片が内覆されているので正確には不明であるといえる。しかし、II期中流路にわざわざ小溝を設けたとは考えにくいので、一応該期中のものとして取り扱うことにした。

1　第1号土壙（第54図・図版22）

遺構　長径約300cm・短径約230cmの胴張りの長楕円形に複元されると思うが、発掘時も含めた周壁の崩落によって上面部はかなり拡大している。底面は長径約180cm・短径約100cmの浅皿状の湾曲をもち、検出面からの深さは約100cmである。この土壙は灰白色粘性土中に掘り込まれているが、底面ちかくでは砂質性が強まりかなりの湧水があった。このため内覆土の状態を詳細に検討していないが淡青灰色の比較的荒めの砂が充填しており、上部では少量の樹枝断片が含まれていたが底面まで概して単一層であったと記憶している。



第53図　P_5G区調査区



第54図　P4G調査区

遺物　ここより出土した遺物としては、内覆土下部中でトチの実（殻）十数個を採取した。出土状況はいずれも着床的なまとまりをもった状態ではなく、下部覆土中に点在的に包含されるという状態で発見している。

2　第2号土壙（第54図・図版20）

遺構　1号土壙の東側に隣接して在る土壙で、長径約175cm・短径約100cmの長楕円形をなす基本形に、短径北側に付属的な半円形の掘込みが伴っている。上部は欠失したものが極めて浅い深さ約20cmの壙底は、平坦な面をもたずに皿底状で上面につながる。内覆土は上覆のII－B期下部砂土と同一であるので、開放状態のままII－B期の埋没に瀕したものと想われる。この壙中では遺物等は全く発見されなかった。

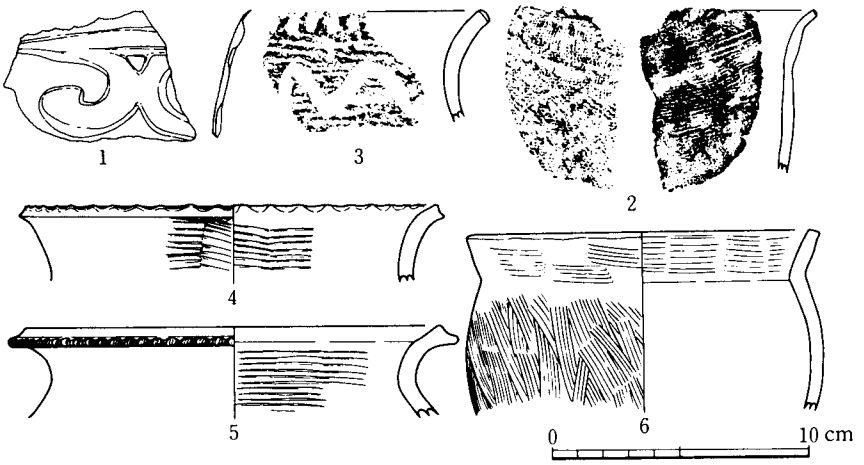
3　第1号小溝跡（第54図・図版20）

遺構　2号土壙の南方約3mに位置しており、西側から東側に向ってS字状の走りをもつ長約550cm・幅約70～130cm・深さ約20～25cmの小溝であり、東側ではI期中の自然流路の可能性がある傾斜面で途絶えている。なお、この流路的な傾斜面は段状をなして調査区外への傾斜を強めるが、この4G区東端部は新旧流路の輻湊的な切り合いと度重なる埋没のくり返しによった極めて錯綜的な部分でもあり、調査担当者自らの未消化部分を多く残している地点といえる。ただII期流路に先行することは確実で、I期土壙等と併行関係にあったかの確証は得ていない。内覆土及び出土遺物については当項中の上段書きによって割愛する。

4　I期中の出土土器等（第55図1～6）

該期に想定した遺構には土壙2基・小溝状跡1条があるが、いずれもこれらに内覆されての出土ではない。II期流路に先行する4G区北側のI－B期堆積層最下部中で、第1号土壙東側に近接した粘土層床面直上の荒砂中での1・2と、II期流路敷底部より出土し、後出土器群中より抽出した3～6とである。

1は雲形文あるいはX字状文と汎称されてきた縄文晩期亀ケ岡系の文様モチーフをもつ、胴部



第55図　I期の出土遺物（S＝1/3）

片かとみられる籃胎漆器片である。文様部分は浮文化され、内外面ともに全般にわたった赤漆での表装飾としている。籃胎部では黒漆（？）で固めた、幅約1mmのヒゴ状原体を網代編みしたもので、一本超え一本潜り一本ずれ①とみられる。縦糸（原体）は平均約7mm間隔とし、横糸は1cm間で約5～6本を置いている。材質は不明であるが竹とは思われず、一定して1mm幅を保って円みも感じられるので、いぐさ様の植物である可能性ももつ。本体器厚は約1～1.5mmとなるが、文様部分では異物(材質不明)の裏込めによって隆起させており、本体部より約2.4mm前後の突出帯とした装飾となっている。内面部では編み目の凹凸も幾分かうかがうことができる薄めの塗りであるが、外表面部は、断面での観察によって数度（4回程度か）の塗り重ね②が行われているようで、比較的厚い入念な仕上げとしている。

2は口縁部をわずかに外反させ、端部に刻み目を施した甕形土器で、内外面とも細かな刷毛目状の調整痕をもつ。器肉はやや薄手の暗茶褐色をした土器で、焼上りはやや良である。

3は、ゆるく外反させた口縁部の端部で刻み目をもつ甕形土器で、外面にはナデ調整後に指頭様である波状文が施されている。淡茶褐色をし、焼成はややあまい感がある。

4は口径約16.5cm、5は約18cmの甕形土器で、内外面に刷毛状具調整後かのナデ調整がみられ、ゆるく外反した4の口縁部の端部は面取り様のナデが施されて口唇上端には押さえによるか波状となる。5では口縁部が強く弧状に外反し、口唇上端部をつまみ上げ様としたナデが施され、口唇下端部に刻み目を入れている。胎中には砂粒を少量含むがあまり目立たず、淡茶褐色をした焼成普通の土器である。

6は口径約14cmの、頸部よりゆるく直線的に外反させた口縁部に、端部では上方向より面取り様のナデを行うもので、内外面の調整では口縁部に横方向の刷毛状具調整がみられ、体部では外面に縦方向の刷毛状具・内面では頸部即下で削りが部分的に認められる他は横ナデ調整としている。胎土・色調・焼成ともに、4・5と似通うものである。

以上が第1期とした土器等であるが、1は明らかに、縄文時代晩期の東北地方で盛行をみた籃胎漆器に同様のもので、文様の特徴からは大洞C_2式③前後の様相が伺える。ただ浮隆装飾とした籃胎漆器では、当遺品を除いては現状では未確認である。この他県内で発見された籃胎漆器には河北郡津幡町河合谷地内での、昭和56年に工事によって表出していた遺物群を採取されていた、当地在住の古本氏（津幡町文化財専問委員）保管品中の縄文晩期の土器群（下野式？）中に紛れていた細片1点④（倉見遺跡）がある。当遺跡出土のものも恐らく下野式期頃の所産と想われるが、状況的にも明確になしえない。

これと同伴的な検出状態であった2は、北陸弥生式土器の第1様式とされてきた柴山出村遺跡出土土器（弥生中期初頭）⑤にやや後出的で、第II様式として中期後半に編年される小松市八日市出土の櫛描文系土器（小松式土器）⑥に代表される一群には先出的要素がある。3～5は従来より広義の小松式土器としてとらえられてきているもので、類例品は県内でも数遺跡から断片的には散見されるが、資料的に極めて乏しい段階であり、組成・構成といった内容については未確認な部分がかなり多い。6は所属不明であるが、II期流路での後出土器群に含みかねるので一応I期中として取扱った。

なお、以上の遺物のいずれかと最下部遺構が同時性下にあったものと考えているが、現状では全く不明である。

(3) II期流路と出土土器

調査区中でのII期流路は、地形的に高所～低所へ直線的に順流する現安津見川に、台地即下より直行する方向で現れている。上流域からの進入路が5G区でコーナーをとるとみられ、4G区最下部面として捉えた黒色系の微細粘土層が比較的厚い堆積で遺存する5G区南西隅では、壁体の下部を構成したと考えられる弧状の湾曲をもって検出されている。また、遺物の出土状況からみても、5G区中では自然木も含めて土器群等は単発的なものであってレベル的にもばらつきが認められるが、4G区中では流底に密着的な多量のものが遺留されてあることからも、L字状流路とする直入部分とよどみ状の緩流地点の差異として認められるものと思う。

I－A期に先行するこの微細粘土層は、台地先端の沖積部に微地形としての派生的な小高まりをもっていたとも推測され、台地先端を洗う上部からの流れがこの高まりによって屈折をよぎなくされた自然生的な側面が強いものと想われるが、反面、I期の埋没堆積によって約1.5m の嵩上げ後に出現した流路であることと、4G区最下部東端でのI期凹地ないし流路とする斜傾地が認められた沖積地の中央部が、I－B期の埋没後でも基本的な流路域の条件を保持しえたと考え得る一般的通念からすれば不自然性も拭払しきれない。調査区からは全く不明である。

この自然生的流路あるいは開削引導にかかる人工的用水路かのいずれにせよ、該期では流路と深い係わりのなかでの日常的な生成があったと考えられ、流路底部より混沌として出土した多量土器群は台地上住居跡等内外より出土した土器群（弥生時代末葉頃～古墳時代前期末葉頃）とほぼ合致をみることができるとともに、完形土器が多くを占め、赤彩色を施すものもかなり目立つ。

このことは、集落からの単なる流入あるいは廃棄としての投棄のみでは理解しえないものがあり、加えて流路肩部に想定されるT－18区では別途遺構に伴なったとは考えられない土器群が、配列的に据え置かれた様相をもって検出され、ここでも彩色文を含む赤彩土器が目立って多いことなどに注目すれば、水ないし流水路自体に対する有相無相の祭祀的行為も推測の域にある。

ただこの流路の継続期中の基本的な問題として残るのは、T－18区では弥生末葉期頃の一群にほぼ限定的な状況であるのに対し、流底中の殊に4G区では古墳時代前期末葉頃の土器類も自然木が入り組む下部の約30cm を越えない砂層中に一体的な収まりをもって出土していることとの、約100年間前後の状況的把握に対しての問題であるが、現状では理解の範疇を越え、全く解明の糸口をつかんでいない。あくまでも想像以上のなにものでもないが一つの可能性としてのみ考えてみるならば、流路がII－B期による廃絶に至るまでにも、III期の直進路すら没する流入土のあり方からみて当該L字状屈折路からすれば完没に至らないまでも、数度の氾濫に遭遇しているものと考えるが、台地集落の営続と軌を一とした流路と想定されることから当然、保全が講じられてきているものと推測したい。この保全には底さらいなども考えられ、下流部での運搬土の堆積に伴って流路床の総体的な上昇が、前半段階遺物群の流底部遺留に結びつき、後半遺物との一体的な状況が形づくられたと考えるか、または、近接上流部に弥生末葉頃の密集した相当遺構群

が存在し、これを一挙に押し流したかとも考えられるがこの場合では、後出土器との兼ねあいから弥生末遺構群の廃絶後の流路となるので前者的な状況を想像し、後考に委ねておきたい。

なお、その他の遺物には、食用（対象）物としてのトチ・クルミ・ドングリ・稲籾、容器の方盤形木製品１・農具の木製クワ１・建物用材かの加工板３点なども含まれる。その内で、木の実類についてはＩ期第１号土壙中や同最下部層でも確認されることから、このＩ期埋没層を抉ったII期流路営続期間中の結実物であるかは定かではないが、稲籾の観察にはＩ・II期埋没層の対比条件が良い４Ｇ区北壁（Ｉ期）では確認しておらず、西壁（II期）中の土器群を内包する砂層上部に堆積した草炭状の有機物と砂の混合層中でかなり包含されるので、II期最終的な埋没時に伴うものがほとんどとみなされる。

II期流路の規模は、上幅約9.5～11m・下幅約5.5～６m・深さ約1.25～1.3m で、Ｌ字状の上流部の延長は不明であるが曲折から下流にあたる約50m 間での一部分を発掘したことになる。

Ｔ－18区を除いてこの流路中より出土した土器群は、総数約 800 個体前後を数える。図示可能なものは、４Ｇ区・５Ｇ区に分けて全て掲載するよう努めた（第56図～第93図）。

この土器群の取り上げについては、当初、層序的な分割を試みてはいるが、流路内では沈着とした土層堆積ではなかったため、結果的に分層区分として捉えられるものではなかった。出土土器はいずれも流路内下部中よりの出土であるが、一応の層序的な取扱いとしているものは、不分明な土層区分の対応のなかでの検出高低差を仮定とした分割（のみ）となっていることをあらかじめ断わっておきたい。また、土器の個々の説明には土器観察表により、一括的に取扱った。

これらの土器群の分類については、型式学的分類作業の必要性も認めるが、現状的には分筆担当者＝筆者の整理能力と認識不足から、類型分類的な分類に陥る危険性をもつもので、従来より先行的に行われてきた県下での加賀地域の弥生～古式土師の土器編年作業に比べ、能登地域では決して資料的に恵まれていない状況であり、様相的にも若干の相異が認められてきているところでもあるので、能登地域ことに周辺地域での資料的蓄積をまって分割・再構成される機会に委ねたい。

なおこの混在した土器群のなかで、かつて小林行雄氏の注目と論考[7]以来、汎日本的な斉一性と祭祀性の確立と波及[8]が推察されてきている、定形的な小型丸底坩（壺）が出土しているので、この資料を中心として補足的に報告しておきたい。

当遺跡の小型丸底坩（第93図19.20）は、外方に大きく開く直線的に長い口縁部に、小形で扁球状の浅い体部をもつもので、口縁部の調整は細かなハケ状具調整痕が残りヨコナデ調整が一部加わる（第93図19はハケ状痕がほとんど消える）。体部内面はナデ上げ様調整後にか、丁寧なヨコナデを行っている。外面頸部では横位のミガキが伺えるＡ－１とＡ－２ではナデのみ観察され、体部にはナデ調整を行っている。なおＡ－１では体上部で削り痕が認められるので、体部から頸基部のくびれの造作には削り込みを行って成形した後のミガキ様の調整ともいえる。胎中には細砂粒（石英質のものが目立つ）を少量含み、焼上りは黄褐色～黄橙褐色をなして固くしまる。

この特徴的な形の小型丸底坩は、畿内でも最古の形態として纒向辻土壙４上層[9]・発志院ＳＫ15中層[10]など布留Ｉ式より出現するものと認められており、その資料では内外面ともにヘラミガキ調

整が一般的とみうけられるが、当遺跡A－1・A－2ではハケ調整を基本とし、体部内面のナデ・外面の削り及びナデ調整である点では相異が認められる。しかし、発志院ＳＫ15中層資料の分類では、口縁径は体部径を稜駕しない、体部の球状形も一部含めて断面算盤玉形が主流を占め、体部内面はヘラ削り調整・口縁部内外面をハケ調整が施こされたのが布留Ⅰ式の小型丸底壺の典形的なものと示されている。また、ＳＫ15資料中での後続的要素として、口縁部はヨコナデ・底部外面にヘラ削り調整が行なわれているものと理解されている。

当遺跡資料中でも球形状体部の形態的に類似の小型丸底壺（第93図 22・23）があり、体部内面はナデ調整とするが、口縁部内外面ともハケ状具後のナデ調整と、底部～体下部外面に細かなヘラ削りが施こされたものもある。

このＡタイプとＢタイプの若干の相異を形式的差とみるか短時間差として捉えられるか、また、布留Ⅰ式との調整・整形上の相異を波及期あるいは浸透段階のズレとみなしうるかも不明といえるが、県内で今、布留式など畿内や影響下に出現したとみられる古式甕形土器（発志院布留１式対応）が比較的まとまって出土して既に報じられている遺跡では、金沢市古府クルビ遺跡[11]・松任市上二口遺跡等[12]があげられるが、これらの遺物の中では小型丸底甕は確認されていない。この甕形土器に後出的要素をもつ、口縁端部の内厚を顕著として口頸部の外反を強めてその内面基部の稜線も明瞭化した一群が伴なった金沢市高畠遺跡[13]・二口六丁遺跡[14]中には、球形状と算盤玉形の小型丸底壺（高畠では中型球状１点）の出土がみられることから、鹿首モリガフチ遺跡出土の定形的な小型丸底坩は、これらに先行する時期に想定され、最近月影式直続として認識されつつある古府クルビ式期[15]の所産となる公算が高い。

註

① 漆で上覆されるので絶対視できないが、凹凸の状態等からこの編み方とみられるとの、山本和人氏（名古屋大学大学院生）の観察と教示を得た。

② 巻頭カラー写真（断面）を参照されたい。なお、この写真撮影と保存処理については奈良国立文化財調査研究所の厚意によったものである。

③ 『日本の原始美術Ⅰ縄文土器Ⅱ』講談社

④ 西野秀和・米沢義光氏の教示による。

⑤ 浜岡賢太郎「北陸地方　Ⅰ」『弥生式土器集成　本編Ⅱ』　1968
橋本澄夫「弥生文化の発展と地域性－北陸」『日本の考古学』　河出書房　1966

⑥ 橋本澄夫「石川県小松市八日市地方遺跡の調査」石川考古学研究会々誌11　1968

⑦ 小林行雄「小型丸底土器小考」考古学　第６巻第一号　東京考古学会

⑧ 岩崎卓也「古式土師器考」考古学雑誌　第四八巻三号　1962等

⑨ 石野博信・関川尚功・他『纒向』　橿原考古学研究所編　1976

⑩ 藤井利章・他『発志院遺跡』　奈良県立橿原考古学研究所 1980

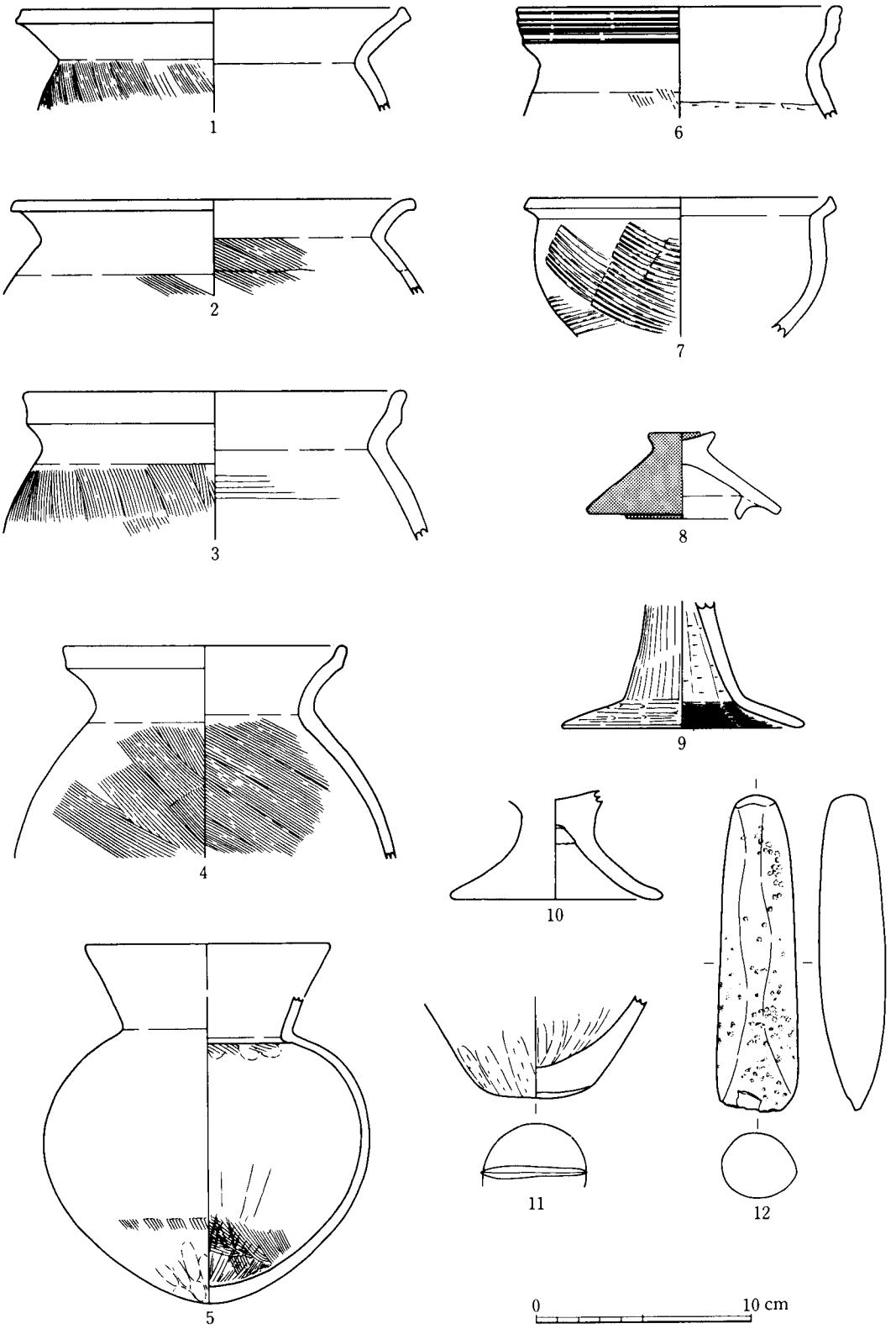
⑪ 石川県教育委員会・石川考古学研究会『北陸自動車道関係遺跡調査報告Ⅱ』　1976

⑫ 石川県立埋蔵文化財センター『松任市上二口遺跡』　1982

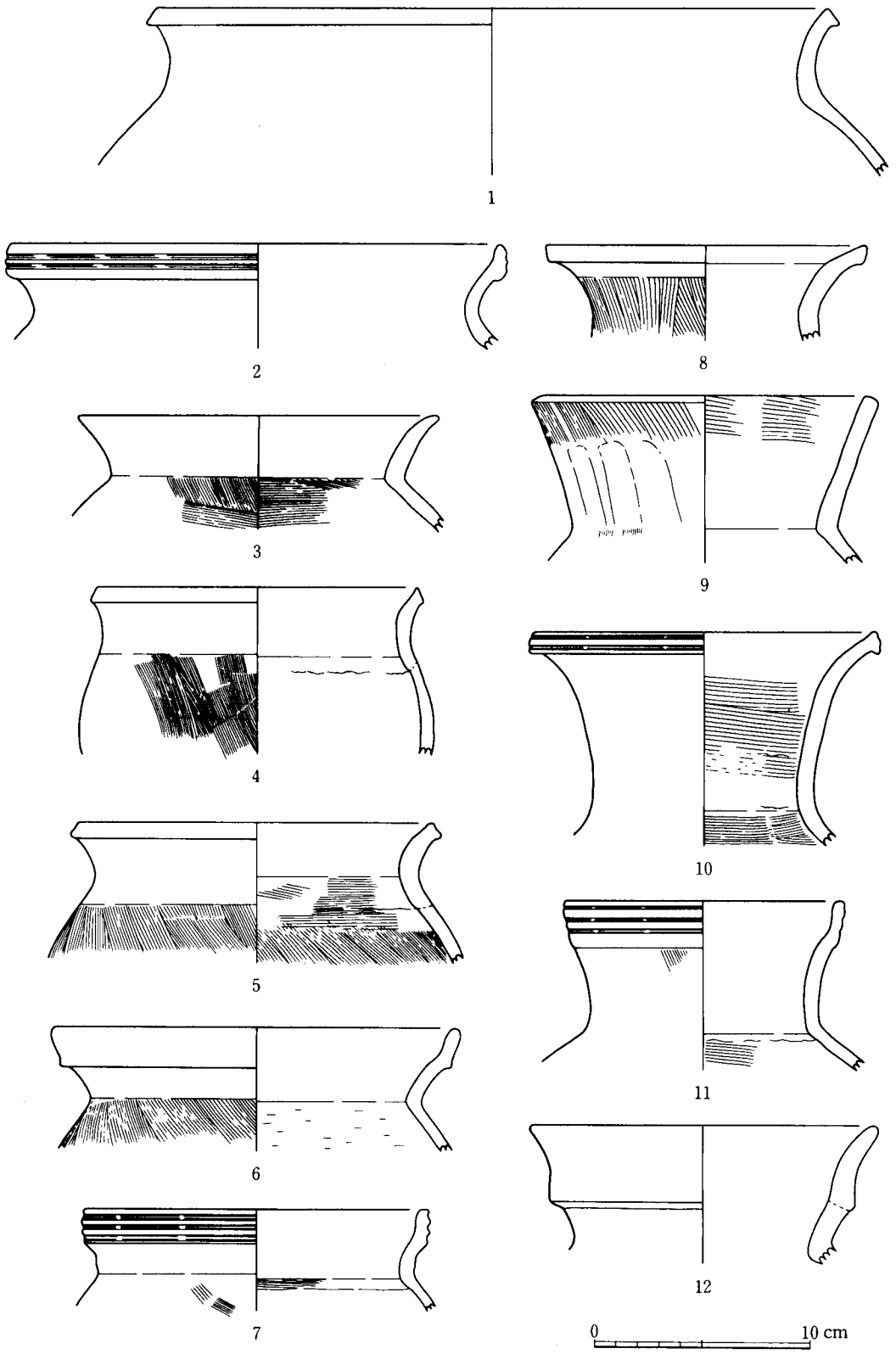
⑬ 金沢市教育委員会『金沢市高畠遺跡』　1975

⑭ 金沢市教育委員会『金沢市二口六丁遺跡』　1983

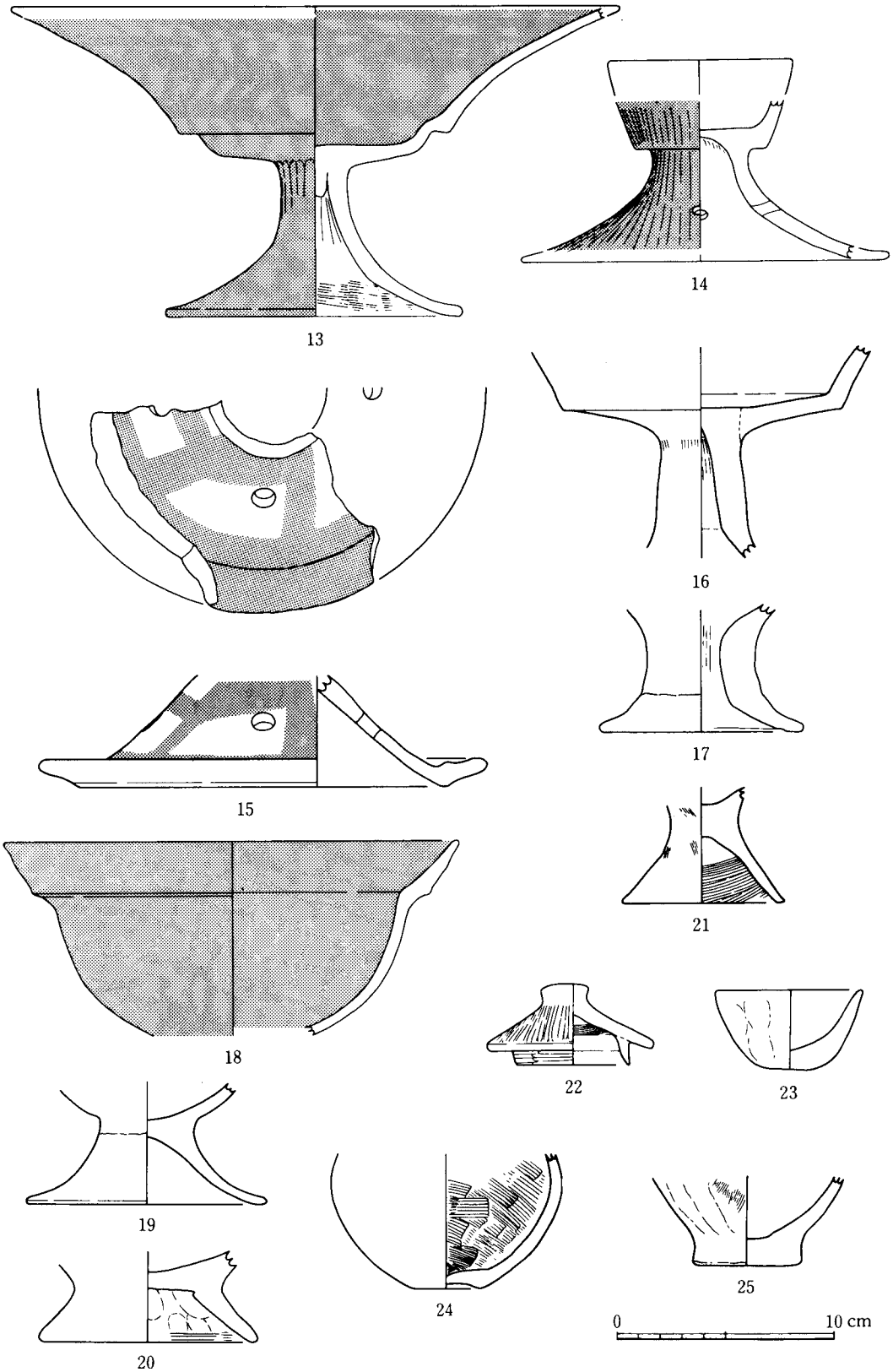
⑮ 谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』1983



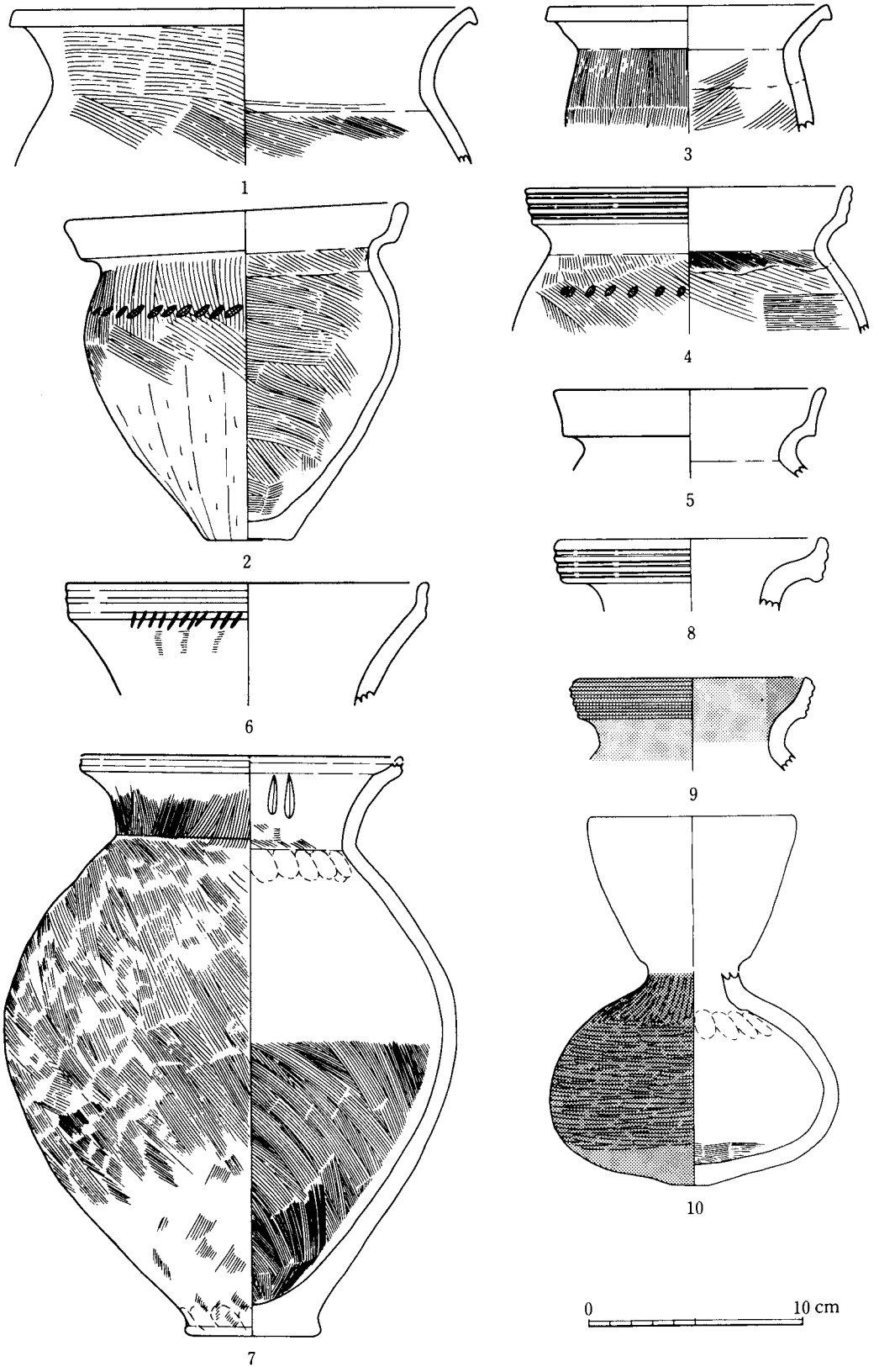
第56図　P５G調査区第２層出土遺物



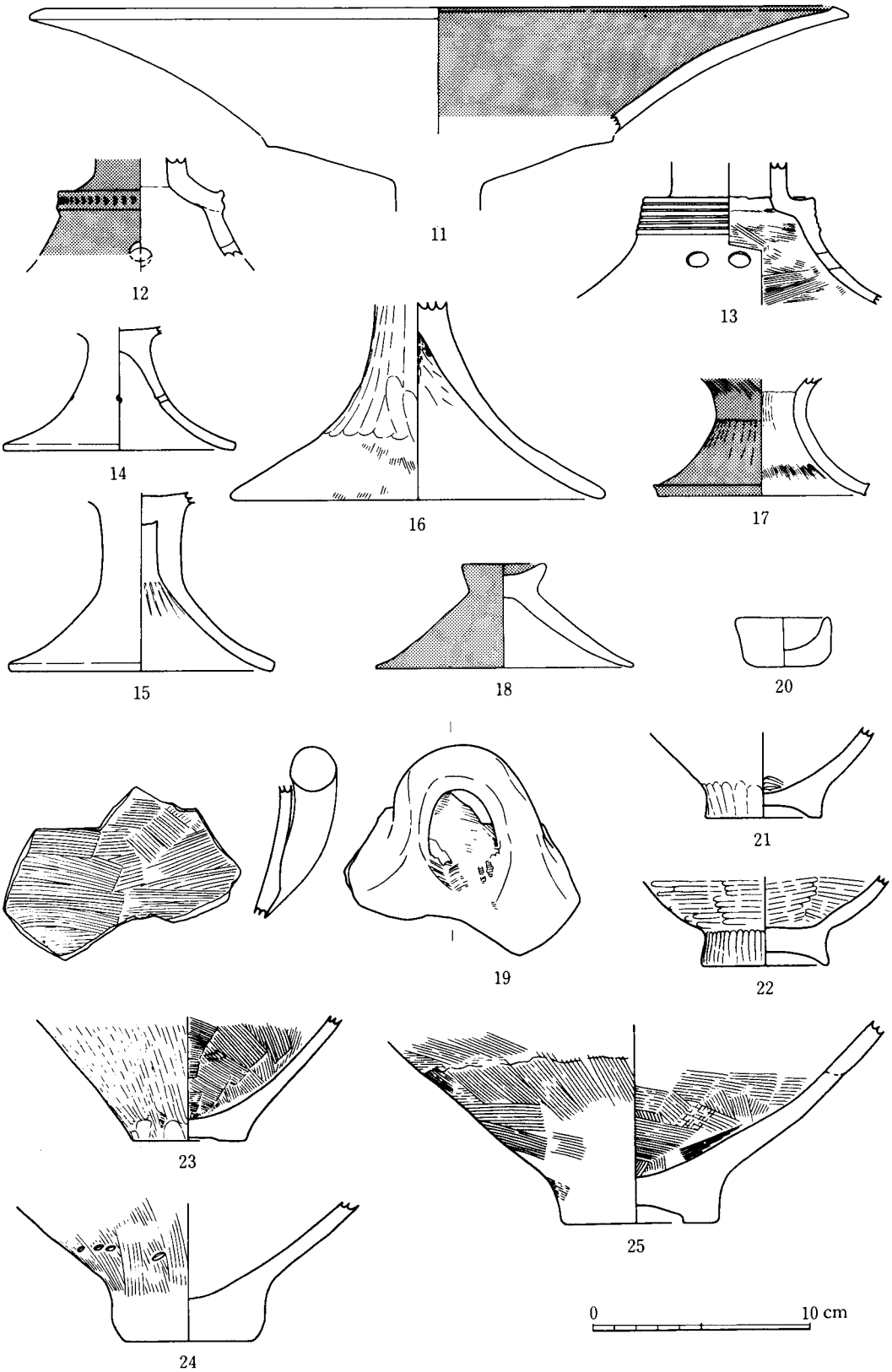
第57図　P5G調査区第3層出土土器



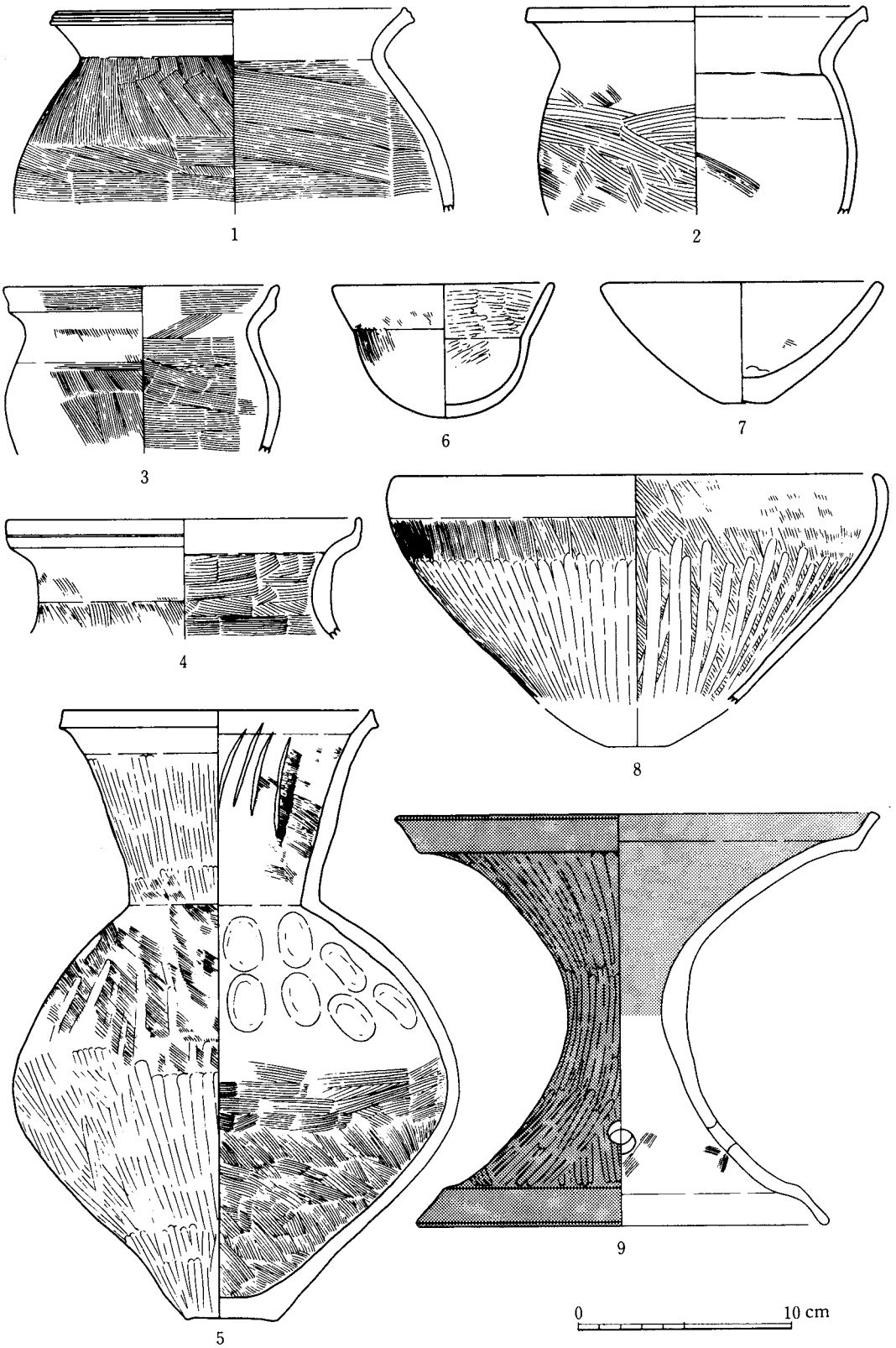
第58図　P5G調査区第3層出土土器



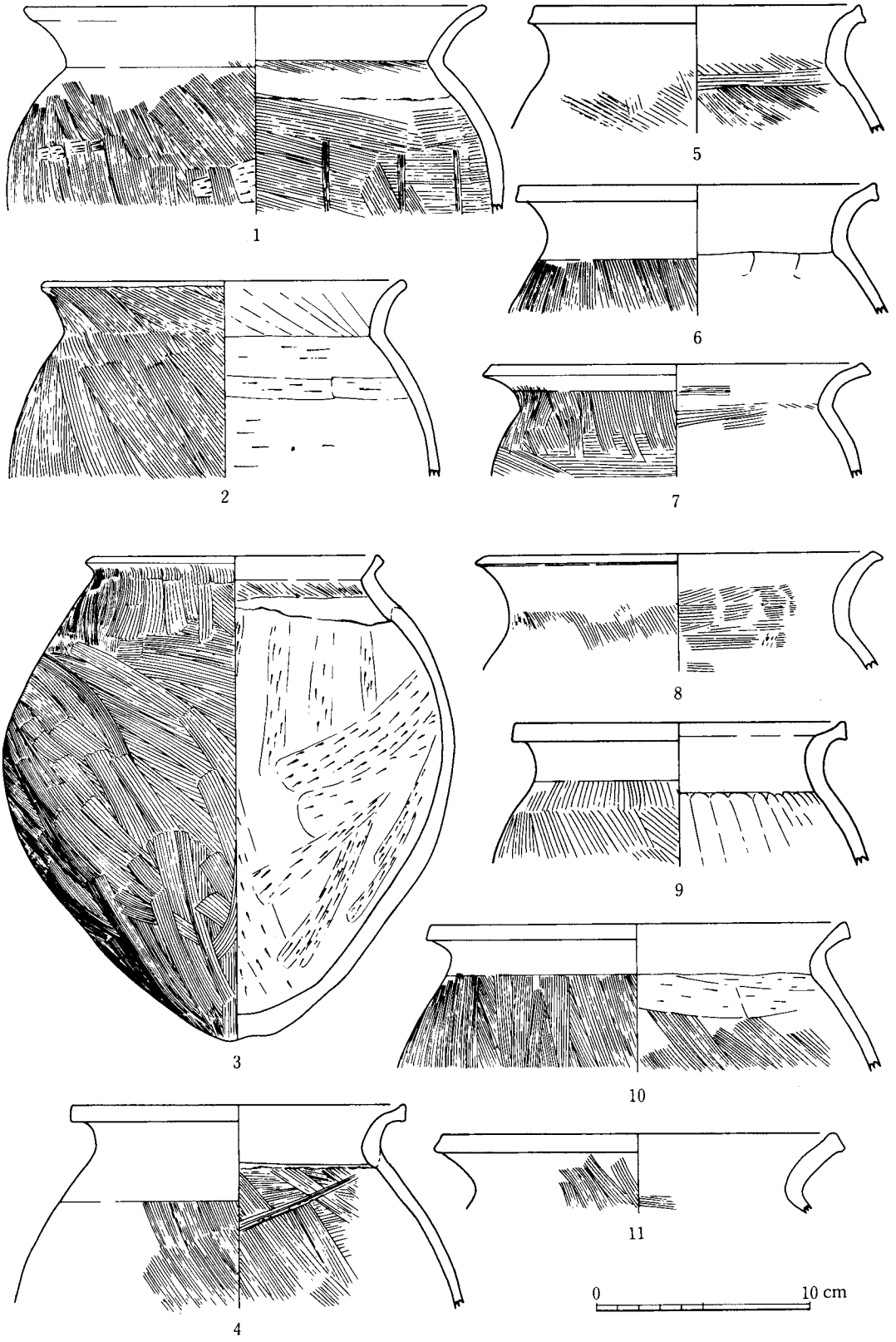
第59図　P5G調査区第3層下部出土土器



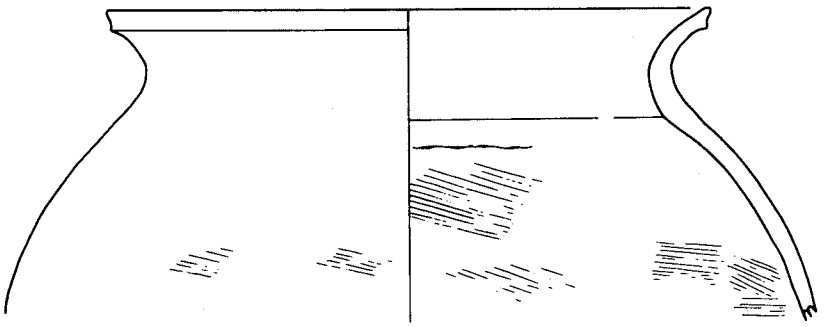
第 60 図　P 5 G 調査区第 3 層下部出土土器



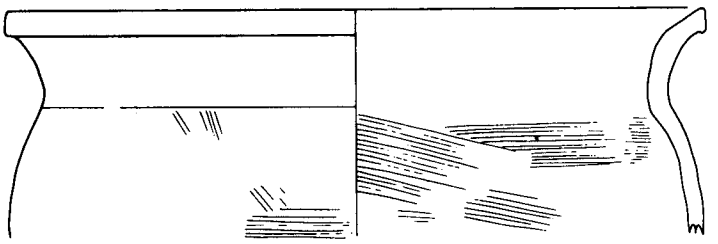
第61図　P５G拡張調査区出土土器



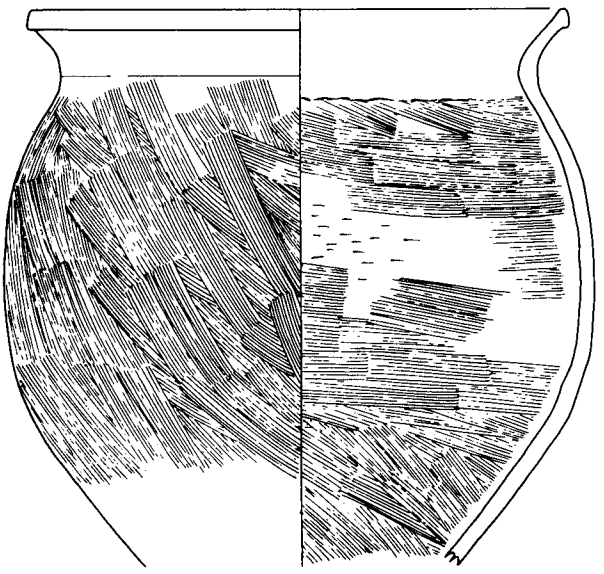
第62図　P４G調査区第４層出土土器



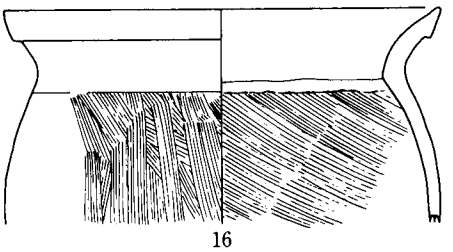
12



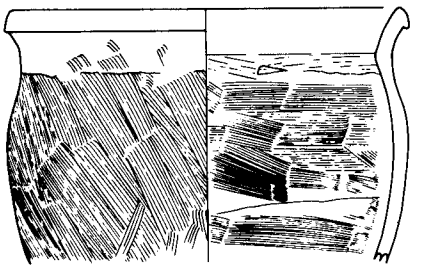
13



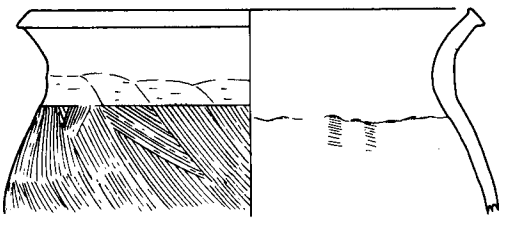
14



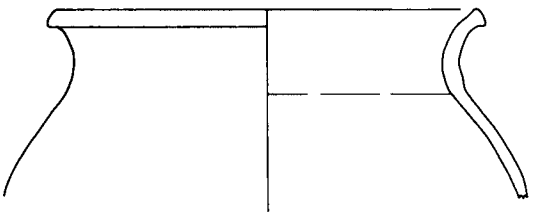
16



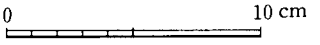
17



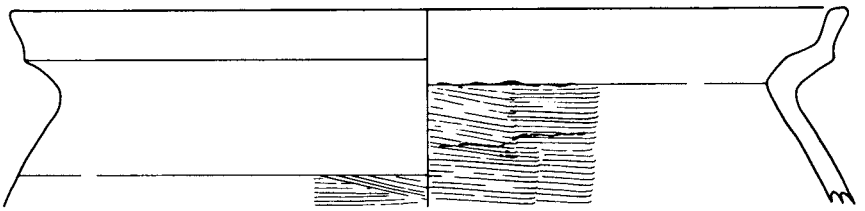
18



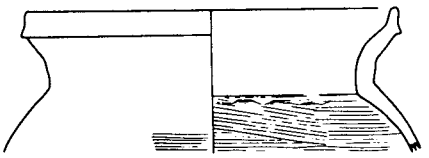
15



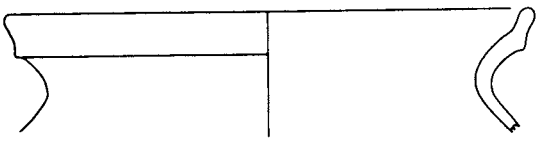
第63図　P4G調査区第4層出土土器



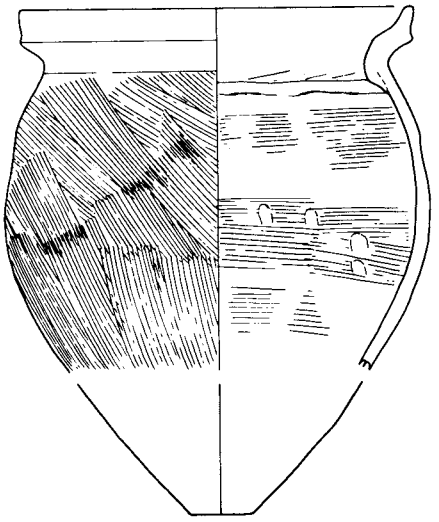
19



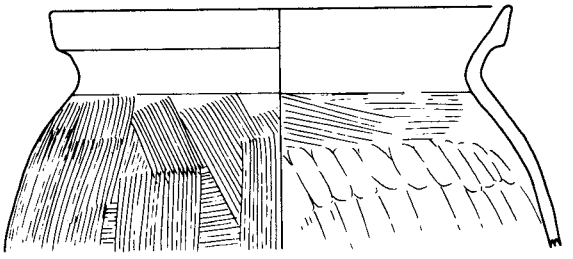
20



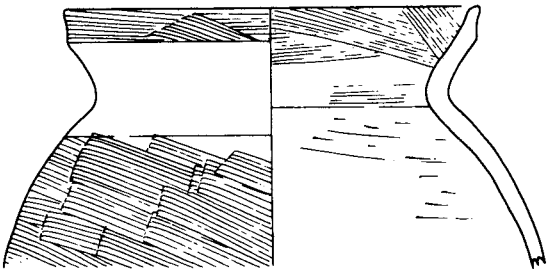
24



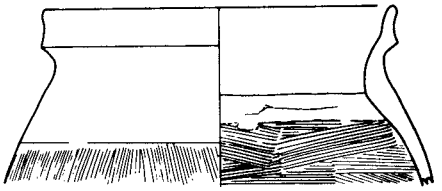
21



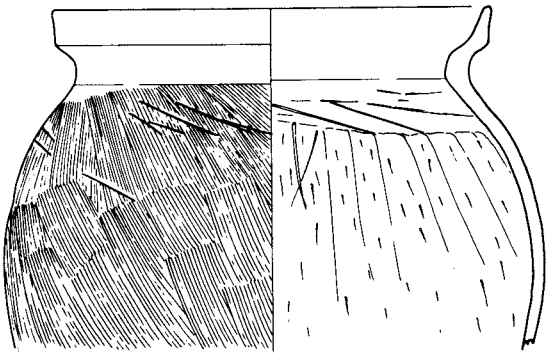
25



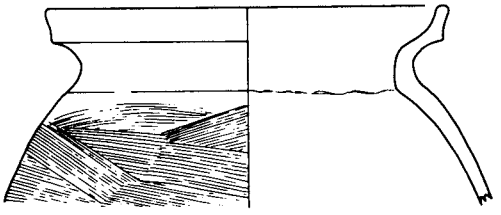
26



22

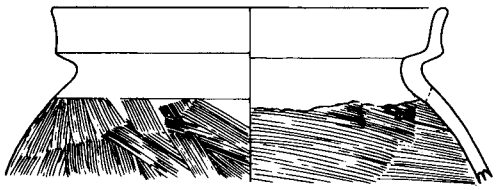


27

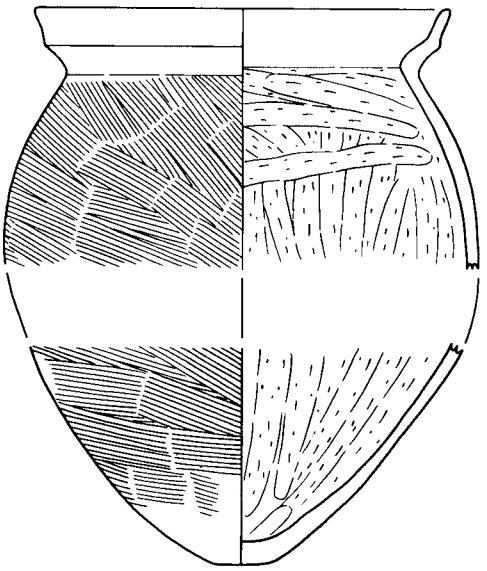


23

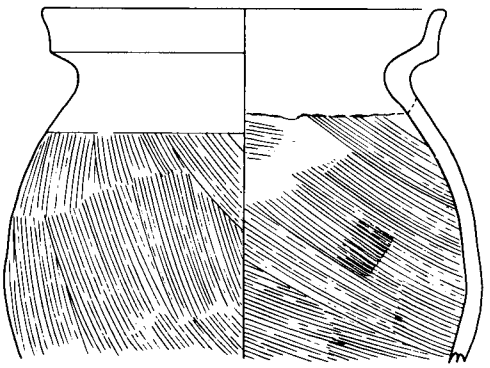
第64図　P4G調査区第4層出土土器



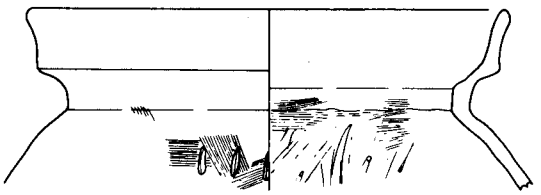
28



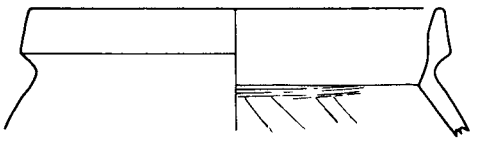
29



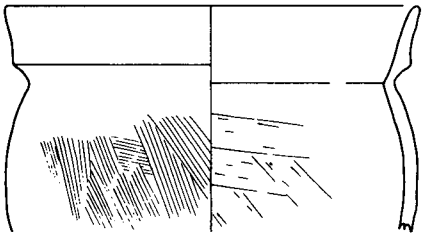
30



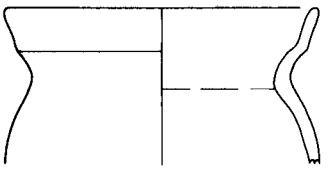
31



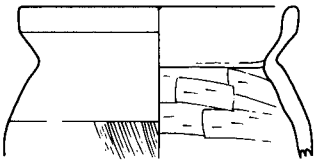
32



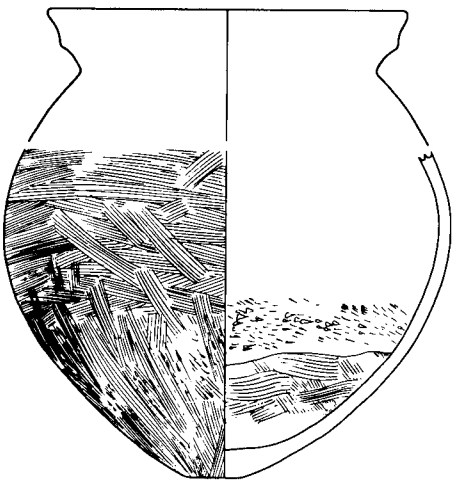
33



34

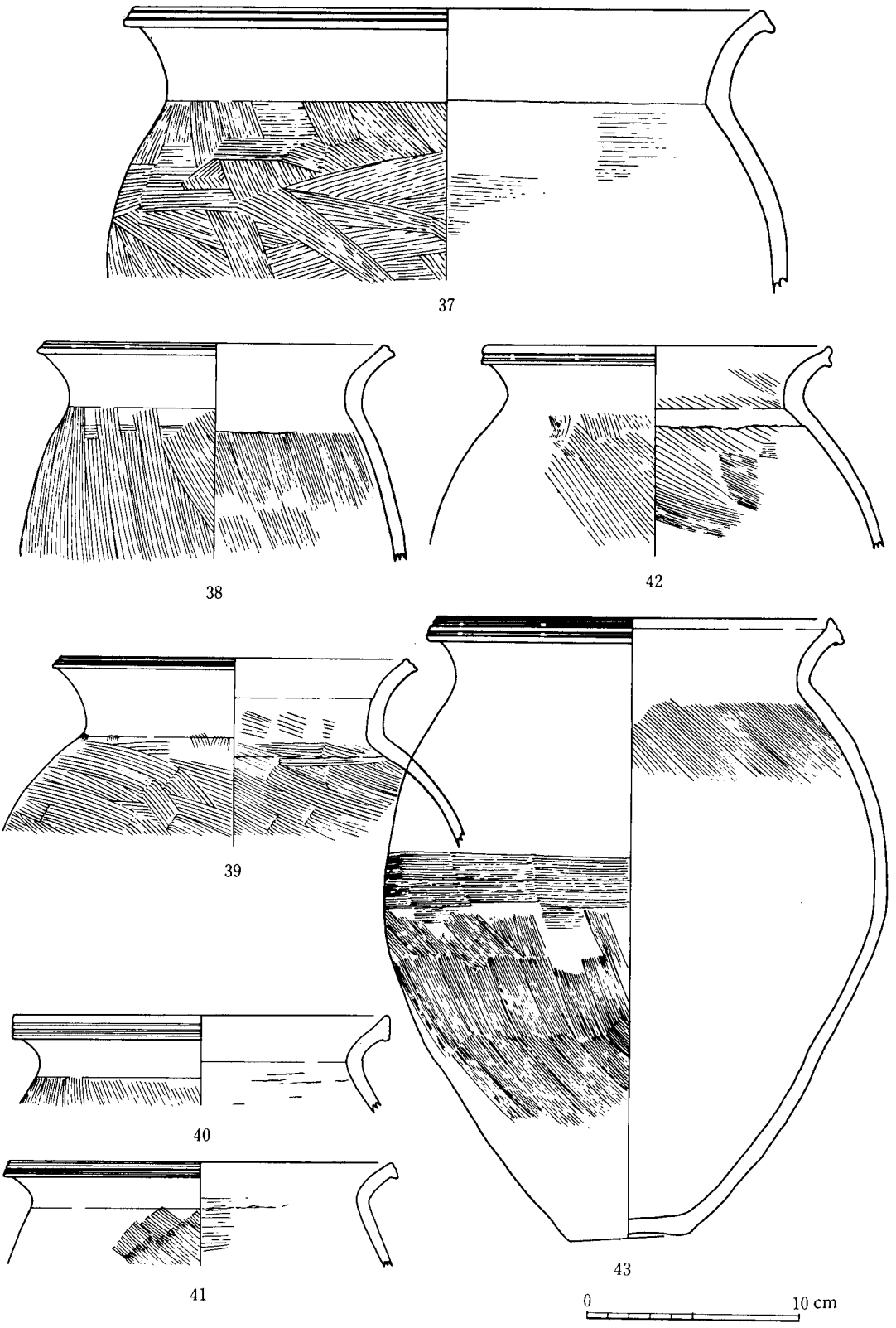


35

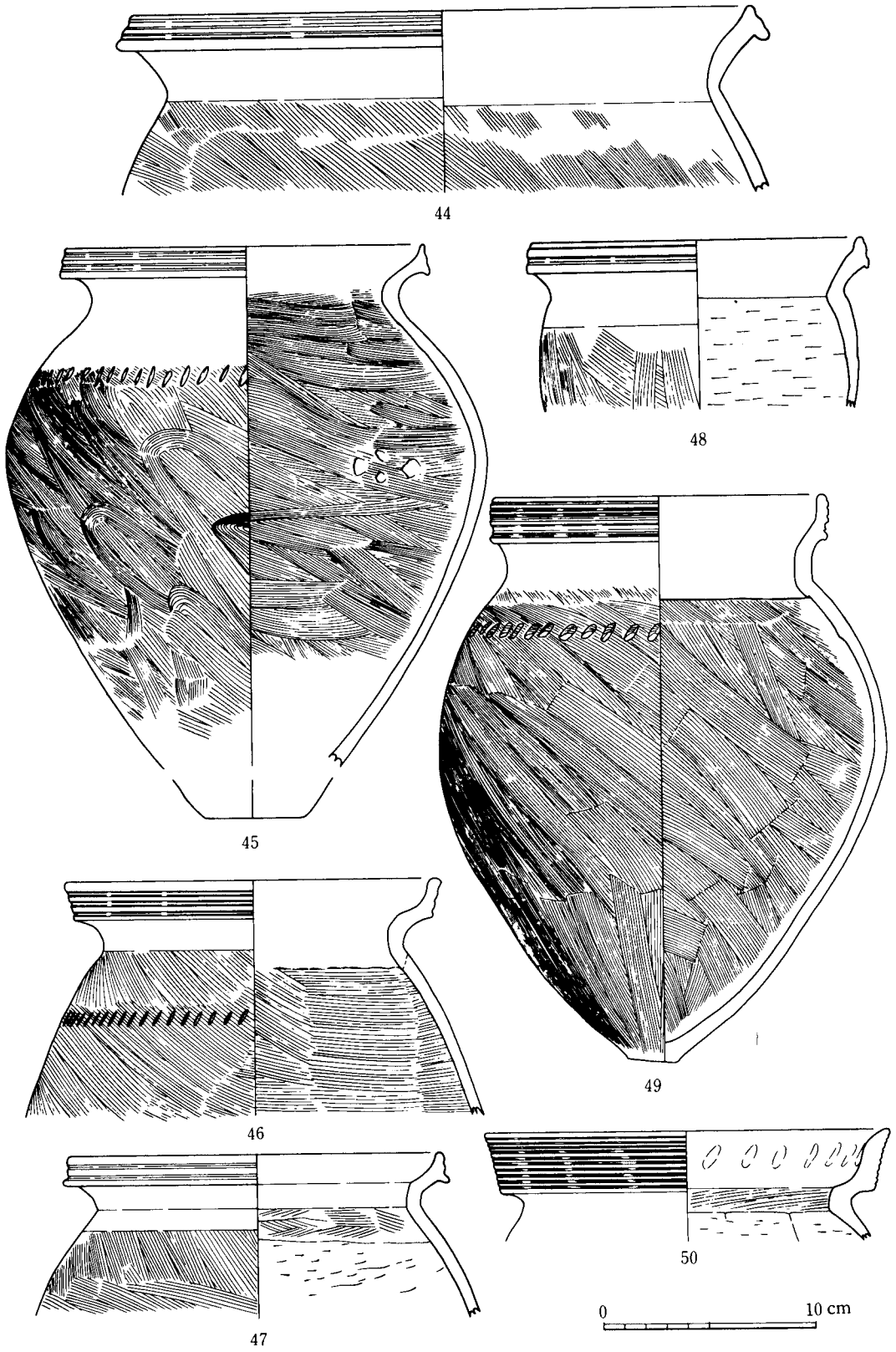


36

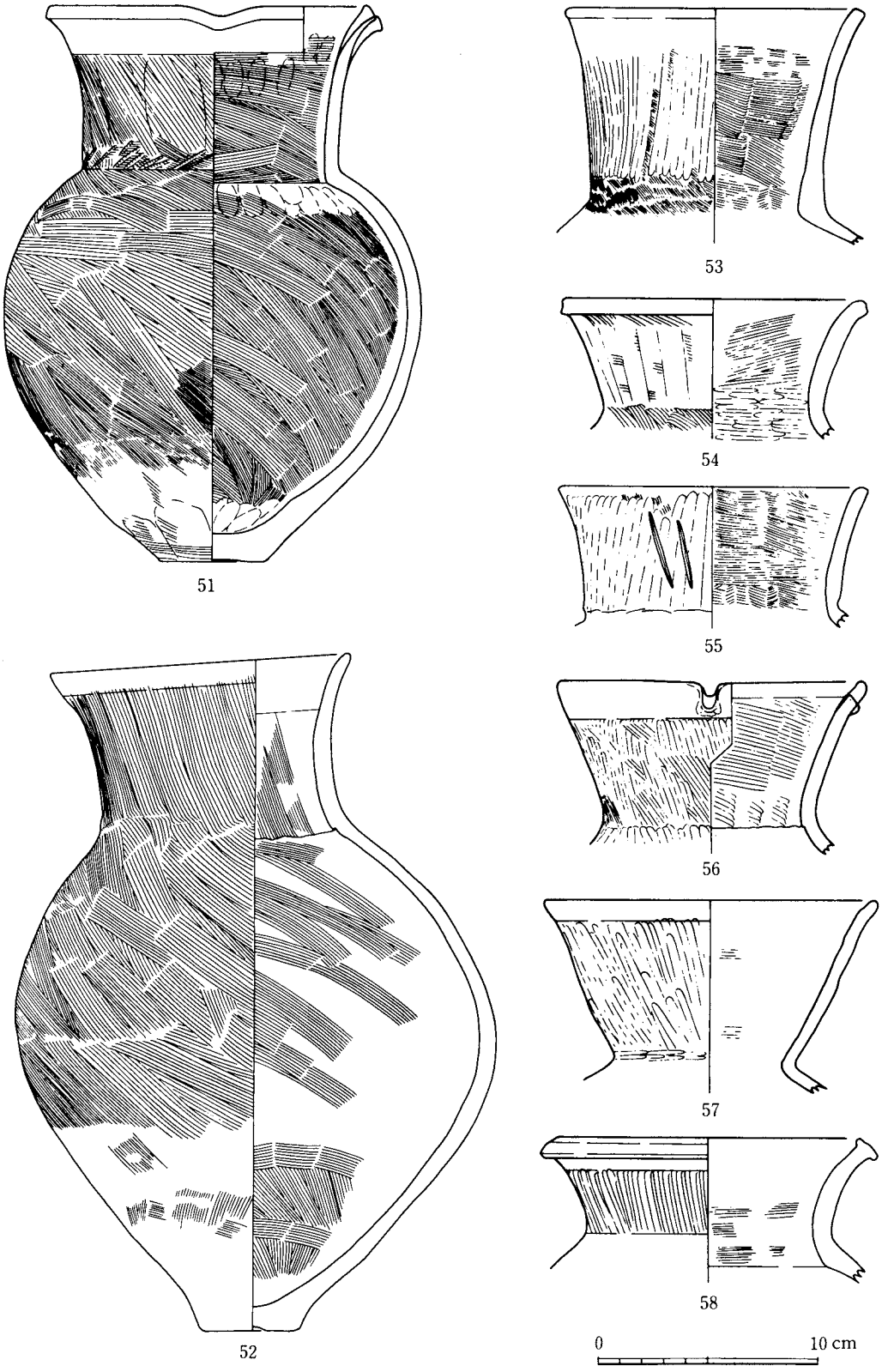
第 65 図　P 4 G 調査区第 4 層出土土器



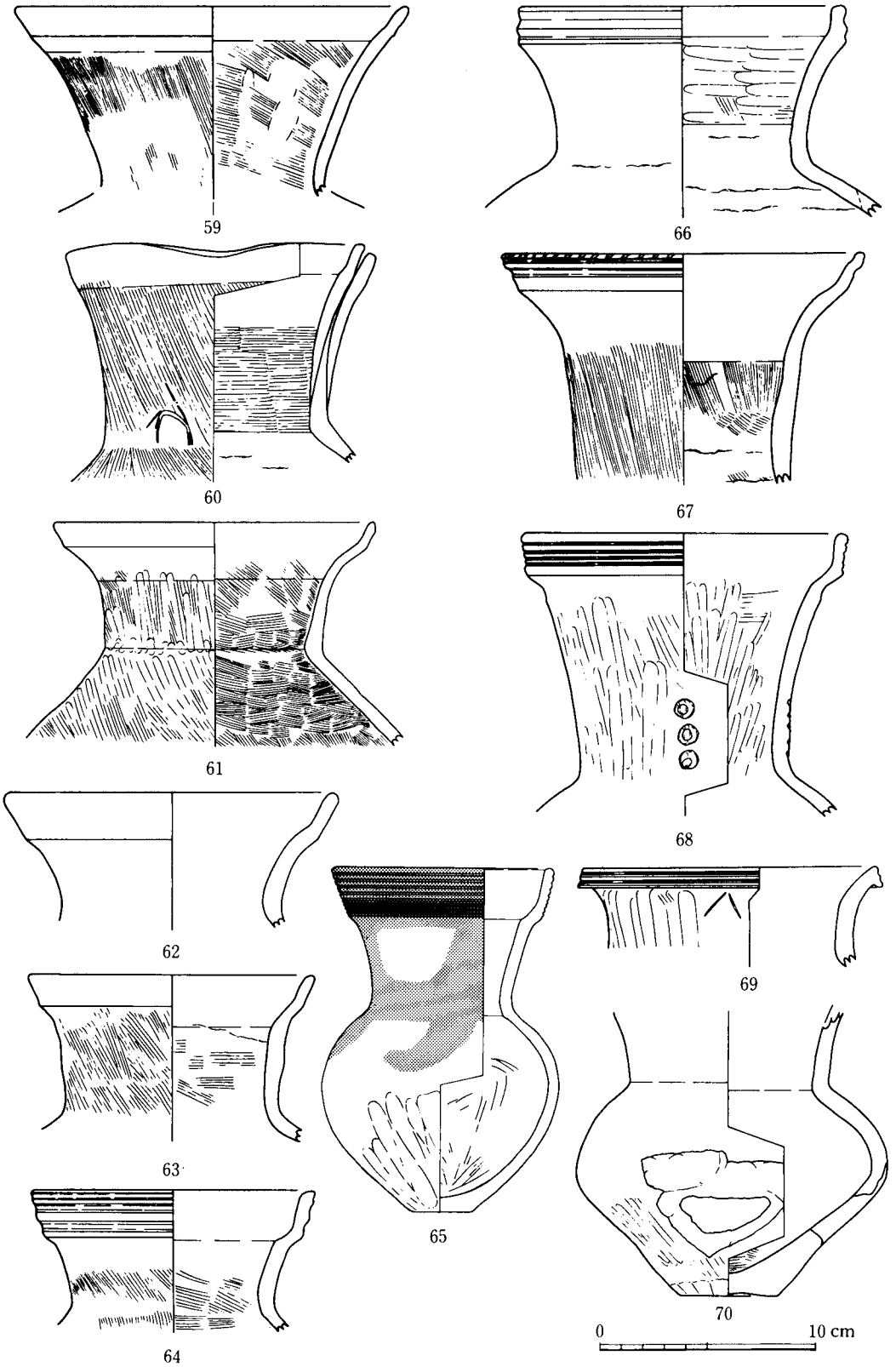
第66図　P4G調査区第4層出土土器



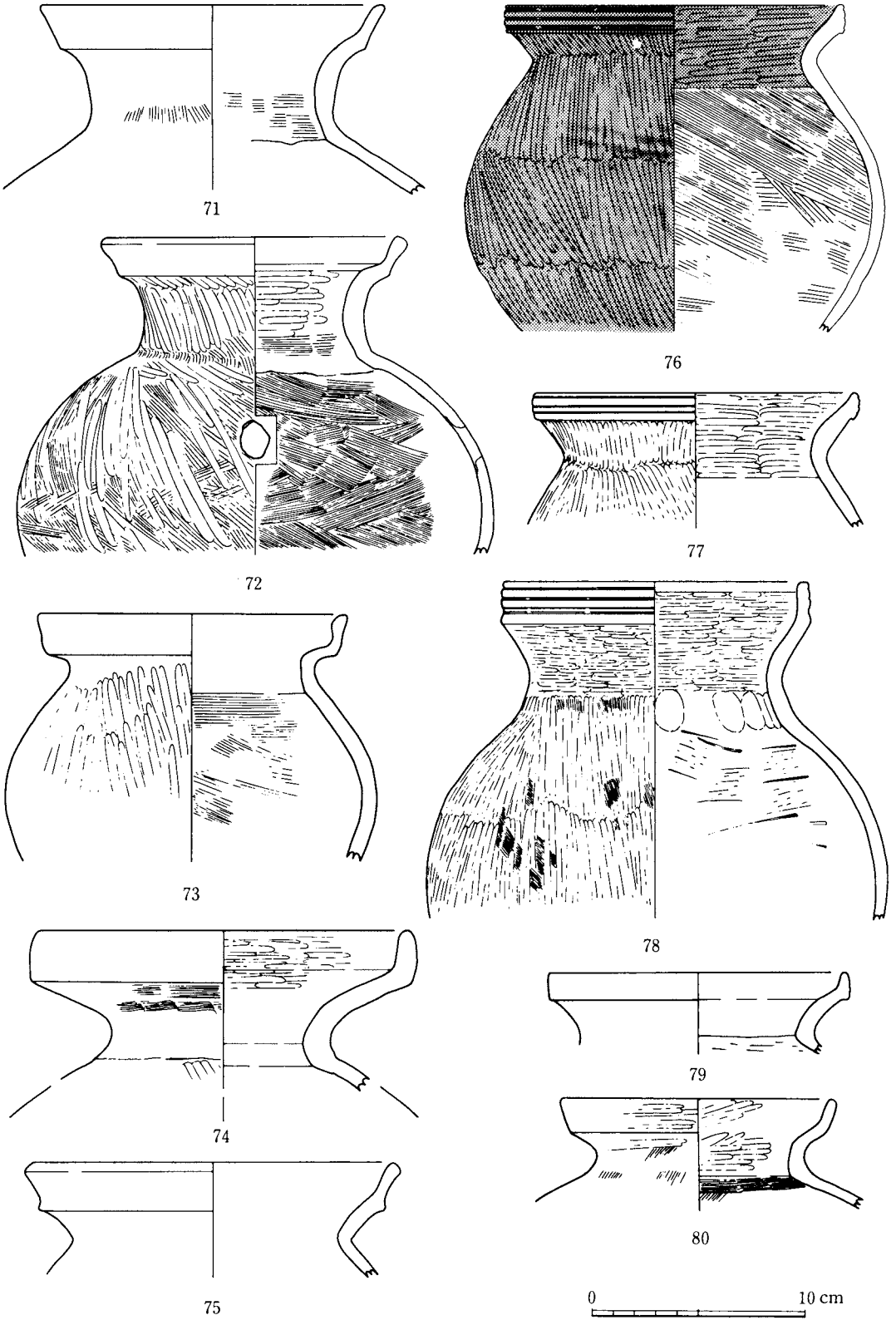
第67図　P４G調査区第４層出土土器



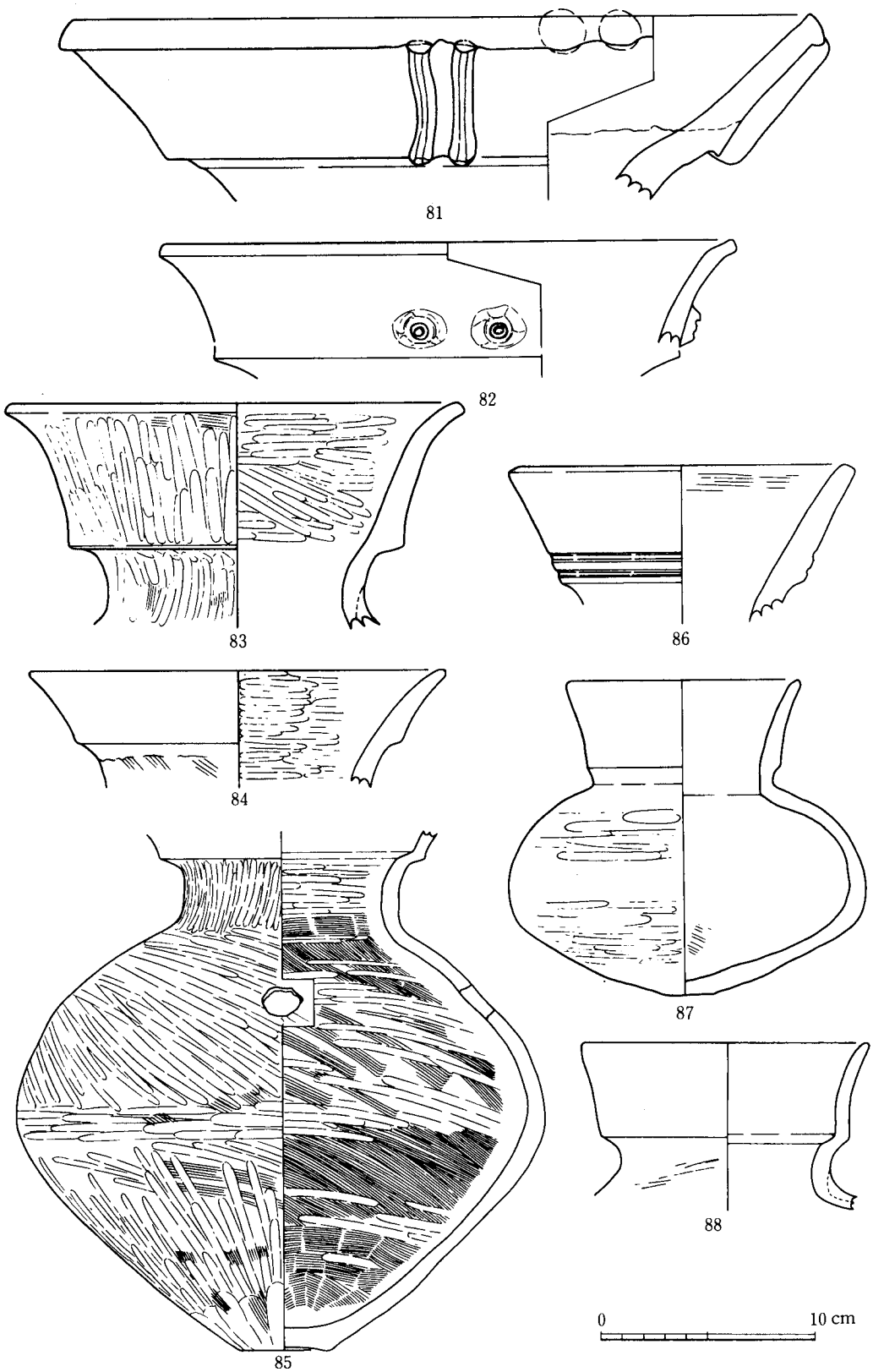
第 68 図　P 4 G 調査区第 4 層出土土器



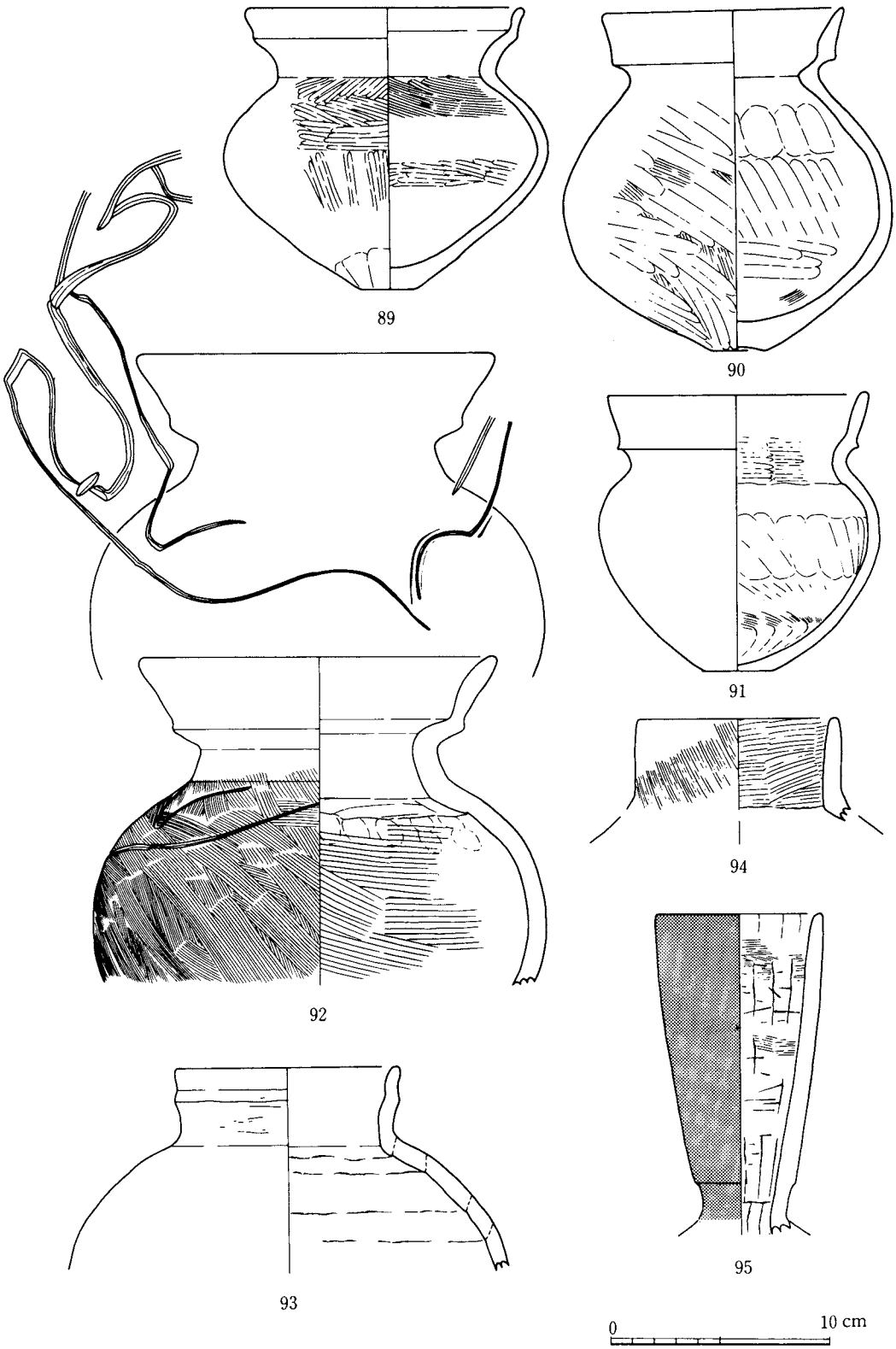
第 69 図　P 4 G 調査区第 3 層出土土器



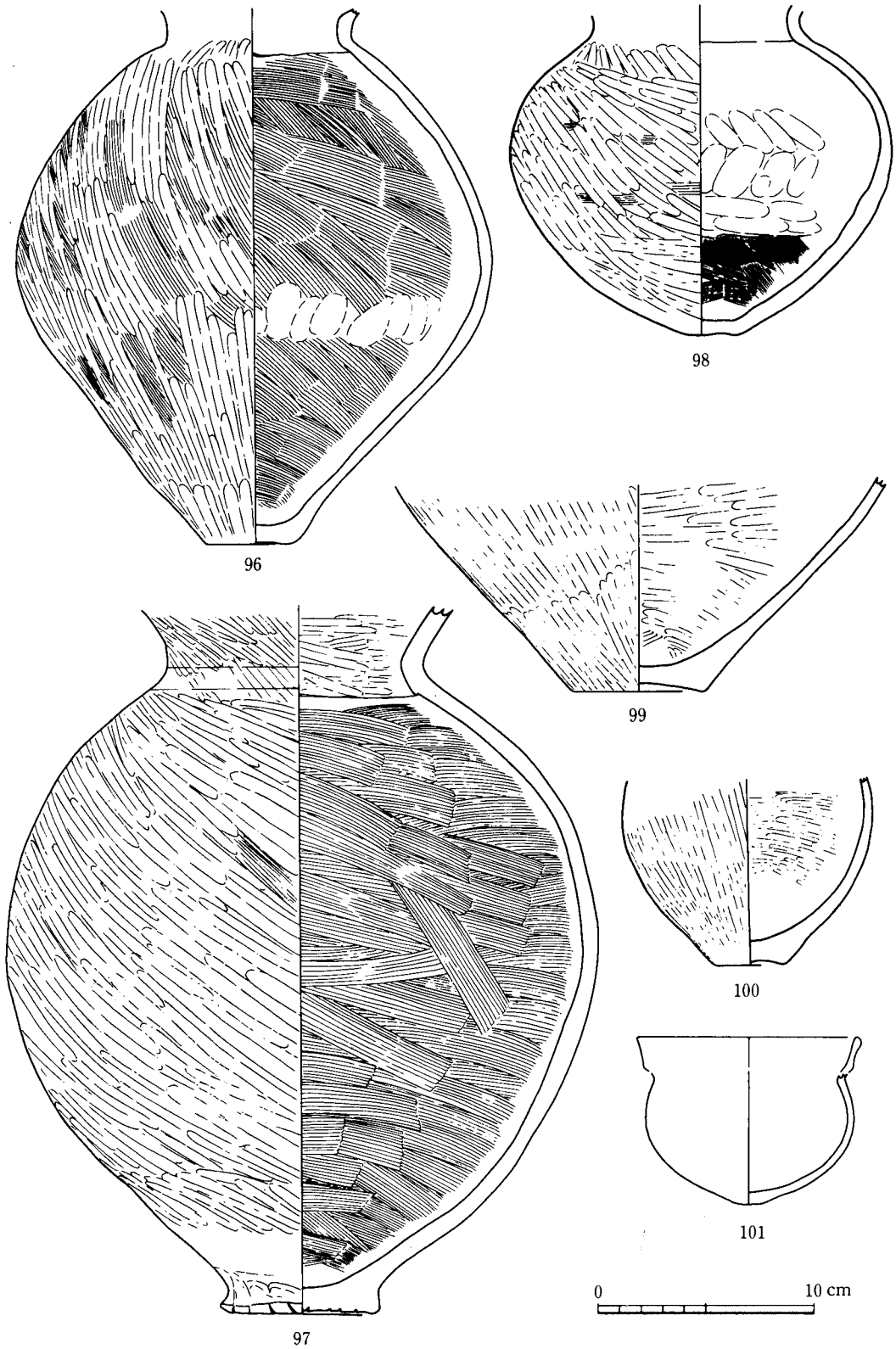
第 70 図　P 4 G 調査区第 4 層出土土器



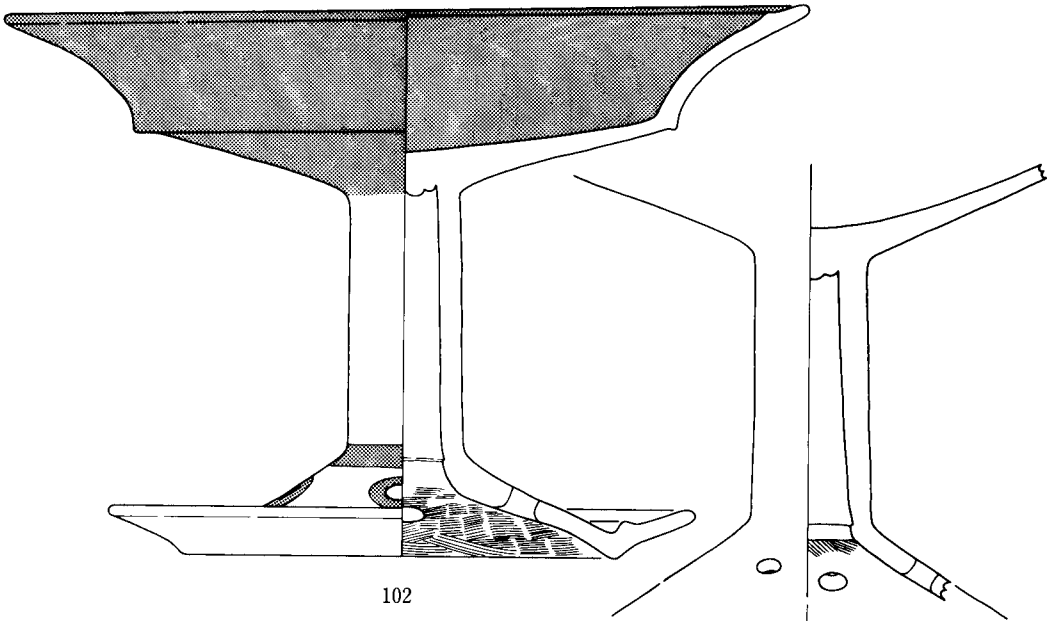
第 71 図　P 4 G調査区第 4 層出土土器

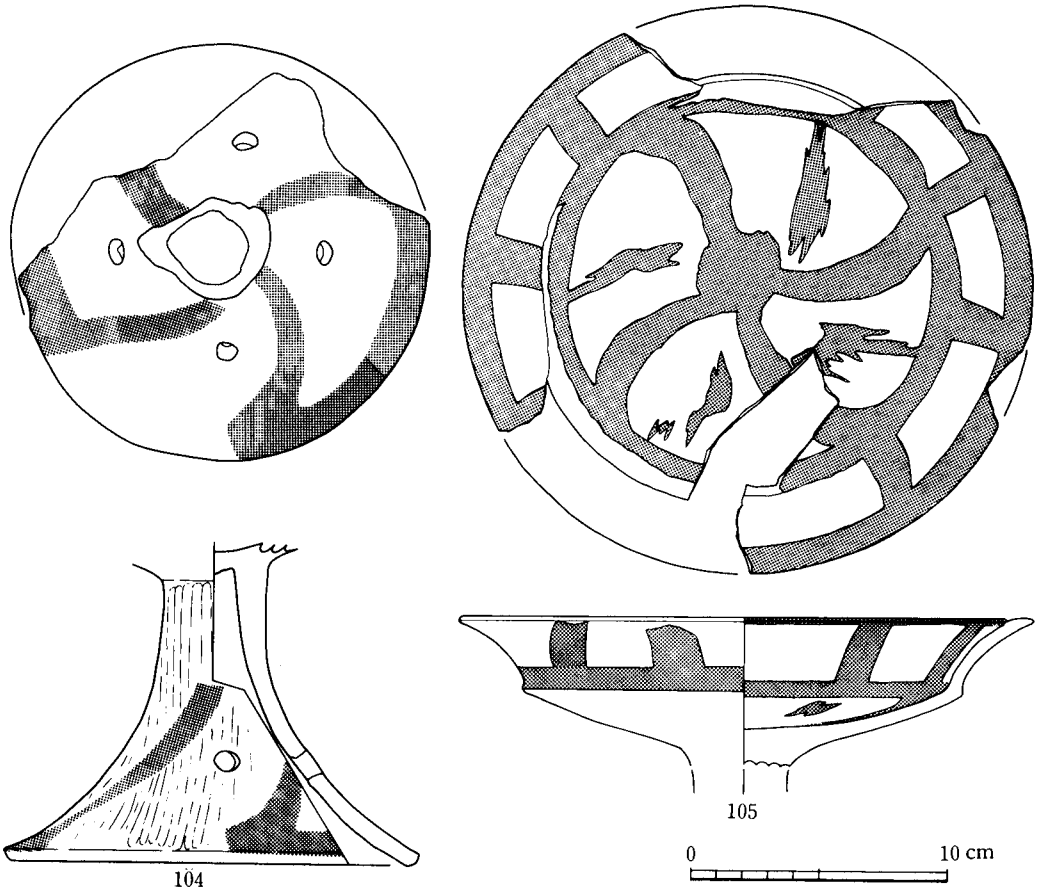


第72図　P4G調査区第4層出土土器

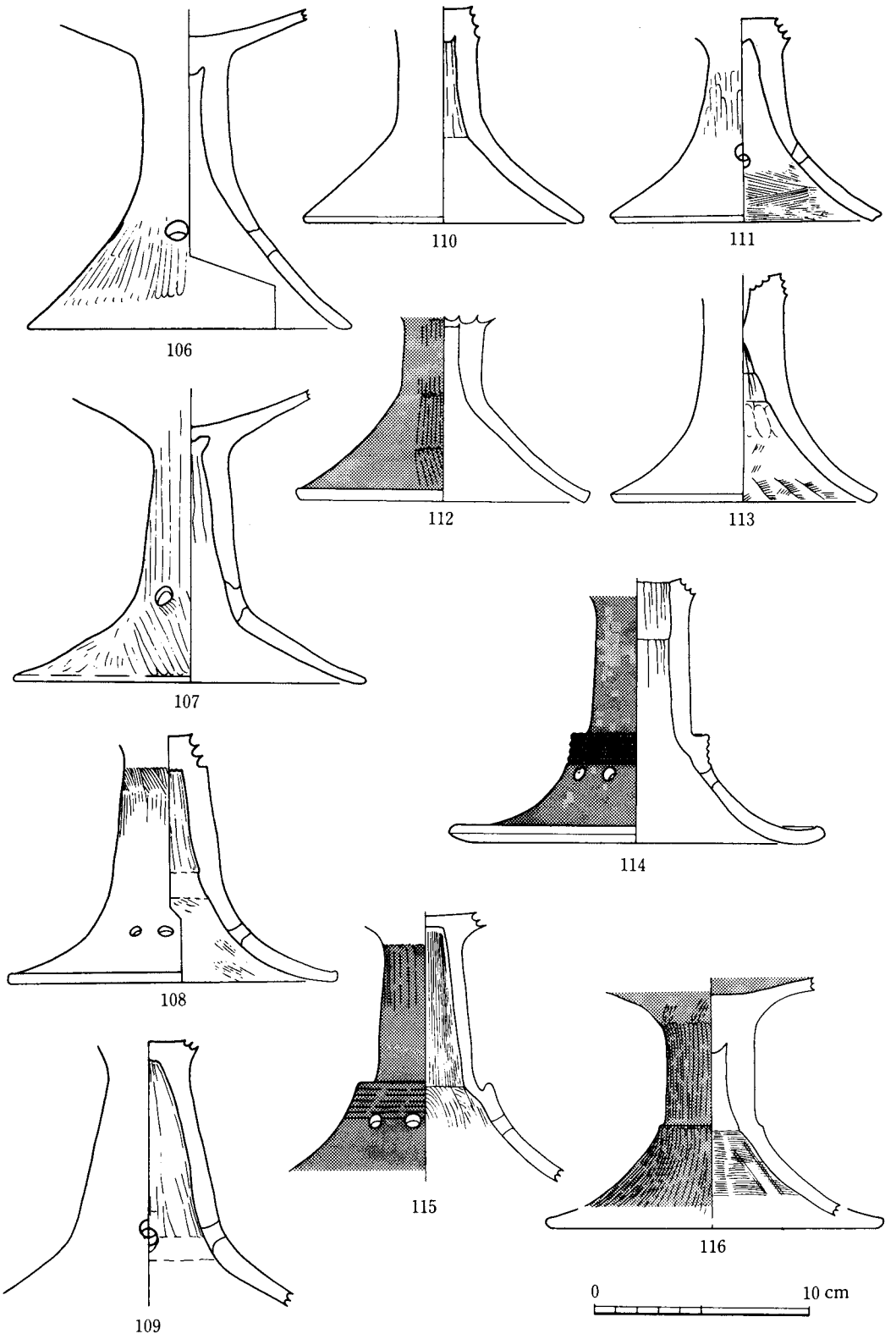


第73図　P4G調査区第4層出土土器

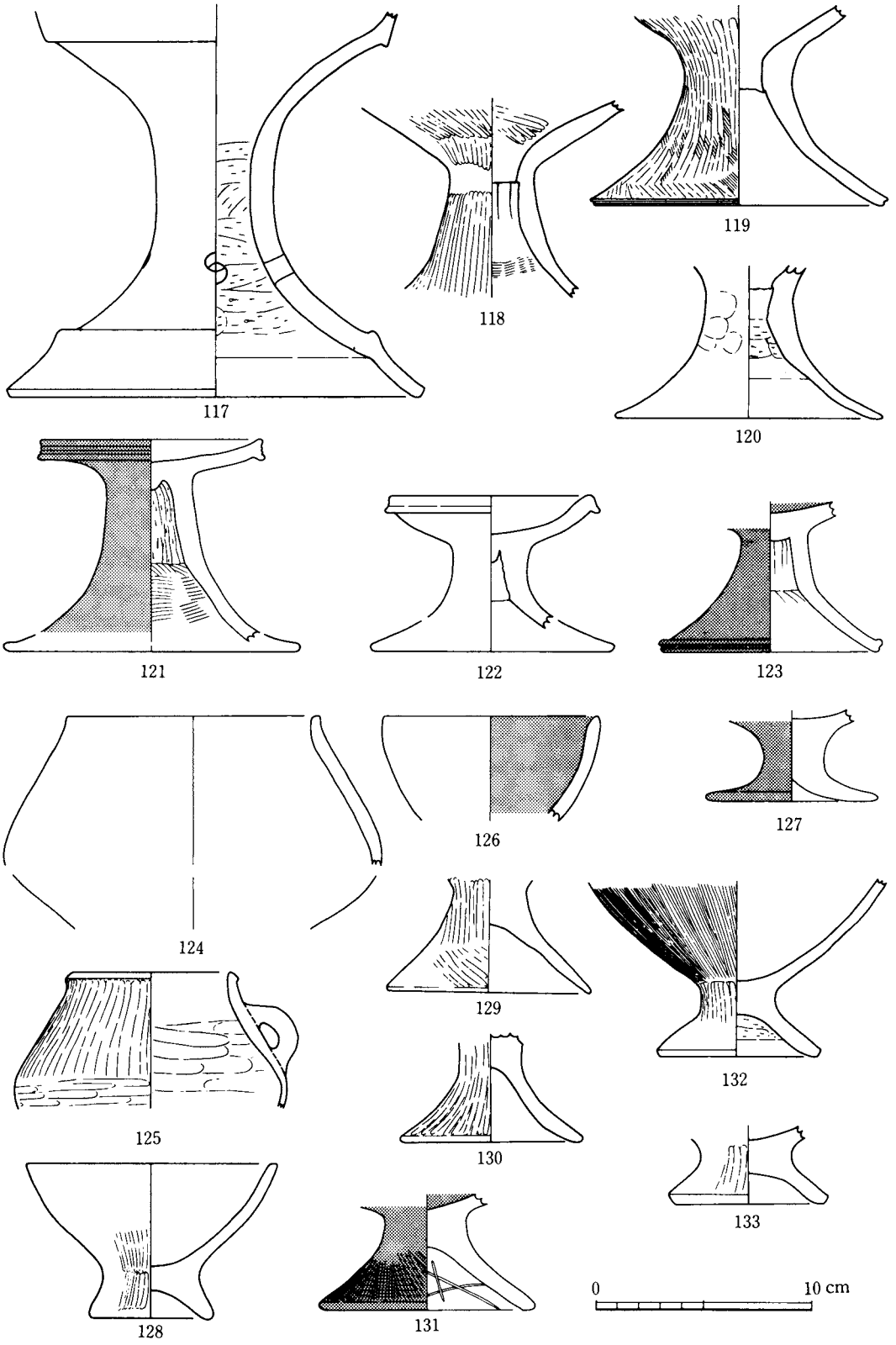




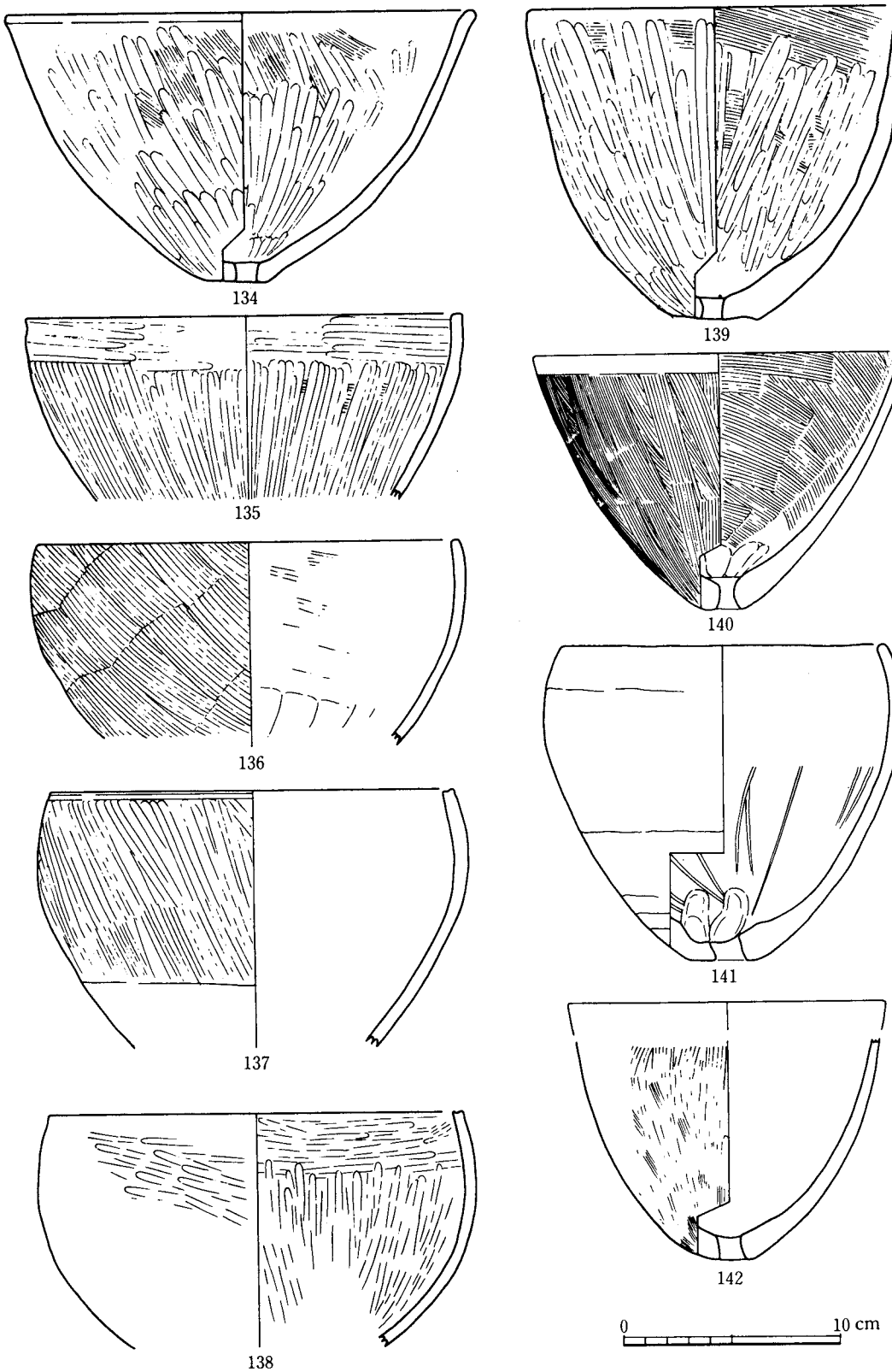
第74図　P4G調査区第4層出土土器



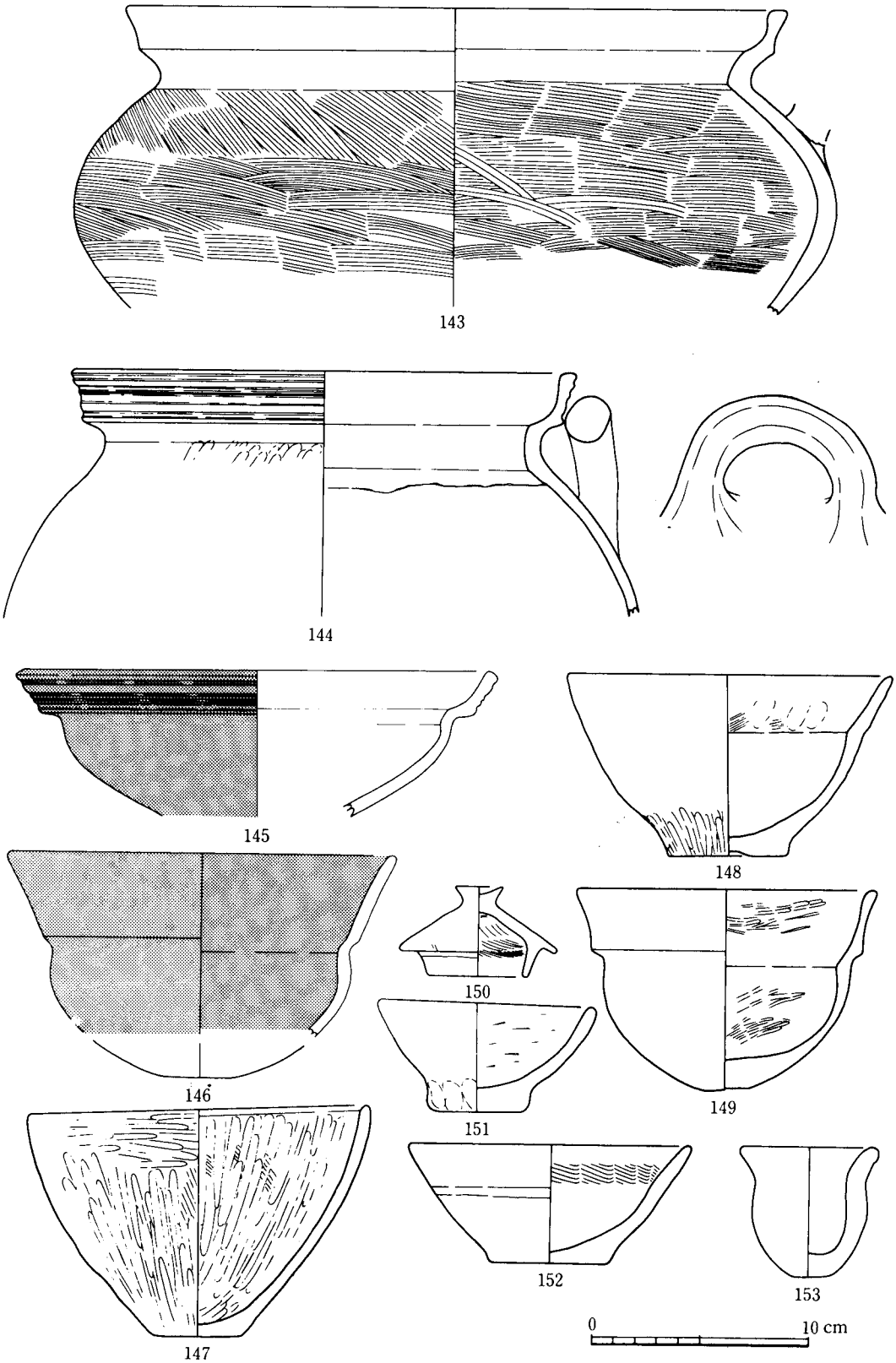
第 75 図　P 4 G 調査区第 4 層出土土器



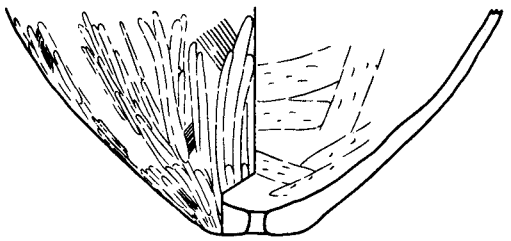
第 76 図　P 4 G調査区第 4 層出土土器

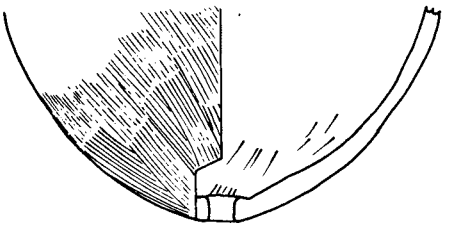


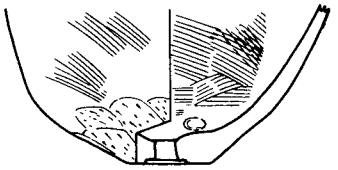
第77図　P4G調査区第4層出土土器

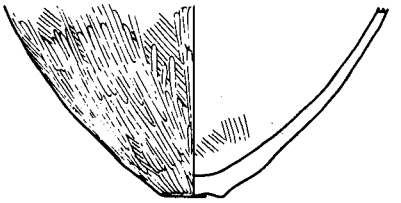


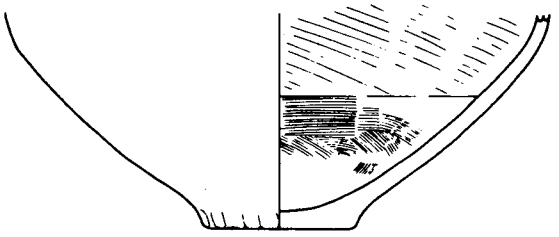
第78図　P4G調査区第4層出土土器

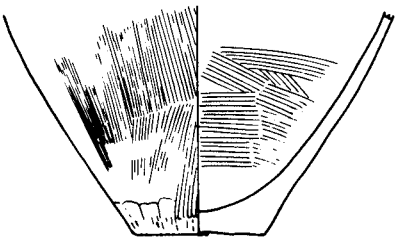

154

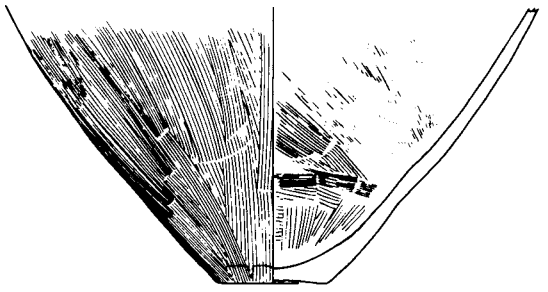

155

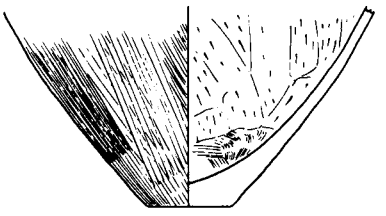

156

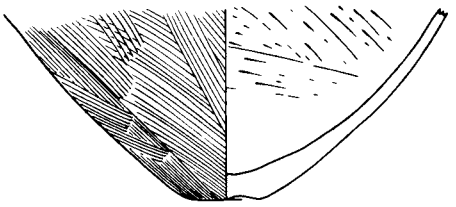

161

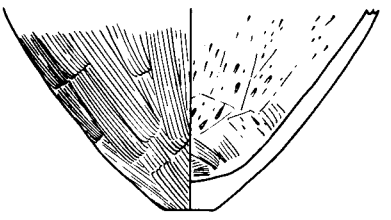

157

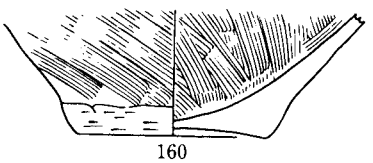

162

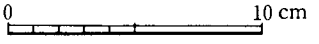

158


163

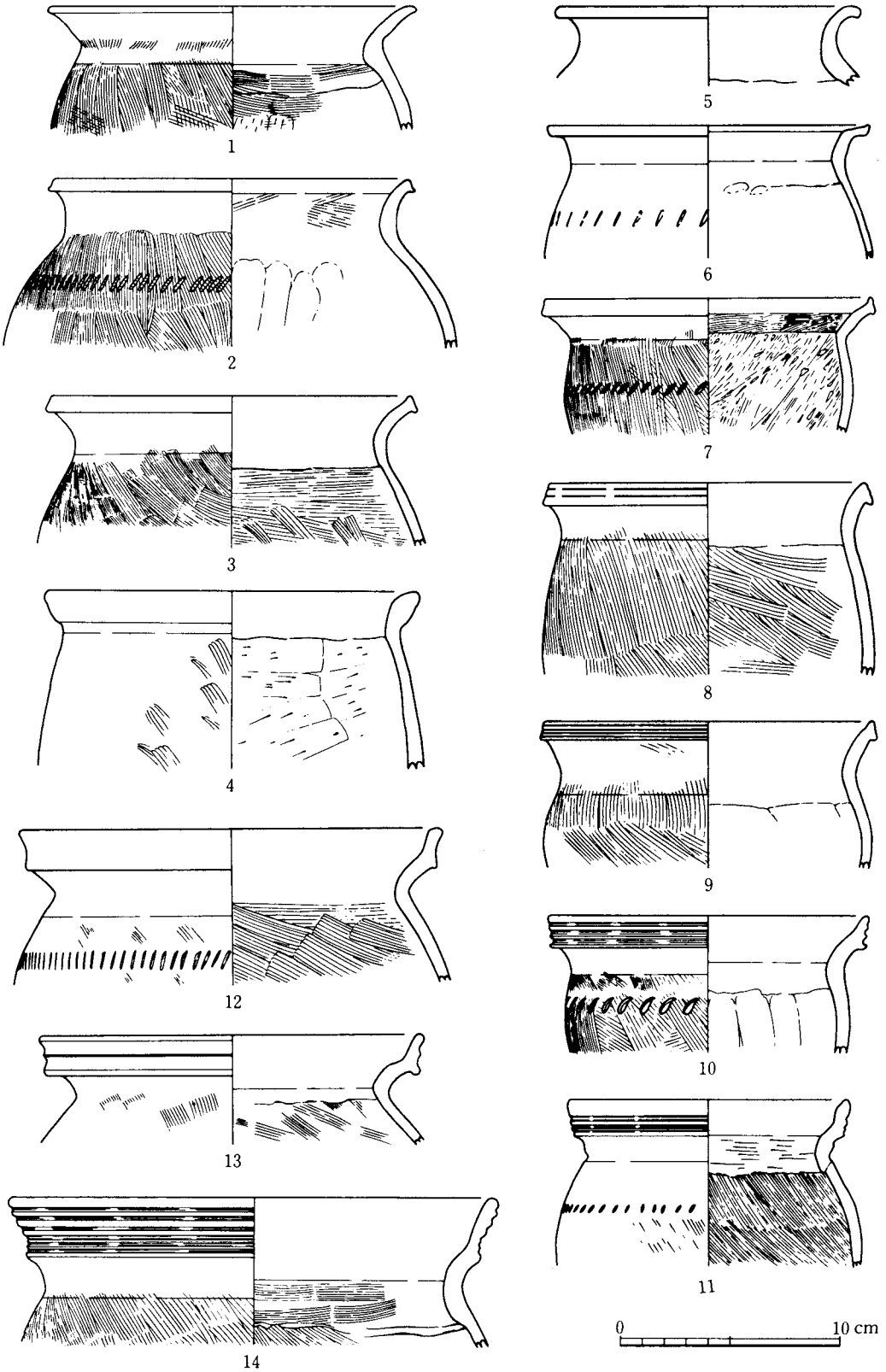

159


164

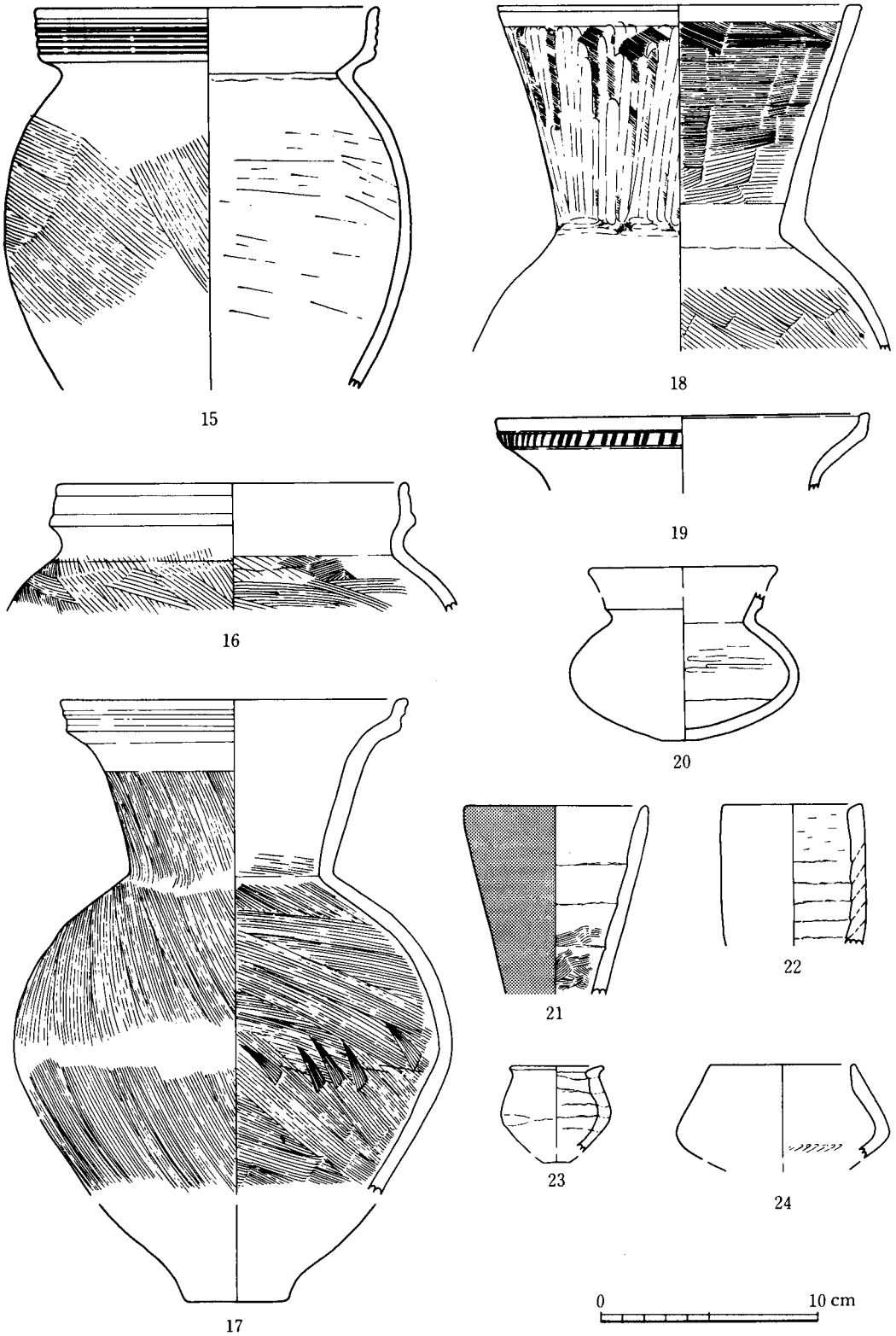

160



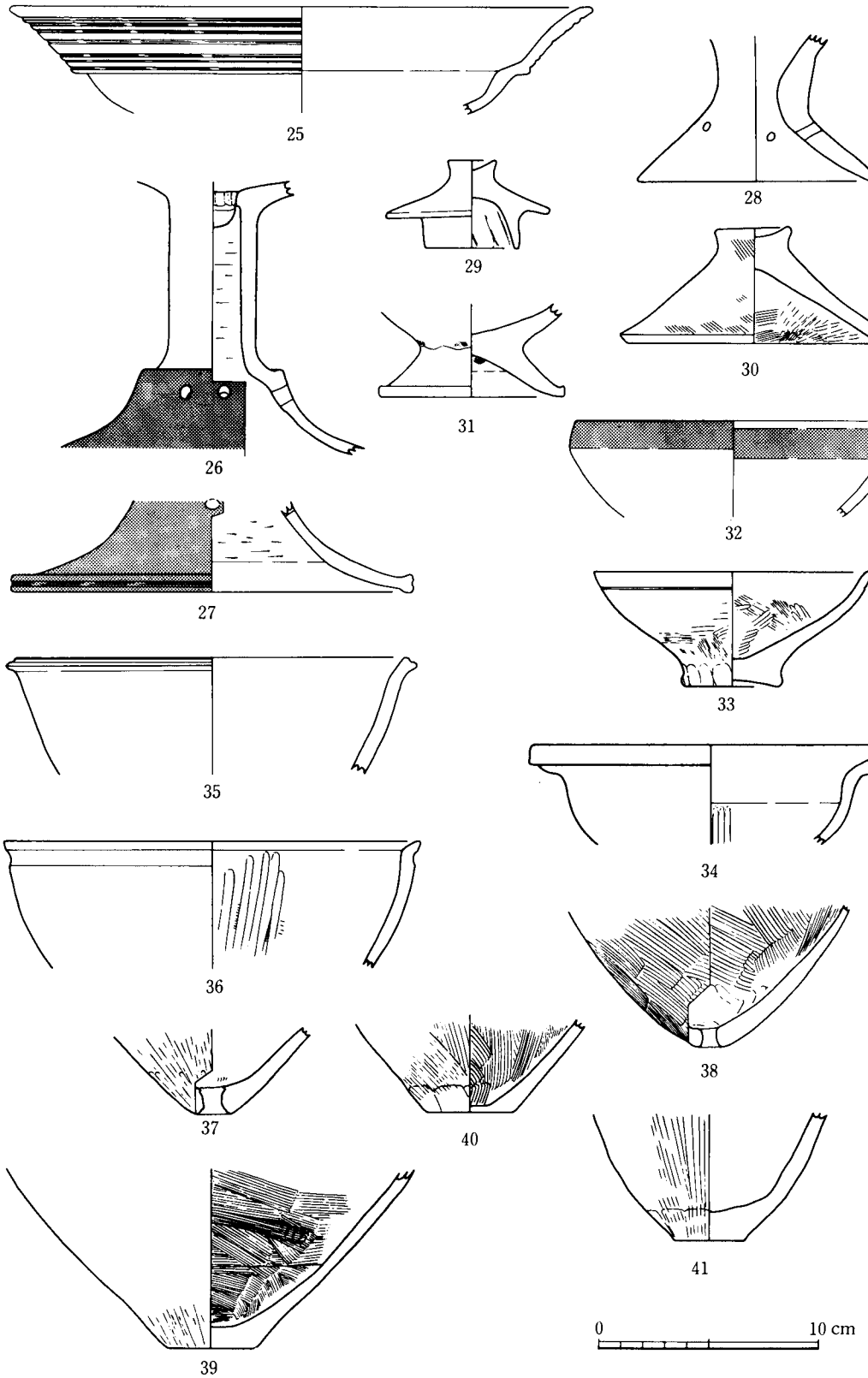
第79図　P4G調査区第4層出土土器



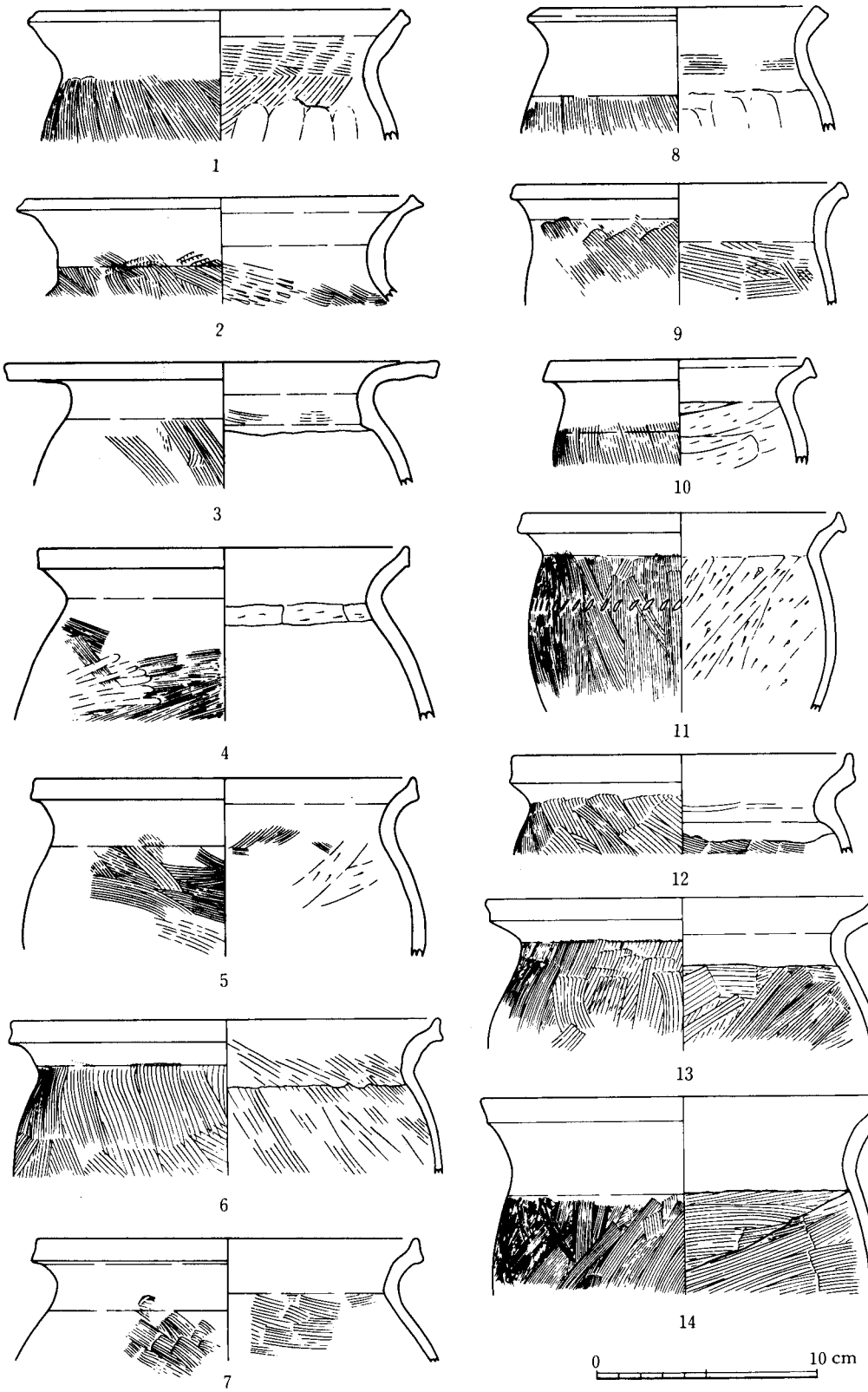
第80図　P４G調査区第３層下部出土土器



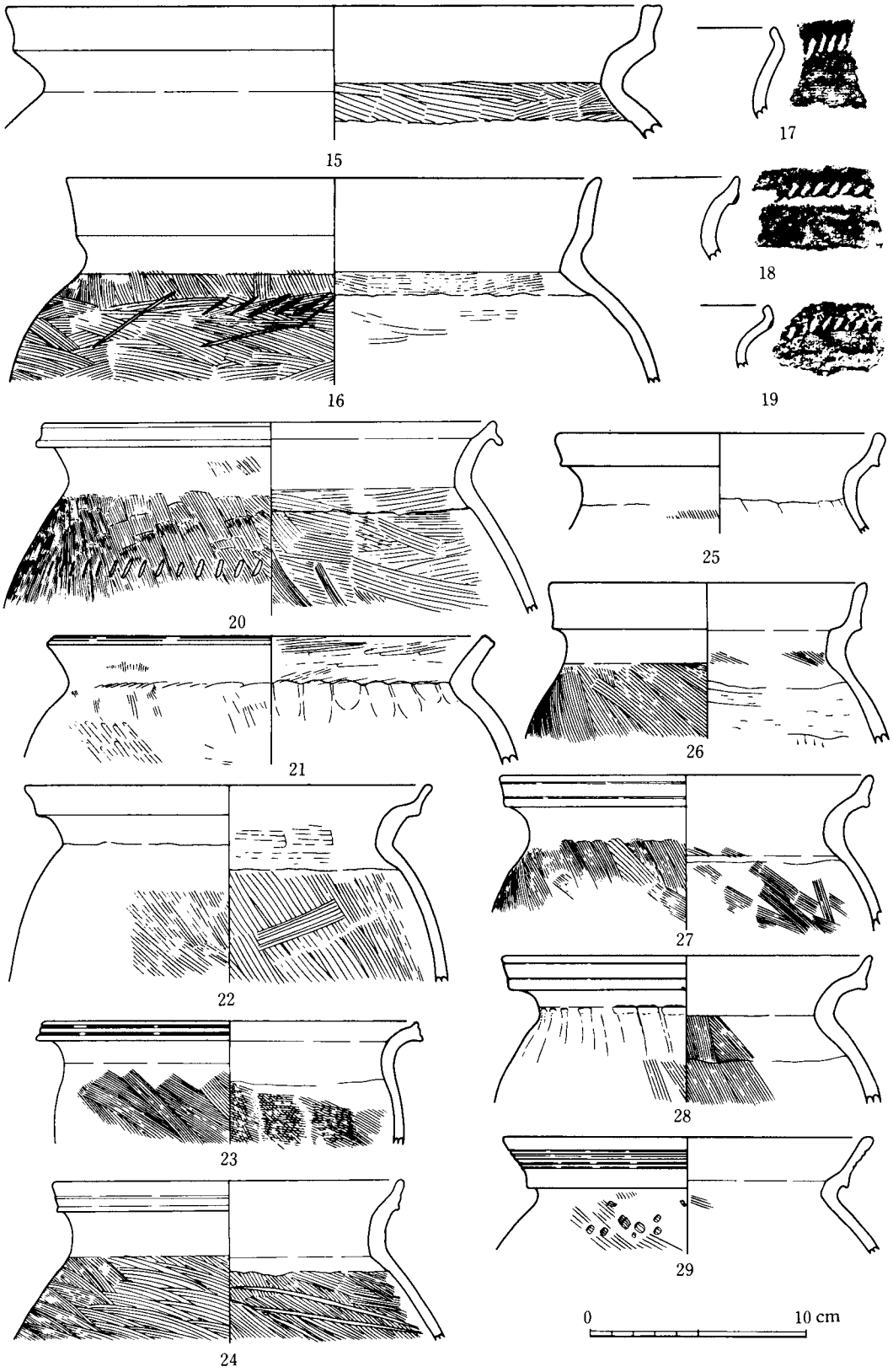
第 81 図　P 4 G 調査区第 3 層下部出土土器



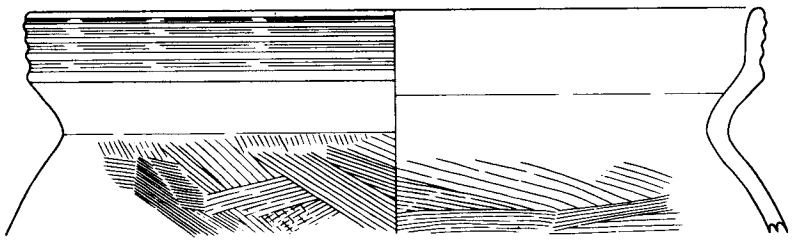
第 82 図　P 4 G調査区第 3 層下部出土土器



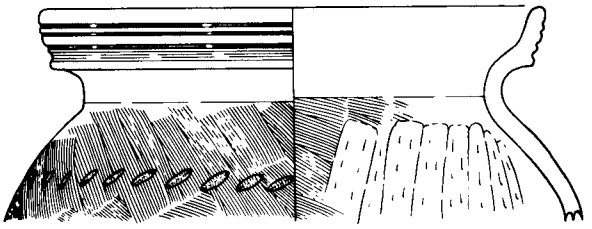
第83図　P4G調査区第3層出土土器



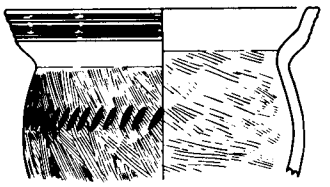
第84図　P4G調査区第3層出土土器



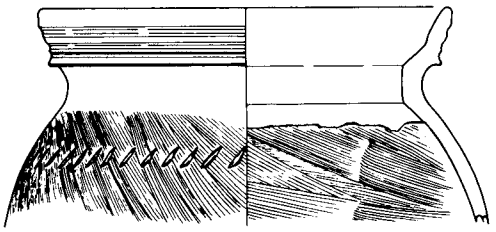
30



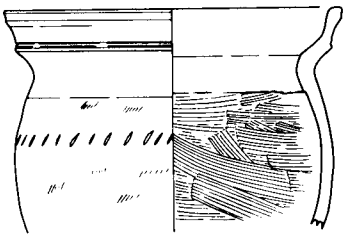
31



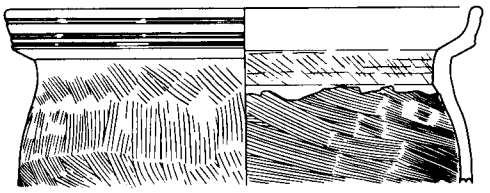
36



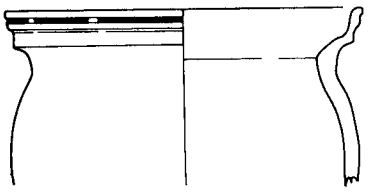
32



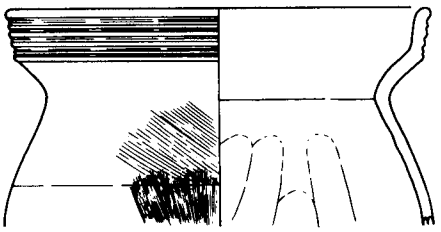
37



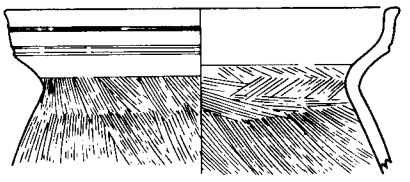
33



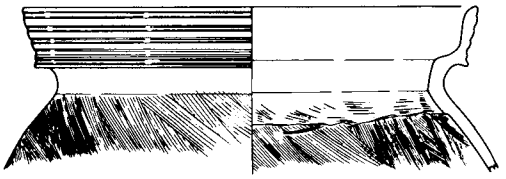
38



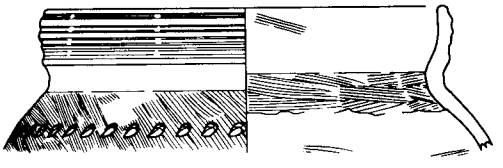
34



39



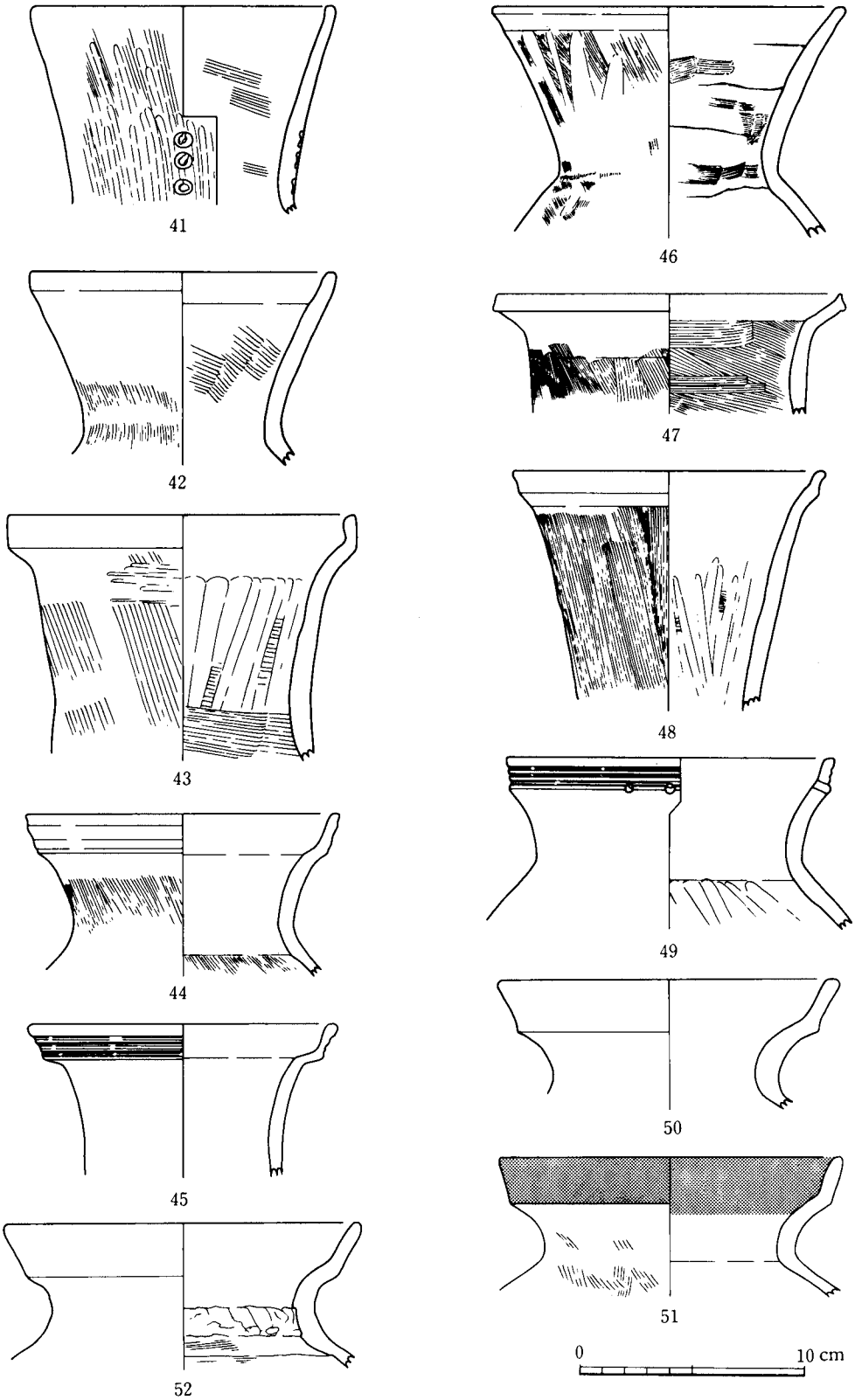
35



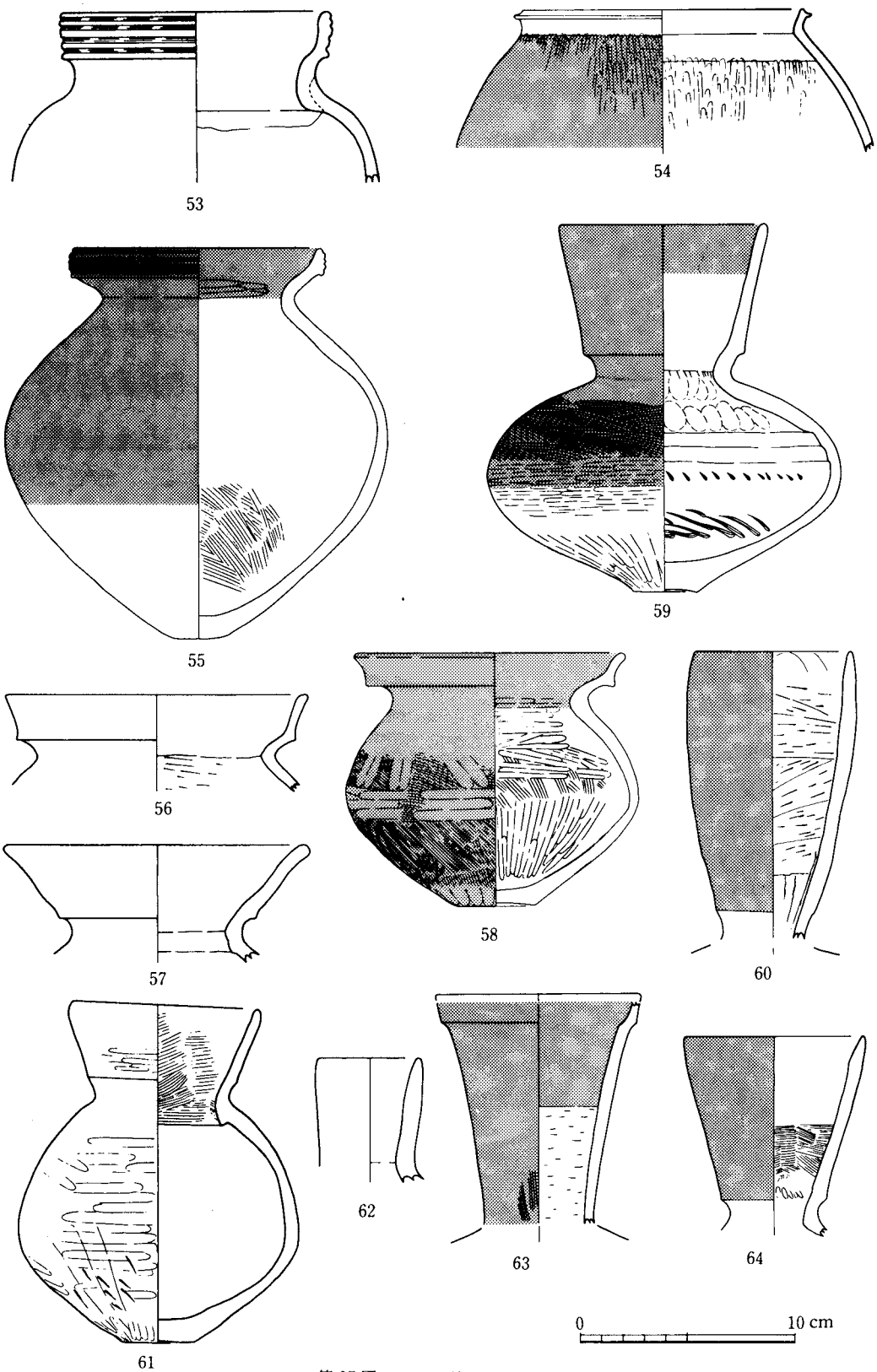
40

0 10 cm

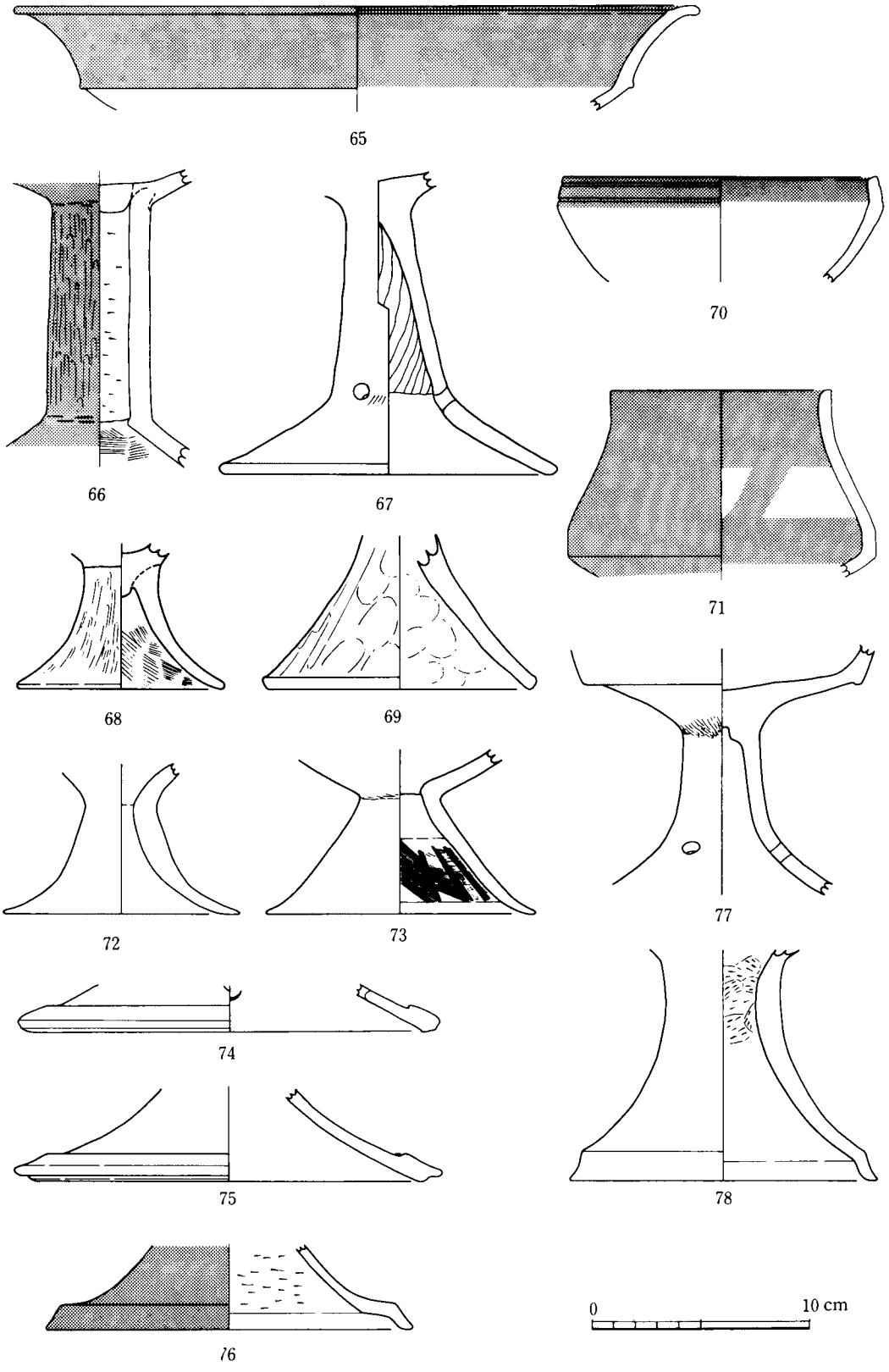
第 85 図　P 4 G 調査区第 3 層出土土器



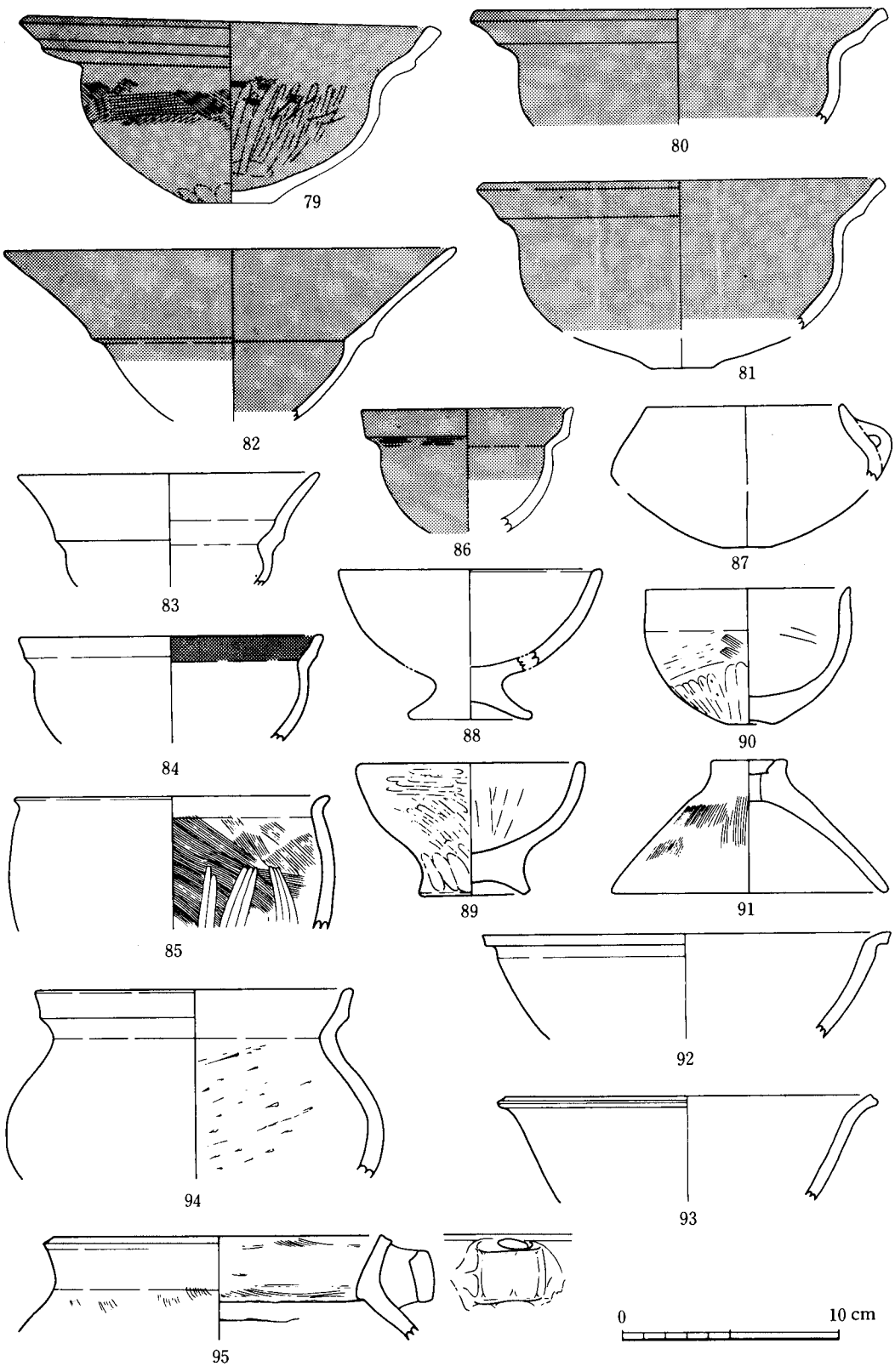
第 86 図　P 4 G 調査区第 3 層出土土器



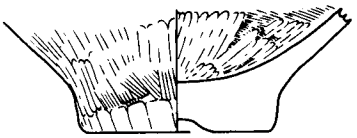
第87図　P4G第3層出土土器

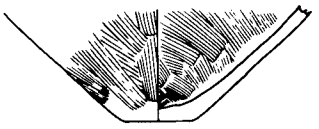


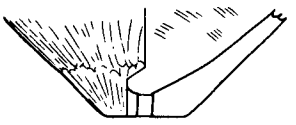
第88図　P 4 G調査区第 3 層出土土器

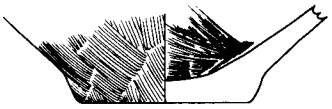


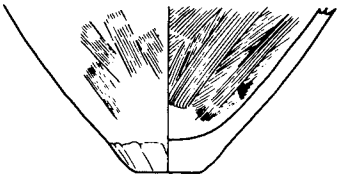
第89図　P4G調査区第3層出土土器


96

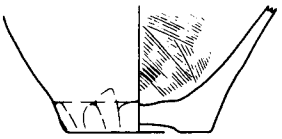

101

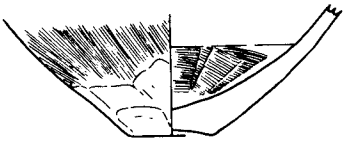

105

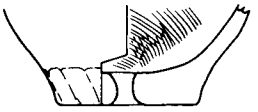

97

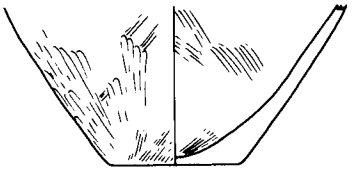

102

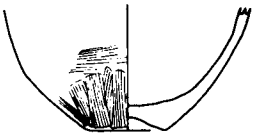
106

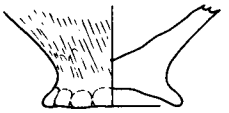

98

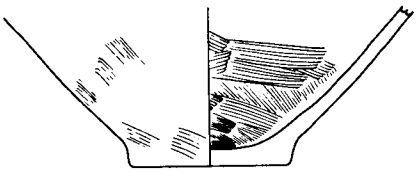

103


107

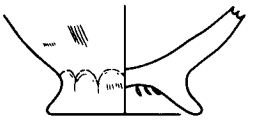

99

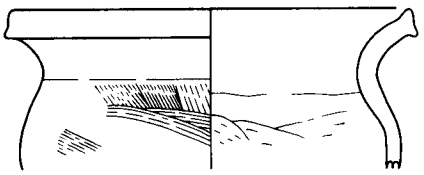

104

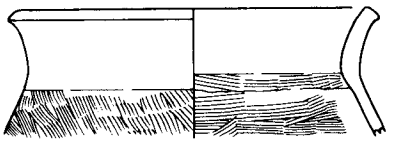

108

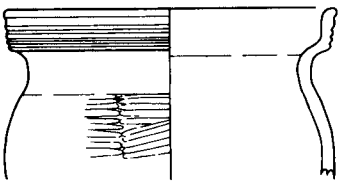

100

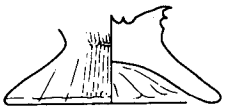
109


110


1

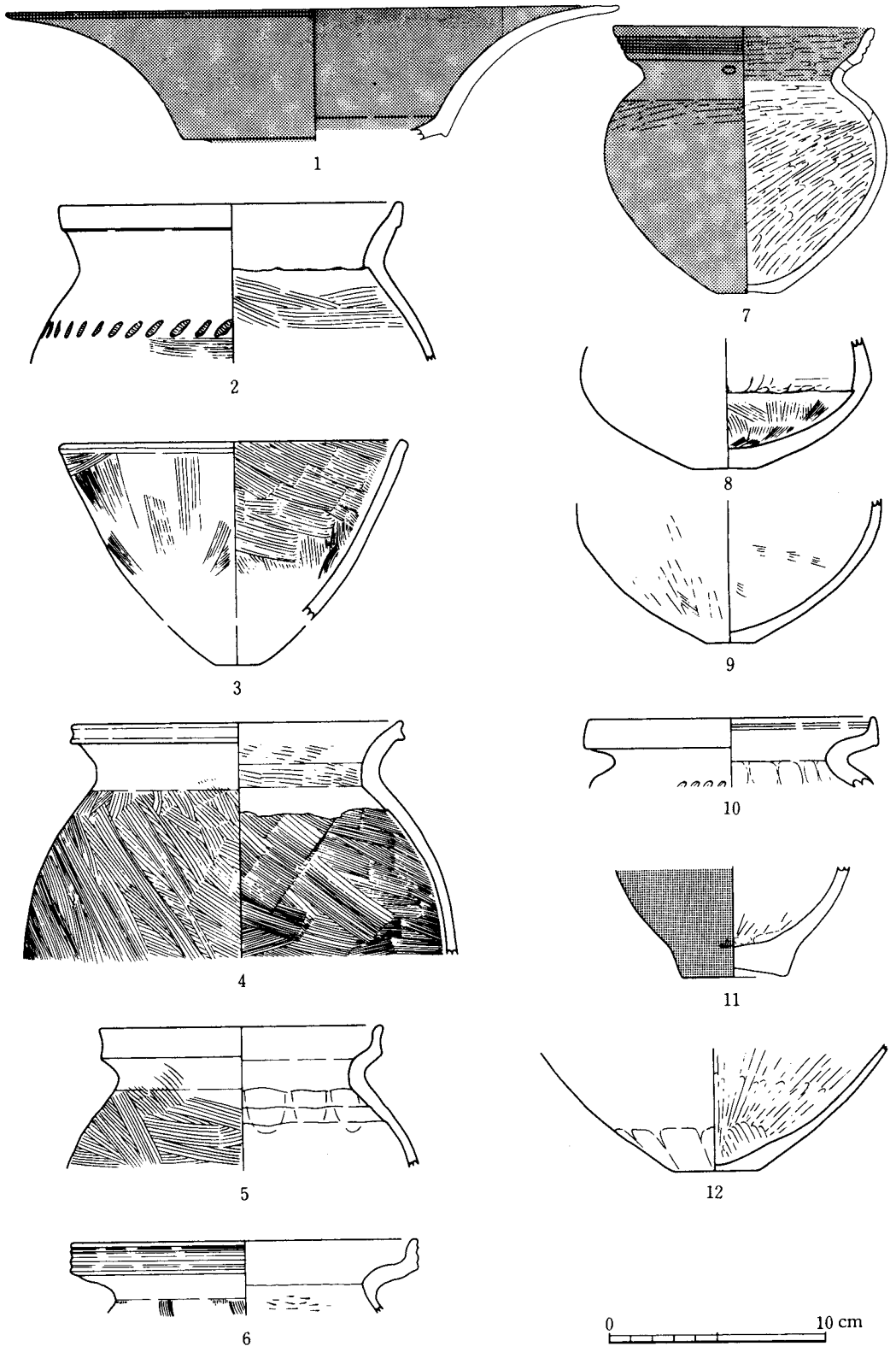

2


3

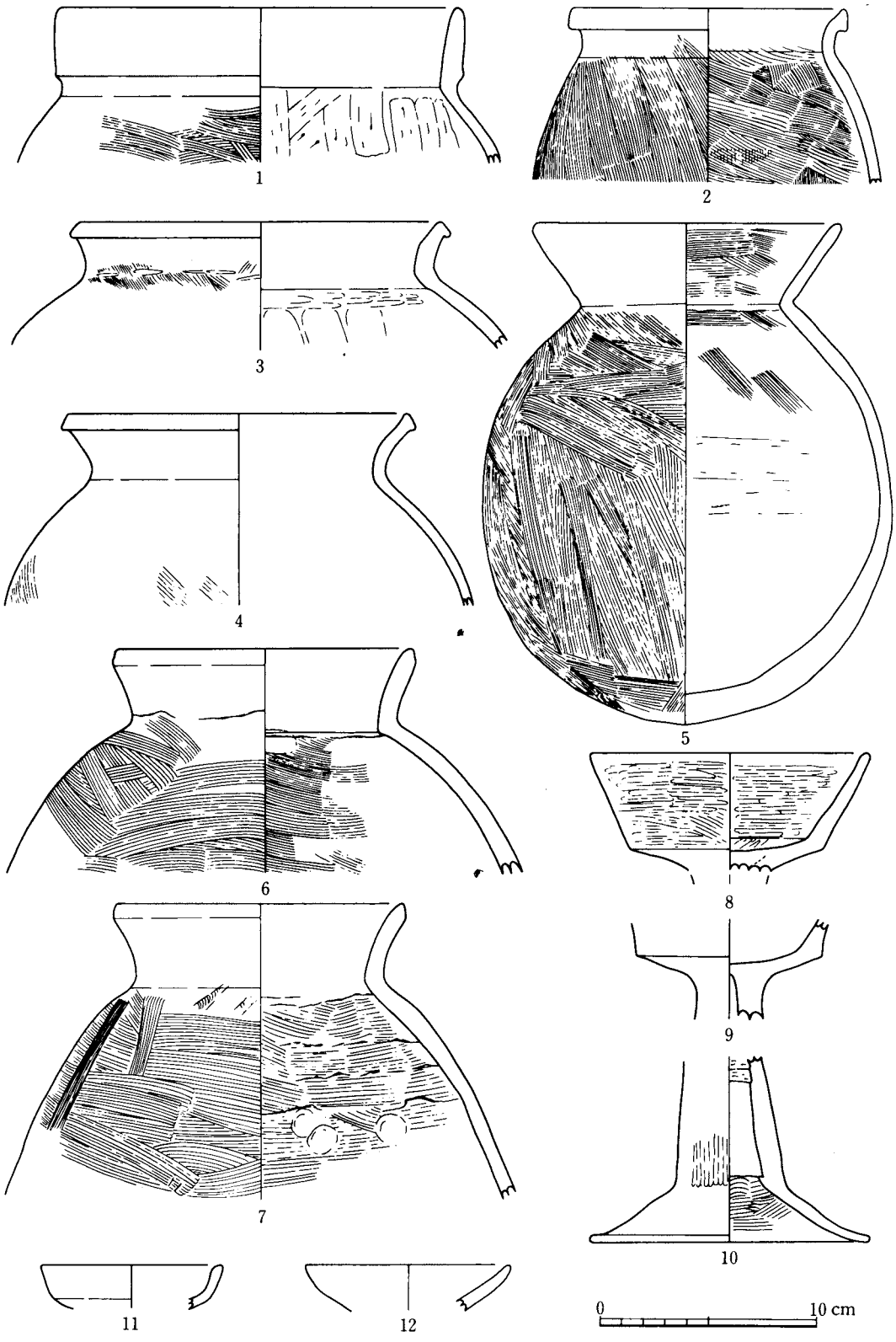

4

5

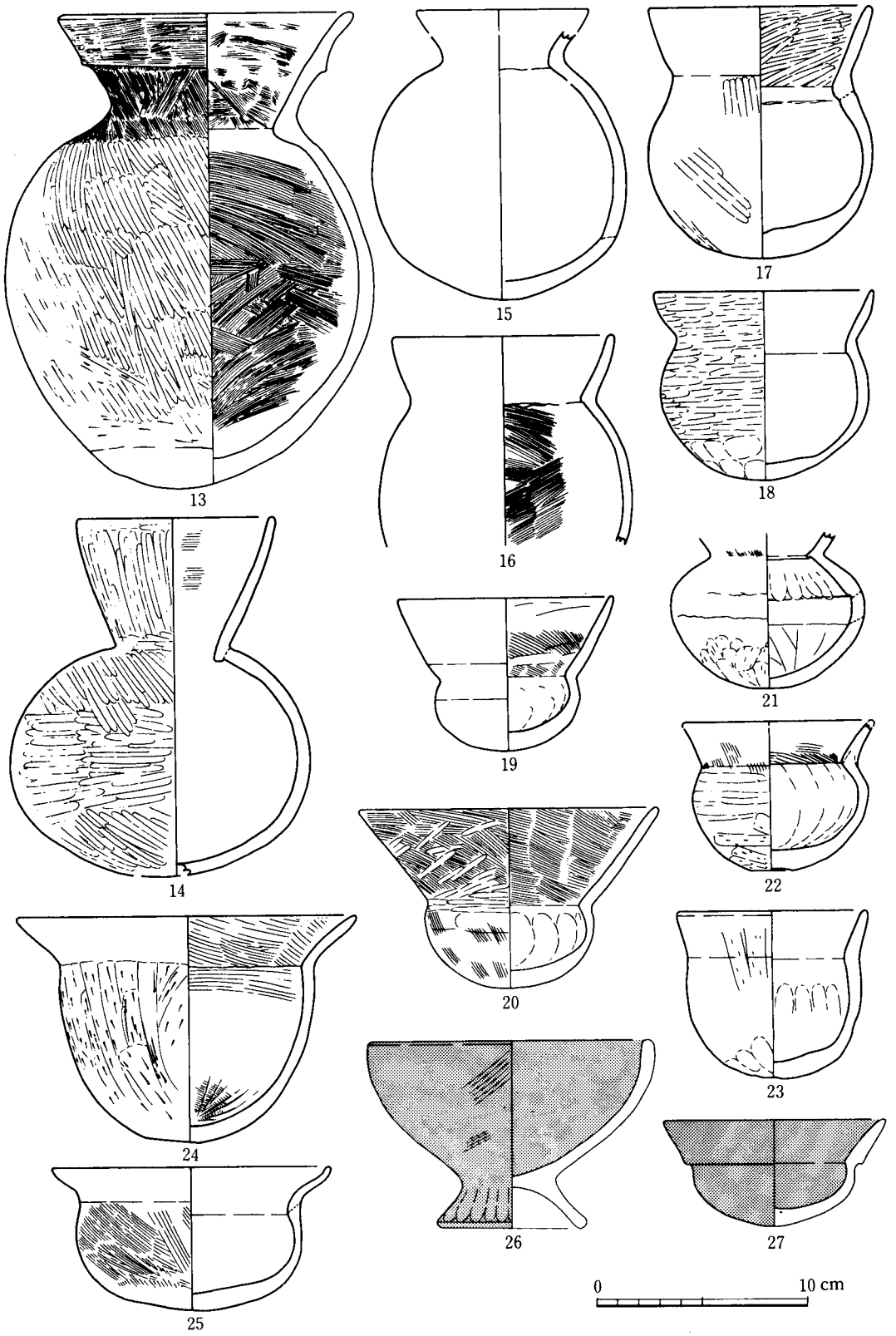
第90図　P4G調査区第3層・第4層（溝埋土）出土土器



第91図　P4G調査区出土土器



第92図　P4G調査区出土土器



第93図　P 4 G調査区出土土器

第3節　T18調査区の遺構と遺物

(1)　層序と遺物包含状況（第94図・図版24～27）

T18調査区は、P4G調査区とP5G調査区の間に、その間の土層堆積状況を調査するために設定したトレンチである。当初、長さ9m、幅2mの規模であったが、土器の一括出土があったため南側に長さ5m、幅2mにわたって拡張した。延平面積は約28m²である。

層序は、耕土（第1層）・床土（第2層）が約20cmから30cmの厚さでみとめられ、その下に上層の遺物包含層である茶褐色砂質土（第3層）が堆積する。この層は調査区東端で厚さ約30cm、西端で約40cmを測り、西側にゆくに従って厚さを増す。その下に、ほとんど遺物を包含しない黄茶褐色砂質土（第4層）が堆積し、下層包含層との間層をなす。第3層と同様に西側に徐々に下降し、厚さは東端で約10cm、西端で約25cmを測る。この間層下に、明茶褐色砂質土（第6層）が約15～20cmの厚さで堆積、その下に、明茶褐色砂質土と灰褐色粘質土の混合土層（第7層）が堆積、第6層とともに下層の包含層をなす。第7層は、調査区中央部まではほぼ水平堆積し、それより西進するに従って下降する。厚さは東側で約15cm、西側で約25cmを測る。また、調査区東側では、第6・7層を切込むかたちで暗灰褐色粘質土が溝状をなして堆積する。厚さは東端で約30cmを測る。この層は調査区平面では、東側を北東に斜行して分布、多量の自然木を包含するが、土器片はほとんどみとめられない。下層包含層下には明灰褐色粘質土（第10層）が厚く堆積する。比較的よくしまったシルト質土層で、遺物をほとんど含まないことからその上面が当時の基盤をなす生活面と考え、それ以上の掘下げをやめた。現田面より第10層上面までの深さは、調査区東側で約90cm、最も深い西端で約115cmを測る。

さて、以上が調査区南壁での基本的な層序であるが、調査区全体でみれば、中央部北壁側で包含層のレベルが最も高く、南側および西側にゆくに従って徐々に下降し、間層（第4層）を介在した下層面においては、調査区東側半分が北東に斜行する溝状落込み（第5層）によって層序が変化している。遺物包含層は第3層（上層）と第6・7層（下層）で、間層（第4層）によって区別され、それぞれの生活面は、第4層上面および第10層上面である。両生活面の比高差は、南壁中央部で約50cm、北壁中央部で約30cm、西壁で約40cmを測る。遺物の出土レベルもそれに応じて、南壁側および西壁側にゆくに従って下降し、この傾向は下層包含層において著しい。しかし、後述するが、上層包含層出土土器と下層包含層出土土器では、若干の形態差は看取されるものの、それはほぼ同一型式の枠内で把握されるものである。こうした事実は、この間の層堆積が極めて短期間であったことを示している。予想される自然現象として、大洪水などによる土砂の一時期における大量堆積が想定される。それはまた、下層における土器の出土状態が多量の完形品を含むにもかかわらず流木が混在するなど雑然としており、さらに、第6・7層に、黒色土ブロックを含む明茶褐色荒砂や黄褐色荒砂が部分的に介在しているなどのことからも窺えうる。無遺物層である第4層は下層生活層が完全に埋没した後、再度の洪水により堆積した層であろう。この層上面を生活面として、人々の営みが再開されるのは、さほど長い期間をおいてではなかったことは確かであろう。

(2) 遺物の出土状態について（第95図・図版24～27）

上層から出土した土器は、そのほとんどが完形品からなり、大きく2ブロックにわかれ列状をなして出土した。列方向は北東を向き、2列に並行する。東列は壺5点、甕2点、把手付鉢1点からなり、直立あるいは横倒れの状態で検出された。また、西列は、壺4点、甕10点以上、高杯10点、台付鉢3点、鉢8点（甑を含む）からなる。出土間隔が密接し、横倒れた土器が多いため、かなり錯綜した出土状況をしめすが、出土位置関係の復元は可能な状態であった。高杯類は直立した状態で検出されたものが多く、甕と甑があきらかにセットをなしている例もみとめられる。こうした出土状態から、これら一括出土した土器群は、破損などにより破棄されたものとは認めがたく、何らかの目的で意識的に据え置かれたものと考えられる。

これらの土器群がこうした営為による産物と把握し、さらに詳細にその配置状況をみてみることとする。西列南部では、5個の高杯（13A・14・9B・40A・39A——土器取り上げ番号、第95図に標示参照）を中心に、3個の台付鉢（21・31・19）が西側に、2個の鉢（9A・10）と広口壺（11）が東側に配され、さらにそれらの間に、鉢（40B）小型広口壺（40E）小型片口甕（12）が据えられている。高杯・台付鉢・広口壺は、40Aを除いて赤彩され、台付鉢（31）には勾玉状の文様が加飾されるなど、祭器的様相の濃い一群から構成され、北部の一群とやや様相を異にしている。13Aの高杯より南には土器出土がみられず、生活面も下降することから、西列土器群の配列はこの地点より開始するものと推定される。また、隣接する高杯（13A）と鉢（9A・10）とでは底部検出面で約15cmの比高差がある。鉢は台状の施設の上に据えられて可能性が考えられるが、確証はない。

西列南部出土の土器群は、5個の高杯（28A・29B・29C・29D・24A）を中心とした、甕10、長頸壺2、広口壺2、有段浅鉢2、有孔鉢3から構成され、甕・鉢は高杯群の南・西・北側に配置される。北西側は甕が主体をなし、さらに北西に配列が延びるものと推定される。特に、甕(23A）と鉢（28C）および甕（26A）と鉢（26C）は、その出土状態からセットで使用されていた可能性が高く、こうした有孔鉢が甑としての用途をもっていたことを窺えさせる。ただ、周囲の生活面からは焼土・炭化物が検出されていないことは、この場で直接火を使用する煮炊行為がなかったと示しているとも考えられ、その実際の用途の解明ともに、この一群の土器配置目的や性格を考察する上で見逃せない事実である。

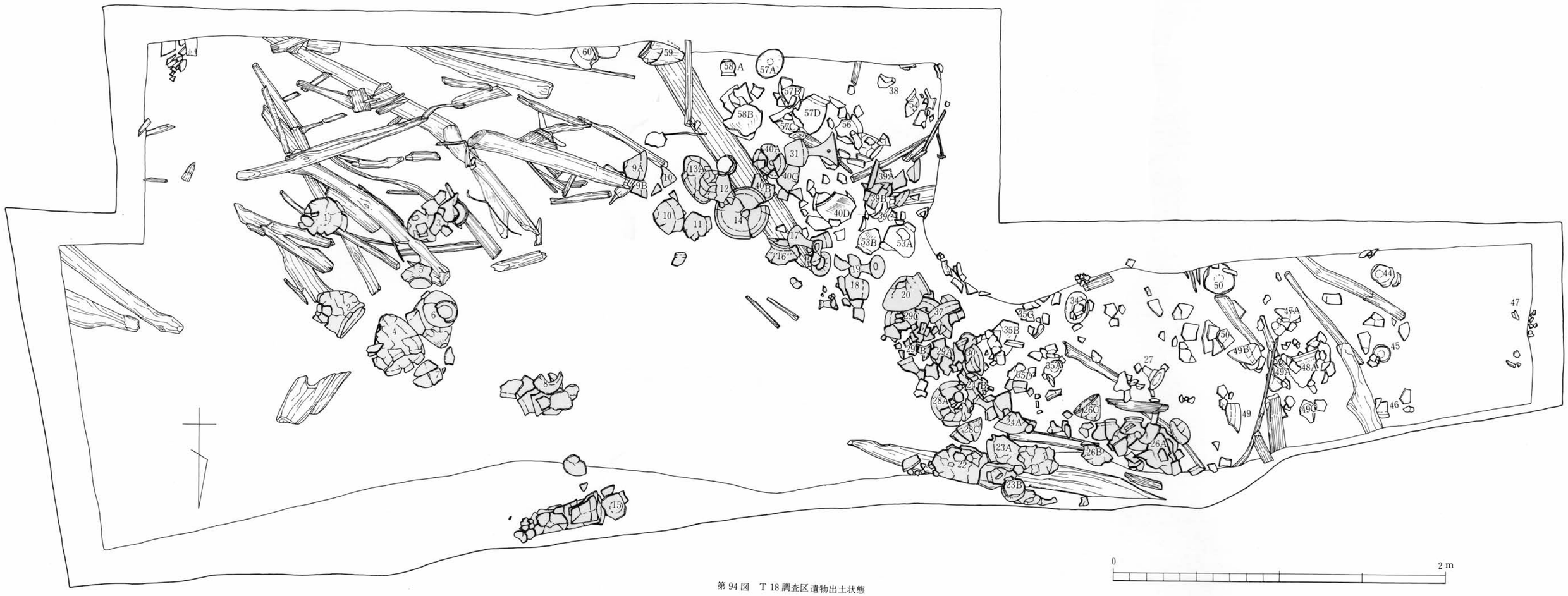
こうした出土状況から、T18調査区出土土器は次の4つの土器群に分けられる。

A群、東例の土器群で、やや間隔をおいて配置される。赤彩土器は含まない。

B群、高杯・台付鉢・小型広口壺・有段浅鉢など祭器的様相の濃い赤彩土器から構成される西列南側の土器群。基本的には甕は含まれない。

C群、やや間隔をおいて配置された5個の高杯を中心とし、甕4、長頸壺1、有段浅鉢2から構成される西列北側中央よりの土器群。5個の高杯を基本とする点がB群と共通するが、甕を含むなど器種構成が異なる。

D群、C群の北側に配置された、甕およびそれとセットをなす有孔鉢からなる土器群で、一個の底部穿孔の長頸壺を伴う。



第 94 図　T 18 調査区遺物出土状態

第 95 図　T 18 調査区南壁断面土層図および土器出土層位模式図

こうした出土状態を器種構成で整理すると、供膳土器からなるB群、それに準じた構成をとるC群、煮沸土器を主体とするD群、貯蔵土器と煮沸土器からなるA群に区別される。これは、土器の配置が使用目的に応じて、強く規制されていた結果と推定される。さらに、B群の5個の高杯がすべて器形態が細部にわたって異ると事実に代表されるように土器群を構成する個別器種の形態差が多様であることも大きな特色である。これは、土器配置行為が、複数単位の集団によって営まれたことを示唆しているとも考えられる。

下層からも、完形品を含む多数の土器がある程度のまとまりをもって出土しているが、その出土状態は洪水による攪乱のため雑然とし、原位置を窺えうるものは少ない。また、破片化したものが多く、それが意識的に据え置れたものか、破損などにより遺棄されたものか現状では断定できない。しかし、その出土範囲はほぼ上層西列と重なり、上層と同様に北西方向に列状に配置されていた可能性が強い。器種の構成比は、圧倒的に甕・鉢類が多く、高杯・台付鉢・有段浅鉢などの赤彩土器が少ない。また、個別器種の形態差は上層ほど顕著ではなく、出土状況では、有段口縁甕、くの字口縁甕など、同一形態のものが群をなして出土する傾向性が窺え、上層と逆の様相を示す。

(3) 出土遺物

T18区調査区からは総数275点にのぼる後期弥生土器が出土した。その出土状態は前述したとおりである。上層出土土器と下層出土土器との間には若干の時間差が存在するものと思われるが、ここでは、形態的特徴からほぼ同一型式の枠内での新旧の相様差として把握されるものであるという前提にたって総括し、器種別に分類整理し説明を加えることとする。

器種は、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高杯形土器・器台形土器からなり、その器種別構成比は別表　のとおりである。なお、61点を数える底部（他）があるが、その多くは甕形土器に関わるものである。

器種		構成比	個体数
甕	A	12.5%	34
	B	18.4%	51
	C	9.8%	27
	D	0.4%	1
	E	0.4%	1
甕小計		41.5%	114
壺		11.5%	32
鉢		13%	36
高杯		11%	30
器台		0.7%	2
底部（他）		22.3%	61

第1表　T18調査区出土土器器種別構成比

1　甕形土器（第100図～第110図・図版45～50）

甕形土器は、器体の容量差にかなりの格差があり、機能面からの分類も必要と考えられるが、ここでは、あえてそれにこだわらず、また体部の形状に大きな格差がないことから、口縁の形態差を分類の拠りどころとした。つまり、擬凹線有段口縁系のものを甕A、「くの字」口縁系のものを甕B、無文（ナデ）有段口縁系のもの甕C、前3者のどれにも属さなくて口縁部が屈曲するものを甕D、受口状口縁系のものを甕Eと、大きく5分類した。さらに個体数の多い甕Aについて3小類7形式に、甕Bについては5小類9形式に、甕Cについては3小類5形式に細分した。

甕 A_1（第100図7）

口縁端部を強くヨコナデして拡張し、狭い口縁帯を作りだし、2条のクシ歯状施文具で2・3

条の擬凹線を施す。口縁部の外傾度は比較的強い。口縁片1点のみで、体部形は不明。

甕 A_2（第100図2・3・8・9・第101図13・15）

口縁帯が甕 A_1 に比較して広く面取られ、端部が上下にわずかに押出され肥厚する。口縁帯は内傾する。口縁部の外傾度および頸の屈曲はゆるやかで、内外面とも上肩部までヨコナデされる。体部は、卵形をなす長胴で、内外面とも4段から5段にわたってハケ調整され、内面はナデ仕上げされている。法量は口径22cm から15.2cm とバラつきがあり規格性に欠く。

甕 A_3（第110図10～12・第101図14・16・17）

甕 A_2 に比べて、さらに口縁上端部がヨコナデにより引き延ばされ口縁帯が幅広となる。口縁外傾度および頸部の屈曲度が強い第101図14・17と、比較的ゆるやかな第100図11・第101図16などのタイプがあり、前者は体部最大径を胴上半部に置き、後者は胴中位に置く。法量は口径17cm 前後、器高25cm 前後を標準とするが、後者タイプのものには、口径22.4cm や口径15.4cm ものがみられ、ややバラツキがある。体部は内外ともハケ調整痕を残し、外面肩部には連続する斜向列点文が施されている。第101図14の底部はヘラ削りで尖底に近い形に整えられ、やや安定感に乏しいが、自立可能である。

甕 A_4（第101図18・第102図21・24・25・27）

口縁上端部がさらに延び有段状をなす幅広の口縁帯を作るが、内面の段は不明瞭である。口縁帯はやや内傾し、3・4条の擬凹線が施される。体部は最下径を胴中位に置き長胴平底のプロポーションをとる。内面がヘラ削り調整される第101図18を除き、他は内外面ともハケ調整され、肩部に斜行列点文を施す。法量は口径15cm 前後を標準サイズとするが、完器で出土した第102図21は口径17.2cm、器高32.1cm を測りやや大ぶりである。

甕 A_5（第101図19・20）

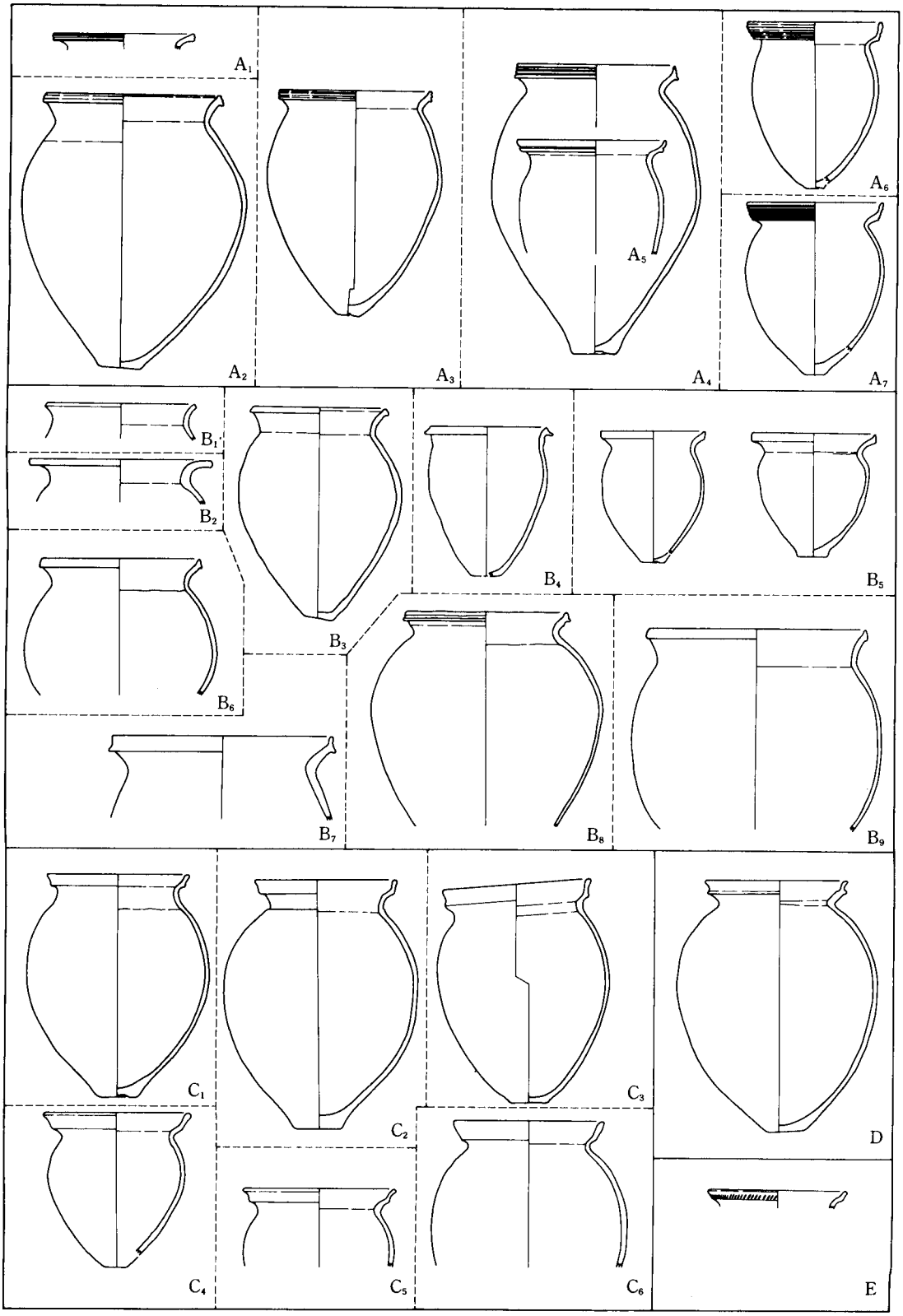
甕 A_5 と同様、有段状をなす幅広の口縁帯をもつが、口縁部内面がゆるやかに内湾し段をなさない。体部はなで肩で胴の張り出しはゆるやかである。体部は内外面ともハケ調整される。法量は口径16cm が標準。

甕 A_6（第102図22・26・28・第103図30・33～35・37）

口縁内面に明瞭な段をもつ有段擬凹線文甕である。やや外傾する口縁帯には4・5条の擬凹線が施文される。口縁帯は直線的もしくはやや外反して延びるものが主流をなすが、第103図35のようにやや内湾するものもみられる。体部は胴長の砲弾状をなし最大径を胴上半部におく。底部はヘラ削り調整され、やや不安定な平底をなす。体部調整は、内外面ともハケ調整されるが、一部ナデによる2次調整が施される例（第102図28）もある。法量的には、口径18cm 前後、器高25cm 前後の中型に属する甕と、口径15cm 前後、器高19cm 前後の小型甕の2種がある。

甕 A_7（第102図23・29・第103図31・32・36・38）

甕 A_6 とほぼ同形式であるが、口縁内面の立ち上り幅がやや短く、段部の屈曲度が高いものを甕 A_7 として区別した。第103図38の小型甕を例外として、法量的には甕 A_7 と同様・中・小型甕2種がある。第103図31・36は内面がヘラ削り調整される。しかし、この期の北加賀の内面ヘラ削り甕とやや異なり、ハケ状具による1次調整後、ヘラ削りされ、一部にその痕跡を残す。



第 96 図　T 18 調査区出土甕形土器形式分類一覧図

甕 B_1（第104図40・41・43・45～50）

体部および口縁部の外傾度など細い個体差があるが、ここでは口縁端がヨコナデにより平縁に面取られたいわゆる「くの字」口縁甕を一括して甕 B_1 とした。頸部での屈曲が比較的明瞭なもの（第104図45・47）と、なだらかに体部に連続するもの（第104図40・43）などがあり、さらに端部が直線的なもの（第104図47・48）、強いヨコナデにより内面に凹むもの（第104図49・50）など個体差が多様である。ほとんどが体部以下を欠くため不明瞭な点が多いが、内外面ともハケ調整されているものと考えられる。法量的には、口径約20cm 前後の中型甕と口径15cm 前後の中型甕の2種がある。第　図46の小型甕は注ぎ口を有する。

甕 B_2（第104図42）

平縁の「くの字」口縁甕であるが、口縁部に外方に大きく引き延ばされ、弧状に外反する特異な形状を呈する。1点のみの出土であるが甕 B_1 と区別した。

甕 B_3（第104図44・51・52・第105図53・58・第106図70）

口縁端部がヨコナデにより肥厚し、下端部が垂れ口唇部断面が三角形を呈するもの。頸部での屈曲が明瞭で、体部最大径を胴上半部におくもの（第104図52）と、口縁部がさほど強く外反せずに体部に連なり、体部最大径を胴中位におくもの（第104図44）とがみられる。体部は内外面ともハケ調整痕を残す。法量的には、口径15cm 前後、器高24cm 前後の中型甕が主体をなしているが、口径24cm 前後の大型甕もみとめられる。

甕 B_4（第107図82・86～89）

口縁端部に粘土紐を付加し、口縁端部幅を強調したもので、口縁帯の狭い垂下口縁をなす。頸部での屈曲が比較的明瞭な口径18cm 前後の中型甕と、口縁部の外傾度の弱い口径13cm 前後の小型甕があり、いずれも、口頸部はヨコナデされ、体部は内外面ともハケ調整される。

甕 B_5（第105図65・第106図68・69・71～74）

口縁端をつまみあげぎみにヨコナデして拡張するいわゆる「はねあげ口縁」の甕である。端部内側に弱い段を作るものとそうでないものがある。口径12cm 前後の小型甕、口径15cm 前後の中型甕、口径28cm 前後の大型甕の3種がある。体部は、あまり胴が張らず安定した平底をもち、内外面ともハケ調整される。口縁部の外傾度は、小型甕が比較的強く、中・大型甕は弱い。

甕 B_6（第105図54～57・62・63・第106図66・67・第107図80・81・85）

口縁端部に粘土紐を付加し、口縁端幅を強調したもので、強いヨコナデにより端部が上下に拡張され、狭い口縁帯を作る。出土甕類の中では最も個体数が多い割には、完器で出土したものはなく全体形ははっきりしないが、口縁部の外傾度が強く、体部最大径を上半部におき肩の張りが比較的強い口径15～17cm の中型甕が主体をなすものと推定される。第107図85は注ぎ口をもつ小型甕である。体部内外面はハケ調整されるものが多い。第106図62は、肩部に斜面列点文が施され、内面は指ナデにより2次調整されている。

甕 B_7（第107図83・84）

甕 B_6 と同様の口縁形態を取るが、口縁帯の幅が比較的広く、内面に弱い段を作り有段口縁に近いものを甕 B_7 とした。口縁断片2点のみであるが、いずれも口径24cm 前後の大型甕である。

甕 B_8（第100図 1 ・4 ・ 6 ・第105図64・第106図77）

口縁端部を強くヨコナデすることで拡張させ狭い口縁帯を作る。端部には、強いヨコナデにより生じた凹みが凹線文風に残るが、これは調整上生じたものと考え、凹線文と区別する。端部が上方にややもち上げられたため、有段状をなす第106図77も含めたが、体部の形態が他とやや異なり、この群からは区別した方が適切かもしれない。

甕 B_9（第105図60・61・第106図75）

甕 B_6 と同様、口縁端部に粘土紐を付加して、口縁帯を作る。上端部に指頭によるつまみあげぎみのヨコナデが施されているため、内側に弱い段をもち、口縁帯外面は丸みをもつ。口縁部の外傾度は少なく、ゆるやかな曲線を描いて体部に連なる口径25cm 前後の大型甕と、「くの字」に屈曲する口径15cm 前後の中型甕がみとめられる。体部調整は内外面ともハケ。

甕 C_1（第106図76・78・第108図91・94・95・第110図115）

無文（ナデ）有段口縁甕で、口縁帯の発達が少なく、内面に明瞭な段を作らないものを甕 C_1 とした。頸部での屈曲はなだらかで、体部最下径を胴中位におき、底部は安定した平底である。体部は内外面ともハケ調整され、内面が指ナデによる 2 次調整が施されているもの（第108図91）もある。口頸部の横ナデは体部肩までが多く、肩部には斜行列点文が施される。法量的には、口径15～18cm、器高24cm 前後の中型甕が主体である。

甕 C_2（第108図92・93・第109図100・103）

口縁帯がやや外傾し、端部がヨコナデにより肥厚して面をもつ。内面の段は明瞭で、頸部で屈曲し、胴上半部に最大径をおく体部に連なる。底部は安定した平底である。体部は内外面ともハケ調整され、外面肩部に斜行列点文が施される。法量的には、口径15cm 前後、器高27cm 前後の中型甕が主体をなす。口縁端部の形態から第109図103の小型甕を甕 C_2 に包括したが、口径が胴径にこえるなど器形的には甕 C_4 に区別した小型甕に近い。

甕 C_3（第108図96・98・99・第109図101・第110図107・110・114）

口縁帯が発達し、わずかに外傾する。内外面は強いヨコナデにより内湾し、端部に比較して器壁が薄い。内面の段および頸部の屈曲が明瞭なもの（第109図101）と不明瞭なもの（第110図114）があるなど、細い個体差がみとめられる。法量的には、口径16～17cm 前後、器高24cm 前後の中型甕が主体をなす。体部は内外面ともハケ調整され、底部は安定した平底。

甕 C_4（第109図104・105・第110図112・113）

口縁部が大きく外傾する小型甕で、口径が胴径をうわまわるものが多い。口縁部内面の段は不明瞭。体部は内外面ともハケ調整され、外面肩部に斜行列点文を施す。

甕 C_5（第108図97・第109図102・106・第110図108）

口縁部が甕 C_4 に比べてさらに外傾する。内面の段は比較的明瞭で、口頸部が長く屈曲度が大きい。法量的には、口径24cm 前後の大型甕と口径17cm 前後の中型甕がみられ、いずれも口径が胴径より大きい。

甕 C_6（第110図109・111）

内面が内湾ぎみに外傾する有段口縁甕で、体部が球状に張り、口径と胴径の差が大きい。体部

調整は2次にわたって施され、第110図109は内面ヘラ削り、第110図111は指ナデ調整される。

甕D（第108図90）

口縁端部に粘土紐を付加し狭い口縁帯を作る。手法的には甕B_7に近似するが、甕C_1の有段口縁に連なる要素もあり1点のみ出土であるが、B・C類のいずれにも属さないものとして区別した。口縁端部は強いヨコナデにより内外ともに凹む。体部は最大径を胴上半に置き、底部は安定した平底。口縁部はヨコナデされ、体部外面はハケ調整後ヘラ研磨され、内面はヘラ削りされる。甕のヘラ研磨はこれ1点のみであり、極めて類例の少ない特異な甕である。

甕E（第106図79）

いわゆる「受口状口縁」の甕で1点のみの出土である。口縁帯下端にヘラ状具による斜行刺突文をめぐらす。

2　壺形土器（第111図～第114図・図版51～53）

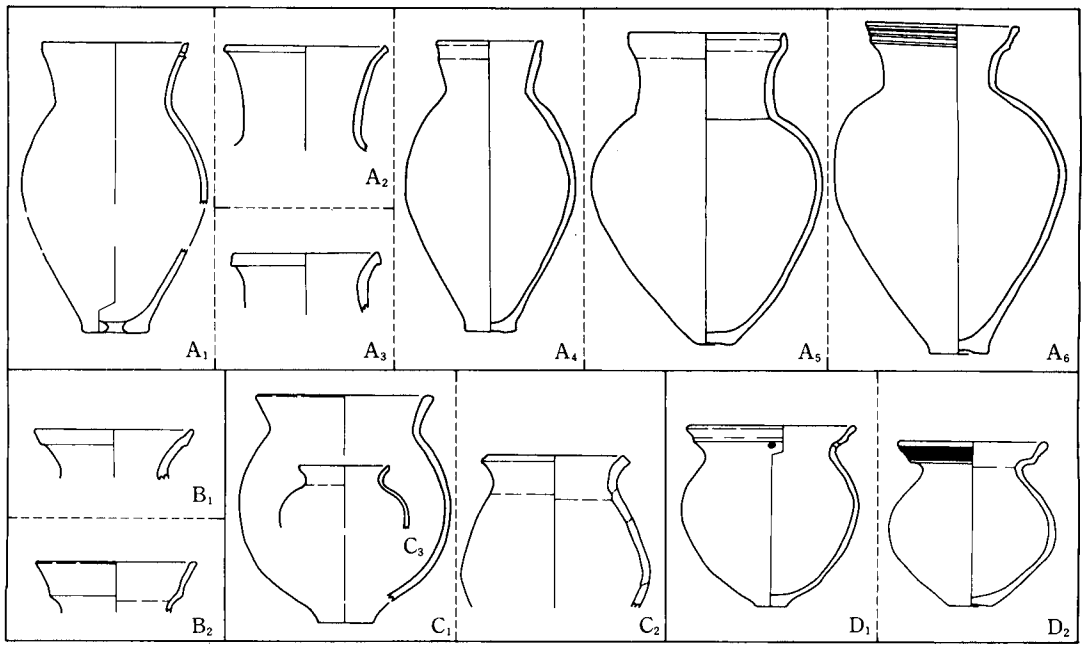
壺形土器は、機能および形態差から、壺A－長頸壺、壺B－有段口縁壺、壺C－短頸壺、壺C－有段広口壺と大きく5分類し、さらに、壺Aを6形式に、壺Bを2形式に、壺Cを3形式に、壺Dを2形式に細分した。

壺A_1（第111図116）

長胴の体部にやや外傾する口頸部を取付けたもので、体部と境界には明瞭なくびれを欠く。造りは粗雑で、内外面に荒いハケ調整痕をそのまま残す。口縁端部はヨコナデ仕上げされず、やや下った位置に1対（2個）円孔をもつ。やや突出し厚く作られた底部は焼成後穿孔されている。

壺A_2（第111図118）

体部を欠く。やや外傾する口頸部は、端部がヨコナデされ平縁に面取られる。頸部のくびれは



第97図　T 18 調査区出土壺形土器形式分類一覧図

比較的明瞭である。内外面ともハケ調整後、ヘラ研磨される。

壺 A_3（第112図124）

外傾する口頸部の端部が強いヨコナデにより肥厚し、やや垂れる。外面はハケ調整後ヘラ研磨され、内面はナデ調整される。

壺 A_4（第111図121）

長胴の体部にやや外傾する口頸部が取付く。頸部と体部とのくびれは明瞭である。口頸部が器高の約1/5以下で、長頸壺とするにはあまりにもその差が大きい。口頸部は端部が強くヨコナデされ内側に凹み、下端に弱い稜を作るため、口縁部は有段状をなす。口縁部外面はナデ仕上げされるが、体部外面および内面下部はハケ調整痕をそのまま残す。

壺 A_5（第111図117・119・120）

口縁部が有段の長頸壺である。口縁部がやや内傾し内面に明瞭な段を作らないもの（第111図117）と、内面に段をもって外傾するもの（第111図119・120）がある。頸部と体部とのくびれは明瞭である。器面はハケ調整後ヘラ研磨される。

壺 A_6（第112図123・125・126・128・129）

有段口縁に擬凹線文が施されるもの。長胴の体部に外傾する口頸部が取付き、くびれは比較的明瞭である。器高に対して口頸部が短かく、いわゆる典型的な「長頸壺」とは体型的にはかなり隔りがあり、同型の壺 A_5 とともに「有段口縁長胴壺」として区別した方が適切かもしれない。器面は、ハケ調整後、外面がヘラ研磨、内面が一部指ナデ仕上げされている。

壺 B_1（第112図122）

口径15cm 前後の中型の有段口縁壺である。口頸部は外傾し、端部で屈曲し狭い口縁帯を作る。口頸部外面はヘラ研磨される。

壺 B_2（第114図143・144）

幅広の口縁帯をもつ中型の有段口縁壺である。口頸部はヨコナデ、体部外面はヘラ研磨され、内面はヘラ削りされている。

壺 C_1（第114図142）

球形の体部をもつ「くの字」口縁の短頸壺である。頸部の屈曲は比較的明瞭である。ハケ調整後、外面はヘラ研磨、内面はナデ仕上げされる。

壺 C_2（第104図39）

口頸部と体部の境界が不明瞭な、粗雑な造りの短頸壺である。ゆるやかに外反する口縁端部はヨコナデにより平縁に面取られている。体部は荒いハケ調整痕をそのまま残す。

壺 C_3（第114図145）

口径8.2cm を測る小型の短頸壺である。口頸部は曲線をなして外傾し、端部は面取られている。

壺 D_1（第113図130～133・135～139）

有段口縁の広口壺である。法量的には、口径15cm 前後、器高15cm 前後を測るものが標準とするが、口径10cm 以下の小型品もみとめられる。口頸部内外面および体部外面が赤彩される例が多く、頸部に対をなす紐通し孔を有するものもあり、蓋形土器とセットでの使用が考えられる。

壺 D_2（第113図134）

口縁部に擬凹線文が施されているものを壺 D_2 として区別した。

3　高杯形土器（第122図～第126図・図版54～57）

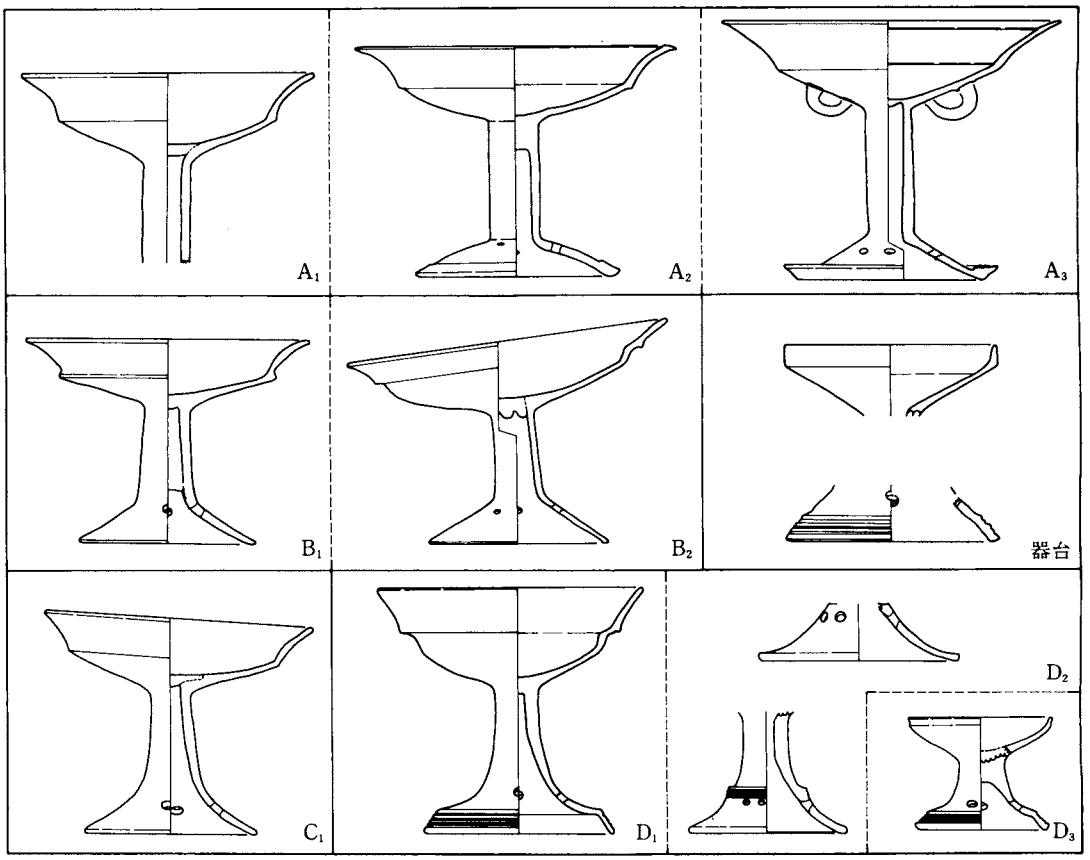
高杯形土器は、脚部の形態差から大きく 4 類に大別し、さらに杯部および脚裾部の形態差から 9 形式に細分した。

高杯 A_1（第124図252・256）

台部を欠くが、円筒（柱）状をなす脚部をもつ。大きく外反する杯口縁部は平縁に面取られる。口縁部高と体部高はほぼ等しく、また長さの比は 2 対 3 程度である。脚部との接合は円板充塡法をとる。

高杯 A_2（第124図253）

円筒状をなす脚柱部は鋭く屈曲してやや内湾ぎみに開脚する台部に連なる。台端部は粘土紐が付加され帯状に縁どられる。台部上位に 4 個の円形の透孔をもつ。杯口縁部は、段部に鋭い稜を作って大きく外反し、端部が内側に肥厚し面をもつ。口縁部高と体部高はほぼ等しく、長さの比



第 98 図　T 18 調査区出土高杯・器台形土器形式分類一覧図

は1対2程度である。仕上げのヘラ研磨は入念で、杯部内外面および脚部外面は赤彩される。

高杯 A_3（第123図250）

円筒状をなす脚柱部は中位でややふくらみをもつ。台端部は上方に折り返され、ほぼ水平で幅広の面をもつ。帯状をなす端面には擬凹線文が施文され、赤彩される。杯口縁部は直線的に延び外傾度は大きい。端部は内側に幅広く肥厚し、赤彩される。杯部外面に縦位置の半環状をなす把手を付す。台部中位に2対の円形透孔を穿つ。口縁部高は体部高より大きく、長さの比は2対3程度である。

高杯 B_1（第125図260）

円筒状をなす脚柱部は徐々に広がりを増し、脚高の1/3ほどの高さのところで急に屈曲、直線的に開脚する。屈曲部に3個の円形透孔をもつ。杯部は直線的に立ち上がる体部と段部で鋭く屈曲して外反する口縁部を特徴とする。口縁端部は丸縁。口縁部高は体部高より大きく、長さの比は1対2程度である。

高杯 B_2（第126図268）

杯部が有段口縁浅鉢形をなすものである。杯部は口径30m、器高6.5cmを測り極めて扁平で、口縁部高は体部高の約半分である。長さの比は内法で1対3と格差が大きい。

高杯 C_1（第125図261～265）

脚部が円筒状をなさず、円錐状に開脚するタイプの高杯で、出土数が最も多い。杯部もほぼ同形態をとるが、口縁部の発達度に若干の相違がある。口縁部高と体部高の比較では、第125図263が2対1と最も格差があり、他は、ほぼ等しいか、やや口縁部高が上まわるものが多い。脚部の円形透孔は4孔を通常とするが、第125図262にはみとめられない。杯部は赤彩が施され、第125図261・262の内面は、文様状に塗り分けられている。

高杯 D_1（第126図269）

杯部が有段口縁浅鉢形をなし、脚部が有段となる。杯部は高杯 B_2 に比べて深く、口縁部高と体部高はほぼ等しい。脚部は円錐状に開脚し、端部で狭い段を作る。段部には4条の擬凹線文が施される。

高杯 D_2（第124図258・259）

脚部片2点のみで、杯部の形態は不明。いわゆる棒状有段脚とされるものであるが、脚柱部は円筒状をなさず除々に開脚するタイプである。

高杯 D_3（第122図245）

脚部に対して杯部が小さい小型の高杯である。脚部は裾部で内屈し段を作る。段部には4条の擬凹線文を施す。杯部は内湾して立ち上り、強いヨコナデにより口縁端部が内側にやや凹む。

4　器台形土器（第122図）

器台形土器は器受部と脚台部の断片2点が出土したにすぎない。いずれも筒胴で、器受部と脚台部が相似形をなして開口するタイプの中型器台片と推定される。第122図243の脚台部は裾部でやや内屈し、外面に弱い稜を作るため有段状をなす。段部には4条の擬凹線文が施され、赤彩される。また脚部は文様風に塗り分けられているが、断片のため文様は不明。

5　鉢形土器（第115図～第117図第121図・第122図・図版58～60）

鉢形土器は、機能および器形から、鉢A―台付鉢(壺)、鉢B―有段口縁浅鉢、鉢C―逆円錐形の深鉢、鉢D―有孔鉢、鉢E―「くの字」口縁系の深鉢、の5類に大別、さらに、鉢Aを2形式に、鉢Bを4形式に、鉢Cを3形式に、鉢Dを5形式に、鉢Eを3形式に細分した。

鉢 A_1（第121図233～336）

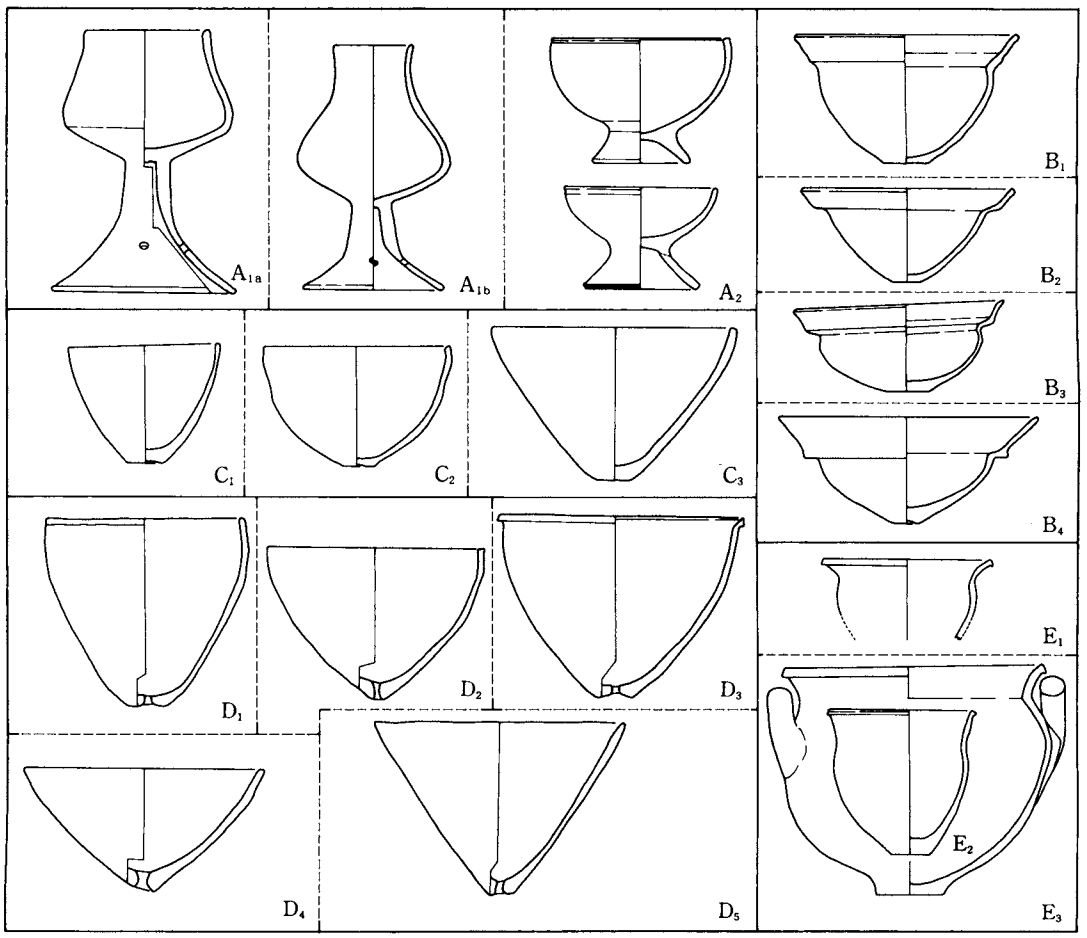
円錐状をなして開脚する脚高の高い脚台部をもつ。体部は壺形土器に近いが、一応ここでは鉢形土器として取り扱かった。口頸部をもつ第121図 234と無頸の第121 図233がある。後者は、体部上半部外面が全面赤彩され、体部下半部および脚台部外面には勾玉状の文様が描かれている。

鉢 A_2（第122図239～241）

半球状をなす体部に低い脚台を取付けた台付鉢である。口縁端部はヨコナデされ、内側にわずかに凹む。入念にヘラ研磨仕上げされ、第122図239は体部内外面および脚台部外面が赤彩される。

鉢 B_1（第117図169）

器高が比較的高く安定した平底をなす。口縁部内側の段は不明瞭で、断面は「くの字」に近い。赤彩は口縁部内外面および体部外面に施される。



第 99 図　T 18 調査区出土鉢形土器形式分類一覧図

鉢 B_2（第117図173）

体部が逆円錐形をなし、底部が小さいため安定感に乏しい。口縁帯は狭いが、外傾度は強く、口縁内側の段は比較的明瞭である。内外面とも赤彩される。

鉢 B_3（第117図172）

口縁部の段は明瞭で頸部の屈曲は鋭い。器高は低いが、体部は丸みをもちしっかりとした平底をなすため安定感がある。内外面とも赤彩される。

鉢 B_4（第117図170・171）

口縁部が大きく外反して延び、口縁帯の幅が広い。口縁帯下端は外側に突出し鋭い稜をなす、内側の段は明瞭で、体部はやや内湾する。体部に比較して口縁部が大きいため、安定感に乏しい。内外面とも赤彩される。

鉢 C_1（第116図167）

安定した平底で、体部はやや内湾ぎみにたちあがる。器高が口径より大きい。小型。

鉢 C_2（第116図168）

体部は半球状をなし平底。口径が器高より大きい。造りが粗雑で、指ナデ・ヘラ研磨などの2次調整なし。

鉢 C_3（第116図166）

逆円錐状をなす体部は口縁部でやや内湾する。口縁端部はヨコナデされ平縁。口径が器高より大きく、安定感に乏しいが、底部は平底で自立可。体部内外にハケ調整痕を残す。

鉢 D_1（第115図151）

体部が内湾ぎみにたちあがり口縁部でやや内傾する。器高が高い。底部は平底。口縁部はヨコナデされ、体部は内外面ともハケ調整後ヘラ研磨される。

鉢 D_2（第115図154）

体部が内湾ぎみにたちあがり口縁部でほぼ直立する。底部は尖底をなし自立不可。口縁部はヨコナデされ、端部は水平に面取られ平縁。体部は内外面とも入念なヘラ研磨仕上。

鉢 D_3（第115図148）

口縁部が外側に屈曲し狭い口縁帯をもつ。口縁端部は強いヨコナデによりはねあがりぎみに突出する。底部は内側にもちあがる凹底。体部はハケ調整後ヘラ研磨されるが、上位には一部ハケ調整痕を残す。

鉢 D_4（第115図149・150・152・153・155・156・第116図157～159）

いわゆる漏斗形の浅鉢である。口径が器高よりかなり大きく、尖底をなすため、自立不可。体部が連続的に開口するものと、やや内湾ぎみに開口するものがある。法量的には、口径18～20cm前後、器高10cm前後がほとんどで、規格性が強い。体部は内外ともハケ調整後ヘラ研磨されるものが多い。

鉢 D_5（第116図160）

直線的に開口し、器高が高いため、立面形は三角形に近い。造りは粗雑で、口縁端部はヨコナデされるが、外面には荒いハケ調整痕に残し、内面は乱雑にヘラ削りされる。

鉢 E_1（第122図237）

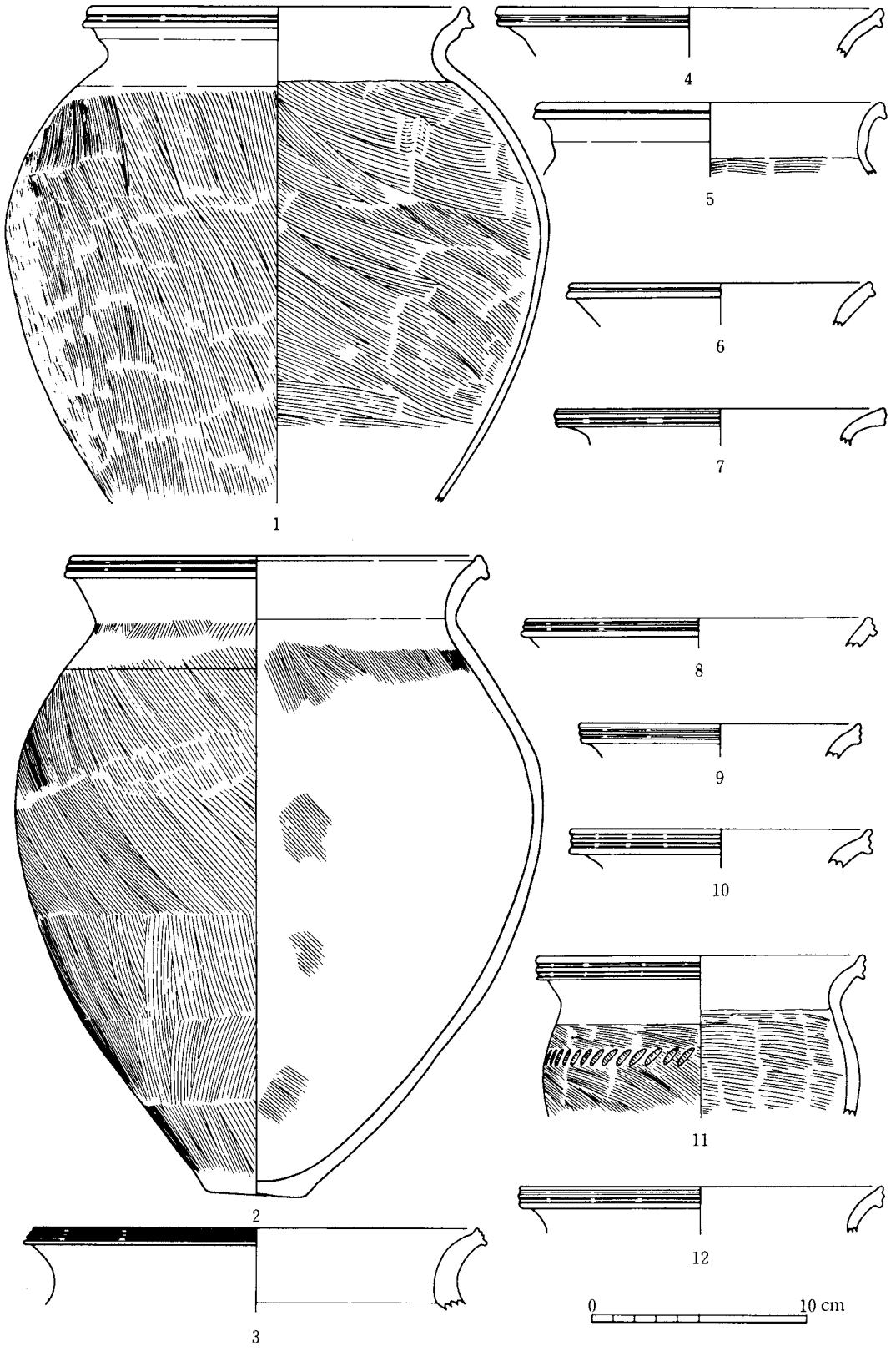
「くの字」に屈曲する口縁部をもつ小型鉢である。

鉢 E_2（第117図174）

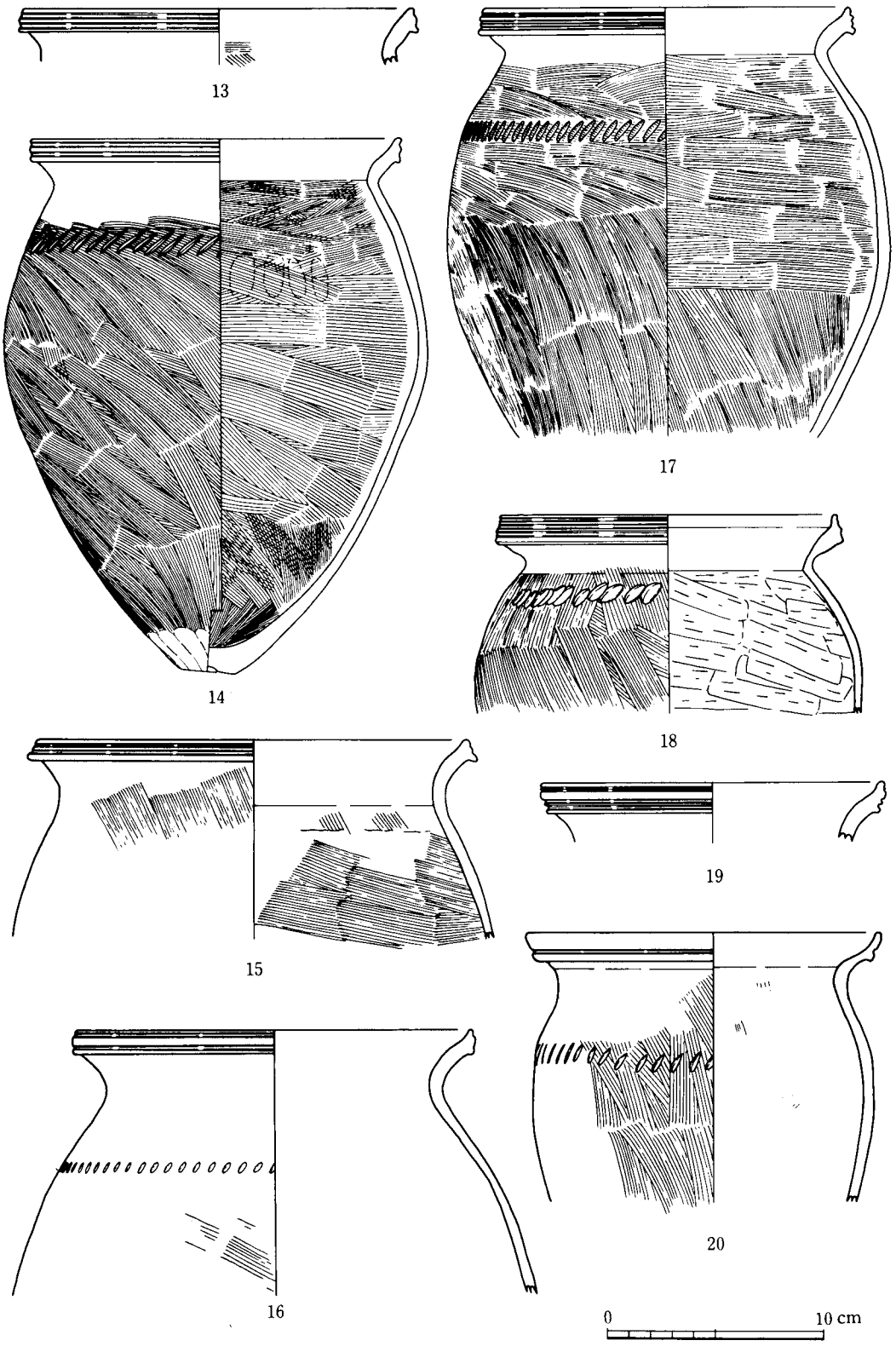
口縁部がわずかに外傾し、比較的深い体部をもつ小型鉢である。体部は内外面ともハケ調整痕を残し、小型甕に含めてもよい形態をとる。

鉢 E_3（第117図175）

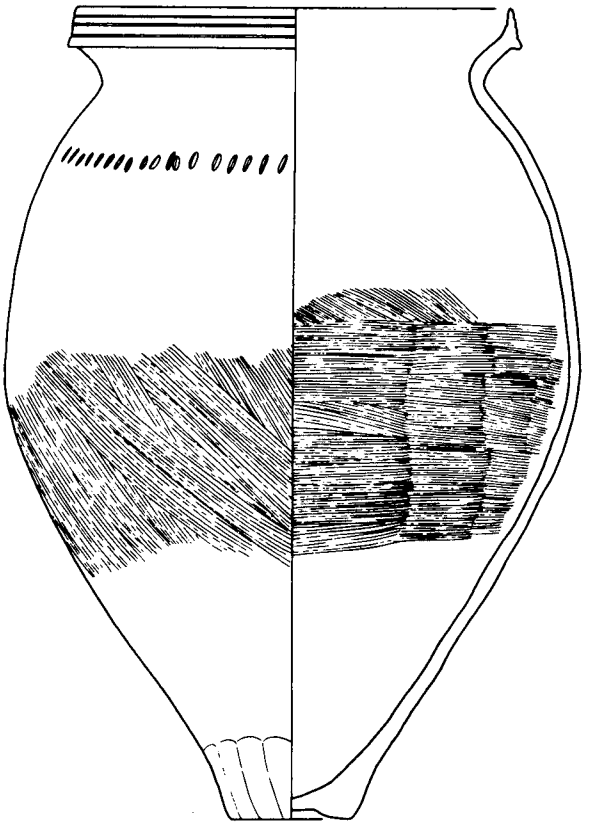
体部に環状把手をもつ比較的大型の鉢である。口縁部は「くの字」に屈曲し、端部はヨコナデにより面取られる。体部は内外面ともハケ調整後、指ナデおよびヘラ研磨される。



第 100 図　T 18 調査区出土土器



第 101 図　T 18 調査区出土土器

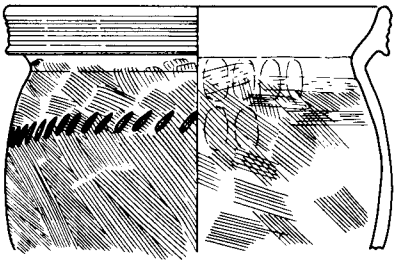


21

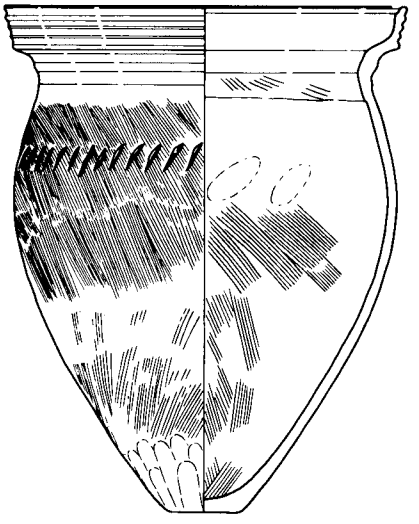
24

25

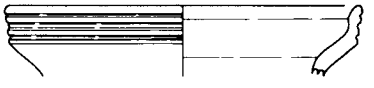
26



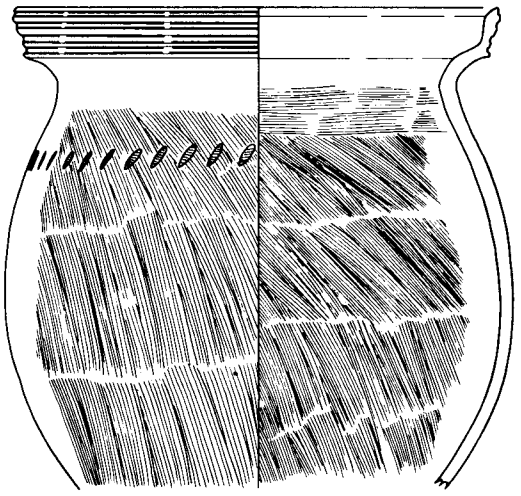
27



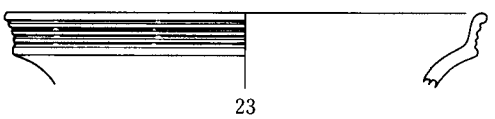
28



29

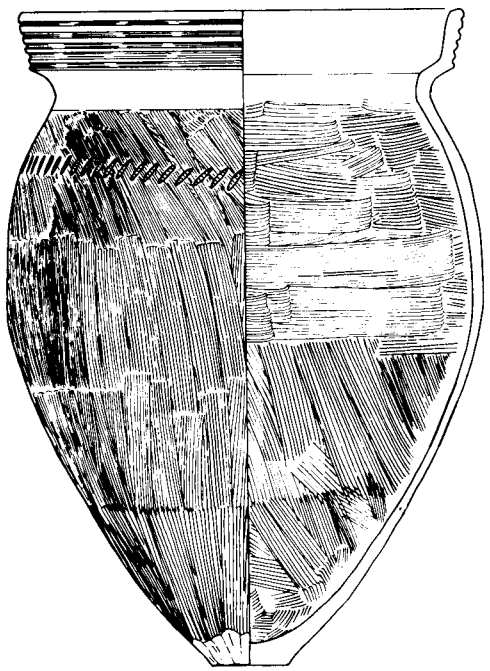


22

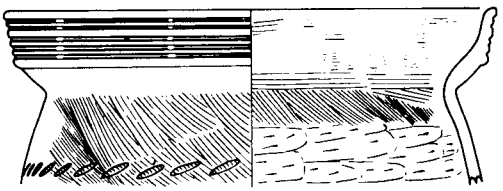


23

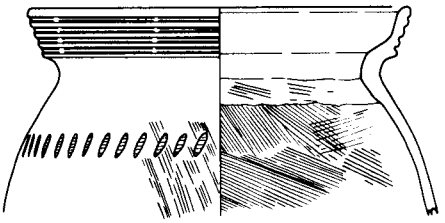
第 102 図　T 18 調査区出土土器



30



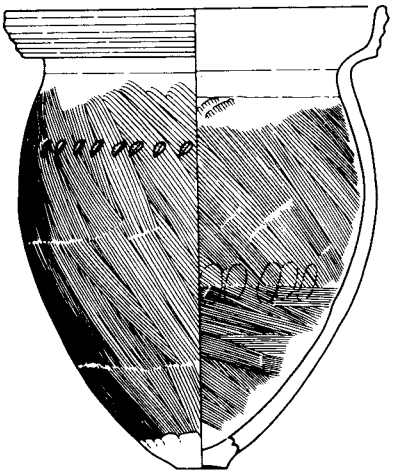
31



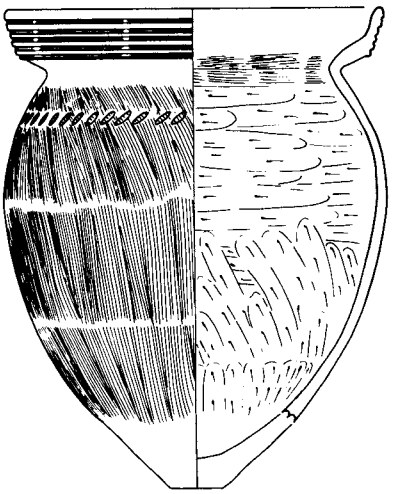
32

33

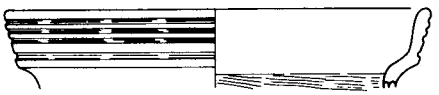
34



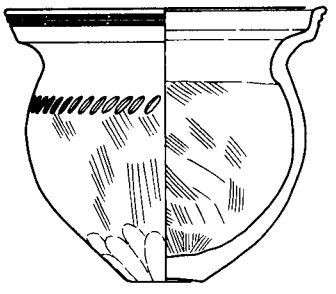
35



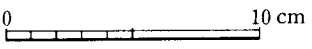
36



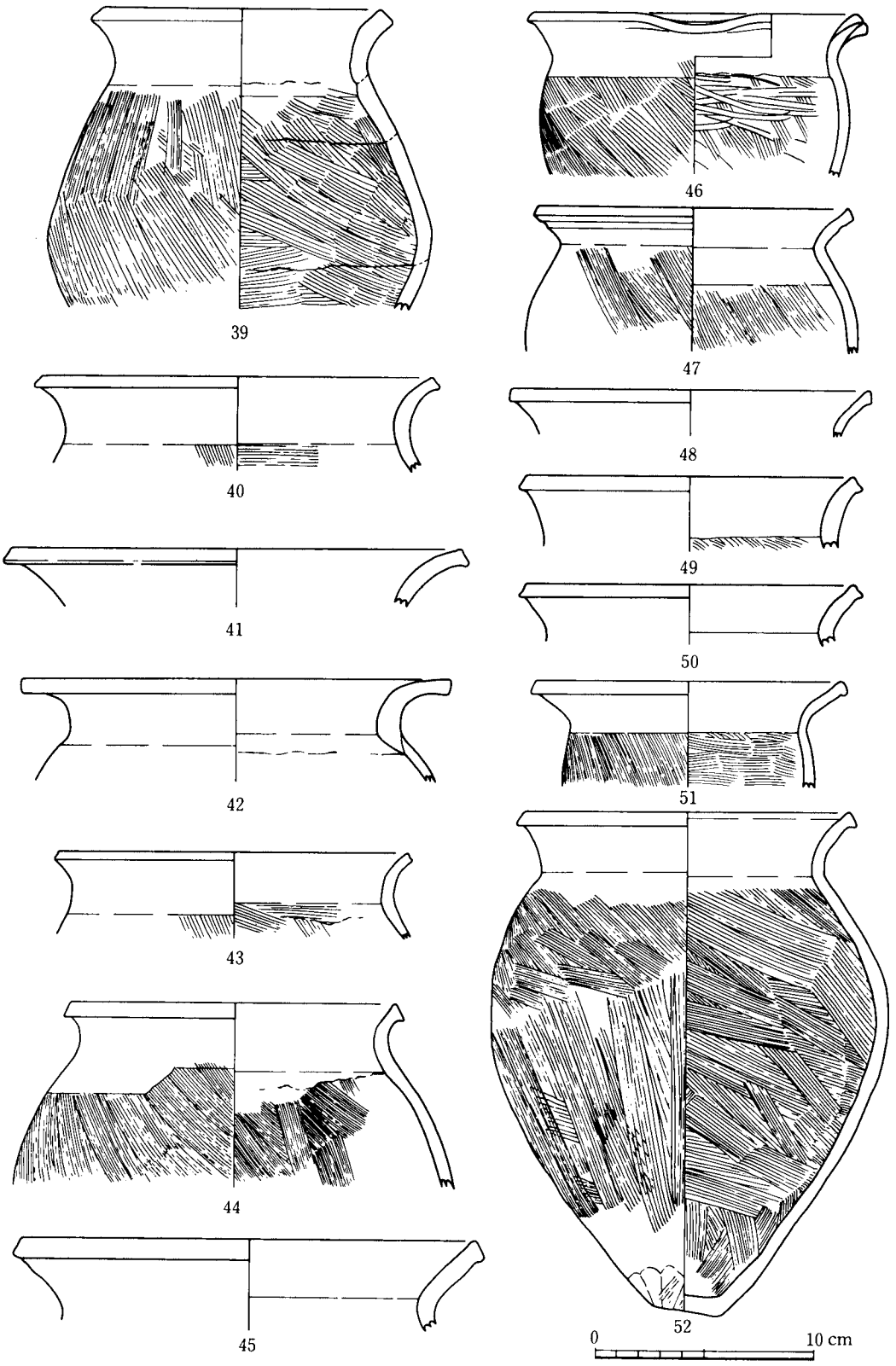
37



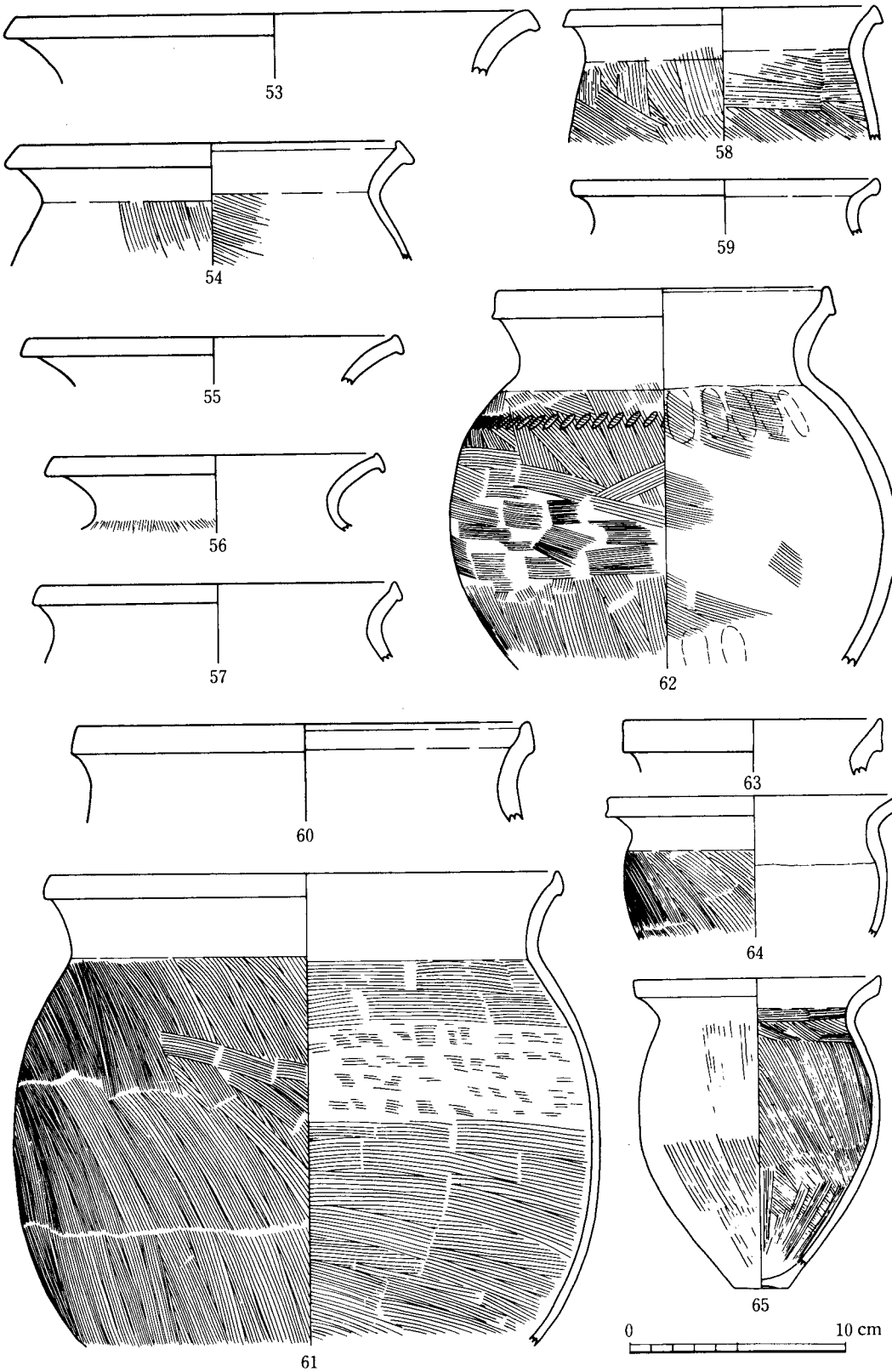
38



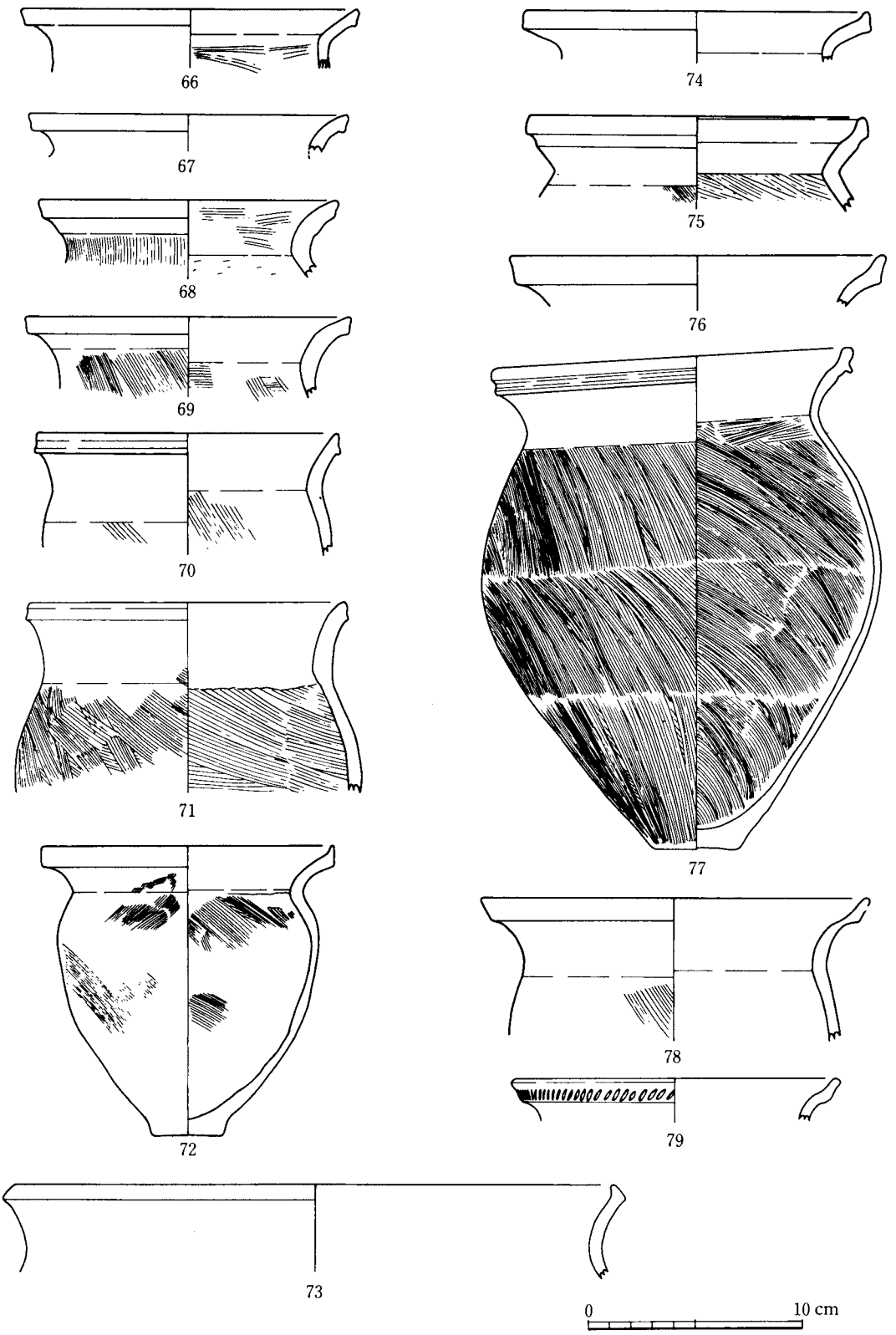
第103図　T 18調査区出土土器



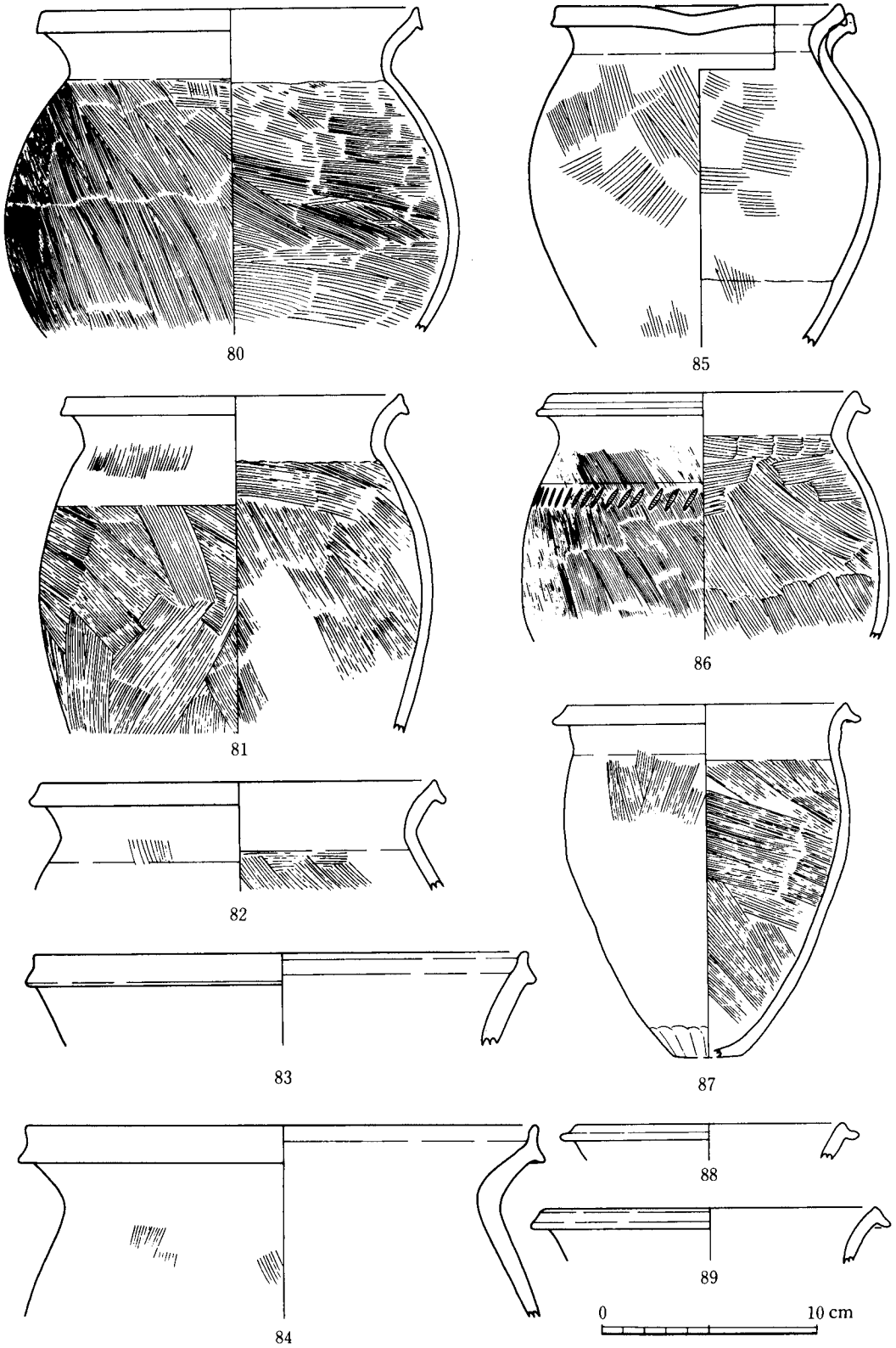
第 104 図　T 18 調査区出土土器



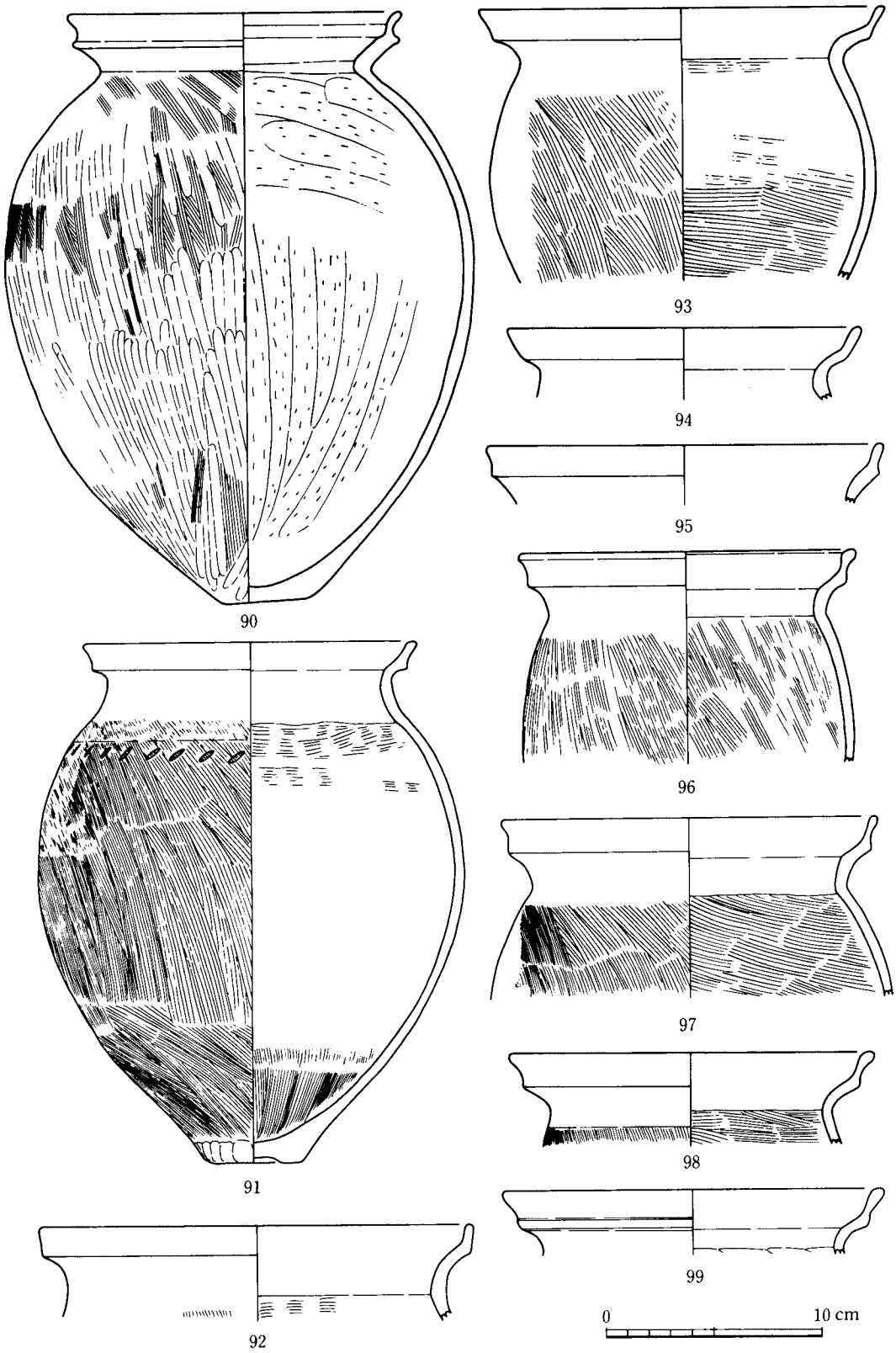
第105図　T 18調査区出土土器



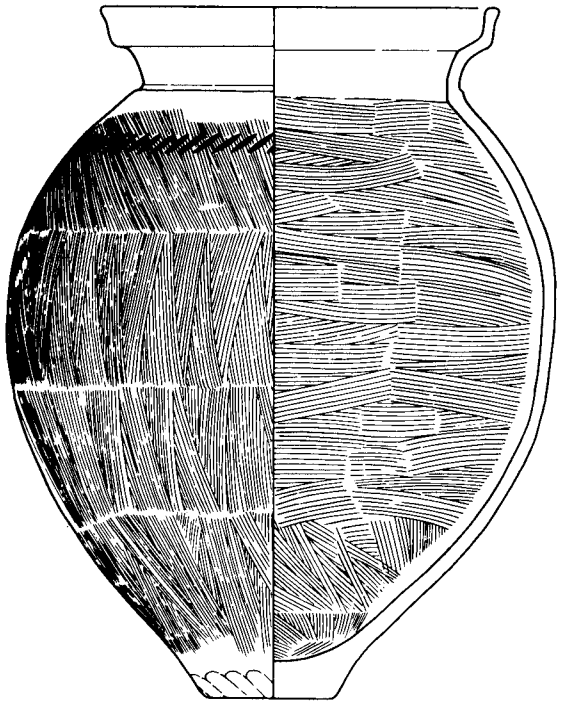
第 106 図　T 18 調査区出土土器



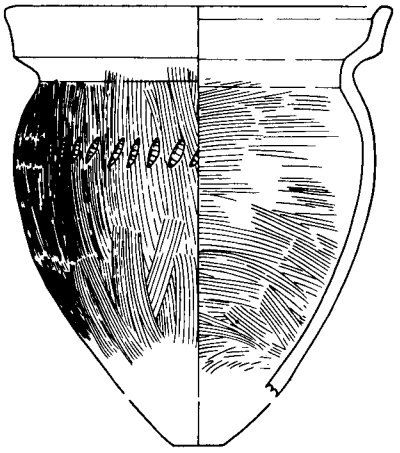
第 107 図　T 18 調査区出土土器



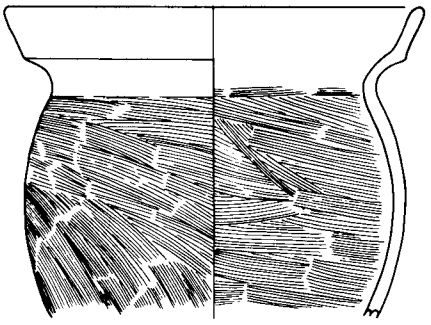
第 108 図　T 18 調査区出土土器



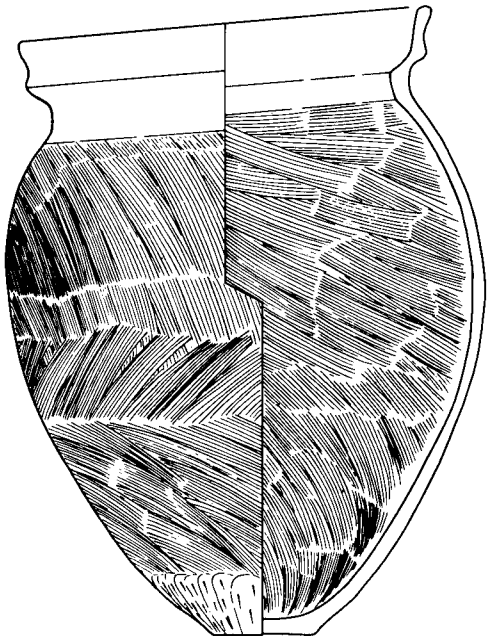
100



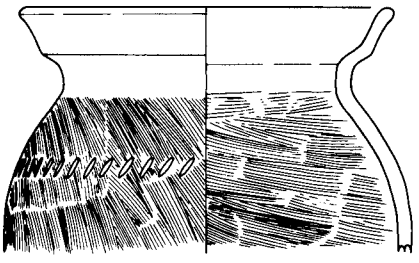
103



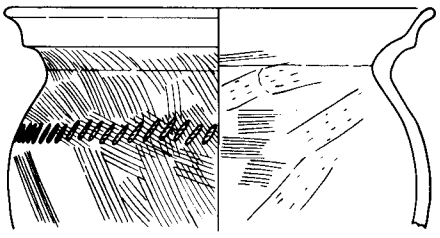
104



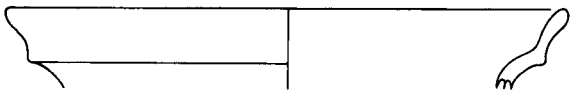
101



105



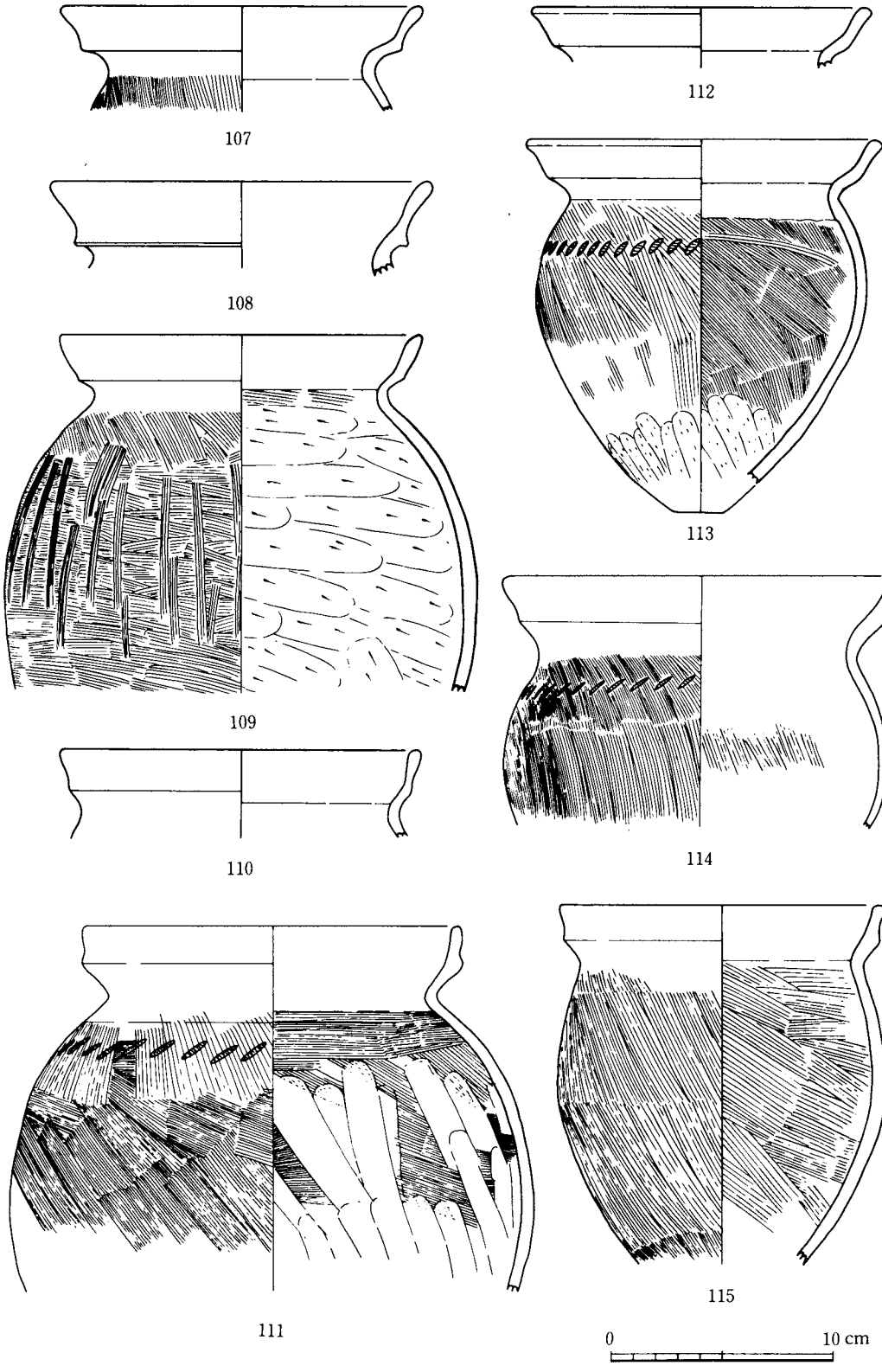
106



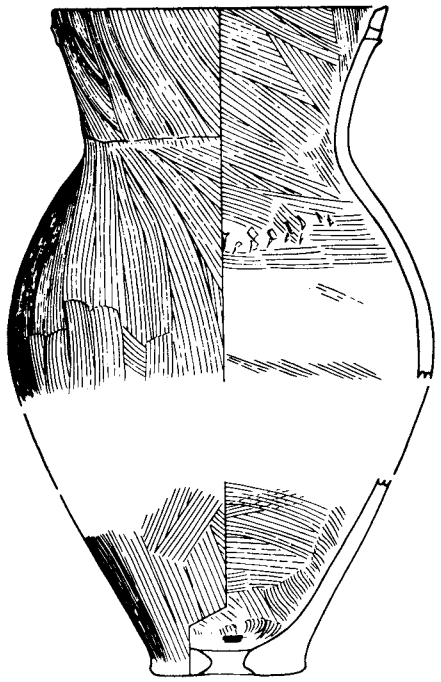
102

0 10 cm

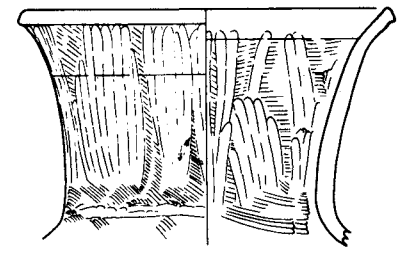
第 109 図　T 18 調査区出土土器



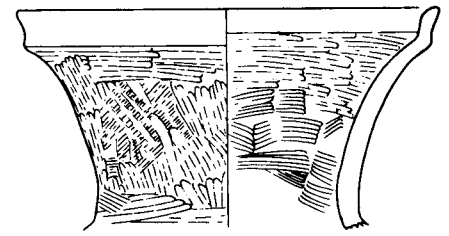
第 110 図　T 18 調査区出土土器



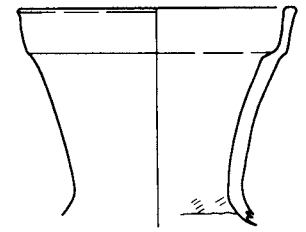
116



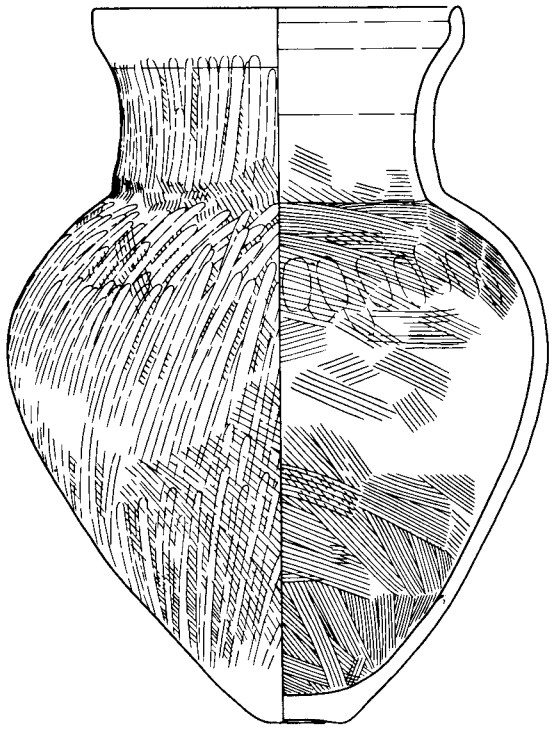
118



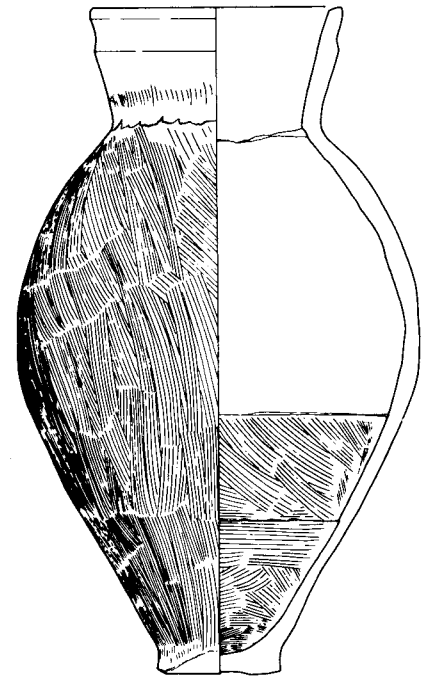
119



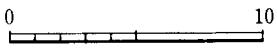
120



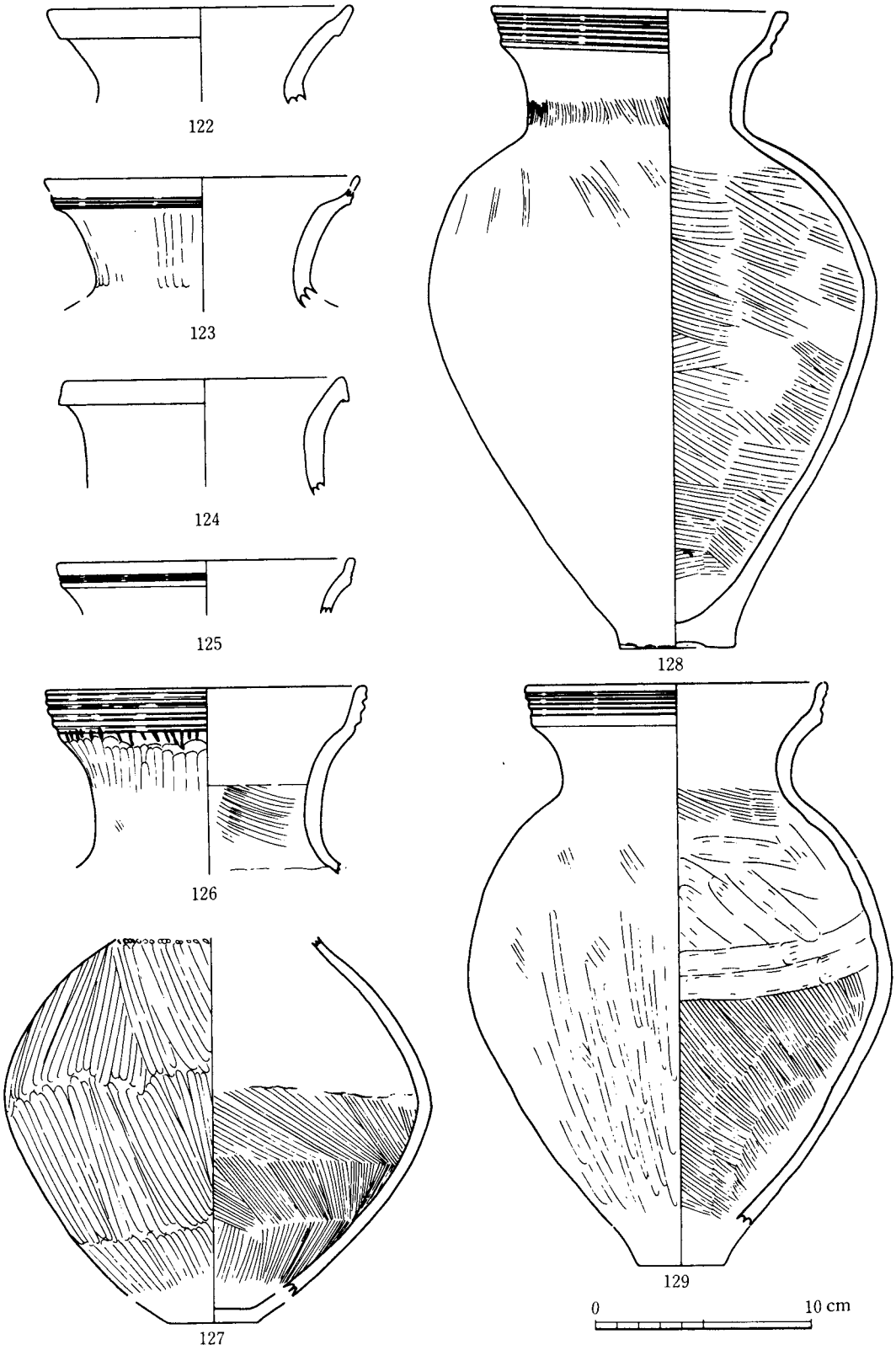
117



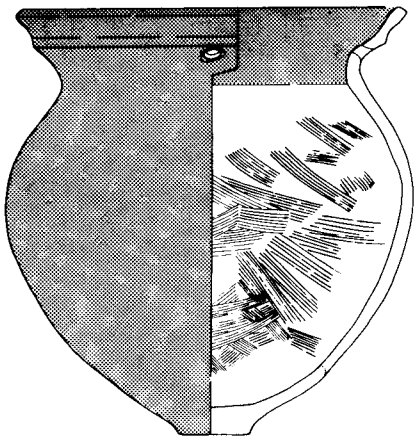
121



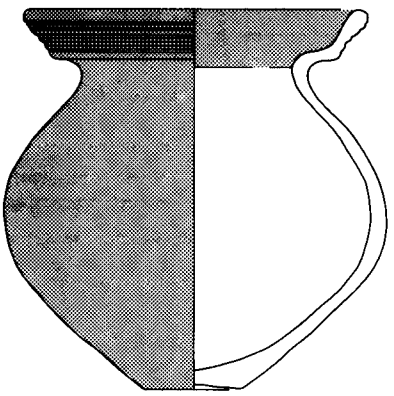
第 111 図　T 18 調査区出土土器



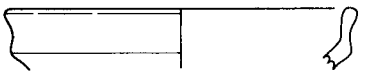
第 112 図　T 18 調査区出土土器



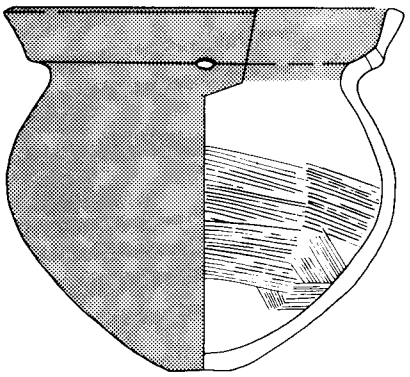
130



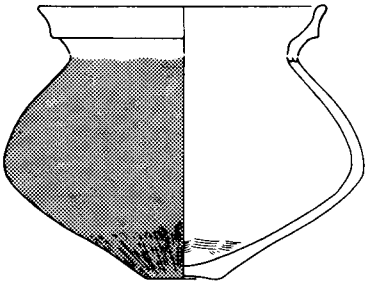
134



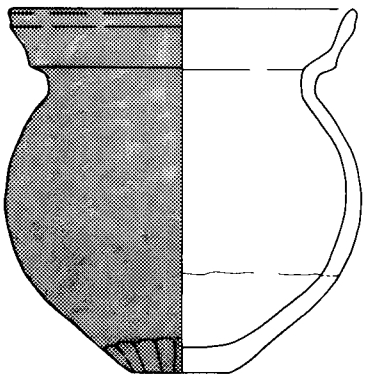
135



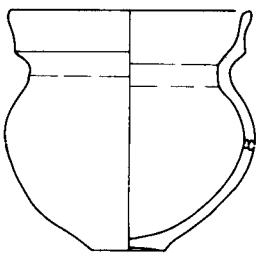
131



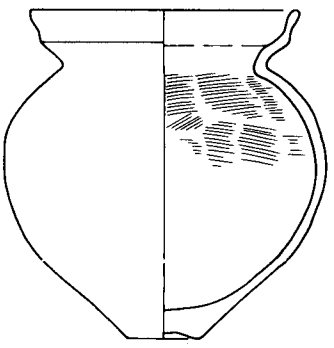
136



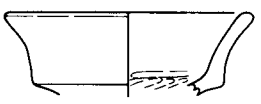
132



137

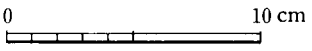


139



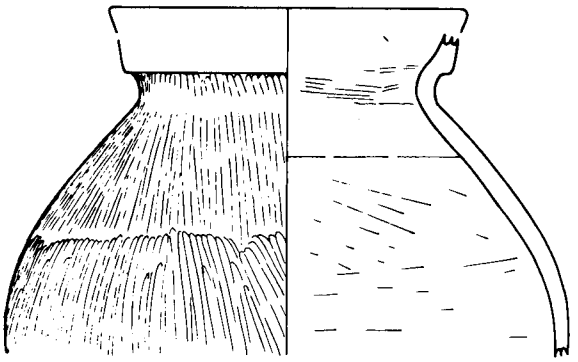
138

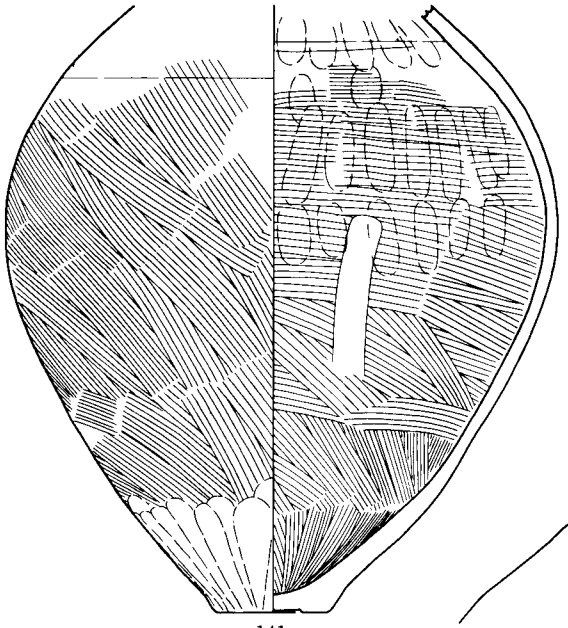
133

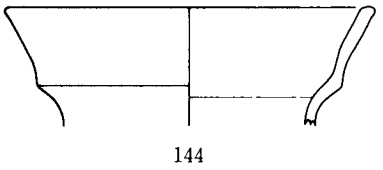


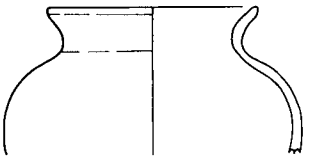
第 113 図　T 18 調査区出土土器

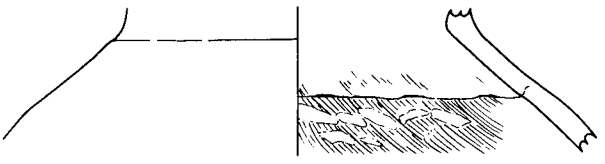
140

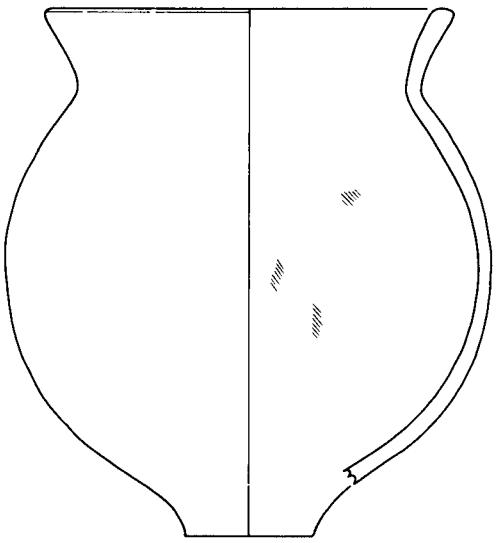

143

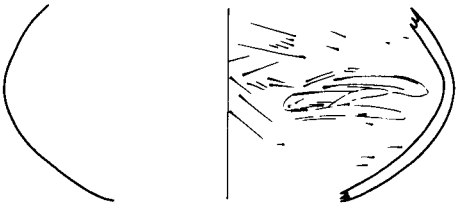

141

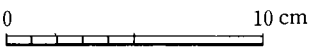

144


145

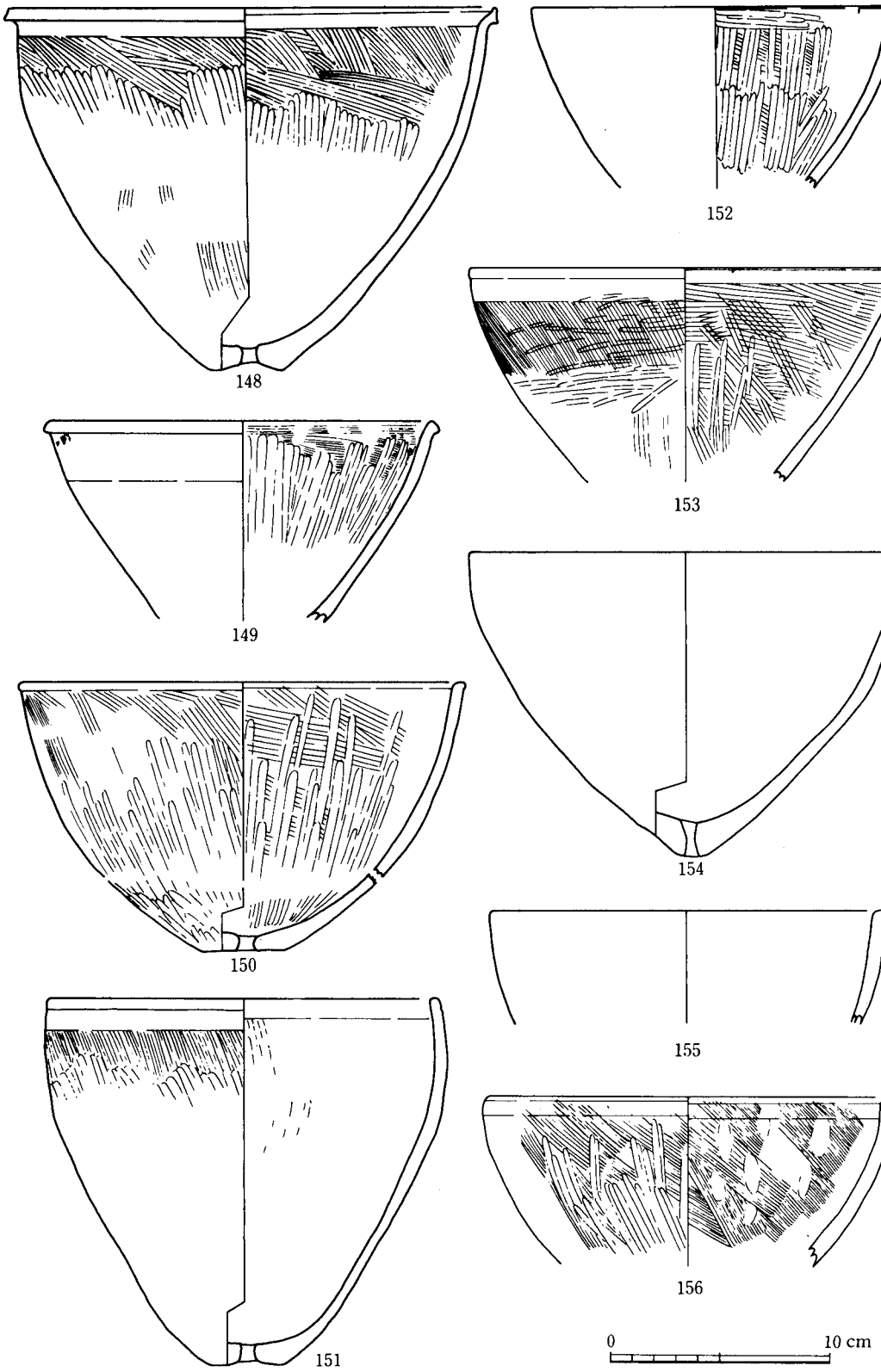

146


142

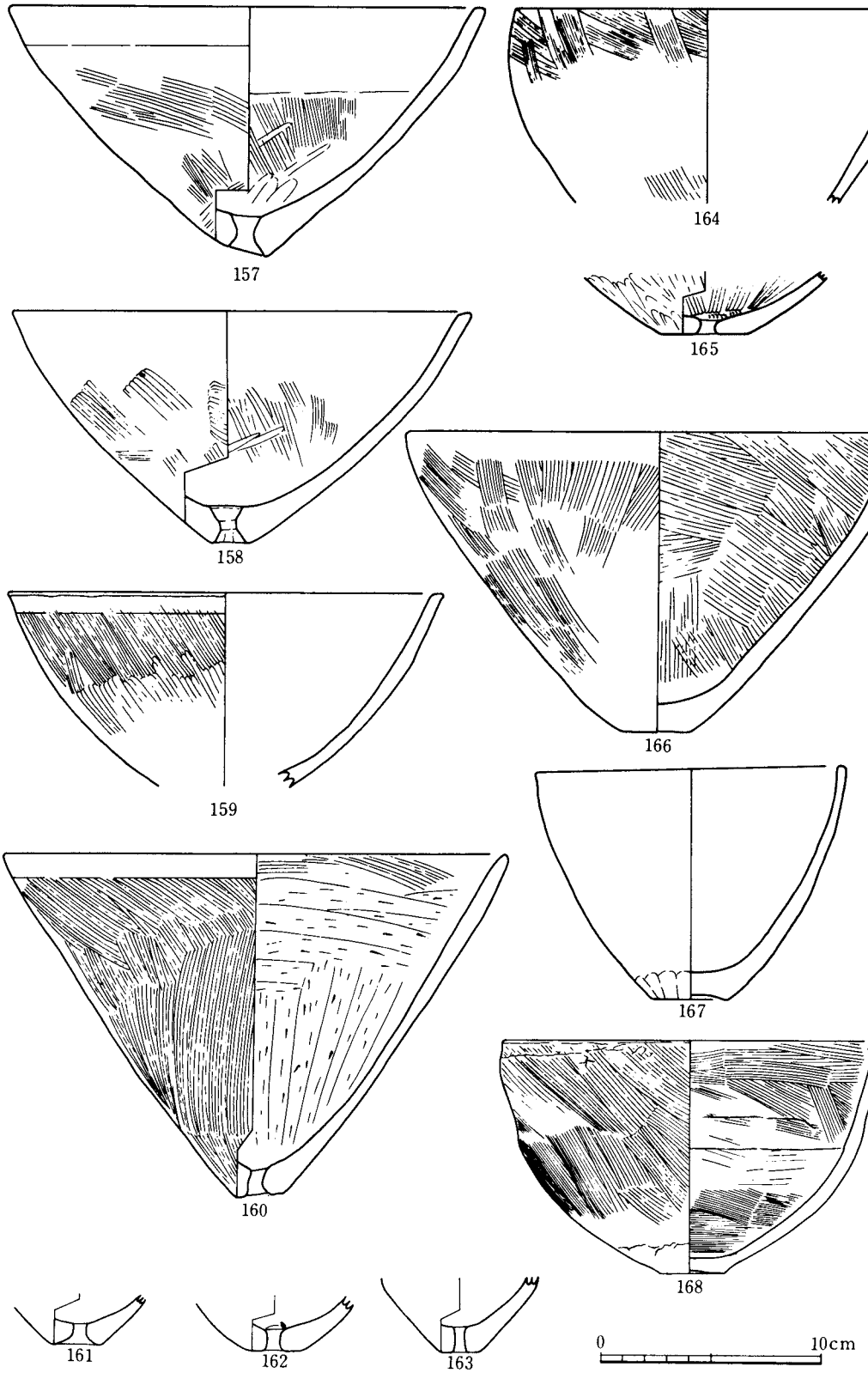

147



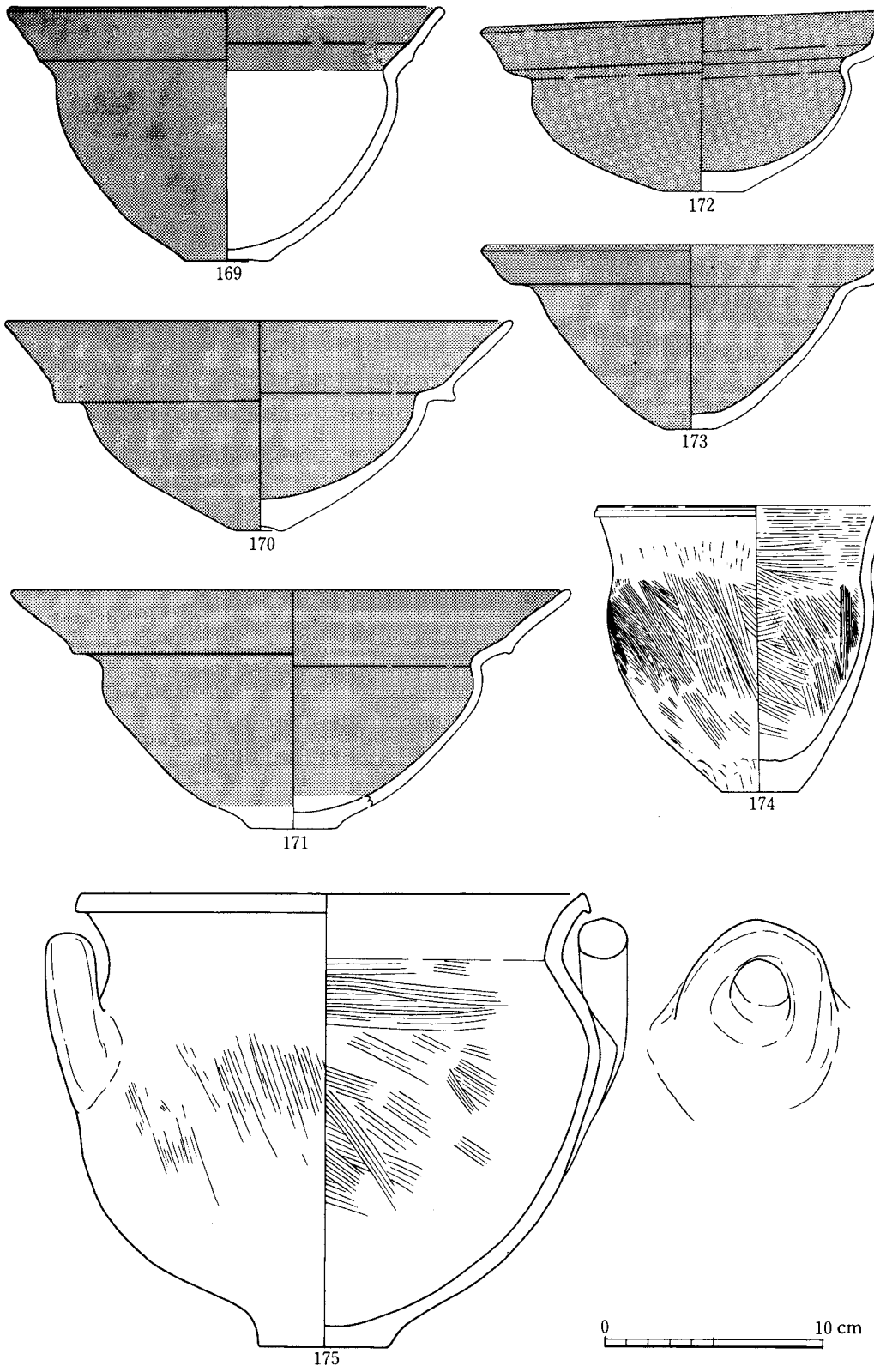
第 114 図　T 18 調査区出土土器



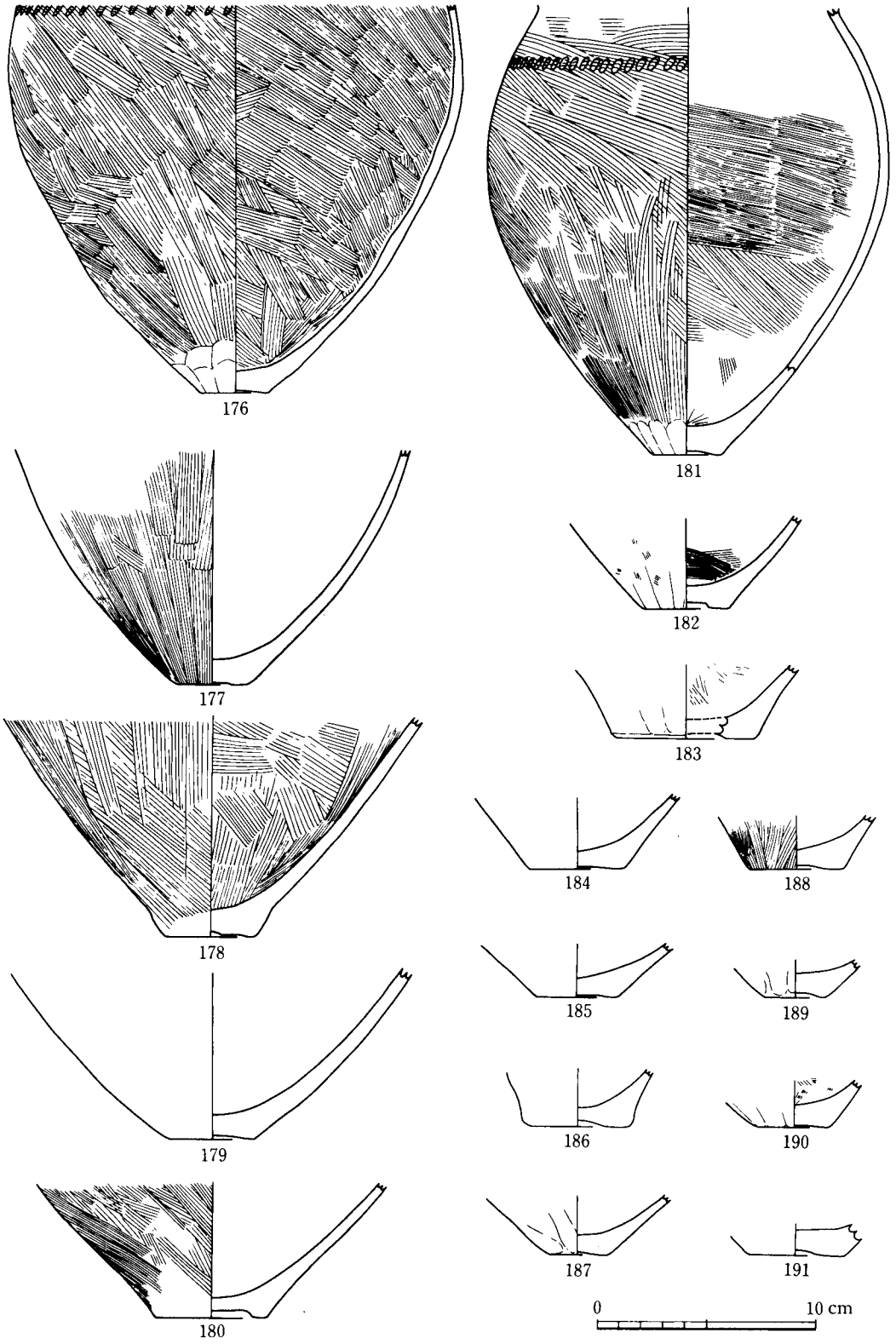
第115図　T 18 調査区出土土器



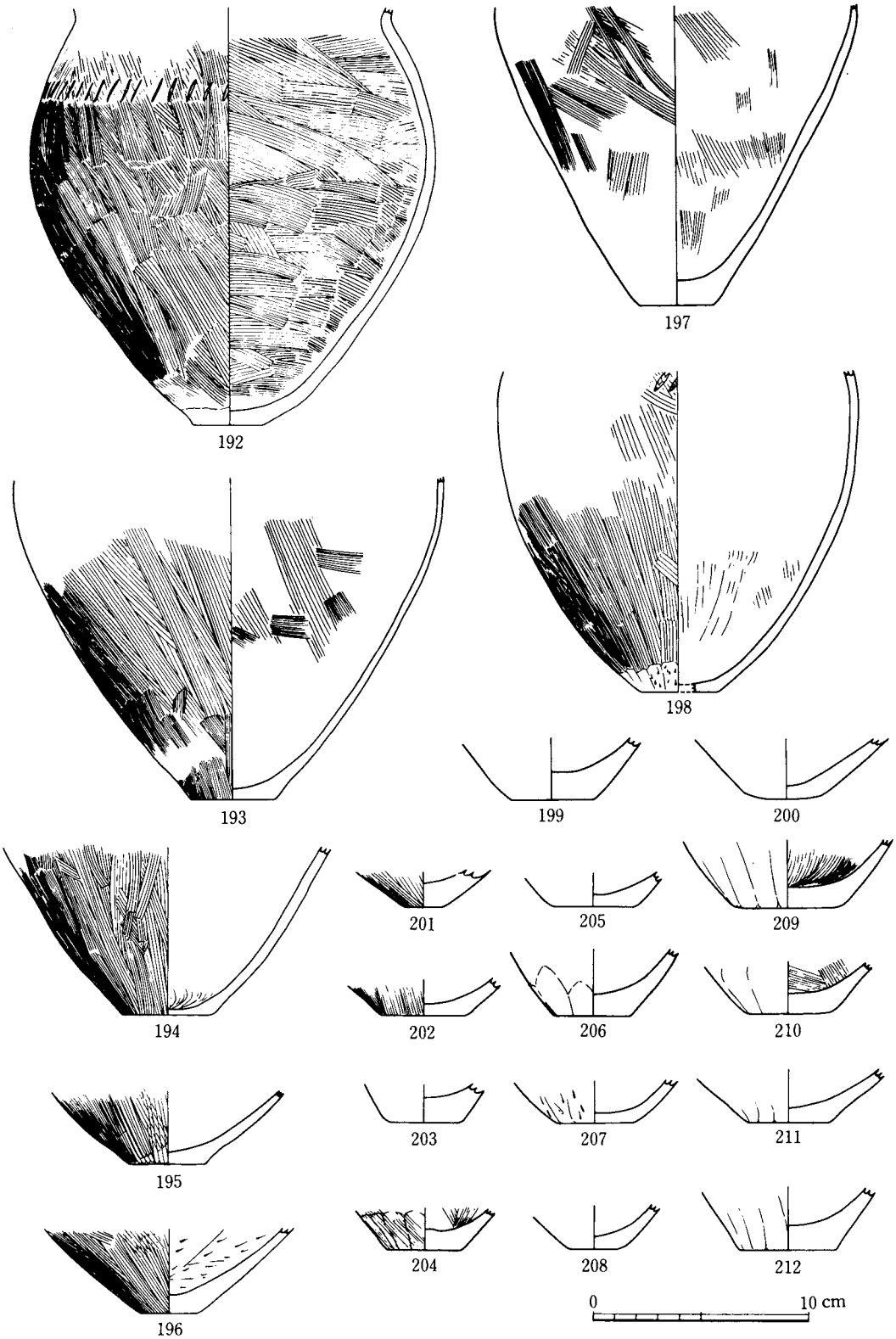
第 116 図　T 18 調査区出土土器



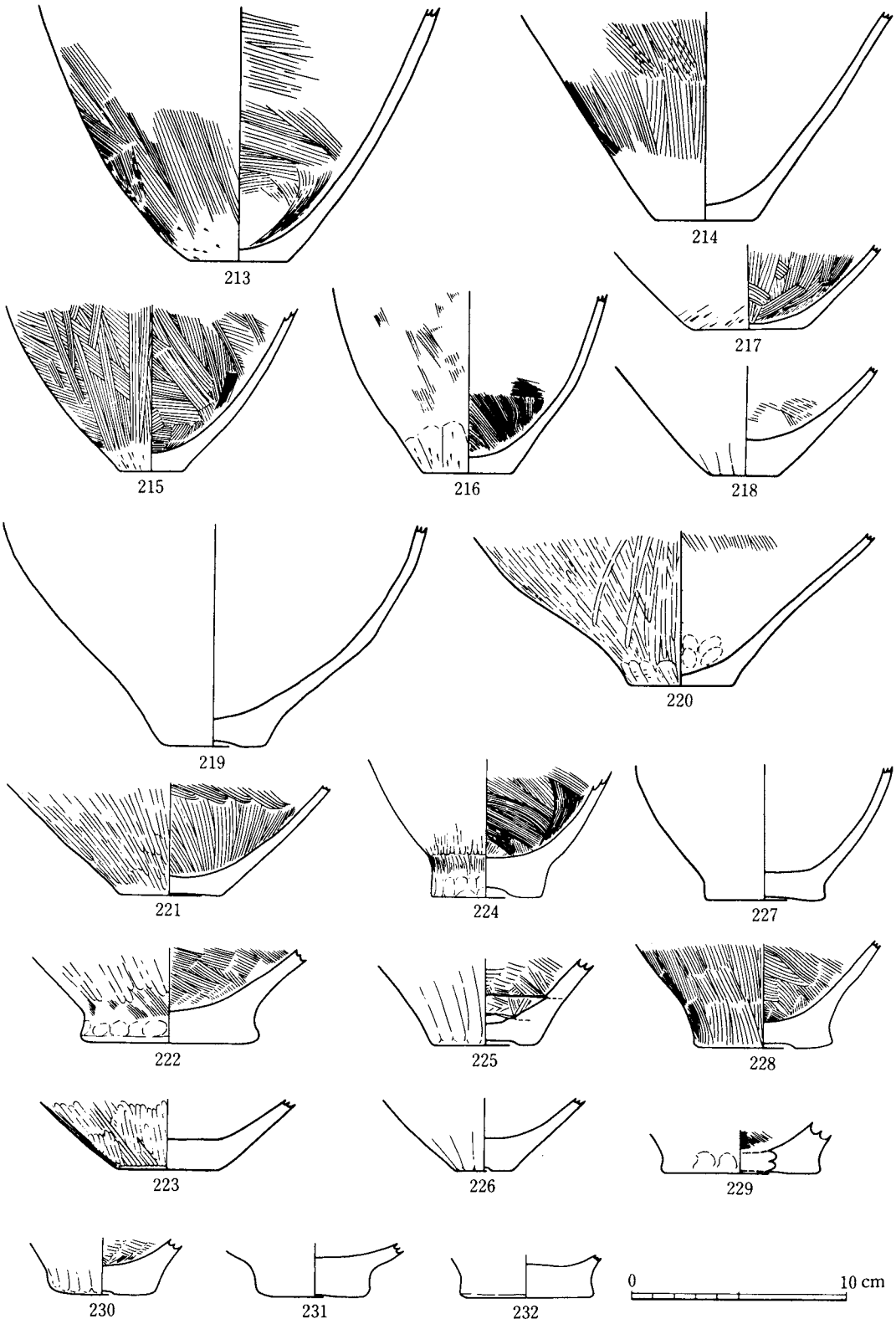
第 117 図　T 18 調査区出土土器



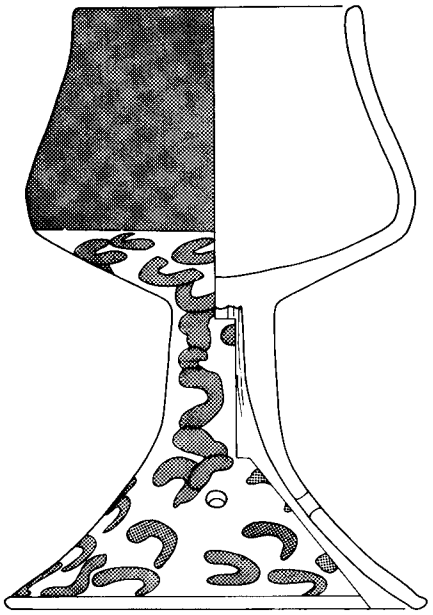
第 118 図　T 18 調査区出土土器



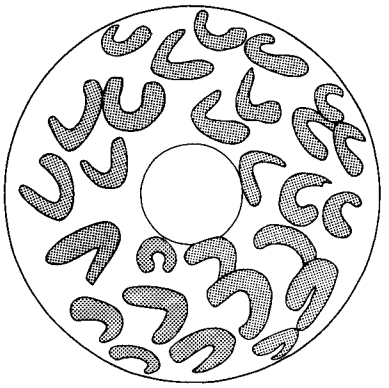
第 119 図　T 18 調査区出土土器

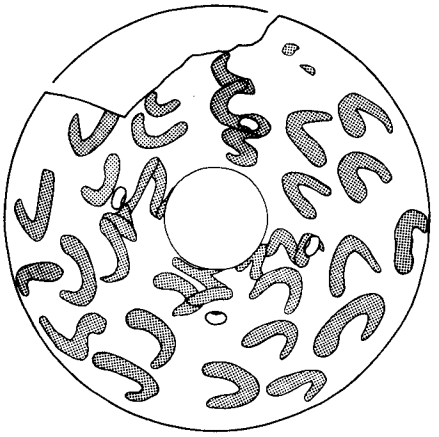


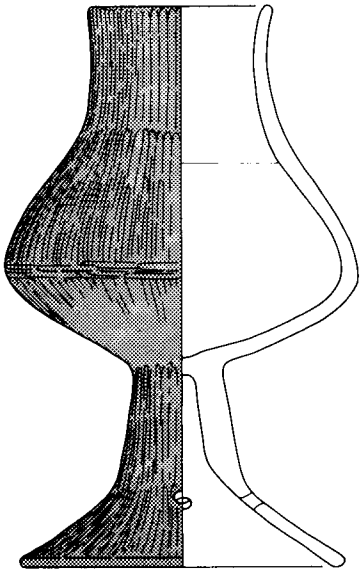
第 120 図　T 18 調査区出土土器



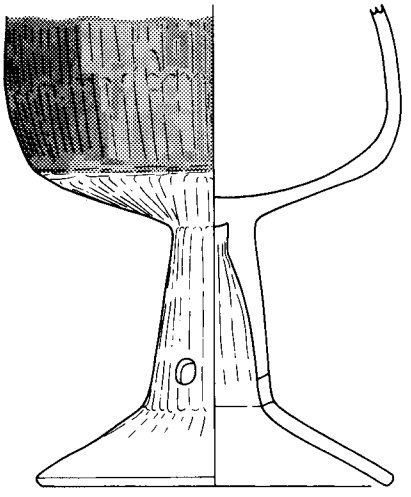
233



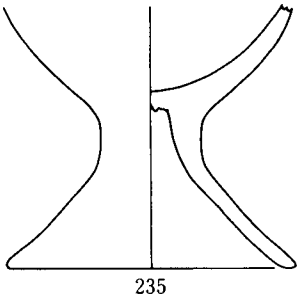




234



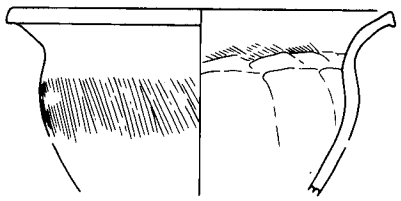
236

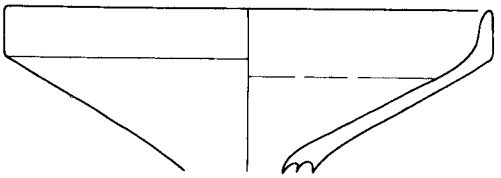


235

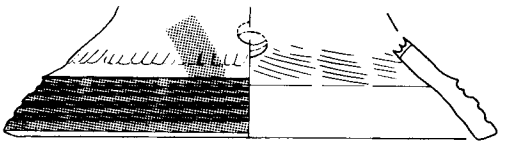
0 10 cm

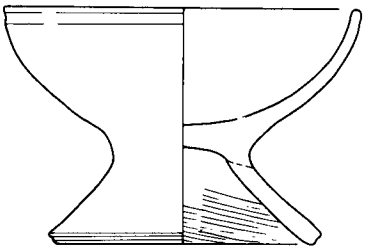
第 121 図　T 18 調査区出土土器

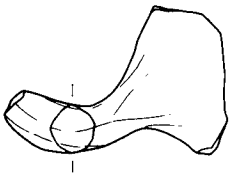

237

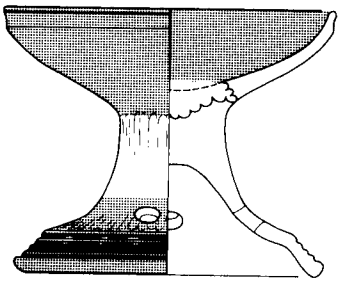

242

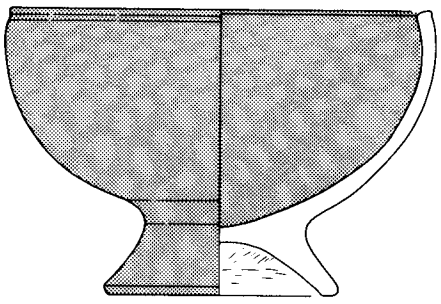
238

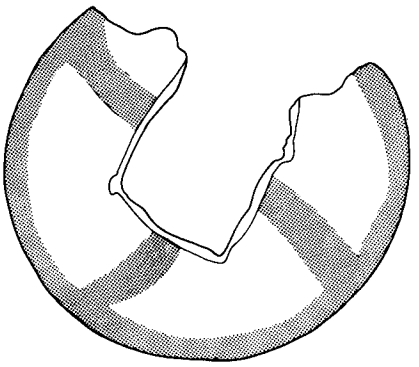

243

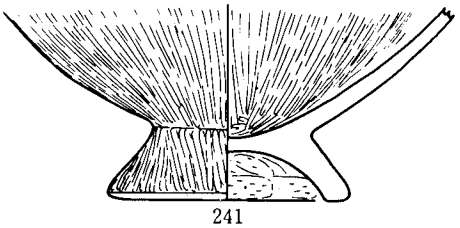

239

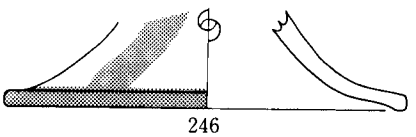

244

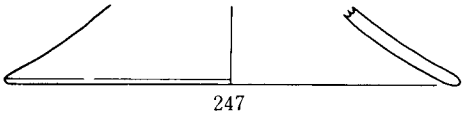

245

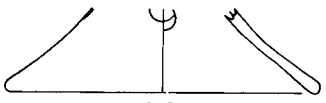

240

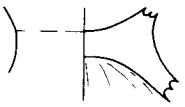



241

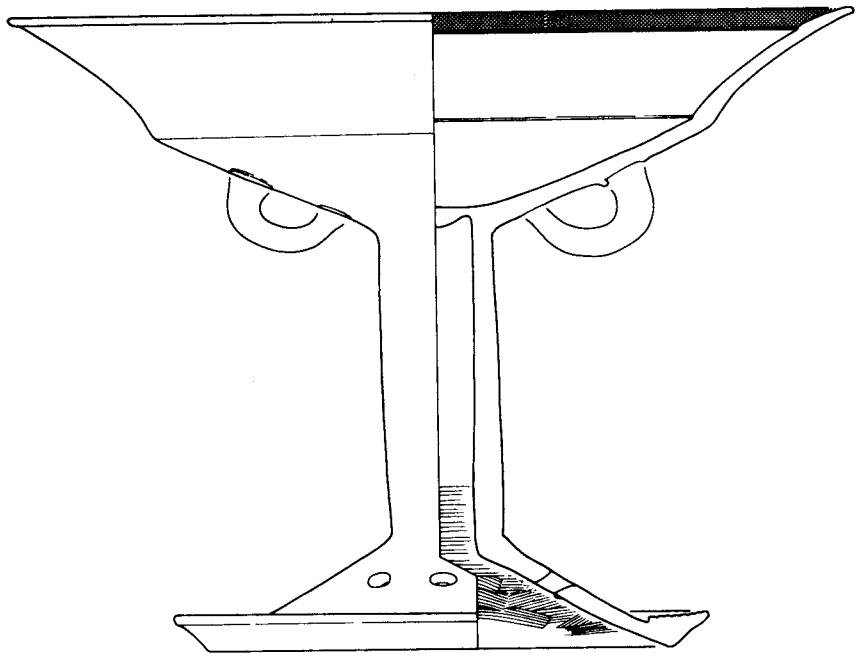

246

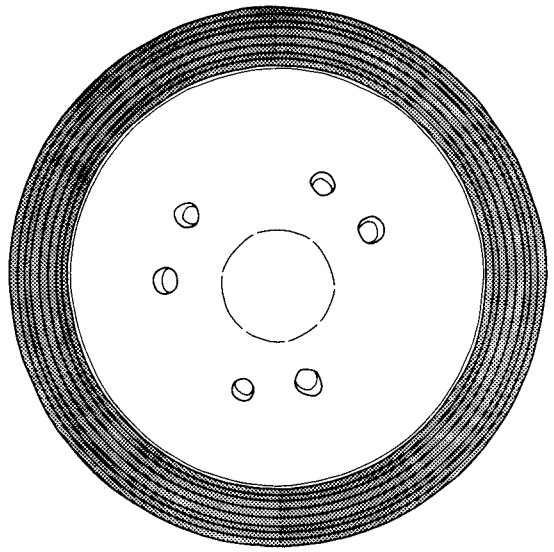

247


248

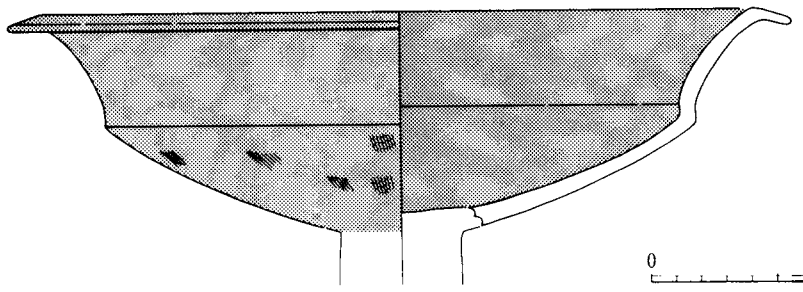

249

第 122 図　T 18 調査区出土土器



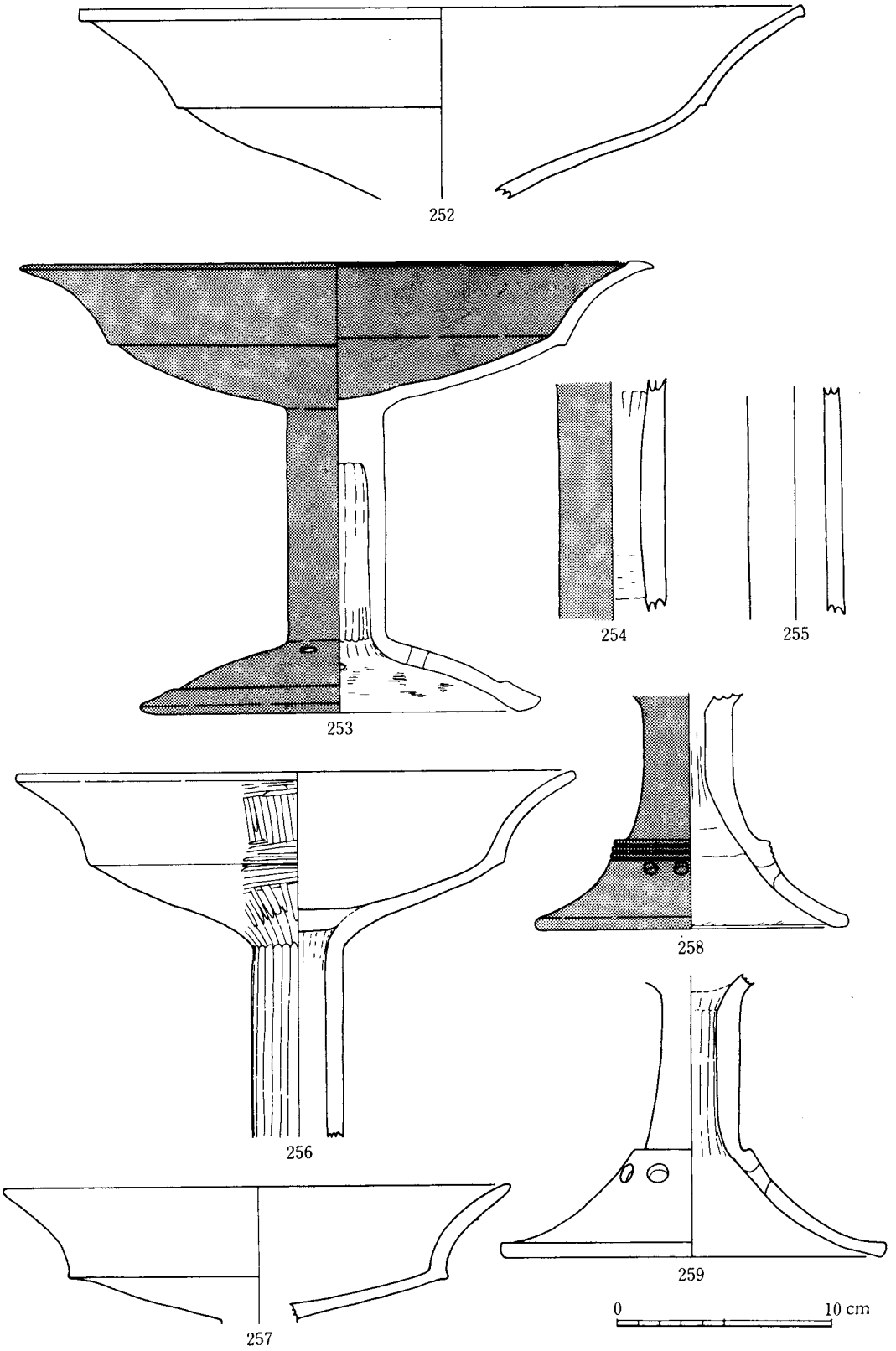


250

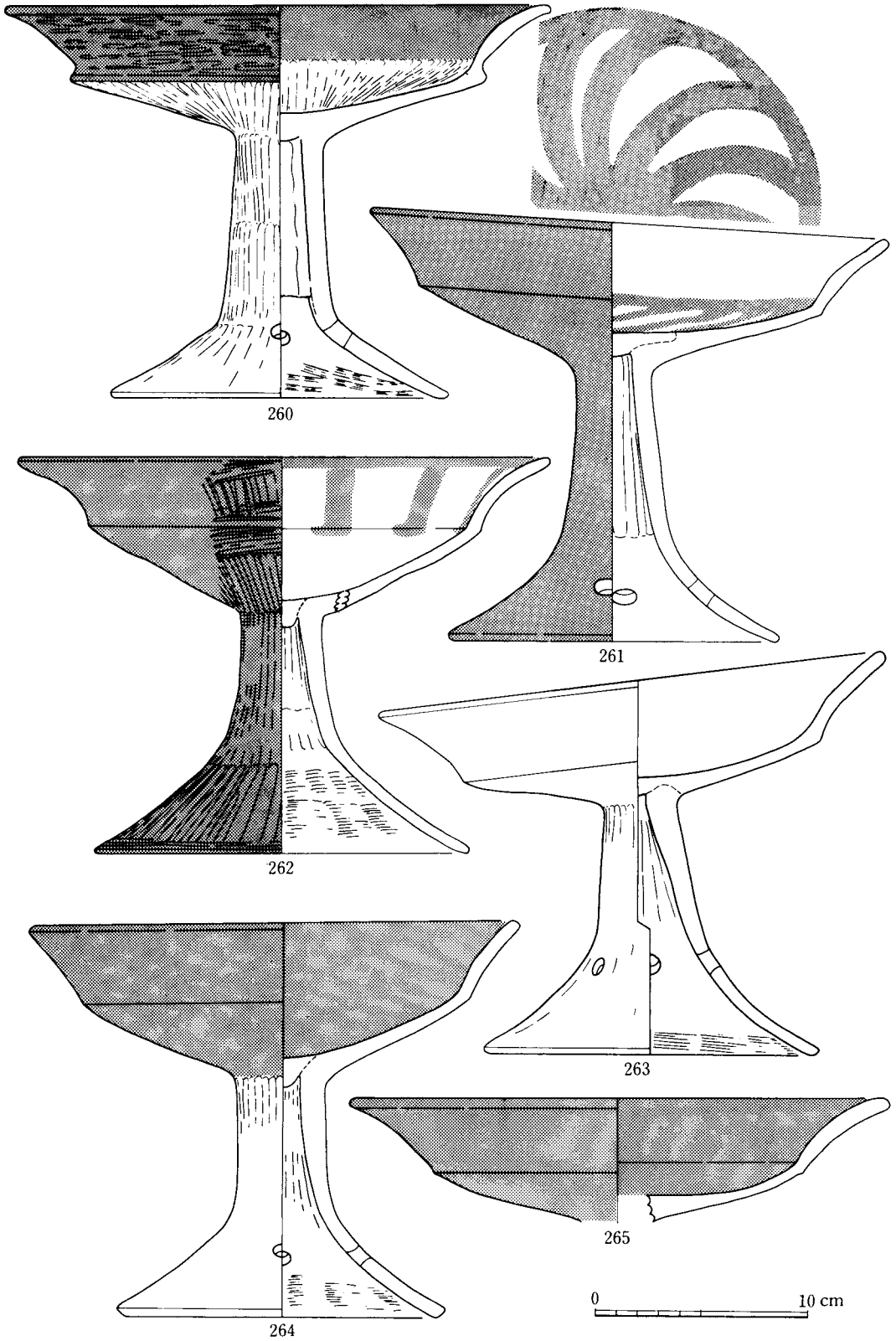


251

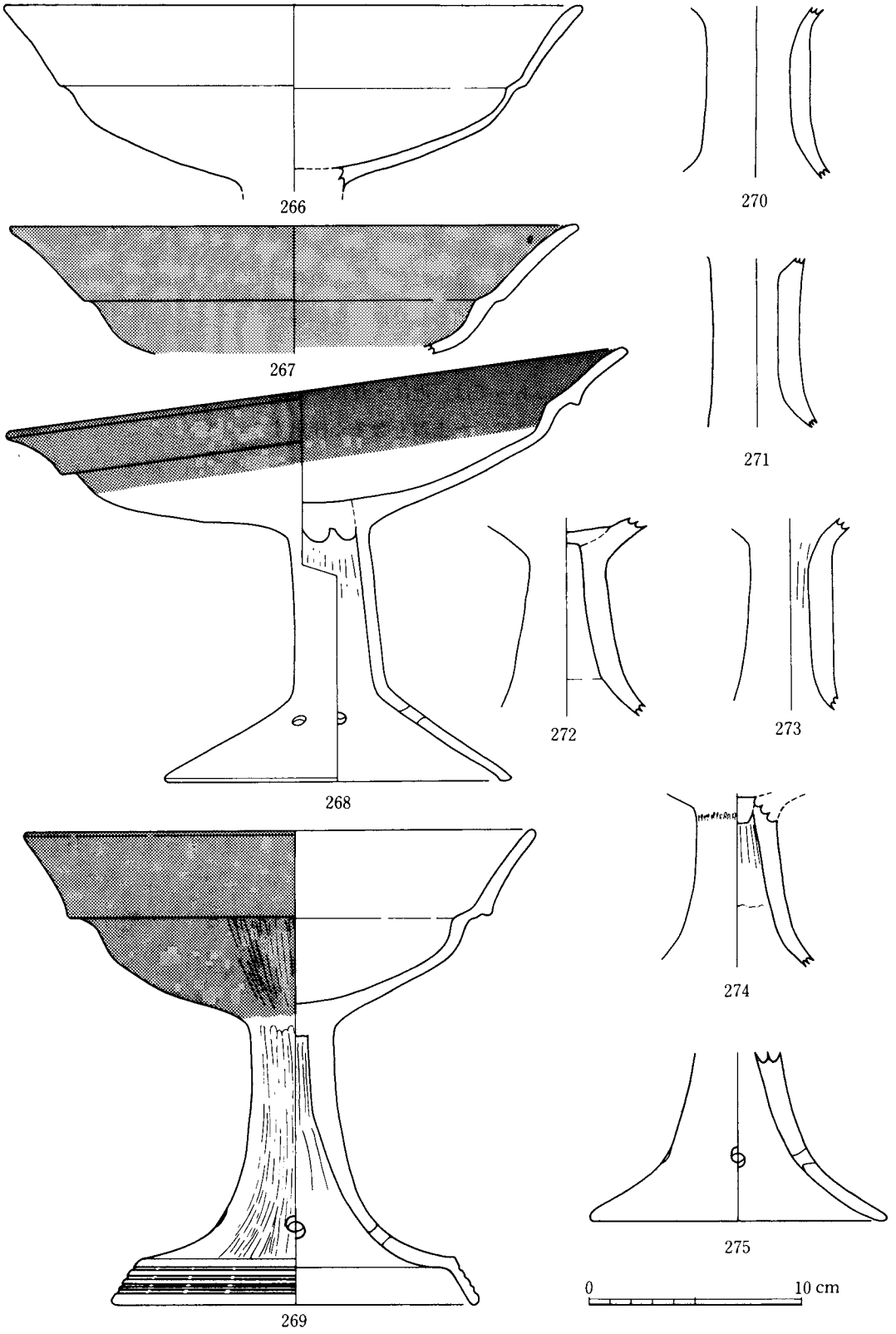
第 123 図　T 18 調査区出土土器



第 124 図　T 18 調査区出土土器



第125図　T 18 調査区出土土器



第126図　T 18 調査区出土土器

第V章　考　　察

第1節　鹿首モリガフチ遺跡出土土器の様相と占める位置
（T 18調査区出土土器を中心に）

(1)　はじめに

北陸の後期弥生土器は、凹線文系土器の系譜下におかれ、西日本海沿岸地域とほぼ同一の歩みをとるが、後期後半には擬凹線文系土器を基調とした独自な「北陸型土器」[1]を創成する。それは多少の地域差を包括しつつも越前から佐渡・越後西半部に至る広範囲な地域に分布し、独自な土器文化圏を形成する。また、形成期にあっては、近江・丹後・山陰地方などの隣接地域との交流も活発で、これらの地方の影響を強く受容した土器も数多く伴出する。しかし、こうした「北陸型土器」も後期末には北陸内部の各小地域を単位とした狭小な土器圏に分割・細分化する傾向にあり、個別地域差が顕現化する。こうした小地域単位の様相差は古墳出現期の土器にまで継承され斉一的な文化的段階区分の理解を複雑なものにしている。また、同時に地域間の交流が停滞化するのもこの期であり、極めて個性的で在地的な土器が出現するなど、器種の盛衰が顕著で、その系譜関係や組成の実体が図式的に把握しにくい状況にある。これは、この期の土器様相が転換期社会の在地集団の政治的動向と密接に関るからであり、土器に反映される地域性は、変動期における在地集団の自立指向に対応するからであると理解される。すなわち、古墳出現前夜における地域集団の再編過程に伴う社会的緊張関係を要因として土器圏の細分化現象が急速に進行したと考えられる。こうした意味では、この期の土器が最も強く地域性を反映している。それゆえ、転換期における土器研究は、土器が〈時代性を負う社会の個性の反映〉であるならば、個別性と普遍性の不断の関係において、個有の地域性をその極限まで徹底して追求する作業から開始せねばならないであろう。土器研究の偉大な先駆者であった山内清男が、かつて〝真に執るべき科学的手段は……中略……型式は益々細分され、究極まで推し進むべきである[2]。〟と断言したのは、まさにこの意味において理解すべきであろう。土器研究が単に編年羅列のための土器論というドロ沼に陥らないためにも、個別地域性の問題は徹底的に追求すべきであり、極端にいえば、一遺跡一型式（様式）という型式（様式）[3]の乱立も今日的な状況としてはやむえないであろう。要はその細別の視点と方法の問題であり、個々の特質から導きだされた共通属性をいかに構造的に分析・把握し体系づけるかである。

(2)　一括遺物と式の設定

T 18調査区から、完器を含む多量の土器が出土した。しかもその出土状態は、第4章第3節で述べたように、人為的な一括遺棄を窺えさせるものであり、該期の能登では比類のないもので、土器研究に格好な資料を提供したといえよう。

単一層位および竪穴住居跡・土壙などの遺構から一括出土した土器群は、土器研究の根幹をな

す基礎資料であることはいうまでもない。それゆえ、一括出土した土器群の取扱いについては、とりわけ慎重な態度で臨まなくてはいけないことについては多言は要さない。特に一括出土の土器群の組成をもって、「型式（様式）」を設定し、その編年的位置を付与する場合はなおさらである。いかにその資料が遺構内一括出土品であっても、それが「廃棄の同時性」・「消費の同時性」をしめす以外にありえないことは、多くの研究者によって語られているところである(4)。この特質（限界性）を補完するものとして土器の「型式学的研究」が極めて有効な手段である。多くの研究者が「型式（様式）」設定や土器編年にあたって、こうした方法を駆使することによって、「製作の同時性」や限定された空間領域における「地域性」を追求してきた。

また、土器は目的をもって製作・使用されてはじめて機能する〈生活の道具〉でもある。それゆえ一括出土した土器群の組成は〈時代性を負う社会の個性〉の反映とされる。たとえば、弥生土器は〈農民の土器〉として縄文土器と区別されるのは、農耕生産を根幹とした弥生文化の所産であるがゆえであり、帰結としての器種構成がその社会に対応したものになっているからである(5)。すなわち、土器は、社会的要求の変化に応じて細分化し複雑な構成をとり、用途に応じて機能分化するとともに、群組成は使用目的によって異なる。さらに、用途と使用法が必ずしも一致するとは限らず、2次的に転用される場合も多い。土器研究は〈器種構成の認識からの出発〉が基本とされるゆえんはこうした性格による。

一括出土の土器群は、その中に包括された人間集団の生活内容の一端を示すものであり、その生活の上に形成された〈社会の個性〉を反映するものならば、同時に、土器の個々の形状およびその集合としての組成を決定するのは、時間と空間領域に規制された社会的要因と製作者・使用者の意志である。それゆえ一括出土の土器群には単に土器の集合として普遍化しえない強い個性がある。また同時に、製作者および使用者の極めて個別的な意思・感性・癖をも反映する。極言するなら、限定された時間的空間的領域内での同一遺構一括出土土器群であっても、個々の土器群はその組成がみな個性的で、同一構成をとる例はまれである。土器研究は〈個の認識からの出発〉がまたその基本でもある。何が個性的で、何が普遍的なのか。その区別と関連性を一括出土の土器群からよみ取らねばならない。

鹿首モリガフチ遺跡T 18調査区から一括出土した土器群は、極めて個性的で、在地性の強い土器群である。また、器種によっては個々の形態差が多様で画一性に乏しい。これは、時代性や地域性の問題であり、個別出土遺構や製作者・使用者の性格に基因する問題であり、土器論の視点はここに求めるべきであることは前述したとおりである。しかし、これらの社会的側面を前面に打ちだし、それを前提とした土器論は、土器の変化のメカニズムが解明されていない以上、あまりにも短絡的すぎるであろう。目的と手段を混同してはいたずらに混乱するだけである。ここでは、個々の土器のもつ形態的特質分析から導きだされた普遍性を基礎に標式的な土器群を抽出し、その地域性と編年的位置を考察するにとどめ後考に備えたい。

(3) 土器の類型と分析

甕形土器

T 18 調査区出土土器総数 275 個体中甕形土器は 114 個体を数え、総出土量の約 41%を占める。器形・製作技法は多様性に富み、体部容量にもかなりの格差があることから、機能面からの分析も必要と思われるが、ここでは、最も端的に個々の特質を特徴づける口縁形態を分類の拠りどころとし、24 形式に細別し、さらにその共通属性によって再統合分類する方法をとった。

甕（A_1・A_2・A_3）は肥厚する口縁端部にクシ歯状具によって擬凹線を施した甕で、甕ＡＩ類と一括する。能登の該期遺跡での出土量が比較的多く、甕 A_3が鹿島町徳前Ｃ遺跡[6]（第 4 次）、甕 A_1が七尾市奥原遺跡[7]第 2 号住から出土している。甕 A_2は口縁 1 点のみので出土であり、前 2 者より形態的に古相に位置づけられる。

甕（A_4・A_5）を甕ＡII類とする。口縁帯の発達が顕著でなく、体部は長胴で安定した平底をなす。体径に対して器高が高いプロポーションは、後期前半期の特徴を残し、甕Ａ類では最も古相である。甕 A_5は甕 A_4より後出的で、羽咋市柳田うわの遺跡[8]溝状遺構Ａ出土土器に例品が求められる。

いわゆる有段擬凹線文口縁甕である甕（A_6・A_7）を甕AIII類とする。口縁帯が外反し、体部内面がヘラ削り調整される甕 A_7と、口縁帯が直立ないしはやや内湾ぎみで、体部内面がヘラ削り調整されない甕 A_6がある。甕 A_7は該期の加賀甕の典型的なもので、月影式土器に先行する法仏II式土器[9]の有段擬凹線文甕とほぼ共通する特徴をもつ。しかし、能登では傍系甕で、甕 A_6が有段擬凹線文甕の主体をなす形式である。また、甕 A_6と甕 A_7では擬凹線文の施文方法に若干の違いがみとめられる。すなわち、甕 A_6の擬凹線文は、体部外面のハケ調整具と同じ柾目面を利用した板状具によるものと考えられるのに対して、甕 A_7の擬凹線文は専用の施文具を使用していると考えられる。いずれにしても、能登においては甕AIII類とした有段擬凹線文甕の占める割合は小さく全体量の 2 割にも満たない。また、それに伴って波及したと考えられる内面ヘラ削り技法も主流とはなりえていない[10]。

さて、甕Ａ類の型式学的な新旧関係は、甕Ｉ・II類が古く甕III類が新しい。さらにその系譜関係は、甕 A_1→A_2・甕 A_3→甕A_4→甕 A_6・A_7と推定され、層序的にも問題はない。

甕（B_1・B_2）を一括して甕ＢＩ類とする。甕ＢＩ類は、口縁端部がヨコナデにより平縁に面取られる「くの字」口縁甕で、比較的古相を残す 1 群である。口縁部が大きく外反する甕 B_2は該期の甕としては類例に乏しい。近似するものが、羽咋市吉崎・次場遺跡[11]や七尾市細口源田山遺跡[12]など中期（小松期）後半な甕に求められるが、直接系譜的に連続するものとは考えにくい。

甕（B_3・B_4）を一括して甕BII類としたが、甕 B_4は端部に粘土紐を付加して、垂下口縁状に口縁部を強調しており、強いヨコナデにより口縁端部を肥厚させる甕 B_3と手法的属性は異なる。甕 B_4は徳前Ｃ遺跡（第 4 次）出土甕に近似するものがみとめられる以外は、能登では類例の少ないものである。

甕 BIII 類とした甕 B_5は、口縁端部がやや上方につまみあげぎみにヨコナデされ面取られるもので、手法的属性は、甕 BIV類とした甕 B_6と共通する。

口縁端部に粘土紐を廻らし口縁帯を強調する甕（B_7・B_8・B_9）を甕BV類とした。類列としては、押水町上田出西山遺跡第7号土壙・奥原遺跡第2号・7号住居跡出土甕などが知られ、甕B_3・甕B_5・甕B_6とともにこの期の能登の標式的甕である。

さて甕B類は、甕BI類が型式学的にやや古く位置づけられ、他は、甕B_5→甕B_3・甕B_6、甕B→甕B_7・甕B_9と系譜的に移行するものと推定される。層位的には、甕B_8が上・下層から、甕B_3・甕B_6が上層から、他は下層から出土している。

無文系有段口縁甕をC類とし、さらに、口縁の形態・発達状態から、甕C_1を甕CI類に、甕(C_2・C_3）を甕CII類に、甕（C_4・C_5）を甕CIII類に分類した。有段口縁甕においては、口縁帯の発達度がその新旧関係を窺う一応の目安となる。すなわち、新しくなるについて、口縁帯が発達し大きく外傾する。この視点から新旧関係をみると、甕CI類→甕CII類→甕CIII類の順となり、個別的には、甕C_1→甕C_2→甕C_3、甕C_5→甕C_4・甕C_6の形式的系譜関係をみることができる。しかし、層位的には、甕C_1・甕C_3・甕C_5が上層より、甕C_6が下層、甕C_2が上・下層より出土しており、先述した型式学的な序列とやや矛盾する。このことは、これら細別した形式が時間差ではなく、製作者の個性を反映した結果と考えられる。すなわち、古い形態を踏襲して製作された甕と新しい手法を導入して製作された甕が同時存在した事実を意味し、単に形態差のみで製作時の新旧関係をみれないことを示している。また加賀の擬凹線文系有段口縁甕が、凹線文系甕を基調として有段化が進行し、口縁帯が発達をみたのに対して、能登の有段口縁甕は、その影響を受けつつも常に主体をなしてきた「くの字」口縁系甕の口縁部肥厚・発達の延長線上に出現した可能性が強く、口縁帯を強調する意識性に欠如したことも無関係ではない。甕C_1・甕C_2はこうした能登型甕の典型例で、該期の遺跡からの出土例も多く、七尾市国分高井山遺跡[13]、同津向大杉崎遺跡[14]など、能登の月影併行期の甕までその口縁形態が残存する。甕Dも、体部内外面がヘラ削り仕上されるなどやや特異であるが、こうした「くの字」口縁系の有段口縁甕であろう。

甕Eは近江系受口状口縁甕である。能登の該期の遺跡でも近年この種の甕の出土例が増加しつつあり、柳田うわの遺跡、徳前C遺跡などから数例出土している。

さて、一括性の強い上層出土土器を基軸に「製作の同時性」が強い標式的な甕を抽出するなら、甕A_2・甕B_3・甕B_6・甕C_1・甕C_3があげられる。さらに用途面を考慮して、甕A_6・甕B_5・甕C_4の小型甕、甕B_8．甕B_9の大型甕も、他遺跡での供伴関係から同時性が強いものとして付加しておく。

壺形土器

壺形土器は、器形と機能面から、壺A類―いわゆる長頸壺に属するもの、壺B類―有段口縁壺、壺C類―短頸壺、壺D類―有段広口壺に分類、さらにそれぞれを細部の形態差から細別した。総数32個体の形式別内訳（比率）は、壺A類―12個体（37.5%）、壺B類―3個体（9.5%）、壺C類―3個体（9.5%）、壺D類―10個体（31%）、その他―4個体（12.5%）となっており、長頸壺、背段広口壺が主体をなす。特に稲籾貯蔵用とされる壺B類は口縁断片3点のみで、上層一括出土品の中には1点も含まれていないことが、この期を特徴づける事象として注目される[15]。

壺A類とした長頸壺は、いわゆる典型的な畿内第V様式長頸壺とかなり形状が異なる。口頸部

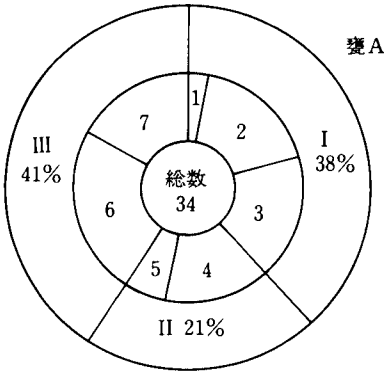
が短く、体部高が高い長胴のプロポーションは、寺沢　薫氏が長胴短頸壺として形式分類しているものに近い[16]。先行する柳田うわの遺跡では、いわゆる畿内第Ⅴ様式の系譜におかれる体部が球状をなす長頸壺と、体部が長胴となる長頸壺の2種が確認されており、後者は寺沢氏のいう長胴タイプの短頸壺であり、壺A類に連続性がみとめられる。こうしたことから、壺A類は畿内長頸壺の退化形式とするより、こうした長胴短頸壺の系譜を引くものと考えた方がよいかもしれない。なお、いわゆる長頸壺は柳田うわの期で消滅するものと思われ、後続する、七尾市国分高井山遺跡、同奥原遺跡からは出土していない。こうした傾向は加賀においても同様で、長頸壺は法仏Ⅰ式期に消滅し、法仏Ⅱ式から月影Ⅰ式期にかけて壺A類が主体をなしている[17]。また壺A_1・壺A_2の器面調整はきわめて粗雑で、ハケ調整痕をそのまま残している。柳田うわの期の長頸壺が入念にヘラ研磨仕上げされるのに対して対象的である。壺A_1の底部は穿孔されるなど、用途・機能面の相異を考えねばならないであろう。これに対して、壺A_5・壺A_6はヘラ研磨仕上げされ、口頸部の調整も入念であり、用途的には前者と異なる機能をもつと考えられる。出土個体数は壺A_5・壺A_6が多く、特に壺A_6はほぼ画一的な形態をとり、本遺跡での主体をなす形式となっている。

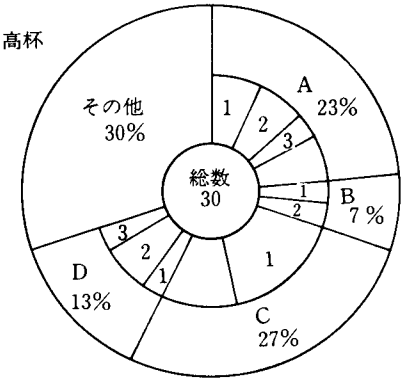
壺B類・壺C類は、それぞれ個体差があり、全体的な傾向性は把握しにくい。系譜的には、壺B_1→壺B_2と推移すると考えられ、壺B_2は月影期に連続して主体をなす有段口縁壺である。壺C_3は柳田うわの期から月影期に連なる系譜関係をもつ小型壺であるが、壺C_1・壺C_2については系譜関係は不明である。

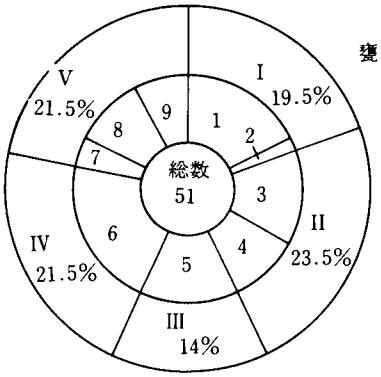
壺D類は有段広口壺で、口縁部に擬凹線をもたない壺D_1と、もつ壺D_2に細別されるが、量的には壺D_1が9個体、壺D_2が1個体と、圧倒的に壺D_1が多く主体をなす。法量的には、口径15cm前後、器高15cm前後を標準とした画一化現象がみとめられる。また、口頸部内外面および体部外

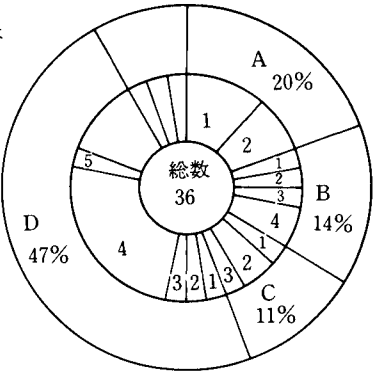
器種	個体数	出土層位	器種	個体数	出土層位	器種	個体数	出土層位	器種	個体数	出土層位
甕 A_1	1	下層	甕 C_1	6	上層	壺 C_1	1	上層	鉢 B_1	1	上層
〃 A_2	6	〃	〃 C_2	4	上・下層	〃 C_2	1	〃	〃 B_2	1	〃
〃 A_3	6	〃	〃 C_3	7	上層	〃 C_3	1	〃	〃 B_3	1	下層
〃 A_4	5	〃	〃 C_4	4	〃	〃 D_1	9	上・下層	〃 B_4	2	上層
〃 A_5	2	〃	〃 C_5	4	〃	〃 D_2	1	上層	〃 C_1	1	下層
〃 A_6	8	上・下層	* C_6	2	下層	高杯A_1	2	上・下層	〃 C_2	2	〃
〃 A_7	6	〃	〃 D	1	上層	〃 A_2	2	上層	〃 C_3	1	上層
〃 B_1	9	下層	〃 E	1	下層	〃 A_3	1	〃	〃 D_1	1	下層
〃 B_2	1	〃	壺 A_1	1	上層	〃 B_1	1	〃	〃 D_2	1	〃
〃 B_3	7	上層	〃 A_2	1	下層	〃 B_2	1	〃	〃 D_3	1	上層
〃 B_4	5	下層	〃 A_3	1	不明	〃 C	5	上・下層	〃 D_4	9	上・下層
〃 B_5	7	〃	〃 A_4	1	上層	〃 D_1	1	上層	〃 D_5	1	下層
〃 B_6	〃	上層	〃 A_5	3	上・下層	〃 D_2	2	〃	〃 E_1	1	上層
〃 B_7	2	不明	〃 A_6	5	〃	〃 D_3	1	〃	〃 E_2	1	下層
〃 B_8	5	上・下層	〃 B_1	1	下層	鉢 A_1	4	上層	E_3	1	上層
〃 B_9	4	下層	〃 B_2	2	不明	〃 A_2	3	上・下層	器台	2	不明

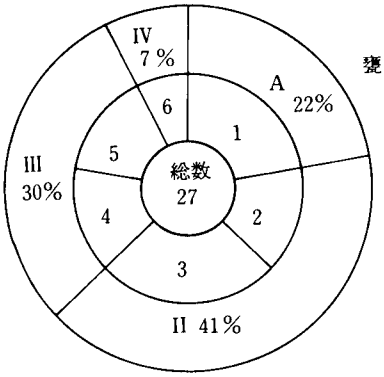
第2表　器種形式別個体数と出土層位（T 18 調査出土土器）

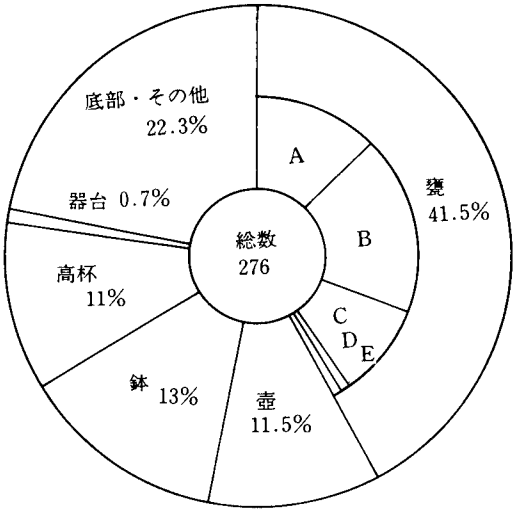


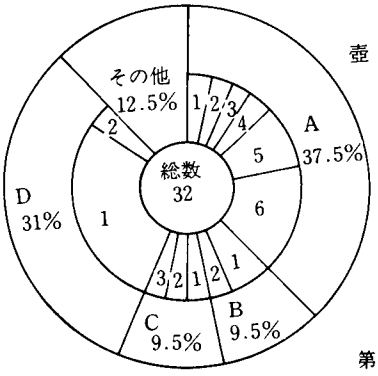












器種別相対比率

※ その他としたものは形式分類不可能なもの、
空欄は細分不可能なもの

第 3 表　器種別組成比率表

面が赤彩され、頸部に対をなす紐通し孔をもつことを通有とするが、セットをなす蓋形土器は出土していない。しかし、やや後出的ではあるが、押水町上田出西山遺跡の谷　幸信氏一括採集品中[18]には土器蓋が伴っており、蓋と一対のものとして使用された可能性が強い。壺D_1は本遺跡においては壺の約30%を占める主要器種であるが、該期の他遺跡では比較的出土例に乏しい。類例としては、国分高井山遺跡第1号土壙出土例、奥原遺跡包含層出土例があり、やや後出的なものとして徳前C遺跡溝状遺構一括出土品中に類例がもとめられる。先行する柳田うわの遺跡溝状遺構A出土品中にはみとめられず系譜的にはこの期に出現・盛行するものと考えられるが、富山県上市町江上A遺跡[19]、金沢市西念南新保遺跡[20]など他地域ではやや先行して出現しているようである。また、壺D_2は、能登では類例に乏しいが、北陸の他地域では比較的出土例が多く、系譜的には、後期前半期にまで遡ることができる。類例は、西念南新保遺跡、富山県上市町飯坂遺跡[21]5号方形周溝墓、同江上A遺跡SD01・SD03溝などから出土している。

さて、壺形土器は層位的には、壺A_1・壺A_4・壺C_1・壺C_2・壺C_3・壺D_2が上層より、壺A_2・壺B_2が下層より、そして壺A_5・壺A_6・壺D_1が上・下層の両層より出土している。上層出土品は壺C類以外はすべて完器であり、少なくとも「使用の同時性」が強いと考えられるものである。中でも、壺A_5・壺A_6・壺D_1は出土量の上からも本遺跡の主体をなす標式的な壺であり、「製作の同時性」も合せもつ。これに各1点のみの出土であるが、壺A_1・壺A_4を加え、標式的壺形土器群と考えておきたい。これらに伴う蓋形土器は、出土が皆無であるため不明であるが、使用されたとするなら他遺跡例より、土器蓋が使用されたものと推定される。ここでは蓋形土器の使用を必要としない用途、すなわち貯蔵以外の食物供献・会食などの即時的な使用を考えねばならないであろう。これは、上層での土器一括遺棄行為の性格をみる上でも無視しえない事実である。

高杯形土器・器台形土器

高杯形土器は脚部の形態差から4類9形式に細別したが、杯部の形態差からでは2類に大別される。段部に稜を作って大きく外反する該期有通の形態をしめす高杯A_1・高杯A_2・高杯A_3・高杯A_3・高杯B_1・高杯C_1と、杯部が有段浅鉢状を呈する高杯B_2・高杯D_2である。両者は系譜上異なる形式に大別される性格のもので、前者は正統な高杯の系統におかれ、後者は、有段浅鉢の出現と密度な因果関係のもとに創成された器種と考えられ、脚台付浅鉢形土器として高杯形土器と区別した方がより適切かもしれない。

高杯D_3はいわゆる小形高杯である。古墳発生時の小型高杯については、系譜とその展開を主とした比田井克仁氏の論考[22]がある。氏の分類によると本例は杯部が椀状を呈するA類に属することになるが、脚部の形態が氏のいうA類細分のいずれにも属さない類例のないものである。小型高杯A類は、中部瀬戸内地方の上東式期を初現として、畿内・東海をへて東国に展開したと考えられているが、本例のような脚部形態については展開・系譜の中では特例となるようである。全国的な小型高杯の展開の影響下に独自に創成されたものと考えておこう。

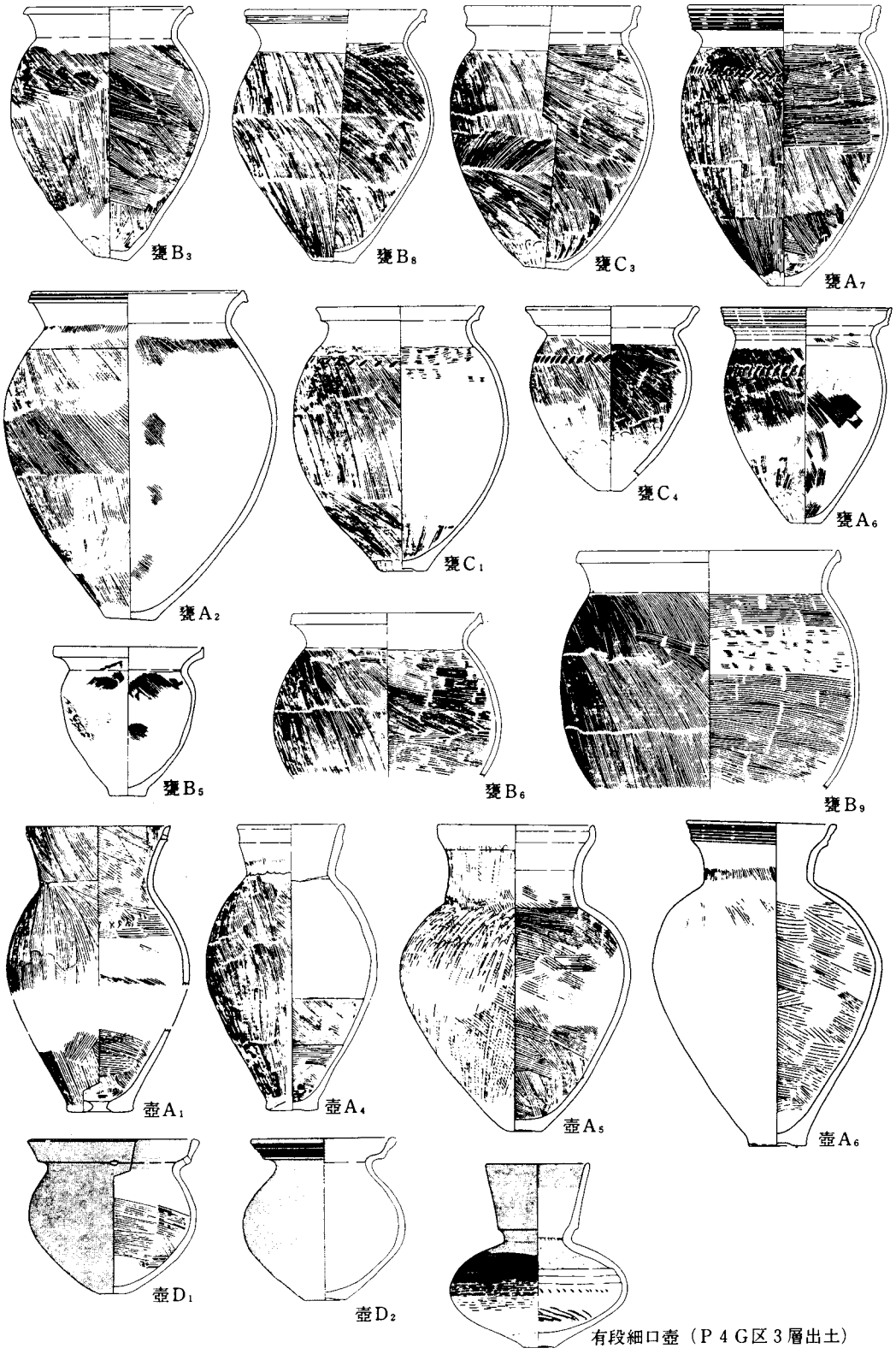
さて、高杯A類は筒状をなす脚柱部をもつものである。この種の高杯では、脚部が有段となる例が、柳田うわの遺跡溝状遺構A、松任市法仏遺跡[23]6号住などやや先行する土器群の中にもとめられるが、本遺跡ではすべて無段である。系譜的には無段のものが古く位置づけられることか

ら、本遺跡においては、有段化現象は顕著ではなく、古形態が長く継承されたものと考えられる。高杯A_3は脚端部のかえしが大きく、杯部に把手を有する。近似するものが柳田うわの遺跡溝状遺構A、金沢市西念．南新保遺跡B—2区、富山県上市町江上A遺跡SD03溝など北陸地方の該期遺跡および京都府丹後町大山墳墓群[24]から出土している。しかし、その分布圏は日本海沿岸域においても比較的限定されるようで注目される器種である。中でも大山墳墓群では7例と出土高杯類の中ではその占める割合が高く、時期的にも後期前半代のこの地のものと比較して古いことから、その出現系譜は丹後地方にあり、北陸地方に伝播したものと考えられる。西念・南新保遺跡B—2区出土例は後期中葉に比定され、本遺跡出土例は最も新しい形式である。なお、端部を上方に折り返えし加飾する手法は、奥原遺跡、徳前C遺跡第Ⅰ様式土器などみとめられ、本遺跡と同期の法仏II式期に最も盛行し、月影Ⅰ式には一部の祭式土器をのぞいてほとんどみとめられなくなる。

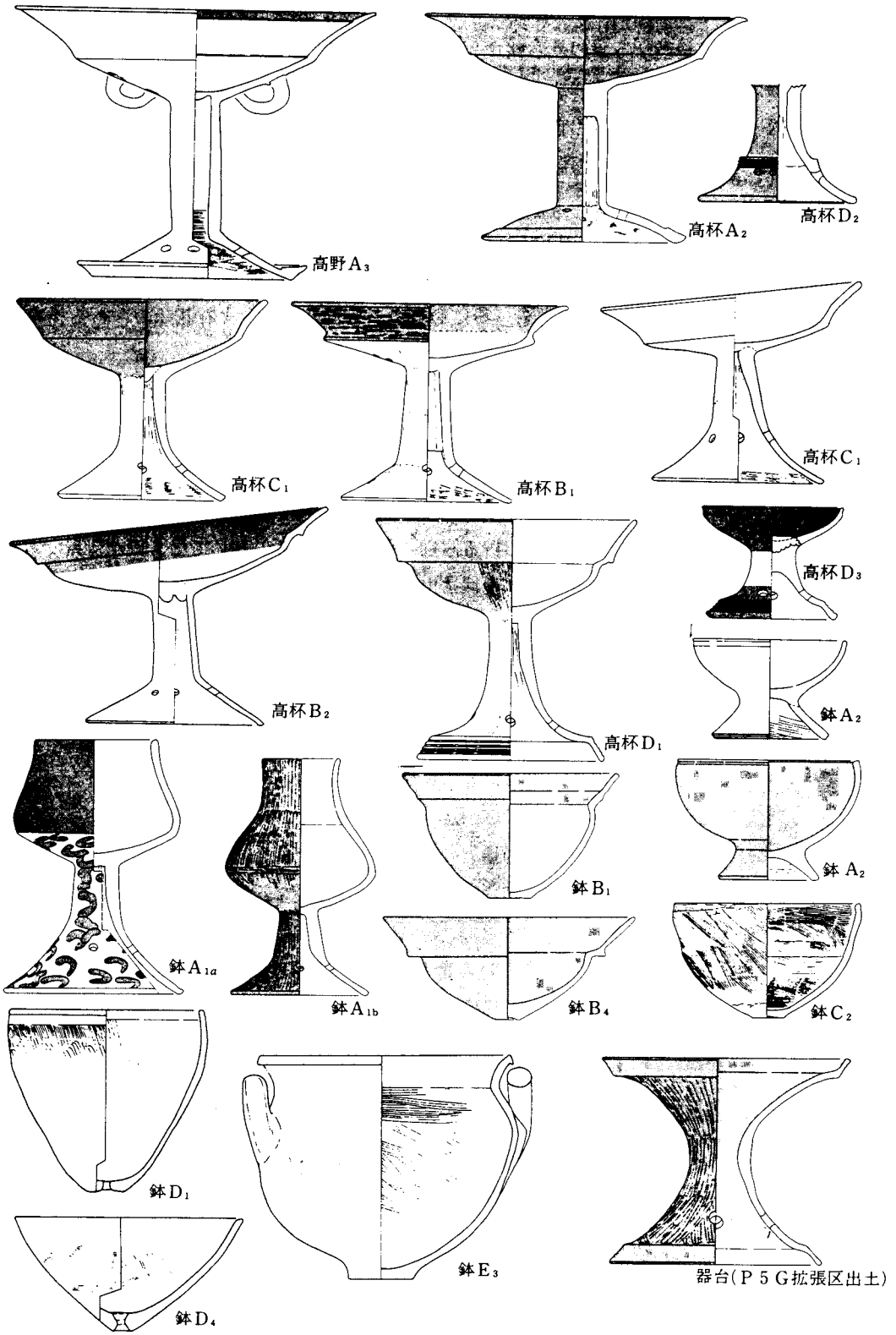
高杯C類は出土個体数が最も多く本遺跡の主体をなす高杯である。脚柱部が筒状に近い高杯B類の脚は高杯A類と高杯B類の折衷形をなすが、形式的には高杯C類に近い。高杯の脚部は時期的に新しくなるに従って体高が低くなり矮小化する傾向にある。同時に杯部においては、口縁部の発達・外傾度が顕著となり、器形の新旧関係をみる上でのひとつのメルクマールとなる。法仏Ⅰ式期においては体部と口縁部の比が2対1、法仏II式期においては3対2、月影Ⅰ式期においては1対1あるいは口縁部がやや長い、月影II式期においては口縁部が体部長をはるかにうわまるのを一般的な基準とする。なお、高杯C類は、鳥屋町大槻3号墓[25]、西念・南新保遺跡G区出土土器など後期前半の土器にその祖型がもとめられ、高杯A類とともに北陸の弥生後期高杯の主体をなす形式となっている。高杯A類は前述したように、丹後地方と強い関連性をもって出現した北陸独自の形式と考えられるのに対して、高杯C類は畿内第Ⅴ様初頭（西ノⅠ式）にその系譜がもとめられる形式である。また、東海地方の山中期の高杯に近似するものがみとめられこの地方との関係も無視できない。

高杯B_2・D_1は、西念・南新保遺跡B—1区、法仏遺跡3号住、福井県敦賀市中遺跡[26]、富山県上市町江上A遺跡SD03溝出土高杯に類例がもとめられる。西念・南新保例を初現とし、その系譜は月影式土器に継承され、主体的な高杯形式となっている。前述したように、杯部が有段浅鉢形土器と同形態であり、その系譜変遷は同様である。ただ、山陰地方の後期高杯に近似する例があり、比較的出土例も多く、その関連性に注目しておきたい。高杯D_2の有段棒状脚は、脚柱部が円筒状をなさず円錐状を開脚するタイプで、段部の幅も狭くなっている点などこの種の脚では比較的新しいタイプに属し、月影期に退化形態が継承される。

さて、これら細分した高杯の各形式の前後関係であるが、層位的には高杯A_1・高杯C_1が上・下層から、他はすべて上層から出土している。特に上層の出土状態から、これらは同時期に並べられて遺棄された可能性が強いことは本文中に述べたとおりで、同期の所産と考えてよい。量的には高杯C_1が8点と抜きでており、他は1～2点の出土であることから、高杯C_1を標式的タイプとし他は器形の多様性と考えておく。また、該期の他遺跡に比べてやや古い様相を残す高杯A類の出土比率が高いことや、個々の高杯がそれぞれ個性的であるも大きな特色である。これは上層における土器一括遺棄行為の性格に基因するものと理解しておきたい。



第127図　鹿首モリガフチ遺跡T 18調査区出土の標式的土器（S＝1/6）



第128図　鹿首モリガフチ遺跡T 18調査区出土の標式的土器（S＝1/6）

高杯形土器、鉢形土器の出土量が該期の他遺跡例に比べて極めて多いのに対して、器台形土器と考えられるものは総数275点のうち断片2点のみであった。これは、土器一括遺棄行為に器台形土器が使用されなかった結果によるものと推定される。出土した2点の破片は、いずれも該期の器台形土器通有の器受部と脚台部が相似形をなす中型筒胴タイプの器台断片と考えられ、その例品が本遺跡P5G拡張区より完器で出土している。

鉢形土器

鉢形土器は総数36点出土しており、機能と器形から5分類し、さらに17形式に細別した。その類別比率は、A類—7個体（20%）、B類—5個体（14%）、C類—4個体（11%）、D類—17個体（47%）、E類—3個体（8%）である。特にD類とした漏斗状をなす有孔鉢の占める比率が極めて高いことが注目される。

鉢A_1は比較的高い脚部をもつ台付鉢である。体部がカップ状をなす鉢A_{1a}と短頸壺に近い鉢A_{1b}があり、鉢A_{1b}は台付壺の系譜においた方が適切かもしれないが一括して取扱った。類例としては、西念・南新保遺跡、羽咋市吉崎次場遺跡、富山県江上A遺跡出土例などがあるが。比較的類例に乏しい器種である。他地域では丹後地方に類例がみられる。しかし体部に帯状突帯をめぐらすいわゆる台付装飾壺は北陸地方における該期の特色づけるものとして出土例が豊富である。これは、畿内から伊勢湾沿岸にかけての地域に出現した中期後半の器台結合壺の系譜におかれるもので、鉢A_1と区別して考えねばならない。また、有段細頸壺で体部に帯状突帯をめぐらし脚台をもつものがあるがこれは、先の器台結合壺と系譜が異なり、この影響下に月影期に出現する器種と考えられる。その祖型となったのは、該期に盛行した長い頸部をもつ有段細頸壺であろう。しかし、一方ではこれらの系譜の異なる台付壺の諸要素が混合した台付装飾壺が存在することも事実で、いわゆる北陸型とされる台付装飾壺の性格についての理解を複雑にしている。

鉢A_2は椀状の体部に低い脚部を取付けたもので、北陸地方では比較的出土例に乏しい器種である。系譜的には山陰地方の低脚杯や山陽地方の小型高杯に連なるものと考えされ、北陸ではこの期に出現し、月影期・古府クルビ期にまで継承されるが、主要な器種とはなりえていない。能登では本例が初例である。

鉢B類は北陸の後期弥生土器を特色づける主要器種である有段浅鉢形土器である。北陸で自生した器種と考えられ、その初現は加賀市猫橋遺跡、西念・南新保遺跡などの後期前半期の土器群に求められる。系譜的には、前半期の体部が比較的深く安定した底部をもつものから、体部が浅く小さく不安定なものにと推移し、月影期の小型の有段鉢へと継承される。有段口縁甕と同じく口縁部の発達が新旧のメルクマールとなっている。また、古形態のものや北陸西半部に分布するものには口縁部に擬凹線文が施される例が多いなど、その傾向性は甕・壺類と同様である。本遺跡では細い形態差から4つに細分した。形態的には、下層出土の鉢B_3が古く、上層出土の鉢B_1・鉢B_2・鉢B_4は同時期における個体差とみられる。鉢B_4は、その類例が奥原遺跡2・4号住など該期の土器群にみとめられ、標式的な形態と考える。

鉢C類は壺形土器の体部下半部を切り取った形態をなす鉢形土器で、この種のものとしては比較的大ぶりである。鉢C_1は精製品で柳田うわの遺跡溝状遺構A出土品の中に例品がある。鉢C_3は

不安定な漏斗状をなし、鉢D類と形態的に近いが、底部には穿孔がみられない。

鉢D類は底部に穿孔を有するものを一括した。漏斗状をなす穿孔鉢は畿内の後期にみとめられる器種で甑と考えられているが、あまりにも容量が小さく疑問視するむきもある[27]。ただ、その形態から、壺・甕など器種とセットで使用されて機能するものであることは確実で、本遺跡例では甕の上に乗せられた状態で少なくとも2点以上出土している。こうした例は羽咋市寺家遺跡[28]の弥生後期の土壙状遺構でも確認されており、甕とセットで使用されたことはほぼ確実視される。しかし、こうした出土状態にもかかわらず、その周囲には焼土・炭化物など焚火を伴う炊飯行為を行った痕跡は全くないことから甑として機能した確証はない。また、この種の鉢は、器面調整が入念で、内外面ともヘラ研磨仕上されている例が多く、ススの付着や2次焼成痕が全くみとめられないことも特徴のひとつである。こうした事例から、何か液体物を濾過抽出する機能をもったものであった可能性も強い。さて、鉢D類は、畿内第V様前半（西ノ辻I式）の有孔鉢にその系譜が求められるもので、北陸では、西念・南新保遺跡B—1区出土例など後期中葉に出現し、金沢市無量寺B遺跡[29]、奥原遺跡第2号住など法仏II式期に盛行し、金沢市塚崎遺跡[30]、小松市白江ネンブツドウ遺跡[31]など月影II式期に継承される。形態的には、器高が高い鉢D_1および浅い鉢D_4の2タイプのものが主体的で、時期的形態差はあまりないようである。本遺跡では鉢D_4が9点と最も多い。鉢D_3・鉢D_5は類例に乏しく、個有の多様性として理解しておきたい。

鉢E類はその他の類を一括した。鉢E_1・鉢E_2はくの字に外反する口縁部をもつ粗製の鉢で小型甕に近い。環状把手をもつ大型の鉢E_3は比較的類例の少ないもので、富山県江上A遺跡SD01溝、奥原遺跡、金沢市北安江遺跡などから数点出土しているのにすぎない。

さて、鉢形土器はその機能素が多様であるため、その分類もそれに対応して細分化される。形態および層位から同時性を、個体数から普遍性を考察し、本遺跡の標式的鉢形土器を抽出するなら、鉢A_1・鉢A_2・鉢B_4・鉢C_2・鉢D_4があげられる。これに、該期の他遺跡伴出例から、1点のみであるが鉢B_1・鉢D_1・鉢E_3を付け加え、該期の標式的鉢形土器群としておきたい。

(4) ま と め

前述した分析結果から抽出した鹿首モリガフチ遺跡（T18区）出土の標式的土器群は次のとおりである。

甕形土器——甕A_2・甕A_7・甕B_3・甕B_5・甕B_6・甕B_8・甕B_9・甕C_1・甕C_3・甕C_4

壺形土器——壺A_1・壺A_4・壺A_5・壺A_6・壺D_1・壺D_2

高杯形土器—高杯A_1・高杯A_2・高杯A_3・高杯B_1・高杯B_2・高杯C_1・高杯D_1・高杯D_2・高杯D_3

これに、P5G拡張区出土の器台形土器（第61図9）およびP4G調査区第3層出土の小型有段細口壺（第87図59・60）を追加し、器種構成上の欠如を補っておく。ただし器種によっては、微妙なところで細部の形態が異なるため、その細分は多岐にわたった。

これら抽出羅列した土器群をもって型式設定するには、再度これらの諸形式の共通属性を系譜関係に応じて整理・統合する必要がある。こうした検証作業ぬきにしての型式設定は、単に遺

構の一括遺物を第1義的なものとした土器群の羅列にすぎなく、〝鹿首的なもの〟がより不鮮明になるにすぎない。としても、能登における該期の土器様相の実体が不明瞭な現段階(32)においては、これらの土器群が基本的資料たりうるものであることは、出土状態およびその出土量の豊富において確かであろう。型式学的な属性分析の不備を承知の上で、これら一群の土器を「鹿首式土器」として提唱したい。地域性を前提とした土器型式はあくまでより純粋であるべきであることは前述したとおりである。これらの中から、型式属性としての不純分子は将来的には除外されるべきであり、また追加されるべき器種形式もあるであろう。これらについては、今後の証査にゆだねておきたい。

註

(1) 擬凹線文を基調とした「北陸型土器」は北加賀でいう法仏Ⅰ・Ⅱ式土器の段階で成立をみたと考える。法仏Ⅰ・Ⅱ式土器は汎北陸的に分布し、一部は近江地方にまで流入している。谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』昭和58年

(2) 山内清男「縄文土器型式の細別と大別」(『先史考古学』第1巻1号) 昭和12年

(3) ○○式土器と呼称する場合、「型式」でとらえる研究者と「様式」でとらえる研究者が存在し、概念の一致をみていない。主に縄文土器研究者は「型式」を使用し、弥生土器研究者は「様式」を使用する場合が多い。こうした使用上の問題についての学史的経緯については、寺沢　薫氏や、佐原　真氏が近著で述べられている。〝「様式」はあきらかに「型式」の高次概念であり、前提として具体的な空間と時間を属性として内包している。〟として、「様式論」で構造的に体系化しようする寺沢　薫氏らの土器論はそれなりに理解できるが、土器群組成の個有の特質を規定する概念としての「型式」にこだわっておきたい。

寺沢　薫「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」『六条山遺跡』昭和55年

佐原　真「弥生土器入門」『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社刊　昭和58年

(4) 南　久和「一括遺物について」(『考古学研究』第28巻第1号) 昭和56年　他

(5) 佐原　真編 (『弥生土器』日本の美術第125号) 昭和51年

(6) 西野秀和・浜野伸雄・平田天秋『鹿島町徳前C遺跡（第4次）発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター　昭和58年

(7) 橋本澄夫・西野秀和・平田天秋『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　昭和57年

(8) 谷内尾晋司「柳田うわの遺跡」『羽咋市史・原始古代編』　昭和48年

(9) 註(1)に同じ。

(10) 内面ヘラ削り技法は、後期前半期には波及し、有段口縁甕主体に普遍化したと思われるが後期末には減少する傾向にあり、本資料よりやや後出的な徳前C遺跡大溝出土甕類ではほとんどみとめられない。逆に加賀では月影Ⅰ・Ⅱ式土器甕のほぼ9割以上が内面ヘラ削りされており、土器相の地域差が明瞭にあらわれている。

(11) 浜岡賢太郎・谷内尾晋司・三浦純夫『羽咋市吉崎・次場遺跡第3次調査概報』羽咋市教育委員会　昭和51年

(12) 浜岡賢太郎・土肥富士夫・桜井憲弘他『細口源田山遺跡』七尾市教育委員会　昭和58年

(13) 土肥富士夫他『国分高井山遺跡』七尾教育委員会　昭和59年

(14) 橋本澄夫「古墳文化」『七尾市史（資料編4巻）』昭和45年

(15) こうした現象は地域的・遺構の性格的なものではなく、時期的な土器様式の大きな変革を意味するものであることが丸山竜平氏によって指摘されている。稲籾貯蔵用壺は畿内第Ⅴ様式末期にあたる上六万寺・北鳥池下層期を境に激減し、消滅するとされ、地域的には近江や播磨・吉備・出雲で、同時にこうした現象を進行するという。こうした壺の消滅は余剰稲穀の管理・保管方法の変革に基因するものとし、この期に古墳出現に体現される集団関係の大変革があったとされる。本遺跡でも同様の現象がみとめられることは、関係地域との土器年代の比定において参考となる。

丸山竜平「弥生式土器の終焉—稲籾貯蔵用壺の消滅と古墳文化の成立基盤—」『古代研究10号』昭和51年

(16) 寺沢　薫「大和における第五様式土器の細別と二、三の問題」『奈良市六条山遺跡』昭和55年

(17) 註(1)文献参照

(18) 三浦純夫『上田出西山遺跡』押水町教育委員会　昭和55年

(19) 富山県埋蔵文化財センター編『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器・石器編―』上市町教育委員会　昭和57年

(20) 宮本哲郎・栃木英道他『金沢市西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会　昭和58年

(21) 註(19)に同じ

(22) 比田井克仁「古墳発生期における小型高杯について」(『金鈴』22号) 昭和55年

(23) 註(1)文献参照

(24) 平良泰久・黒田恭正・常盤井智行他『丹後大山墳墓群』丹後町教育委員会　昭和58年

(25) 石川考古学研究会「鳥屋高階古墳群分布調査報告」(『石川考古学研究会々誌』第20号) 昭和52年

(26) 山口　充他『北陸自動車道関係遺跡調査報告書第14集―中遺跡―』福井県教育委員会　昭和55年

(27) 佐原　真『弥生土器』日本の美術125号　至文堂　昭和50年

(28) 小嶋芳孝『寺家1980年度調査概報』石川県立埋蔵文化財センター　昭和56年

(29) 宮本哲郎他『金沢市無量寺B遺跡』金沢市教育委員会　昭和57年

(30) 吉岡康暢・小嶋芳孝他『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』昭和51年

(31) 田島明人他『漆町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　昭和57年

(32) 最近の傾向として、甕形土器を中心に、地域の独自性を抽出しつつ、他の地域との横の関係を追求することで、土器様相の地域的転移のあり方を把握しようと研究動向が模索されつつある。当地においても、各小地域単位にかなりの相差があることが明らかにされ、三浦純夫氏（註(18)文献）や土肥富士夫氏（註(13)文献）らによって、能登での編年が確立されつつある。ただ、調査例が少なく、その実体がいまひとつ明らかではない。しかし、加賀とは異なる土器圏が確実に存在し、越中東部や佐渡・越後地方に大きな影響を与えている。(坂井秀弥『内越遺跡発掘調査報告書』新潟県教育委員会　昭和58年)たとえば、甕形土器を例にとると、当遺跡期(法仏期)の能登と加賀とでは、この期を特色づける有段系甕の出土比率が大きく異なっている。特に有段擬凹線文甕にその差は顕著であり、加賀では全体の6割を超えるが、能登では2割にも満たない。逆に能登では伝統的な「くの字」口縁甕が半数近くを占め、主体をなしている。また、体部内面のヘラ削り調整は普遍化せず、西日本での全体的な内面ヘラ削り傾向の中で特異な立場を示している。同様に、他の器種の有段化現象についても比較的緩慢で、鹿首モリガフチ遺跡では主要な要素となりえていない。

地域	遺跡名	構成比 (%)	個体数	備考
能登	鹿首モリガフチ (T18)	16.3 / 24.4 / 43.9 / 15.4	114	法仏II期併行
〃	奥原	13.9 / 30.4 / 49.4 / 6.3	79	法仏II期併行
〃	柳田うわの	21.4 / 28.6 / 43.0 / 7.0	28	法仏I期併行
〃	徳前C(第1様式)	10.4 / 25.4 / 38.8 / 25.4	67	法仏I・II期併行(受口20.9%)
〃	国分高井山	16.0 / 42.0 / 40.0 / 2.0	60	法仏II期～月影II期併行
加賀	西念・南新保	41.0 / 15.0 / 31.0 / 13.0	869	後期前半～法仏II期併行
〃	法仏(I式)	60.4 / 21.5 / 13.0 / 5.1	181	
〃	〃 (II式)	58.5 / 24.0 / 10.1 / 7.4	258	
〃	無量寺B	60.9 / 17.4 / 19.3 / 2.4	115	法仏II期～月影I期
〃	塚崎(I式)	20.0 / 35.0 / 35.0 / 10.0	20	法仏I期
〃	〃 (II式古)	21.3 / 38.2 / 34.9 / 5.6	89	法仏II期
〃	〃 (II式新)	38.9 / 44.4 / 14.4 / 2.3	90	月影I期
〃	敷地後方	44.1 / 33.8 / 13.3 / 8.8	68	法仏II期併行
越中	江上A (SD01・02・03)	11.2 / 36.3 / 39.1 / 13.4	179	法仏I期併行
〃	魚躬	23.4 / 25.5 / 44.8 / 6.3	47	法仏II期～月影I期併行
〃	囲山	15.4 / 11.5 / 61.5 / 11.6	26	法仏I期併行
〃	串田新 (1・2・4号住)	19.0 / 40.5 / 40.5	42	法仏II期～月影I期併行

凡例　口縁形態　有段擬凹線文　有段無文　くの字系　その他

第4表　遺跡別甕形土器口縁形態構成比表

第2節　鹿首モリガフチ遺跡の遺構とその性格について

本遺跡で検出した遺構は、台地部分での竪穴住居跡8基（内、4基分については同一地点での建替えないし拡張を行うものであり、便宜上8基とす）・掘立柱建物4棟（内、不確定要素1棟を含む）・土坑14基・溝状遺構7条等であり、平地水田部分（下）では土坑2基・小溝状跡1条と、自然生的な流路とがあった。そのなかで、遺物群を内包してとりわけ中心的に捉えられるものは、台地上の住居跡群と沖積地での流路とその生成にあろうかと思われるが、生産（的）基盤面に対応する沖積平地部とその流路への係わりと変遷は、台地上集落の推移・構成といった様相面からも表裏一体とした総体的な具象として把握されるものと考えたい。

まず、竪穴住居跡から概略的に整理を行うと、平面プランでは隅円方形と胴張りの楕円形プランの2形態がある。隅円方形プランをとるものは、台地奥部(7G区)での第1号～3号竪穴住と、先端部（6G区）に近い第4号竪穴住とこれに近接して4基相当の建替えが想定されたうちの第5・6号竪穴住の計6基を占める。従って、楕円形プランをとるものは、4基相当重複中での第7・8号竪穴住とする2基である。

次に床面積についてみると、第1号～第4号竪穴住では約8m²～16m²に収まるのに対して重複の第5号～8号竪穴では約40m²～60m²に達し、前者に比して約2倍強の大型竪穴住居跡とすることができる。県内で、台地上集落のほぼ全体にわたる調査が行われた塚崎遺跡の検討例[1]に基づけば、最小約8.7m²・最大約109m²の計26基の竪穴住居跡が検出され、床面積40m²を境として小型・大型の分類が可能なものとなっている。ただ、攻玉生産を内在した竪穴集落とみられることからその比較には妥当性を欠くかもしれないが、一応の目安として考えても本遺跡第5号～8号住居跡は大型とすることには疑いを得ず、しかも台地の先端部に位置して、小谷平野の上・下流部を視望しうる好地の占地であることを除外したとしても、当該集団（住居）中での規模面の格差はその優位性ないしは特殊性として充分認めることができると想う。

これらの竪穴式住居跡が営まれた編年的位置関係については必ずしも明確にはなしえなかったが、比較的純粋に土器の伴出関係が捉えられた第2号～5号竪穴住では、ほぼ塚崎III式（従来よりの月影式に対応される前掲塚崎遺跡）～月影式の直続型式として最近その設定作業が進められてきている古府クルビ式期の時期に包括される、当該での一時期性の強い構成にかかると思われる。ただし，重複状態にあった第5号～8号竪穴住では、前後関係を明らかとする確証を得ていないが、弥生～古墳時代にいたる竪穴住居跡の平面プランでの一般的な推移の傾向性という観点にたてば、円形タイプから方形タイプへの指向性が認められ，また、包含層中出土として取り扱った台地上の土器群の大部分は、当初、台地南斜面部の凹地にあたる土器廃棄場かともみていた当該地点からの出土であり、ここではくの字状口縁甕形土器の端部のつまみあげあるいは端部を幅せまい肥厚帯として1条ないし2条程度の擬凹線文を巡らす、畿内弥生第Ⅴ様式にやや後出的な一群として弥生終末頃の年代観が与えられている羽咋市柳田ウワノA溝状遺構[2]出土の類品も数点含まれ、最新的土器では畿内布留系タイプの甕形土器が出土している金沢市高畠遺跡（高畠式）[3]期あるいはこれに先出的な古府クルビ式[4]頃に考えられている小型丸底壺も出土している

ので、上記土器型式の年代観に従って、第5号～8号住居跡では弥生末葉頃から古墳時代前期後葉頃にかけての土器型式で3ないし4期頃の営みであったと想定されるのではあるまいか。

なお、掘立柱建物とした第1号～3号建物（第4号については先に不確定としている）については、第1・2号竪穴住居跡と重複関係にあるが、時期的にはほとんど不明といえる。ただ第2号掘立柱建物柱穴には、第2号竪穴住居跡の壁体との切合い関係にあり、後出的な可能性が強いとはいえるが埋土の状況からは峻別できていない。第2・3号掘立柱棟を小型の倉庫状の建物となる可能性も一応考えておきたいが、基本的な問題としてこの2棟には遺存状態に難点があり、極めて不鮮明に加えて出土土器・棟数・配置関係・沖積部の状況（後述）・第3号棟との関係等と照応した場合、方形竪穴住居跡群に直続的に連続するとは容認しえず、むしろ後述する側面からみれば先出的な楕円形竪穴住居跡に同伴する可能性さえもちえるものであり、現状では確実な建物であるかも含めて保留としておきたいが、第1号掘立柱建物は柱穴内覆土からも台地上の他ピットと区別され、竪穴住居跡との切合からも確実に後出した、柱穴掘方約50cmのしっかりとした円形タイプをなし、調査着手以前の踏査では須恵器細片1点も記憶されていることからみて、竪穴集落（団）の廃棄後のある時期を経た段階と推測されるので、6C～7C前半頃かと予想して以後の調査で検証されるに委ねておきたいが、これらの観点に基づいて、台地部分と沖積平地調査区部分との対応関係についての概略を整理すると、以下の表（第5表）のように想定される。

<table>
<tr><td></td><td>縄文晩期～弥生中期</td><td colspan="2">弥生後期</td><td>古墳前期</td><td>古墳中期</td><td>古墳後期～以降</td></tr>
<tr><td></td><td>（下野式～小松式）</td><td colspan="4">柳田ウワノ
A溝 ―― 高畠式</td></tr>
<tr><td rowspan="2">台地部調査区</td><td></td><td colspan="4">楕円大型竪穴（7・8号）
方形大型竪穴（5・6号）
方形小型竪穴（1～4号）</td><td>掘立柱建物（第3号棟）</td></tr>
<tr><td>土壙2基
小溝状跡
流路ないし凹地</td><td colspan="2">沖積埋没</td><td>L字状流路の出現
T－18区土器配列（祭祀？）</td><td>流路埋没</td><td>直進流路の出現と埋没</td></tr>
<tr><td></td><td>I－A期</td><td colspan="2">I－B期</td><td>II－A期</td><td>II－B期</td><td>III期</td></tr>
</table>

第5表　遺構等推移関係対応想定表

沖積部（水田部調査区）で先駆的な縄文晩期（か）‥弥生中期の遺物と土坑が検出されたI－A期には、台地上ではその痕跡はみいだせていない。あるいは、近年来東日本各地で指摘されてきている「性格不明の落込み」[5]に類似した内容をもつ、地山質盛土状遺構とも仮称される不整形で大型土坑状の第3・5号土坑として取り扱ったこれらの、竪穴住居跡等に確実に先行するものの

他は全く不明である。この沖積部では、Ⅰ—A期の様相をかなり大半に変更させる自然木と土砂の急激的で厚い沖積作用に瀕した次のⅠ—B期を迎え、間断的な一時期があったと予想されるが、この堆積による嵩上げ後に始まるII—A期のL字状流路の出現に伴って、台地上ではその先端部に占地した大型の楕円形竪穴住居跡が端緒として現れたものと想定され，これとほぼ同時期に推測されるL字状流路の肩部（T—18区）では、意識的に据え置かれたと考えられる弥生終末頃の同一型式の枠内で把握される、祭祀的様相の濃い土器群が認められる。この土器群の据置的状況では，使用形態の主たる異なりのある規制的なまとまりをもった4群の構成によったものとも推されることから、土器配置行為が当該台地に直接係わっていった一つの単位集団のみによって行われているとは想定し難い面もあり、複数の単位集団の営為を示唆するものがある。

この期を境として、台地上では竪穴住居跡の継続化が認められると考えるが、楕円形大型竪穴住居跡の拡張（第7号か）→方形大型竪穴住への建て換え（第5・6号か）と加えて方形小型竪穴住（第2・3・4号等）の形成などによって示される、古墳時代前期前葉頃～中葉頃（前掲月影式～古府クルビ式）にかけての安定的盛期は、生産性面での安定あるいは増幅にも証引されているものと考えたい。しかしながら、この安定増幅期に到来したと考える台地上竪穴集団は、II—B期に至るや忽然とその姿を消している。このことは、台地及びII期L字状流路中の最新土器として示し得る小型丸底坩（壺）がそれぞれに伴いかつ、下限となる同時性が認められることを根拠とすれば、Ⅰ—B期の急激的な沖積作用を彷彿させるII—B期L字状流路の過激な濁流の伴ったとみる完没を直接的な契機とし、流路の変動あるいは沖積部（生産基盤面）自体の打撃的変貌が、再生産への保全と意欲をはるかに凌駕した災害であったことを推測させると同時に、台地上の当該集落の廃棄（移動）をよぎなくさせた要因の主体であったと考えられないだろうか。

従って、先駆的小集団の沖積部での痕跡[6]→埋没→L字状流路出現[7]←→竪穴住居の台地への占地・流路際での祭祀的営み(痕跡)[8]→竪穴住居の増加[9]→流路の埋没←→台地上からの竪穴集落(住居）の消失という一連的かつ連関的なあり方には、極めて沖積部の状況（自然性）に影響された動向として、あるいは準拠した動機的側面からの推移としても捉えられるものと想われる。

註

(1) 小嶋芳孝 「建物の構造と集落構成」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団 1976年

(2) 谷内尾晋司 「柳田ウワノ遺跡」『羽咋市史 原始古代編』羽咋市史編纂委員会 1973年

(3) 橋本澄夫 『金沢市高畠遺跡』金沢市教育委員会 1975年

(4) 橋本澄夫・高橋裕 「金沢市古府クルビ遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書III』石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団 1976年

(5) 能登 健 「発掘調査と遺跡の考察—いわゆる性格不明の落ち込みを中心として—」『信濃』第26巻3号 信濃史学会 1974年

(6) 実相的には極めて不明であるが、弥生時代中期中葉頃（小松式以前）に考える急激的沖積作用（Ⅰ—B期）による被覆以前では長期に亘る沖積部面の安定状態が推測でき、最古の遺物に想定される籃胎漆器出土層面やトチの実を内包した4G区第1号土坑検出面より−2mの深度（標高約2m地点となり、以下は未確認）まで植物遺体を含まない青白色砂～灰白色粘土層が続いている。従って、これらに先行する時期では沖積作用の穏当な段階が想定されて、貯蔵穴かとも考えられる第1号土坑と籃胎漆器が対応するものと考えれば、採集経済を主たる生産手段とした縄文晩期の氏族小集団の先駆的先住性も可能性としては充分存在する。ただ、この他に

畿内弥生第3様式期に考えられている小松式土器にやや先出的な土器数片もこれらと近接し、一体的(一面的)な状態で出土しているので第1号土坑の帰属をめぐっては、不確定なものといえる。しかしながら、いずれにせよこの弥生式土器の段階では北陸でも農耕社会へ大きく傾斜する時期に想定されており、北陸の第1様式(柴山出村式)とされる縄文文臭が強く留める一群とは器形的にも脱皮した様相が伺えるものでもあり、また、小松式の段階では潟湖あるいは河川を擁する広範な平野部へ進出した遺跡と集落規模の大きさなどによる農耕文化の定着～拡大化(橋本澄夫『七尾市奥原遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1982等)が指摘されているものであり、当遺跡においても小規模ながらも原安津見川に臨む低地での水稲耕作に着手した小集団(世帯共同体的)の存在は見込まれてよいものと考えたい。

(7) この流路に関しては、①出現時期の特定と②人工性か自然性かのほぼ2点の問題に集約されると考えるが、いずれも断定できる資料を得ることができず、今後に残る課題としておきたいが、ただ、②項における人工性に関してはどちらかといえば否定的な考えにたっている。その理由のもう一点として、L字状流路の上流部流入口の延張推定線をたどれば現安津見川の本流にぶちあたる、東北方から台地先端部を睨んだ支流(第1図・写真図版1等参照)の存在が強く意識されるものであり、また調査区の状況からみたⅠ－B期・Ⅱ－B期に代表されるそれぞれに突発的で大規模な暴風雨が伴ったとみられる短時的沖積作用状況からして、この間でも何らかの風水害が推測しえるものであるため、この流路出現の直接的経緯には、Ⓐ Ⅰ－B期の沖積作用時によった流路の変動自体か、Ⓑこの後に続く(T－18区配置的土器を遡らぬ)主たる支流からの鉄砲水等によったかの出現にかかる可能性が富に高いと考えておきたい。

(8) 台地への出現と流路際での祭祀的状況は一体的な様相として捉えられ、規制的な群別構成をとっているとみられる土器配置状態から類推して、数単位集団(世帯共同体)の集合体による同水系に介した、水路の安静・生産(諸穀)の豊穣を祈した豊耕儀礼(的)な協業行為を示唆するものがあり、また、この土器群の措置点は、当該小谷平野のほぼ中央部にあたるこの舌状的突出台地の前面での営為であることを加飾して推測すれば、この小水系に沿った地縁・血縁的(農業共同体)に結ばれる集団間でも、当該台地集団のもつ優位性ないしは祭祀面での中核的な位置関係をも示唆する面がある。なお、台地上に出現した竪穴住居は当初,楕円形大型1基調査区内で想定できるもの)であるが、祭祀的土器配列・小谷平野を一望しうる先端部の選(占)地に加えて、以降の3基相当の建て替えないし拡張でも同位置を固持していずれも大型を継承することからみて、少なくとも当該台地集団中での家長世帯住居を想わせるが、今後、当該集団の総体的な集落構成の把握や墓域の顕現とその動向面からの検討に委ねたいが、近隣の同時代性が認められる遺跡には倉垣遺跡(第2章第2節で紹介)が在存し、一部発掘調査が行われているのでこの整理結果にも準じることが大と思われる。

(9) 北陸、ことに石川県内では月影式(土器)期を中心とする、弥生一古墳時代移行期において集落遺跡総体の著しい増加現象が認められており、ほぼこの期に限定されて一部台地への集落の進出が伺える。こうした動向への理解には、ある程度の鉄器(農工具)の保有化に伴う農耕小集団の生産・耕地の拡大から、一連の発展図式(通説的経過)によって求められてきている小地域集団化への結束と競合(再編)による小地域的集団の抗立的緊張によってもたらされる防禦的台地集落の出現とその背景として捉えられてきている(吉岡康暢『加賀三浦遺跡の研究』1916・同「弥生社会から古墳社会へ」『古代の地方史4』1978他)と想うが、近年、河北郡宇ノ気町鉢伏地内での標高約50m(比高40m代)を越える険しい山丘上に環濠をめぐらして営まれる集落跡(茶臼山遺跡--の顕現以来、北陸一円的な傾向として新潟県～福井県を含めた数遺跡を追加して、北陸に対する強力な外的圧力からの抗築とする見解(麻柄一志「北陸の高地性集落」『考古学と古代史』1982)も示されるようになってきている。確かに、該期の日常的生産活動には極めて不利な、防禦性を強く意図した高地性集落それ自体は強い緊張感の反映として疑いえないところであるが、現状的にはその外的要因として一律的に規定できるかどうか、であるとすればその背景・要因を何に求めどのように捉えられていけるかなど、与えられる課題は大きいと思われるが、当面、こうした視点もふまえた個別的・小地域的単位での動態の分析という、地域論的領域のなかでの諸文化形態の把握への基礎的作業(研究)への提言であるとも解したい。

こうした時期にほぼ相当する当遺跡(Ⅱ期中)では、低台地への住居の選地と廃棄には、大規模な洪水等による自然性面からの動向とし理解できるもので、狭長な谷平地部に生成基盤面をもつ一農耕小集団として、広範な平野(地)部を前面に控える集団とはその内在する地形的側面から同一視できない問題ではあるが、少なくとも暴風雨によって沖積部の禍害が想定される弥生中期後半頃と古墳時代前期中葉頃(あるいはこの間でも)には周辺部地域においても幾分かの影響も予想されるところでもあり、社会的・政治的揺籃期における歴史的総態のなかでは末梢的な一遺跡(事象)としての位置付けは容易であるが、あるいは海水準の上昇による

畿内河内平野の一部湖沼化現象等から引導された一可耕地等々の確保をめぐる混乱が、集団間の緊張と再編を惹起乗じさせているという（安田喜憲「倭国乱期の自然環境」『考古学研究』第23巻第4号　1977年）論考にもまた、当該期における自然環境と立地環境のもつ問題から派生しうることとしてあながち無視できない側面もみいだせるように思える。

補記

要因の多くは編者の怠慢によるものであるが、本書の体裁が筆者の望まないかたちとなり、報告書としては極めて不十分なものとなったことをお詫びしたい。台地部住居跡等出土の土器について田中孝典氏より原稿をいただいたが、それを全く生かしきれなかったことをお詫びしたい。また本遺跡の性格をみる上で欠すことができない多量の自然遺物、木器の報告を掲載できなかったことも残念であった。最後に、本書を編筆にするにあたって、奈良国立文化財研究所沢田正昭氏、桜井甚一会長をはじめとする石川考古学研究会員諸氏、石川県立埋蔵文化財センター職員諸氏、石川県埋蔵文化財協会諸氏より格別の御教示、御指導を賜わったが、それを十分に生かしきれなかったこと深くお詫びしたい。

土　器　観　察　表

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第14図　1	壺	P 6 G NO16	密 並	淡橙褐色	肩部に突帯。胴央で段をもち、胴下半から底部へは内すぼがりの形態をとるものと思われる。	頸部、ヘラ磨き、体部外面、ヘラ磨き、内面、ハケ	外面赤彩、接合痕あり
第14図　2	〃	〃	〃	茶褐色	現器高24.2cm、底径5.8cm、凹み底	頸部ハケ、頸部以下外面ハケ→ヘラ磨き、肩部内面、指圧痕→ハケ、体部ハケ（一部ヘラ磨き）	接合痕あり
第14図　3	〃	〃	〃	橙褐色	現器高7.5cm、体部最大径18.2cm	体部外面ハケ→ヘラ磨き、内面ヘラ削り	外面赤彩、接合痕あり
第14図　4	〃	P 6 G NO14	〃	外淡橙褐色 内淡黄褐色	口径15.4cm、現器高8.2cm、口縁部下半に稜	調整不明	
第14図　5	台付鉢	P 6 G NO22	〃	橙褐色	底径4.6cm、現器高5.5cm	調整不明	外面赤彩
第14図　6	〃	P 6 G NO12	〃	淡橙褐色	口径13.8cm、現器高7.1cm、底径5.2cm、凹み底	調整不明	
第14図　7	〃	P 6 G NO16	〃	淡茶褐色	口径17.7cm、現器高11.8cm、底径11.6cm、有段口縁	口縁部ヘラ磨き、体部ヘラ磨き、脚部ヘラ磨き	外面、内面赤彩
第14図　8	蓋	P 6 G NO22	〃	橙褐色	つまみ径2.25cm、現器高3.3cm、天井部凹む、体部は外反的に広がる	外面、内面ヘラ磨き	外面赤彩
第14図　9	〃	〃	〃	淡橙褐色	つまみ径2.6cm、現器高4.4cm、笠部径8.1cm、口径4.8cm、天井部凹む、体部は内湾的に広がる	外面ヘラ磨き、内面調整不明	外面赤彩
第15図　1	甕	P 6 G NO24	〃	外淡黄褐色 内淡橙褐色	口径20.4cm、くの字口縁	口縁部、ヨコナデ、肩部外面、ハケ内面ハケ	接合痕あり
第15図　2	〃	P 6 G NO44	〃	淡橙褐色	口径15.4cm、有段口径	口縁部、ヨコナデ	
第15図　3	壺	P 6 G	〃	淡橙褐色	口径18.5cm、現器高34.5cm、有段口縁、丸底、端部は面取り	口縁部、外面、ヘラ磨き、内面ヨコナデ、頸部外面、ヘラ磨き、体部外面、ハケ、内面ヘラ削り	
第15図　4	〃	P 6 G NO26	〃	淡橙褐色	口径18.6cm、有段口縁、口縁は内湾気味に開く	調整不明	
第15図　5	〃	P 6 G NO24	〃	淡橙褐色	口径17.0cm、有段口径	口縁部、ヘラ磨き	
第15図　6	〃	P 6 G NO44	〃	淡橙褐色	口径15.0cm、ハの字形に大きく外反する口縁をもつ	口縁部、ヨコナデ、頸部ハケ	
第15図　7	装飾壺	P 6 G NO26	〃	淡茶褐色	胴部に突帯、凹線2本	外面ヘラ磨き、内面不明	外面赤彩
第15図　8	壺底部	P 6 G NO44	〃	外茶褐色 内暗茶褐色	底径7.0cm、凹み底	外面、ハケ→ヘラ磨き、内面ハケ	外面赤彩、黒斑あり
第15図　9	器台	P 6 G NO26	〃	淡橙褐色	現器高4.7cm	外面、ヘラ削り→ヘラ磨き、内面、ハケ	外面赤彩
第15図　10	〃	P 6 G NO44	〃	淡橙褐色	脚部径10.0cm、現器高6.0cm	外面、ヘラ磨き、内面、不明	外面赤彩
第15図　11	脚	〃	〃	橙褐色	脚部径10.4cm、現器高2.6cm、端部面取り	外面、ハケ→ヘラ磨き、内面、ハケ、ナデ	
第15図　12	蓋	P 6 G NO25	〃	淡橙褐色	つまみ径（復元径）2.9cm、口径8.8cm、現器高4.3cmヒ天井部平坦	外面、ハケ、内面、ヘラ磨き	外面赤彩
第15図　13	〃	P 6 G NO24	〃	淡黄褐色	つまみ径2.0cm、口径（復元径）8.0cm、現器高2.6cm、天井部凹む	調整不明	外面赤彩、つまみ部の穴孔は貫通していない

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第16図　1	甕	P6G NO81	密 並	淡澄褐色	口径14.8cm、〝く〟の字口縁	口縁部外面、ハケ、ヨコナデ、内面、ヨコナデ	
第16図　2	〃	P6G NO35	〃	淡澄褐色	口径19.6cm、〝く〟の字口縁	口縁部、ヨコナデ、肩部ハケ	外面スス付着
第16図　3	〃	P6G NO42	〃	橙褐色	口径12.4cm、〝く〟の字口縁	口縁部、ヨコナデ、頸部外面、ハケ	接合痕あり
第16図　4	〃	P6G NO46	〃	淡澄褐色	口径19.6cm、〝く〟の字口縁、端部面取り、復元器高25.3cm	口縁部、ヨコナデ、体部外面、ハケ、(一部ヘラ削り)、内面、ハケ	
第16図　5	〃	P6G NO48	〃	橙褐色	口径14.3cm、断面三角形	口縁部、ヨコナデ、頸部以下、ハケ	外面スス付着
第16図　6	〃	P6G NO43	〃	淡茶褐色	口径19.5cm、〝く〟の字口縁、端部面取り	内面、ヘラ削り、外面不明	黒斑あり
第16図　7	〃	P6G NO49	〃	茶褐色	口径1.2cm、有段口縁	口縁部、ヨコナデ、頸部外面、ヨコナデ、頸部内面、ハケ	
第16図　8	〃	P6G NO39	〃	淡橙褐色	口径15.4cm、有段口縁	口縁部、ヨコナデ、頸部外面、ヨコナデ、内面、ヘラ削り	
第16図　9	甕底部	P6G NO40	〃	外茶褐色 内淡茶褐色	直径1.2cm、平底	外面、ハケ、内面、ハケ	
第16図　10	〃	P6G NO31	〃	淡茶褐色	丸底、現器高6.7cm	外面、ハケ、内面、ハケ、ヘラ削り？	内面スス付着
第16図　11	壺	P6G NO37	〃	淡黄褐色	口径25.8cm、有段口径、端部面取り	内面、ハケ、外面不明	
第16図　12	〃	P6G NO46	〃	淡橙褐色	口径20.4cm、有段状口縁、端部面取り	口縁部、ヘラ磨き	
第17図　13	〃	P6G NO27	〃	橙褐色	口径13.7cm、有段口縁	口縁部、ヨコナデ、体部外面、ハケ、内面、ハケ	
第17図　14	〃	P6G NO38	〃	淡橙褐色	口径12.8cm、有段口縁	体部外面、ハケ、内面、ヘラ削り	
第17図　15	〃	P6G NO28	〃	橙褐色	口径14.5cm、有段口縁、擬凹線11本	口縁部内面、ヨコナデ、体部外面、ハケ、内面、ヘラ削り	
第17図　16	〃	P6G NO25	〃	淡黄褐色	口径17.0cm、有段口縁、端部面取り)、棒状浮文2本	調整不明	外面赤彩
第17図　17	〃	P6G NO28	〃	橙褐色	現器高8.7cm、有段口縁	口縁部外面、ハケ、ヨコナデ→ヘラ磨き、内面、ヘラ削り	外面赤彩
第17図　18	〃	P6G 焼工面	〃	淡橙褐色	口径14.2cm	口縁部外面、ナデ、内面、ヘラ磨き	
第17図　19	〃	P6G NO32	〃	橙褐色	口径15.8cm、〝く〟の字口縁	口縁部外面、ハケ、内面不明	
第17図　20	〃	P6G NO24	〃	茶褐色	口径14.8cm、〝く〟の字口縁	口縁部、ヘラ磨き、頸部内面、ヘラ削り	
第17図　21	壺	P6G NO41	〃	淡橙褐色	口径14.2cm、〝く〟の字口縁	口縁部、ハケ→ナデ	
第17図　22	？甕	P6G NO31	〃	灰白色	口径16.0cm、〝く〟の字口縁、丸底、器高（復元）25.5cm	口縁部、ヨコナデ、体部外面、ハケ、内面、ハケ	接合痕あり
第18図　23	壺底部	P6G NO41	〃	茶褐色	底径4.8cm、凹み底	外面、ナデ、内面不明	
第18図　24	台付鉢	P6G NO39	〃	橙褐色	口径11.6cm、器高（復元）65cm	外面、ヘラ磨き、内面、ヘラ磨き	口縁部、外面、内面、赤彩
第18図　25	鉢	P6G NO40	〃	淡茶褐色	口径8.9cm、器高6.1cm、底径3.0cm、凹み底	外面、ヘラ磨き、内面、ヘラ磨き	外面、赤彩

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第18図　26	蓋	P6G NO39	密 並	淡橙褐色	つまみ径5.6cm、内湾気味に開く、天井部凹む	つまみ部外面、指圧痕、ヘラ磨き、体部外面、ハケ、内面、ハケ→ヘラ磨き	
第18図　27	〃	P6G NO29	〃	淡橙褐色	つまみ径2.5cm、口径6.1cm、器高4.1cm	調整不明	外面、内面赤彩
第18図　28	〃	P6G	〃	淡黄褐色	つまみ径1.8cm、口径4.6cm、器高3.8cm	内面、ナデ、外面不明	
第18図　29	脚底部	P6G NO34	〃	淡黄褐色	底径9.1cm、現器高3.5cm	外面、ナデ、内面、ヘラ磨き、脚内面、ハケ	外面、内面赤彩
第18図　30	〃	P6G NO40	〃	淡黄褐色	底径10.0cm、現器高4.2cm	外面、ハケ→ヘラ磨き、内面、指圧痕、ハケ	外面赤彩
第18図　31	高杯	P6G NO39、41	〃	外淡赤褐色 内淡褐色	口径13.0cm、現器高6.2cm	外面、ハケ、内面不明	
第18図　32	〃	P6G NO39	〃	淡褐色	現器高4.7cm	外面、ヘラ磨き、脚部内面、ハケ→ヘラ磨き	
第18図　33	〃	P6G NO51	〃	赤褐色	現器高3.5cm	外面、ヘラ磨き、内面不明	
第18図　34	〃	P6G NO40	〃	淡黄褐色	底径9.6cm、現器高7.6cm	外面、ヘラ磨き、内面ナデ	絞り目痕あり
第18図　35	器台	P6G NO51	〃	赤褐色	現器高4.0cm	外面、ヘラ磨き、内面不明	
第18図　36	〃	P6G NO50	〃	淡橙褐色	現器高6.0cm	外面、ハケ→ヘラ磨き、内面ハケ	外面赤彩
第18図　37	〃	P6G NO51	〃	淡茶褐色	現器高6.7cm	外面、ヘラ磨き、内面、ヘラ削り→ナデ	外面赤彩
第18図　38	把手付土製品	P6G NO33	〃	明茶褐色	全長9.5cm、現器高3.8cm、底径6.0cm	調整不明	
第18図　39	石皿	P6G S1	〃	〃	全長24.4cm、深さ0.8cm、厚さ6.7cm、六角形と考えられる。	表面は使用痕が残り、中央部は弱い磨きが残っている。裏面は磨いてある。	
第19図　1	甕	T11区 包含層	〃	淡黄灰色	口径15.4cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ	
第19図　2	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径18.8cm、〝く〟の字口縁、口縁下部有段状の稜がかすかに残る。	口縁部外面ヨコナデ、内面調整不明	
第19図　3	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径17.1cm、〝く〟の字口縁、面取り、つまみ上げ	口縁部ヨコナデ、頸部内面ハケ	
第19図　4	〃	T12区 包含層	〃	淡黄褐色	口径18.5cm、〝く〟の字口縁、面取り	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面、指圧痕→ハケ	
第19図　5	壺	P7G	〃	淡茶褐色	口径14.5cm、〝く〟の字口縁、面取り、凝凹線2本	口縁部ヨコナデ、以下外面ヘラ磨き、内面、ヘラ磨き	
第19図　6	〃	T11区 包含層	〃	淡黄橙色	口径10.8cm、有段口縁、凝凹線4本	口縁部ヘラ磨き、肩部以下外面ヘラ磨き、内面ハケ	外面赤彩
第19図　7	〃	〃	〃	〃	口径11.6cm、〝く〟の字口縁	口縁部外面、一次調整のハケ、内面、ヘラ磨き	
第19図　8	甕底部	〃	〃	外淡橙茶褐色 内淡橙褐色	底径2.3cm、平底	調整不明	
第19図　9	壺底部？	〃	〃	淡橙褐色	底径2.7cm、平底	外面調整不明、内面ハケ	
第19図　10	壺底部	〃	〃	淡黄褐色	底径4.8cm、平底	外面ヘラ削り→ハケ、内面ハケ	
第19図　11	〃	〃	〃	淡橙褐色	底径6.3cm、平底(中央部で凹む)	外面ヘラ削り→ハケ、内面ハケ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第19図　12	蓋	T12区 包含層	密 並	淡茶褐色	つまみ径2.6cm、現器高2.3cm、天井部は凹む	外面つまみ部分に指圧痕、以下ヨコナデ、ヘラ磨き、内面ヘラ磨き	
第19図　13	器台	T11区 包含層	〃	淡橙褐色	受部径18.0cm、現器高5.8cm	口縁部ヨコナデ、外面ヘラ磨き、内面ハケ	
第19図　14	器台	〃	〃	淡橙褐色	現器高6.3cm、孔：3	外面調整不明、内面ハケ	外面、内面赤彩
第19図　15	高杯	〃	〃	淡黄橙褐色	杯部径20.0cm、杯部下半で稜、現器高6.6cm	調整不明	
第19図　16	甑	T12区 包含層	〃	淡橙茶褐色	底径5.1cm、現器高4.5cm、穿孔1個（孔径5cm）	外面ヘラ削り、内面ハケ	
第20図　1	甕	P6G包含層	〃	暗黄褐色	口径16.8cm、〝く〟の字口縁緩やかに外反	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面ナデ	接合痕あり
第20図　2	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径17.0cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面ハケ	外面スス付着
第20図　3	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径20.0cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ	内面赤彩？
第20図　4	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径21.2cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ内面ナデ	接合痕あり
第20図　5	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径19.6cm、断面三角形、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面ヘラ削り	
第20図　6	〃	〃	〃	茶褐色	口径16.5cm、〝く〟の字口縁、端部は面取り、擬凹線1条	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面ヘラ削り	
第20図　7	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径150cm、〝く〟の字口縁、端部は面取り、口縁下部に稜	口縁部ヨコナデ	頸部に爪痕？
第20図　8	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内黒褐色	口径15.1cm、〝く〟の字口縁、端部は面取り	口縁部ヨコナデ	
第20図　9	〃	〃	〃	茶褐色	口径13.8cm、〝く〟の字口縁、端部は面取り	口縁部ヨコナデ	
第20図　10	〃	〃	〃	外黒色 内暗褐色	口径21.0cm、〝く〟の字口縁、端部は面取り	口縁部外面、ハケ→ヨコナデ、内面ヨコナデ	
第20図　11	〃	〃	〃	橙褐色	口径16.8cm、断面三角形、端部は面取り、つまみ上げ	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	
第20図　12	〃	〃	〃	橙褐色	口径18.9cm、〝く〟の字口縁、端部は面取り、つまみ上げ	口縁部ヨコナデ	
第20図　13	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径16.6cm、〝く〟の字口縁、端部は面取り、つまみ上げ	口縁部ヨコナデ	
第20図　14	〃	〃	〃	明茶褐色	口径14.6cm、〝く〟の字口縁、端部は面取り	口縁部ヨコナデ、頸部内面ヘラ削り	
第20図　15	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径13.6cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケ、内面ヨコナデ？	
第20図　16	〃	〃	〃	外暗灰褐色 内淡黄褐色	口径13.1cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、頸部内面ハケ	
第20図　17	〃	〃	〃	橙褐色	口径17.4cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面ハケ	
第20図　18	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径17.3cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	
第21図　19	甕	P6G包含層	〃	淡茶褐色	口径16.6cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	
第21図　20	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径16.2cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面調整不明	外面スス付着
第21図　21	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径15.5cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面ハケ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第21図　22	甕	P6G包含層	密 並	淡茶褐色	口径15.8cm、有段口縁？	口縁部外面ハケ→ヨコナデ、内面ハケ、頸部以下外面ハケ、内面ハケ	外面スス付着
第21図　23	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径17.0cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、頸部内面ハケ	
第21図　24	〃	〃	〃	橙褐色	口径15.4cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケ	
第21図　25	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径17.2cm、受口状口縁	口縁部ヨコナデ	外面スス付着、口縁部内側に化粧土？
第21図　26	？鉢	〃	〃	橙褐色	口径(復元)9.4cm、有段口縁、底径2.0cm、平底	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデ？	内面スス付着
第21図　27	甕底部	〃	〃	淡橙褐色	底径1.1cm、凹み底	外面ハケ、内面ナデ	
第21図　28	〃	〃	〃	淡黄褐色	底径5.1cm、平底	調整不明	
第21図　29	？壺底部	〃	〃	淡茶褐色	底径5.9cm、平底	外面ハケ、内面ハケ	外面スス付着
第21図　30	甕底部	〃	〃	淡茶褐色	底径1.7cm、凹み底	外面ハケ、内面ヘラ削り	
第21図　31	〃	〃	〃	黄褐色	丸底、現器高3.0cm	調整不明	
第21図　32	壺	〃	〃	橙褐色	口径23.1cm、有段口縁、擬凹線18条	口縁部ヨコナデ	
第21図　33	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径15.9cm、有段口縁	調整不明	
第21図　34	〃	〃	〃	外明茶褐色 内橙褐色	口径15.8cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	
第21図　35	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径12.8cm、有段口縁、端部は面取り	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ	外面赤彩
第21図　36	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径11.5cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	
第21図　37	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径16.0cm、有段口縁	口縁部内面ハケ、外面調整不明	外面赤彩、竹管文2個
第22図　38	壺	〃	〃	淡橙褐色	口径15.2cm、有段口縁		外面赤彩
第22図　39	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径19.9cm、有段口縁、端部は面取り		
第22図　40	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径31.8cm、有段口縁、擬凹線1条、端部は面取り	口縁部ヨコナデ	
第22図　41	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径25.2cm、有段口縁、端部は面取り	口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケ	
第22図　42	〃	〃	〃	暗茶褐色	口径24.6cm、有段口縁	口縁部ハケ→ヨコナデ	
第22図　43	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内淡灰茶褐色	口径19.8cm、有段口縁、端部は面取り	口縁部ヨコナデ	外面、円形浮文2個（内1個は欠落）
第22図　44	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径16.8cm、端部内面肥厚		外面、内面赤彩
第22図　45	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径17.4cm、有段口縁	口縁部ヘラ磨き	外面、内面赤彩
第22図　46	〃	〃	〃	橙褐色	口径20.4cm、有段口縁	口縁部ヘラ磨き	外面、内面赤彩
第22図　47	短頸壺	〃	〃	〃	口径4.6cm、現器高3.0cm、頸部に穿孔1個（径2.9mm）	口縁部内面ヘラ磨き、体部内面ナデ	外面、内面赤彩
第22図　48	台付細口壺	〃	〃	淡橙褐色	口径9.8cm、現器高6.9cm	口縁部ヘラ磨き	外面、内面赤彩
第22図　49	壺	〃	〃	橙褐色	口径14.4cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケ	
第22図　50	〃	〃	〃	橙褐色	口径14.4cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケ	
第22図　51	〃	〃	〃	淡黄橙褐色	口径20.0cm、〝く〟の字口縁	口縁部外面ハケ、内面ハケ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第22図　52	壺底部	P6G包含層	密 並	黒褐色	底径6.4cm、平底(中央部で凹む)	内面ハケ、外面調整不明	
第22図　53	〃	〃	〃	淡茶褐色	底径5.0cm、平底(中央部で凹む)	外面ヘラ工具による調整？	
第22図　54	〃	〃	〃	淡黄茶褐色	底径5.1cm、凹み底	外面、指圧痕→ハケ→ヨコナデ	
第22図　55	〃	〃	〃		底径4.7cm、平底	調整不明	外面赤彩
第22図　56	〃	〃	〃	橙褐色	底径2.8cm、凹み底	調整不明	
第22図　57	〃	〃	〃	淡茶褐色	底径5.6cm、凹み底	内面ヘラ磨き、外面調整不明	外面赤彩
第22図　58	〃	〃	〃	淡黄色	底径3.3cm、平底	調整不明	
第23図　59	壺底部	〃	〃	橙褐色	底径7.0cm、平底(若干中央部で凹む)	調整不明	
第23図　60	〃	〃	〃	加茶褐色 内黒色	底径6.9cm、平底(中央部で凹む)	〃	
第23図　61	〃	〃	〃	橙褐色	直径6.1cm、平底(中央部で凹む)	内面ハケ、外面調整不明	
第23図　62	〃	〃	〃	外黒褐色 内淡橙褐色	底径7.7cm、平底(中央部で凹む)	調整不明	
第23図　63	〃	〃	〃	淡茶褐色	底径4.6cm、平底(中央部で凹む)	外面ヘラ工具による調整？	黒斑あり
第23図　64	〃	〃	〃	暗黄褐色	底径5.1cm、平底(若干凹凸が見られる。)	外面指圧痕、内面ハケ	
第23図　65	甕底部	〃	〃	外暗灰褐色 内茶褐色	底径4.4cm、平底		外面スス付着
第23図　66	壺底部	〃	〃	暗茶褐色	底径1.6cm、平底	外面ヘラ削り→ヘラ磨き、内面ハケ	外面赤彩
第23図　67	〃	〃	〃	淡茶褐色	底径5.0cm、平底(中央部で凹む)	外面ヘラ磨き、内面調整不明	外面、内面赤彩
第23図　68	〃	〃	〃	外橙褐色 内黄褐色	底径7.0cm、平底	内面ハケ、外面調整不明	
第23図　69	〃	〃	〃	外橙褐色 内淡橙褐色	底径4.8cm、凹み底	外面ハケ→ナデ、内面ヘラ工具による調整(ヘラ磨き？)	
第23図　70	脚底部	〃	〃	淡橙褐色	底径5.1cm、現器高3.5cm、凹み底	調整不明	
第23図　71	〃	〃	〃	淡橙褐色	底径7.2cm、現器高4.0cm、脚は円堆状	〃	
第23図　72	〃	〃	〃	淡橙褐色	底径8.2cm、現器高4.2cm、脚は円堆状	外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り	
第23図　73	〃	〃	〃	外淡橙褐色 内暗灰色	底径9.0cm、現器高4.0cm、脚は円堆状	外面第1次調整のハケが見られる。内面ヘラ削り	外面赤彩
第23図　74	〃	〃	〃	茶褐色	底径6.0cm、現器高3.2cm、脚は円堆状	外面ヘラ磨き、内面ヘラ磨き	外面赤彩
第23図　75	蓋	〃	〃	淡黄褐色	口径6.4cm、現器高2.4cm、天井部凹む	外面指圧痕、ヘラ磨き	外面、内面赤彩
第23図　76	脚底部	〃	〃	外淡茶褐色 内淡黄褐色	底径10.3cm、現器高5.2cm、脚は円堆状、端部は面取り	外面ヘラ磨き、脚部内面ハケ	
第23図　77	甑	〃	〃	淡茶褐色	現器高4.7cm、穿孔1個(径8mm)	外面ハケ、内面ハケ(底部近くヘラ削り)	
第23図　78	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内暗黄褐色	底径3.8cm、現器高2.2cm、穿孔は1個(径5mm)	外面ハケ、内面調整不明	
第23図　79	底部	〃	〃	外黒褐色 内淡橙褐色	底径4.1cm、現器高3.6cm	外面指圧痕、ハケ	接合痕あり
第23図　80	？高杯	〃	〃	淡茶褐色	口径17.2cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	外面、内面赤彩
第23図　81	高杯	〃	〃	淡黄褐色	口径16.4cm、現器高6.2cm	調整不明	外面、内面赤彩

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第23図　82	鉢	P6G包含層	密 並	茶褐色	口径11.7cm、現器高5.2cm	調整不明	外面、内面赤彩
第23図　83	〃	〃	〃	橙褐色	口径15.5cm、現器高3.8cm、口縁端部はつまみ上げた様な感じで立ち上がる。	〃	外面、内面赤彩
第23図　84	〃	〃	〃	茶褐色	口径13.4cm、現器高2.9cm、内湾気味に立ち上がる。	外面ヘラ磨き、内面ヘラ磨き	外面、内面赤彩
第23図　85	〃	〃	〃	外橙褐色 内淡橙褐色	口径9.5cm、現器高7.9cm、底径5.2cm、(やや上げ底状)	外面ヘラ磨き（一部にハケ残る)、口縁端部ヨコナデ、底部外面指圧痕	黒斑が一部残る、接合痕あり
第23図　86	〃	〃	〃	外淡橙褐色 内橙褐色	口径7.7cm、現器高4.5cm、有段口縁	調整不明	
第23図　87	〃	〃	〃	〃	底径3.2cm、現器高4.4cm	外面ヘラ削り→ヘラ磨き、内面指圧痕→ヘラ磨き	外面赤彩
第23図　88	小型丸底壺	〃	〃	灰褐色	口径7.1cm、現器高7.9cm、丸底	口縁部ヨコナデ、頸部以下外面ハケ、肩部内面、指圧痕、以下ハケ	黒斑あり
第23図　89	?	〃	〃	外淡茶褐色 内茶褐色	体部に沈線6本による紋様	調整不明	外面、内面赤彩か？
第23図　90	把手	〃	〃	明黄褐色	残存長7.8cm、幅2.4cm、断面形、(隋円形)	調整不明	
第24図　91	蓋	〃	〃	茶褐色	つまみ径2.45cm、現器高2.1cm、天井部凹む	つまみの側面くびれ部分に、ヘラ状工具で調整した痕跡が見られる。	
第24図　92	〃	〃	〃	暗茶褐色	つまみ径2.9cm、現器高1.9cm、天井部凹む	外面ヘラ磨き、内面調整不明	
第24図　93	〃	〃	〃	淡茶褐色	つまみ径4.45cm、現器高2.0cm、天井部凹む	調整不明	
第24図　94	〃	〃	〃	淡橙褐色	つまみ径3.0cm、現器高3.4cm、天井部凹む	内面ハケ、外面調整不明	
第24図　95	〃	〃	〃	橙褐色	つまみ径2.5cm、現器高3.6cm、天井部凹む	外面ハケ、内面ハケ	
第24図　96	〃	〃	〃	外暗褐色 内淡茶褐色	つまみ径3.1cm、現器高3.1cm、天井部凹む	外面ハケ、内面調整不明	
第24図　97	〃	〃	〃	赤褐色	つまみ径3.0cm、現器高3.2cm、天井部凹む	外面ヘラ磨き、内面調整不明	外面赤彩
第24図　98	〃	〃	〃	淡橙褐色	つまみ径2.75cm、現器高3.0cm、天井部凹む	調整不明	外面赤彩3内面赤彩か化粧土？
第24図　99	〃	〃	〃	淡橙褐色	つまみ径3.85cm、現器高2.3cm、天井部凹む、つまみ部分にきざみ痕	外面指圧痕、内面ケズリ？	外面、内面赤彩
第24図 100	〃	〃	〃	淡茶褐色	つまみ径4.5cm、現器高3.9cm、天井部凹む	外面つまみ部分指圧痕、体部外面ハケ、内面ヘラ磨き	黒斑あり
第24図 101	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内暗茶褐色	つまみ径2.1cm、現器高2.7cm、天井部平坦	外面つまみ部分指圧痕	
第24図 102	〃	〃	〃	淡茶褐色	つまみ径2.75cm、現器高1.9cm、天井部若干凹む	外面ヘラ磨き、内面調整不明	外面赤彩
第24図 103	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内黒褐色	つまみ径3.7cm、現器高4.3cm、天井部平坦	外面つまみ部分指圧痕、体部外面ハケ、内面ハケ	
第24図 104	〃	〃	〃	淡橙褐色	つまみ径4.5cm、現器高3.7cm、天井部平坦	外面ナデ、内面調整不明	
第24図 105	〃	〃	〃	淡橙褐色	つまみ径（復元）3.2cm、現器高2.75cm	内面ハケ、外面調整不明	外面赤彩
第24図 106	装飾器台	〃	〃	淡茶褐色	最大径15.2cm、現器高2.9cm	調整不明	外面赤彩

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第24図 107	器台	P6G包含層	密 並	淡茶褐色	口径1.3cm、有段口縁	受部内面、ヘラ磨き？	外面、内面赤彩
第24図 108	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径11.0cm、有段口縁	外面ヘラ磨き、内面ヘラ磨き	外面、内面赤彩
第24図 109	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径10.2cm、有段口縁	受部ヘラ磨き、脚部外面ヘラ磨き、内面ハケ	
第24図 110	器台	〃	〃	淡茶褐色	受部径9.6cm、内湾気味に広がる	調整不明	
第24図 111	〃	〃	〃	橙褐色	受部径9.4cm、裾部径14.8cm、現器高8.3cm、受端部は面取り	脚部内面ハケ	外面、内面赤彩
第24図 112	〃	〃	〃	淡橙褐色	現器高6.6cm	脚部外面ハケ	外面赤彩
第24図 113	〃	〃	〃	淡茶褐色	現器高5.3cm、透孔は4個	脚部内面ハケ、外面調整不明	
第24図 114	〃	〃	〃	淡茶褐色	現器高6.1cm、透孔は4個	外面ヘラ磨き、内面ナデ	
第24図 115	〃	〃	〃	淡茶褐色	現器高6.5cm、透孔は4個	脚部内面、ヘラ削り	外面赤彩
第24図 116	？台付鉢	〃	〃	淡黄褐色	脚部径11.90cm、現器高7.5cm、脚中央部で産接する感じで大きく外反する。	脚部内面ハケ、外面及び杯部調整不明	接合痕あり
第24図 117	高杯	〃	〃	淡橙褐色	現器高3.0cm、有段口縁	受部ヘラ磨き	
第24図 118	〃	〃	〃	淡赤褐色	現器高6.0cm	外面ハケ調整→ヘラ磨き、脚部内面ヘラ磨き？	
第24図 119	高杯？	〃	〃	淡茶褐色	現器高2.0cm	調整不明	
第24図 120	？脚底部	〃	〃	淡黄褐色	現器高4.3cm	外面ヘラ磨き？脚部内面ハケ	
第24図 121	高杯？	〃	〃	橙褐色	現器高3.3cm	外面ハケ、脚部、内面ナデ？	
第24図 122	高杯	〃	〃	淡橙褐色	脚部径10.0cm、現器高6.8cm、脚部はラッパ状に開く	外面ハケ、脚部端、内面ヨコナデ	絞り目痕
第24図 123	〃	〃	〃	淡黄褐色	現器高5.2cm、脚部は内湾気味に開く	調整不明	外面赤彩、絞り目痕
第24図 124	〃	〃	〃	淡褐色	現器高5.8cm、透孔は2孔ずつ4ケ所	脚部内面ハケ、外面調整不明	
第24図 125	〃	〃	〃	淡茶褐色	現器高8.7cm、脚部は中ふくらみ	脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り→ヘラ磨き	
第24図 126	〃	〃	〃	茶褐色	現器高6.1cm	調整不明	外面赤彩？
第56図 1	甕	P5G耕作土下部	〃	外黒褐色 内灰褐色	口径18cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ	外面スス付着
第56図 2	〃	P5G第2層	〃	茶褐色	口径18.8cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、肩部ハケ	
第56図 3	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径17.8cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ・内面ナデ	
第56図 4	〃	〃	〃	外淡橙褐色 内淡茶褐色	口径13.2cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部ハケ	
第56図 5	壺	〃	〃	褐色	口径11.4cm、胴径15.3cm、器高17.0cm、丸底	胴部下位ハケ、底部外面指によるナデ、肩部内面上位指圧痕とハケ	外面（一部）スス付着、胴部外面下位に黒斑
第56図 6	甕	〃	〃	淡茶褐色	口径15cm、有段口縁、擬凹線3条	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ・内面ヘラ削り	外面スス付着
第56図 7	鉢	〃	〃	外淡茶褐色 内淡橙褐色	口径14cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	
第56図 8	蓋	P5G耕作土下部	〃	乳褐色	口径5.3cm、つまみ部径3cm、器高4.05cm	外面ヘラ磨き・内面ナデ	外面赤彩

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第56図　9	高坏 (脚)	P5G第2層	密 不良	外赤褐色 内褐～暗褐 褐色	脚部径11.3cm	外面ヘラ磨き、脚部内面ヘラ削り（上位）とハケ（下位）	
第56図　10	(脚)	〃	密 並	淡黄褐色	脚部径9.6cm	外面ヘラ磨き、内面ナデ	内面に接合(痕)
第56図　11	(底)	〃	〃	淡茶褐色	底径（5.2cm)	外面ヘラ削り、内面ナデ	底部下面に断面V字状（深さ3mm）のヘラ記号
第56図　12	磨製石斧	〃		〃	長さ14.9cm、幅3.8cm、厚さ3.1cm		
第57図　1	甕	P5G第3層	密 並	淡茶褐色	口径31.5cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	内・外面ナデ	
第57図　2	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内淡橙褐色	口径23cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	内・外面ヨコナデ	
第57図　3	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径16.9cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、肩部ハケ	
第57図　4	〃	〃	〃	外黒褐色 内淡茶褐色	口径15cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	口縁部外ヨコナデ・内ナデ、肩～胴部外ハケ	肩部内面接合痕あり
第57図　5	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径16.6cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	口縁部外ヨコナデ、肩部ハケ	
第57図　6	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径19cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外ハケ・内ヘラ削り	
第57図　7	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径16cm、口縁有段、擬凹線3条	口縁部ヨコナデ、肩部ハケ	
第57図　8	壺	〃	〃	〃	口径14.8cm、口縁端部ナデによる面取り	口縁端部外面と口縁部内面ヨコナデ、口縁部外ハケ	
第57図　9	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径15cm、口縁端部は面取り	口縁部外ハケのあとヘラ磨き、口縁部内ハケのあとナデ	
第57図　10	長頸壺	〃	〃	外淡黄褐色 内淡茶褐色	口径16cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	外面ナデ、口縁部内面ハケのあとナデ、肩部内面ハケ	
第57図　11	壺	〃	〃	淡黄褐色	口径12.9cm、有段口縁擬凹線3条	口縁部ナデ（外面一部ハケ）、肩部内面ハケ	
第57図　12	〃	〃	〃	〃	口径16cm、有段口縁	内・外面ヨコナデ	
第58図　13	高坏	〃	〃	淡茶褐色	口径(28.4cm)、脚部径13.6cm、器高14.5cm	外面と坏部内面ヘラ磨き、脚部内面ナデとハケ	坏部内・外面と脚部外面は赤彩
第58図　14	〃	〃	密 良	灰褐色	脚部径16.7cm、透孔4径0.6cm	外面と坏部内面ヘラ磨き、脚部内面ナデ	外面赤彩
第58図　15	〃 (脚)	〃	密 並	淡茶褐色	脚部径17.2cm、透孔4径1.1cm	脚端部と脚部内面ヨコナデ	脚部外面は赤彩による文様あり
第58図　16	高坏	〃	〃	淡黄褐色		坏部内・外面と脚部外面はヘラ磨き	脚部内面に絞り（痕）を残す、接合痕あり
第58図　17	器台	〃	〃	〃	脚部径9.2cm	外面と脚部内面下位はヘラ磨き	脚部内面上位に絞り（痕）を残す、接合痕あり
第58図　18	鉢	〃	〃	〃	口径21.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ヘラ磨き	内・外面赤彩
第58図　19	(脚)	〃	やや不良 不良	淡赤褐色	脚部径11.1cm	外面と脚部内面ヘラ磨き	接合痕あり、摩耗が著しい
第58図　20	(脚)	〃	密 並	淡黄褐色	脚部径9.6cm	外面ヘラ削り、内面ナデ、脚部内面に指頭圧痕（一部ハケ）	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第58図　21	(脚)	P5G第3層	密 並	茶褐色	脚部径7.3cm	外面ヘラ磨き、脚部内面ハケ	
第58図　22	蓋	〃	〃	淡黄褐色	口径5.3cm、つまみ部径2.2cm、器高3.8cm	外面ヘラ磨き、内面ハケあり	
第58図　23	手づくね土器	〃	〃	暗灰褐色	口径6.8cm、底径2cm、器高3.8cm	外面指によるおさえ、内面ナデ	
第58図　24	(底)	〃	〃	淡茶褐色	底径3.2cm、底部下面は凹む	外面ヘラ磨き、内面ハケ	
第58図　25	(底)	〃	〃	淡黄褐色	底径5cm	外面ハケのあとナデ、内面ヘラ削り	
第59図　1	甕	P5G第3層下部(灰色砂)	〃	淡橙褐色	口径21.4cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れが明瞭	外面と肩部内面ハケ、口縁部内面ナデ	
第59図　2	〃	〃	〃	褐色	口径16cm、胴部径14.8cm、底径4.1cm、器高15.6cm、有段口縁、肩部口縁、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部～胴部外面と、肩部以下内面ハケ、胴部下半ヘラ削り	
第59図　3	〃	〃	〃	外黒褐色 内淡茶褐色	口径13cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れが明瞭	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	接合痕あり
第59図　4	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径15.3cm、有段口縁擬凹線3条、肩部外面に斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第59図　5	〃	〃	〃	〃	口径12.6cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部ナデ	
第59図　6	壺	〃	〃	〃	口径17cm、有段口縁、擬凹線2条、屈曲部外面に連続する斜行刻目	外面にハケ(一部)、内面ヨコナデ	
第59図　7	〃	〃	〃	橙褐色	口径(15cm)、胴径21.3cm、底径6cm、器高27.4cm、狭い有段口縁にナデによる凹線1条	口縁端と口縁内面ヨコナデ(一部ハケ)、外面口縁以下と内面胴下半ハケ、外面底部付近と内面肩部に指頭圧痕	胴部外面にスス付着、底部内面に炭化物付着、外面胴下半黒斑、口縁部内面にヘラ記号2本
第59図　8	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径12.6cm、有段口縁、擬凹線3条	口縁部外面ナデ、内面横方向のヘラ磨き	
第59図　9	〃	〃	〃	〃	口径9.6cm、有段口縁、擬凹線5条	口縁部ヘラ磨き	内外面赤彩
第59図　10	〃	〃	〃	〃	底径1.6cm	外面ヘラ磨き、内面肩部指頭圧痕、底部ハケ	接合痕あり、外面赤彩、底部付近黒斑
第60図　11	高坏	〃	〃	外茶褐色 内黒褐色	口径37cm	内・外面ヘラ磨き	内面赤彩
第60図　12	(脚)	〃	密 良	淡褐色	屈曲部外面に連続するヘラ状具による刺突	内・外面摩耗が著しい	外面赤彩
第60図　13	〃	〃	密 並	淡茶褐色	屈曲部外面擬凹線5条	脚部内面上位ナデ、下位ハケ	
第60図　14	〃	〃	〃	外灰茶褐色 内茶褐色	脚部径10.8cm、透孔4径0.3cm	外面ヘラ磨き、内面ナデ	
第60図　15	〃	〃	〃	淡茶褐色	脚部径14.2cm	外面ヘラ磨き、内面上位ヘラ状具痕、下位ナデ	
第60図　16	〃	〃	〃	〃	脚部径17cm	外面上位ヘラ磨き、下位ハケのあとヘラ磨き	内面上位に絞り(痕)
第60図　17	〃	P5G第2層	〃	〃	脚部径9.6cm	外面上位ハケ、下位ヘラ磨き、内面上位から、ヨコナデ、ヘラ削り、ハケ、ヨコナデ	外面赤彩、内面に絞り(痕)
第60図　18	蓋	〃	〃	〃	口径12.1cm、つまみ部径3.9cm、器高4.9cm	内・外面ヘラ磨き	外面赤彩
第60図　19	(把手)	P5G第3層下部(灰色砂)	〃	外淡黄褐色 内茶褐色		外面ハケのあとナデ、内面ハケ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第60図　20	手捏ね土器	P5G第3層下部（灰色砂）	密 並	灰褐色	口径4.1cm、器高2.3cm	内面指によるナデ	
第60図　21	（底）	〃	〃	淡黄褐色	底径5.4cm、底部下面は凹む	内・外面ヘラ磨き	
第60図　22	〃	〃	〃	茶褐色	底径5.7cm、底部下面は凹む	〃	外面スス、内面炭化物付着
第60図　23	〃	〃	〃	濃茶褐色	底径5.4cm、底部下面は凹む	外面ヘラ磨き、底部付近にヘラ削り痕、内面ハケ	
第60図　24	〃	〃	〃	淡黄褐色	底径5.9cm、外面に斜行列点文	外面ハケのあとヘラ磨き（一部）、底部付近ナデ、内面ナデ	
第60図　25	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内淡灰褐色	底径6.8cm、底部下面は凹む	内・外面ハケ、内面上位にナデ	
第61図　1	甕	P5G拡張区、砂層	〃	茶褐色	口径16.4cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第61図　2	〃	P5G拡張区、攪乱	やや不良 並	淡茶褐色	口径15.6cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヨコナデ	
第61図　3	〃	〃	密 並	暗灰褐色	口径13cm、有段口縁	口縁部ハケ、一部ナデ、肩部以下ハケ	
第61図　4	〃	P5G拡張区、砂層	〃	淡黄茶褐色	口径16.8cm、受け口状口縁沈線1条	口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケのあとヨコナデ、内面ハケ、肩部以下ハケ	接合痕あり
第61図　5	長頸壺	P5G拡張区攪乱、砂層	〃	淡褐色	口径14.6cm、胴部径21.2cm、底径4.3cm、器高28.9cm、口縁端部はナデによる面取り	口縁部外面ヨコナデ、ヘラ磨き、ハケ、内面ヨコナデ、ハケ、肩部胴部外面ハケ、ミガキ、内面ハケ、底部外面ヘラ磨き、内面ハケ	肩部と胴部上半に指頭圧痕を残す。口縁部ヘラ記号4本
第61図　6	鉢	P5G拡張区攪乱	やや不良 並	淡茶褐色	口径10.4cm、器高6.3cm	内・外面ヘラ磨き	
第61図　7	〃	P5G拡張区、砂層	〃	〃	口径6.3cm、底径2.2cm、器高5.75cm		
第61図　8	〃	P5G拡張区	〃	褐色	口径23.6cm	口縁部外面ナデ、内面ハケのあとナデ、体部ハケのあとヘラ磨き	
第61図　9	器台	P5G拡張区攪乱	密 並	茶褐色	口径22.3cm、脚部径19.2cm、脚部に透孔4径1.4cm	外面ヘラ磨き、内面受け部と脚部ヘラ磨き、ただし両端部ヨコナデ	外面と内面上半は赤彩
第62図　1	甕	P4G P532	〃	淡茶褐色	口径21.8cm、〝く〟の字口縁、口縁部ヨコナデ、内・外面ハケ、外面一部ヘラ削り	接合痕あり	
第62図　2	〃	P4G P514	〃	外黒褐色 内淡橙褐色	口径17cm、〝く〟の字口縁	外面ハケ、内面肩部以下ヘラ削り	
第62図　3	〃	P4G P517	〃	外暗茶褐色 内茶褐色	口径15.6cm、胴部径21.4cm、底径2.2cm、器高23.1cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りとつまみあげ	外面、ハケ、内面口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、肩部以下ヘラ削りとナデ	接合痕あり
第62図　4	〃	P4G P538	〃	淡黄褐色	口径15.8cm、口縁は強いひきだしによって外反、端部はナデによる面取りとつまみあげ	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第62図　5	〃	P4G P14	〃	明褐色	口径15.2cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、つまみあげと垂れがある。	〃	
第62図　6	〃	P4G P117	〃	橙褐色	口径16.8cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りと垂れがある。	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ナデ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第62図　7	甕	P4G P89	密 並	外黒褐色 内淡橙褐色	口径17.4cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りとつまみあげ	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケのあとナデ	
第62図　8	〃	P4G P29	〃	淡褐色	口径18.3cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	口縁部ヨコナデ、肩部ハケのあとヨコナデ	
第62図　9	〃	P4G P7	〃	淡灰褐色	口径15.5cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、つまみあげと垂れがある。	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ナデ	
第62図　10	〃	P4G P504	〃	〃	口径19.6cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	口縁部ヨコナデ	
第62図　11	〃	P4G P128	〃	淡橙褐色	口径18.6cm、〝く〟の字口縁端部はナデによる面取り、つまみあげと垂れがある。	内・外面ハケのあとナデ	
第63図　12	〃	P4G P522	〃	茶褐色	口径24cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面摩耗不明、内面ハケ	接合痕あり
第63図　13	〃	P4G P27	〃	淡橙褐色	口径27.6cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れがある	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケのあとナデ	
第63図　14	〃	P4G P522	〃	茶褐色	口径21.2cm、胴部径23.6cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面一部ナデ	
第63図　15	〃	P4G P59	〃	褐色	口径16.7cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	内・外面摩耗不明	
第63図　16	〃	P4G P501	〃	外黒褐色 内淡茶褐色	口径17.2cm、狭い有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第63図　17	〃	P4G P520	〃	淡黄灰茶褐色	口径15.4cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れあり	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面一部ナデ	接合痕あり、外面スス付着
第63図　18	〃	P4G P517	〃	外淡灰褐色 内淡茶褐色	口径17.4cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、つまみあげと垂れ	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケのあとナデ	接合痕あり
第64図　19	〃	P4G P27	〃	〃	口径33cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以上ハケ	接合痕あり
第64図　20	〃	P4G P119	〃	外黒褐色 内淡茶褐色	口径15.6cm、狭い有段口縁	〃	〃
第64図　21	〃	P4G P105	〃	外黒褐色 内乳褐色	口径15.5cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケのあとナデ	〃
第64図　22	〃	P4G P520	〃	淡茶褐色	口径13.8cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第64図　23	〃	P4G P47	〃	茶褐色	口径15.7cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ナデ	
第64図　24	〃	P4G P501	〃	外淡橙褐色 内淡黄褐色	口径24cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部摩耗、不明	
第64図　25	〃	P4G P524	〃	外黒褐色 内淡茶褐色	口径18.2cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケとナデ	
第64図　26	〃	P4G P513	〃	外黒褐色 内淡黄褐色	口径16.2cm、有段口縁	口縁部上位ハケ、下位から頸部ヨコナデ、肩部以上外面ハケ、内面ヘラ削り	
第64図　27	〃	P4G P61	〃	外黒褐色 内茶褐色	口径17.2cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	
第65図　28	〃	P4G P520	〃	淡茶褐色	口径15.6cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以上ハケ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第65図　29	甕	P 4 G P537	密 並	褐色	口径16.4cm、胴部径18.8cm、底径2 cm、器高22（推）cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	
第65図　30	〃	P 4 G P523	〃	淡茶褐色	口径16cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第65図　31	〃	P 4 G P29	〃	外黒褐色 内褐色	口径19.2cm、有段口縁、外面肩部に斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り、内面頸部ハケ	
第65図　32	〃	P 4 G P532	〃	外黒褐色 内淡黄褐色	口径16.3cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ナデ	
第65図　33	〃	P 4 G P76	〃	褐色	口径16.3cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ、内面ヘラ削り	外面スス付着
第65図　34	〃	P 4 G P57	〃	淡黄褐色	口径12.2cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面摩耗、内面ハケのあとナデ	
第65図　35	〃	P 4 G P99	〃	淡橙褐色	口径11cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ、内面ヘラ削り	
第65図　36	〃 （底）	P 4 G P100	〃	外淡茶褐色 内灰褐色	底径2 cm	外面ヘラ削りとハケ、内面ヘラ削り、ハケとナデ	外面（一部）スス付着、接合痕あり
第66図　37	甕	P 4 G P58	〃	外淡茶褐色 内淡灰褐色	口径33.6cm、〝く〟の字口縁、端部は面をもち、垂れが明瞭擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第66図　38	〃	P 4 G P123	〃	淡橙褐色	口径16cm、〝く〟の字口縁、端部は面をもつ、沈線1条	〃	
第66図　39	〃	P 4 G P517	〃	淡黄茶褐色	口径16.4cm、〝く〟の字口縁、端部は面をもつ、つまみあげ、擬凹線2条	〃	外面スス付着
第66図　40	〃	P 4 G P102	〃	淡黄褐色	口径18cm、狭い有段口縁、擬凹線3条	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	
第66図　41	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径18.4cm、〝く〟の字口縁、擬凹線3条	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケのあとナデ	
第66図　42	〃	P 4 G P23	〃	褐色	口径16.6cm、〝く〟の字口縁、端部は面を持つ、つまみあげと垂れ	口縁部ナデ、肩部以下ハケ	
第66図　43	〃	P 4 G P18	〃	〃	口径18.6cm、胴部径23.9cm、底径5.6cm、器高29.7cm、狭い有段口縁、擬凹線3条	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ、摩耗が著しい	
第67図　44	〃	P 4 G P38	〃	橙褐色	口径29.4cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	外面スス付着
第67図　45	〃	P 4 G P128	〃	暗茶褐色	口径17cm、狭い有段口縁、擬凹線2条、肩部外面斜行列点文	〃	〃
第67図　46	〃	P 4 G P520	〃	外淡橙褐色 内淡灰褐色	口径17.3cm、有段口縁、擬凹線3条、肩部外面斜行列点文	〃	
第67図　47	〃	P 4 G P55	〃	外茶褐色 内橙茶褐色	口径17.8cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケとヘラ削り	
第67図　48	〃	P 4 G P521	〃	茶褐色	口径15.6cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	
第67図　49	〃	P 4 G P 3	〃	灰褐色	口径16cm、胴部径21.2cm、底径2.2cm、器高26.8cm、有段口縁、擬凹線5条、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、胴部斜方向のハケ、底部付近外面縦方向のハケ、内面斜方向のハケ	
第67図　50	〃	P 4 G P42	〃	乳褐色	口径19.1cm、有段口縁、擬凹線10条	口縁部ヨコナデ、肩部内面ヘラ削り、口縁内面連続する指頭圧痕	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第68図　51	長頸壺	P 4 G P22	やや不良 並	褐色	口径14.7cm、器高25.6cm、底径4.8cm、口縁端部はナデによる面取り	口縁部上位ヨコナデ、底部外面ヘラ削り、内面ナデ、その他全てハケ、(頸部、肩部内面に指頭圧痕あり)	
第68図　52	〃	P 4 G P 2 b	〃	淡灰褐色	口径13.4cm、器高32.1cm、底径4.1cm	内外面ハケ、底部外面はナデ	
第68図　53	〃	P 4 G P12	〃	褐色	口径12.9cm、口縁端部はナデによる面取り	外面ハケのあとヘラ磨き、上位はヨコナデ、内面ハケ	
第68図　54	〃	P 4 G P503	密 並	淡茶褐色	口径13.4cm、口縁端部はナデによる面取り	口縁部外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケ、頸部外面ハケ、内面ヘラ磨き	
第68図　55	〃	P 4 G P 6	やや不良 並	外橙褐色 内褐色	口径13.6cm	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケ	口縁部外面にヘラ記号２条
第68図　56	〃	P 4 G P123	密 並	淡黄褐色	口径13.7cm、片口口縁	口縁部上位ヨコナデ、ほか外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケ、頸部内面はナデ	接合痕あり
第68図　57	〃	P 4 G P76	不良 並	橙褐色	口径15.2cm	外面ヘラ磨き、口唇部はヨコナデ、内面ハケのあとナデ	
第68図　58	壺	P 4 G P524	密 並	淡黄褐色	口径13.8cm、口縁端部に面を持ちつまみあげ、垂れあり	口縁部内外面ヘラ磨き、外面端部はヨコナデ、内面下部はハケ、肩部内外面ナデ	
第69図　59	長頸壺	P 4 G P514	〃	淡黄褐色	口径18cm	内外面ハケ、端部はヨコナデ	
第69図　60	〃	P 4 G P34	〃	〃	口径13.9cm、片口口縁	口縁部内外面ハケ、端部はヨコナデ、肩部外面ハケ、内面ナデ	頸部外面にヘラ記号あり
第69図　61	〃	P 4 G P511	〃	淡茶褐色	口径14.8cm、有段口縁	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケ、内外面口縁端部はヨコナデ	外面頸部、肩部（一部）に黒斑
第69図　62	〃	P 4 G P105	〃	淡黄褐色	口径15cm、有段口縁	内外面とも摩耗が著しい、口縁端部はヨコナデ	
第69図　63	〃	P 4 P83	〃	淡茶褐色	口径13.2cm、有段口縁	内外面ハケ、口縁端部はヨコナデ	接合痕あり
第69図　64	〃	P 4 G P59	不良 並	外茶褐色 内褐色	口径13cm、有段口縁、擬凹線３条	内外面ハケ、口縁部はヨコナデ	
第69図　65	〃	P 4 G P50 b	密 並	〃	口径10.5cm、胴部径11.1cm、底部径2.8cm、有段口縁、擬凹線９条	外面ヘラ磨き、内面ハケ、口縁端部はヨコナデ	外面赤彩文様
第69図　66	〃	P 4 P98	〃	淡橙褐色	口径15cm、有段口縁、擬凹線２条	内外面とも摩耗が著しい、口縁部内面はヘラ磨き、(端部はヨコナデ)	頸部、肩部に接合痕あり
第69図　67	〃	P 4 G P74	〃	淡茶褐色	口径16.8cm、有段口縁、端部に連続する斜行刻目あり	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ヨコナデ（上位）とハケ（下位）	
第69図　68	〃	P 4 G P23	不良 並	淡橙褐色	口径15.2cm、有段口縁、擬凹線４条	内外面ハケのあとヘラ磨き、口縁端部はヨコナデ	頸部外面に竹官文スタンプ（３コ）あり
第69図　69	〃	P 4 G P505	密 並	〃	口径13.4cm、狭い有段口縁、擬凹線２条	外面ヘラ磨き、内面ヨコナデ	外面に逆Ｖ字状のヘラ記号あり
第69図　70	〃	P 4 G P20	やや不良 並	外淡褐色 内淡茶褐色	底径4.4cm	外面ヘラ磨き、底部下位はヘラ削り、内面ヘラ削り	胴部下位に焼成後穿孔（４×1.5cm）あり
第70図　71	壺	P 4 P54	密 並	淡黄褐色	口径16.2cm、有段口縁	内外面頸部にハケ、他は摩耗している。	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第70図　72	壺	P 4 G P10	やや不良 並	褐色	口径13.8cm、有段口縁	外面ハケのあとヘラ磨き、内面頸部ヘラ磨き（上位）、他はハケ、口縁端部はヨコナデ	頸部に接合痕あり、肩部に焼成後突孔（指頭大）あり
第70図　63	〃	P 4 G P11	不良 並	灰褐色	口径14.6cm、有段口縁	口縁部外面ナデ、内面ヘラ磨き体部外面ヘラ磨きのあとナデ、内面ハケのあとヘラ磨き	口縁部内面に赤彩
第70図　74	〃	P 4 G P16	やや不良 並	褐色	口径19.6cm、有段口縁	口縁部外面ハケのあとナデ、頸部内面摩耗、他はヘラ磨き	
第70図　75	〃	P 4 G P57	〃	淡橙褐色	口径17cm、有段口縁	内外面ヨコナデ	
第70図　76	〃	P 4 G P108	密 並	淡黄褐色	口径16cm、狭い有段口縁、擬凹線3条	胴部内面ハケ、他はヘラ磨き	外面、口縁部内面に赤彩
第70図　77	〃	P 4 P102	〃	〃	口径15cm、狭い有段口縁、擬凹線3条	口縁端部ヨコナデ、肩部内面ナデ、他はヘラ磨き	〃
第70図　78	〃	P 4 G P125、P 501	〃	〃	口径14.2cm、有段口縁、擬凹線3条	口縁端部ヨコナデ、頸部ヘラ磨き、体部外面ハケのあとヘラ磨き、内面ヘラ削りのあとナデ、頸部内面に指頭圧痕あり	
第70図　79	〃	P 4 G P529	〃	〃	口径14cm、有段口縁	頸部内面ヘラ削り、他はヨコナデ	口縁部外面にスス付着
第70図　80	〃	P 4 G P17	〃	灰褐色	口径12cm、有段口縁	口縁部ヘラ磨き、体部外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケ	
第71図　81	〃	P 4 G P520	〃	〃	口径40cm、有段口縁、口縁部に2個1組の棒状浮紋、円形浮紋痕跡（いずれも組数不明）	内外面ヘラ磨き	
第71図　82	〃	P 4 G P515	〃	外淡茶褐色 内茶褐色	口径13.7cm、有段口縁、口縁部に竹管紋を施した円形浮紋（個数不明）	内外面ヨコナデ	
第71図　83	〃	P 4 G P15	やや不良 並	褐色	口径21cm、有段口縁	内外面ヘラ磨き、頸部内面はハケ	
第71図　84	〃	P 4 G P43	密 並	淡黄褐色	口径19.4cm、有段口縁	外面ハケのあとナデ、端部はヨコナデ、内面ヘラ磨き	
第71図　85	〃	P46 P 8	やや不良 並	外橙褐色 内褐色	底径4.2cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、頸部ヘラ磨き、肩部、胴部上位外面ヘラ磨き、内面ハケのあとヘラ磨き、胴部下位、底部内外面ハケのあとヘラ磨き	肩部に焼成後突孔(指頭大)あり。
第71図　86	〃	P 4 G P520	密 並	茶褐色	口径15.1cm、有段口縁、擬凹線2条、(口縁下部)	外面ヘラ磨き、内面ハケのあとヘラ磨き	
第71図　87	〃	P 4 G P509	やや不良 並	橙褐色	口径10.9cm、有段口縁、底径2.2cm、器高14.6cm	外面ヘラ磨き、口縁部はヨコナデ、内面ハケのあとヘラ磨き	外面スス、内面炭化物付着
第71図　88	〃	P 4 P44	〃	〃	口径13.4cm、有段口縁	外面口縁部ヘラ磨き、内面ヨコナデ	
第72図　89	〃	P 4 G P507	〃	茶褐色	口径12.5cm、有段口縁、底径2.5cm、器高13.1cm	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ハケのあとヘラ磨き、底部外面ヘラ削り、内面ハケ	外面一部スス付
第72図　90	〃	P 4 P 1	〃	橙褐色	口径10.1cm、有段口縁、底径2.5cm、器高15.9cm	口縁部内外面ヨコナデ、体部、底部内外面ハケのあとヘラ磨き、肩部内面はナデ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第72図 91	壺	P4G P527	やや不良 並	淡黄褐色	口径11.7cm、有段口縁、底径3cm、器高12.8cm	外面ヘラ磨き、口縁部はヨコナデ、内面口縁部ヘラ磨き、体部指頭圧痕、ハケのあとナデ、底部ナデ	肩部内面に接合痕あり
第72図 92	〃	P4G第3層 P7	〃	明橙褐色	口径16.1cm、有段口縁	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ハケ	肩部内面に接合痕あり、肩部外面にヘラによる文様、胴部外面に黒斑あり
第72図 93	〃	P4G P533	不良 並	外茶褐色 内淡黄褐色	口径10.2cm、有段口縁	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラ磨き、内面ナデ	肩部、胴部に接合痕あり
第72図 94	〃	P4G P111	密 並	茶褐色	口径9.1cm、つまみあげ口縁	内外面ハケのあとナデ	
第72図 95	〃	P4G P503	〃	淡橙褐色	口径7.6cm、有段口段	内面ハケのあとヘラ削り	外面赤彩、内面に絞り(痕)
第73図 96	〃	P4G P97	〃	外明褐色 内褐色	底径3.9cm	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケ、頸部は内外面ヨコナデ、胴部内面には指頭圧痕	
第73図 97	〃	P4G P41	〃	外褐色 内灰褐色	底径7.4cm	外面ヘラ磨き、頸部と底部の一部ナデ、底部下位に指頭圧痕、内面ハケ、口縁部はヘラ磨き	底部下面にヘラによる断面V字状の切れ込み（9条）あり
第73図 98	〃	P4G P508	〃	褐色	底径2.1cm	外面体部ハケのあとヘラ磨き、底部ナデ、内面体部指頭圧痕とナデ、底部ハケ	頸部内面に接合痕あり
第73図 99	(底)	P4G P528	〃	淡黄褐色	底径6.2cm	内外面ヘラ磨き	外面スス付着
第73図 100	壺	P4G P105	〃	〃	底径3.2cm	内外面ヘラ磨き	内外面赤彩痕
第73図 101	〃	P4G P75	〃	灰褐色	口径10.2cm、底部径1cm、器高7.9cm	内・外面摩耗不明	
第74図 102	高坏	P4G P523	〃	淡橙褐色	口径31.6cm、有段、脚部径16.8cm、端部はかえしをもつ、透孔4径1.5cm、器高21.6cm	外面と坏部内面ヘラ磨き、脚部内面ハケ、脚部端部内面はヨコナデ	坏部内・外面と、脚部外面透孔の周囲に赤彩
第74図 103	〃	P4G P55	〃	〃	脚部透孔4径1cm	外面と坏部内面ヘラ磨き、脚部内面ハケのあとナデ、上位はヘラ削り	坏部内・外面と、脚部外面に赤彩痕
第74図 104	〃 (脚)	P4G P33	やや不良 並	褐色	脚部径17.7cm、透孔4、径0.8cm	外面ヘラ磨き、内面ハケのあとヨコナデ	外面に赤彩による文様
第74図 105	高坏	P4G P38	〃	淡褐色	口径22.2cm、有段口縁	内・外面ヘラ磨き、坏部端部はヨコナデ	内・外面赤彩による文様
第75図 106	〃	P4G P24	〃	褐色	脚部径15cm、透孔4、径0.9cm	外面と坏部内面ヘラ磨き、一部摩耗、脚部内面ナデ	脚部内面に絞り(痕)
第75図 107	〃	P4G P19	〃	〃	脚部径16.3cm、透孔3、径0.8cm	外面と坏部内面ヘラ磨き、脚部内面ナデ、下位はヨコナデ	脚部内面に絞り(痕)、外面に一部赤彩
第75図 108	〃	P4G P120	密 並	淡茶褐色	脚部径15.2cm、透孔は2個ずつ3個所(計6)径0.7cm	外面ヘラ磨き、内面ハケ	脚部内面に絞り(痕)
第75図 109	〃	P4G P95	〃	淡黄褐色	脚部に透孔4、径0.7cm	外面ヘラ磨き、内面ナデ	〃
第75図 110	〃	P4G P27	〃	〃	脚部径13cm	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ナデ	〃
第75図 111	〃	P4G P14	やや不良 並	褐色	脚部径12cm、透孔4、径0.8cm	外面ヘラ磨き、内面ハケ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第75図 112	高坏	P 4 G P541	密 並	淡黄褐色	脚部径13.5cm	外面ヘラ磨き、内面ナデ	外面赤彩
第75図 113	〃	P 4 G P532	〃	淡褐色	脚部径12cm	外面ヘラ磨き、内面ハケ、ナデ	脚部内面に指頭圧痕、絞り（痕）
第75図 114	〃	P 4 G P104	〃	〃	脚部径17.6cm、有段、端部は反転、段（上位）に連続する刻目、擬凹線4条、透孔は、2個ずつ3個所（計6）径0.6cm	外面ヘラ磨き、内面ナデ、端部はヨコナデ	外面赤彩、脚部内面に絞り（痕）
第75図 115	〃	P 4 P28	やや不良 並	〃	有段、透孔は2個ずつ3個所（計6）径0.6cm	外面ヘラ磨き、内面ハケ、下位はヘラ磨き	外面赤彩
第75図 116	〃	P 4 G P110	密 並	外淡桃褐色 内淡茶褐色	有段	外面と坏部内面ヘラ磨き、脚部内面ヘラ削り、ハケ	外面と坏部内面に赤彩
第76図 117	器台	P 4 G P57	〃	淡褐色	脚部径19.2cm、有段、透孔4、径1cm	外面と坏部上位内面ヘラ磨き、脚部内面ヘラ削り、端部はナデ	
第76図 118	〃	P 4 G P13	やや不良 並	褐色		外面と坏部内面ヘラ磨き、脚部内面ハケ	脚部内面に絞り（痕）を残す
第76図 119	〃	P 4 G P505	密 並	淡褐色	脚部径13.2cm、端部は面を持ち沈線1条	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ナデ	内面に接合痕あり
第76図 120	〃 （脚）	P 4 G P524	やや不良 並	外黄灰褐色 内淡黄褐色	脚部径12.4cm	外面ナデ、上位に指頭圧痕、内面上位ヘラ削り、下位ヨコナデ	〃
第76図 121	〃	P 4 G P70	密 並	淡褐色	口径10.2cm、端部は面をもち、擬凹線3条	外面と坏部内面ヘラ磨き、脚部内面上位はヘラ削り、下位はハケ	脚部上位外面に接合痕あり
第76図 122	〃	P 4 G P79	〃	外淡褐色 内黒褐色	口径9.4cm、端部は面を持つ	外面ヘラ磨き、内面ナデ、坏部内面は摩耗により不明	外面赤彩
第76図 123	〃	P 4 G P91	〃	淡橙褐色	底径9.6cm、端部は面を持ち沈線1条	内・外面摩耗不明	外面と坏部内面に赤彩
第76図 124	鉢	P 4 G P111	〃	茶褐色	口径11.8cm	内・外面ヘラ磨き	
第76図 125	〃	P 4 G P35	密 良	褐色	口径8.1cm、体部に把手をもつ	外面ヘラ磨き、内面ナデ	
第76図 126	〃	P 4 G P533	密 並	外淡灰色 内茶褐色	口径10cm		内面赤彩
第76図 127	〃	P 4 G P90	〃	淡褐色	底径8cm	外面ヘラ磨き、内面ナデ	外面一部赤彩痕を残す
第76図 128	小形台付鉢	P 4 G P84	〃	淡黄褐色	口径11.8cm、脚部径5.8cm、器高11.7cm	内・外面ヘラ磨き	
第76図 129	（脚台）	P 4 P18	やや不良 並	褐色	底径9.5cm	外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り	
第76図 130	〃	P 4 G P513	並 密	淡橙褐色	脚部径8.6cm	外面ヘラ磨き、内面摩耗不明	
第76図 131	〃	P 4 G P 2	〃	淡褐色	脚部径10cm	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケのあとナデ	内外面赤彩痕、脚部内面にヘラ記号
第76図 132	〃	P 4 G P104	〃	〃	脚部径7cm	体部外面ハケのあとヘラ磨き、内面ヘラ磨き、脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り、端部はヨコナデ	
第76図 133	〃	P 4 G P74	〃	〃	脚部径7.4cm	脚部内面ナデ、他はヘラ磨き	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第77図 134	鉢 (底部穿孔)	P4G P37	不良 並	褐色	口径21.6cm、底径2.8cm、器高12.4cm、底部穿孔径0.9cm	内・外面ハケのあとヘラ磨き、口縁端部はナデ	外面黒斑あり
第77図 135	鉢	P4G P519	密 並	外淡茶褐色 内淡黄褐色	口径20.2cm	内・外面ヘラ磨き	
第77図 136	〃	P4G P104	〃	外茶褐色 内灰褐色	口径19.6cm	外面ハケ、内面ヘラ削り、ハケのあとナデ	
第77図 137	〃	P4G P535	〃	淡茶褐色	口径18.8cm、端部にやや凹む面を持つ	外面ハケのあとヘラ磨き、下位はナデ、内面ナデ	
第77図 138	〃	P4 P100	〃	〃	口径19.2cm、端部にやや凹む面を持つ	内・外面ヘラ磨き	
第77図 139	鉢 (底部穿孔)	P4G P5	不良 並	褐色	口径15.5cm、底径4.3cm、器高14.5cm、底部穿孔径0.8cm	内・外面ハケのあとヘラ磨き	
第77図 140	〃	P4G P524	密 並	淡黄褐色	口径17.2cm、底径1.9cm、器高11.9cm、底部穿孔径0.6cm	内・外面ハケ、口縁端部外面はヨコナデ、底部穿孔近くに指頭圧痕	
第77図 141	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径14.8cm、底径2.8cm、器高14.6cm、底部穿孔径1.2cm	口縁部ヨコナデ、体部底部外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り、底部下位に指頭圧痕	
第77図 142	〃	P4G P62	〃	淡黄褐色	底径1.9cm、底部穿孔径1cm	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ナデ	外面に黒斑
第78図 143	鉢	P4G P96	〃	淡茶褐色	口径30.6cm、有段口縁、口縁端部はナデによる面取り、肩部に把手を持つ	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	
第78図 144	壺	P4G 第3層	〃	外茶褐色 内灰褐色	口径23cm、有段口縁、擬凹線4条、肩部に把手を持つ	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラ磨き、内面ナデ	肩部内面に接合痕あり
第78図 145	〃	P4G P50	〃	淡茶褐色	口径21.6cm、有段口縁、擬凹線3条	外面摩耗不明、内面ヘラ磨き	外面赤彩
第78図 146	〃	P4G P532	〃	〃	口径17.8cm、有段口縁、端部はナデによる面取り	内・外面ヘラ磨き	内・外面赤彩、外面にスス付着
第78図 147	〃	P4G P21	やや不良 並	褐色	口径16cm、底径4.1cm、器高10.7cm	内、外面ハケのあとヘラ磨き、口縁端部外面はヘラ磨き	外面にスス付着
第78図 148	〃	P4G P4	密 並	〃	口径14.9cm、底径5.5cm、器高8.5cm、不明瞭な有段口縁	内・外面ヘラ磨き、底部外面はヘラ削り	
第78図 149	〃	P4G P30	やや不良 並	茶褐色	口径13.7cm、有段口縁、底径2cm、器高9.4cm	内、外面ヘラ磨き、体部内面にハケ痕を残す	外面と口縁部内面に赤彩
第78図 150	蓋	P4 P107	〃	〃	口径4.6cm、つまみ部径2.2cm、器高4.2cm	外面ヘラ磨き、内面ハケ、端部は内・外面ヨコナデ	
第78図 151	鉢	P46 P539	不良 並	淡褐色	口径9.9cm、底径4cm、器高5cm	外面ヨコナデ、底部下端に指頭圧痕、内面ヘラ削り	
第78図 152	〃	P4G P48	密 並	〃	口径13cm、底径5.3cm、器高5.6cm	内外面ナデ、口縁端部はヨコナデ、体部内面上位はハケ	
第78図 153	手づくね土器	P4 P31	〃	〃	口径6cm、底径1cm、器高6.2cm	内外面ナデ	外面にスス付着
第79図 154	底部穿孔土器(底)	P4G P59	密 並	外灰褐色 内茶褐色	底径3.4cm、底部穿孔径0.6cm	内・外面ヘラ削り、体部外面はハケのあとヘラ磨き	内・外面黒斑あり
第79図 155	〃	P4G P530	〃	淡黄灰褐色	丸底、底部穿孔径1.0cm	外面ハケ、内面体部ナデ、底部ヘラ削りのあとナデ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第79図 156	底部穿孔土器(底)	P4G P46	密 並	外淡黄茶褐色 内淡黄灰褐色	底径3.2cm、底部穿孔0.8cm	内外面ハケのあとナデ、底部下位外面はヘラ削り、内面に指頭圧痕	
第79図 157	(底)	P4G P517	〃	淡橙褐色	底径5.5cm	外面体部ヘラ磨き、底部ヘラ削り、内面ハケ	外面スス付着、内面黒斑あり
第79図 158	〃	P4G P527	〃	〃	底径4.3cm、底部下面はやや凹む	内・外面ハケ、内面底部はヘラ削りのあとハケ	外面スス、内面炭化物付着
第79図 159	〃	P4G P532	〃	淡黄灰褐色	底径2.6cm、底部下面はやや凹む	外面ハケ、内面ヘラ削り	〃
第79図 160	〃	P4G P98	〃	〃	底径7.6cm、底部下面は凹む	内外面ハケ、底部下位はヘラ削り	外面スス付着
第79図 161	〃	P4G P59	やや不良 並	褐色	底径2.2cm、底部下面はやや凹む	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケ	外面スス、内面炭化物付着
第79図 162	〃	P4G P540	密 並	淡黄褐色	底径5.2cm、底部下面はやや凹む	内・外面ハケ、底部下位外面はヘラ削り、内面はナデ	〃
第79図 163	〃	P4G P119	〃	〃	底径3.2cm	外面ハケ、内面ヘラ削り、底部下位内面はハケ、外面にヘラ削り痕を残す	〃
第79図 164	〃	P4G P47	〃	〃	底径2cm		外面スス付着
第80図 1	甕	P4G第3層下部	〃	淡茶褐色	口径16.8cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、外面一部にハケあり、外面肩部以下ハケ、内面はハケ（上位）とヘラ削り（下位）	外面口縁部スス付着
第80図 2	〃	〃	〃	〃	口径16.3cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れが明瞭、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、内面では一部ハケあり、外面肩部以下ハケ、内面はナデ	外面胴部に黒斑あり
第80図 3	〃	〃	〃	茶褐色	口径16.4cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れが明瞭	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	外面スス付着
第80図 4	〃	〃	〃	外淡黄灰褐色 内淡橙褐色	口径17cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	〃
第80図 5	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径13.4cm、口縁部は強いひきだしによって外反	口縁ヨコナデ	外面と口縁の内面（一部スス付着）
第80図 6	〃	〃	〃	外暗茶褐色 内茶褐色	口径14.8cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りとつまみあげ、肩部外面に斜行列点文	摩耗が著しい、肩部内面に指頭圧痕	接合痕あり
第80図 7	〃	〃	〃	茶褐色	口径14.9cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りとつまみあげ、垂れも明瞭、肩部外面に斜行列点文	口縁外面と内面の上位ヨコナデ、外面肩部以下と口縁内面の下位ハケ、内面肩部以下ヘラ削り	外面スス付着
第80図 8	〃	〃	〃	乳褐色	口径14.3cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	接合痕あり
第80図 9	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径15cm、狭い有段口縁、擬凹線4条	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ・内面ナデ	外面スス付着
第80図 10	〃	〃	〃	〃	口径14.6cm、やや狭い有段口縁、擬凹線3条、肩部外面に斜行列点文	〃	〃
第80図 11	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径12.6cm、有段口縁、擬凹線3条、肩部外面に斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面摩耗している、内面ナデ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第81図　12	甕	P4G第3層 下部	密 並	淡茶褐色	口径19cm、有段口縁、肩部外面に斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面摩耗（ハケか）、内面ハケ	外面スス付着
第81図　13	〃	〃	〃	明茶褐色	口径17.6cm、有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	外面スス付着、接合痕あり
第81図　14	〃	〃	〃	外淡赤褐色 内淡黄褐色	口径22.4cm、有段口縁、擬凹線6条	〃	〃
第81図　15	〃	〃	〃	黒褐色	口径15.9cm、有段口縁、擬凹線3条	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	
第81図　16	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径16.1cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	外面スス付着
第81図　17	長頸壺	〃	〃	外淡黄褐色 内暗灰色	口径16cm、胴径20.2cm、有段口縁、擬凹線2条	口縁端部外面と口縁部内面ヨコナデ、外面口縁部以下と内面肩部以下ハケ	胴部内面ヘラ状具痕あり
第81図　18	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径16.8cm	口縁端部ヨコナデ、口縁部外ヘラ磨きのあとハケ、内面口縁部と肩部以下ハケ、外面肩部以下ヘラ磨き（右下り）	接合痕あり
第81図　19	壺	〃	〃	淡茶褐色	口径17.2cm、受け口状口縁、屈曲部外面に連続する斜行刻目	内・外面ヨコナデ	
第81図　20	〃	P4G第4層 P121	〃	〃	胴径10.5cm、底径1.5cm	内・外面ヘラ磨き	
第81図　21	長頸壺 （小形）	P4G第3層 下部	良 並	茶褐色	口径8.4cm	外面ヘラ磨き、内面下位ハケ	接合痕あり、外面赤彩
第81図　22	〃	〃	密 並	淡黄褐色	口径6.4cm	外面ヘラ磨き、内面上位工具によるナデ	接合痕あり
第81図　23	手捏ね土器	〃	〃	外茶褐色 内淡茶褐色	口径4.2cm、胴径5.1cm	内・外面、指によるナデ	〃
第81図　24	小形壺	〃	〃	淡黄褐色	口径6.6cm、胴径9.8cm	内・外面ヘラ磨き	
第82図　25	高坏	〃	〃	茶褐色	口径27cm、有段、擬凹線7条	内・外面ヘラ磨き	
第82図　26	〃	〃	〃	淡黄褐色	透孔は2個ずつ3個所（計6）径0.7cm	外面上位は摩耗している、下位はヘラ磨き、内面上位はヘラ削り、下位はハケのあとナデ	外面下位赤彩
第82図　27	〃	〃	〃		脚部径18.4cm、透孔数は不明、脚端部の面には沈線1条	外面ヘラ磨き、内面上位ヘラ削り下位はヨコナデ	外面赤彩
第82図　28	器台	〃	〃	淡橙褐色	脚部径10.7cm、透孔径0.6cm	内・外面とも摩耗している。	
第82図　29	蓋	〃	〃	淡黄褐色	口径4.4cm、つまみ部径2.2cm、器高4.1cm	外面ヘラ磨き、内面指によるナデ	
第82図　30	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径11.6cm、つまみ部径3.4cm、器高5.4cm	内・外面ハケのあとヘラ磨き	
第82図　31	（脚台）	〃	〃	外淡黄茶褐色 内淡黄褐色	脚台径8.4cm、端部はナデによる面取り	内・外面ナデ（一部ハケ残）	
第82図　32	鉢	〃	〃	明茶褐色	口径14.6cm		口縁部内・外面赤彩
第82図　33	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径12.6cm、底径4.2cm、器高5.3cm、口縁部沈線1条	内・外面ハケのあとヘラ磨き、ただし、口縁部はヨコナデ、底部外面は指によるおさえ	
第82図　34	〃	〃	〃	〃	口径16.1cm	外面は摩耗している、内面口縁部ヨコナデ、体部はヘラ磨きとヨコナデ	外面黒斑あり

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第82図　35	鉢	P4G第3層 下部	密 並	茶褐色	口径17.8cm、口縁端部は面をもつ、沈線1条		
第82図　36	〃	〃	〃	〃	口径19.2cm、口縁部外面指による凹線1条	外面ヘラ磨き、内面ハケのあとヘラ磨き	
第82図　37	（底部）	〃	〃	外淡黄褐色 内淡茶褐色	底径1.6cm、穿孔1、径1.3～1.5cm	外面ヘラ削りのあとヘラ磨き、内面ハケのあとヘラ磨き	外面黒斑あり
第82図　38	〃	〃	〃	淡黄灰褐色	底径1.0cm、穿孔1、径1.0cm	外面ハケ、内面上位ハケ、下位ヘラ削りのあとナデ	
第82図　39	〃	〃	〃	外淡黄褐色 内灰茶褐色	底径3.9cm	外面上位摩耗、下位ヘラ削り、内面ハケ	接合痕あり
第82図　40	〃	〃	〃	黄灰褐色	底径4cm	外面上位ハケ、下位ヘラ削り、内面ハケ	外面スス付着
第82図　41	〃	〃	〃	外淡黄褐色 内淡橙褐色	底径3.2cm	外面ハケ、下位にヘラ削りあり、内面は摩耗している	〃
第83図　1	甕	P4G第3層	〃	外淡灰褐色 内淡茶褐色	口径16.6cm、〝く〟の字口縁、端部は指による面取り	口縁外面と内面端部ナデ、他ハケ、肩部内面指頭圧痕あり	〃
第83図　2	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径17.7cm、〝く〟の字口縁、端部は指による面取り	口縁部ヨコナデ、外面頸部ハケ、内面頸部ナデ、ハケ、ヘラ削り	〃
第83図　3	〃	〃	〃	〃	口径19.7cm、口縁部は強いひきだしによって外反、端部は指による面取り	口縁部ヨコナデ、外面肩部ハケ	
第83図　4	〃	〃	〃	〃	口径16.9cm、〝く〟の字口縁、端部は指による面取り	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケとヘラ磨き、内面ヘラ削りとナデ	外面スス付着
第83図　5	〃	〃	〃	外淡赤褐色 内黒灰色	口径17.4cm、〝く〟の字口縁、端部は指による面取り	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケとヘラ削り	〃
第83図　6	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径19.6cm、〝く〟の字口縁、端部は指による面取りとつまみあげ	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	接合痕あり、外面スス付着
第83図　7	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径17.4cm、〝く〟の字口縁、端部は指による面取りとつまみあげ	〃	
第83図　8	〃	〃	〃	外黒褐色 内橙褐色	口径12.6cm、〝く〟の字口縁、端部は指による面取り	口縁部ヨコナデ、内面一部ハケ、肩部以下外面ハケ、内面ナデ	
第83図　9	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径14.8cm、〝く〟の字口縁、端部は指による面取り	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	外面スス付着
第83図　10	〃	〃	〃	灰褐色	口径11.8cm、〝く〟の字口縁、端部は指による面取り、つまみあげと垂れ	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	〃
第83図　11	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径14.2cm、〝く〟の字口縁、端部は指による面取り、つまみあげと垂れ、肩部外面斜行列点文	〃	〃
第83図　12	〃	〃	〃	淡褐色	口径15.4cm、狭い有段口縁（受口状）	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ナデとハケ	接合痕あり、外面スス付着
第83図　13	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内茶褐色	口径18cm、狭い有段口縁、（受口状）	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第83図　14	〃	〃	〃	茶褐色	口径18.4cm、狭い有段口縁、（受口状）	〃	〃
第84図　15	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径30.6cm、有段口縁、端部はやや凹む水平面をもつ	口縁部ヨコナデ、肩部外面ナデ、内面ハケ	接合痕あり、内面に黒斑あり
第84図　16	〃	〃	〃	〃	口径25cm、有段口縁、肩部外面に不規則な斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	接合痕あり、肩部外面ヘラ記号3条

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第84図 17	甕	P4G第3層	密 並	淡茶褐色	受口状口縁、外面連続する斜行刻目	口縁部ヨコナデ	
第84図 18	〃	〃	〃	暗茶褐色	狭い有段口縁、つまみあげと垂れ、外面連続する斜行刻目	〃	外面スス付着
第84図 19	〃	〃	〃		受口状口縁、外面連続する斜行刻目	〃	
第84図 20	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径21.2cm、〝く〟の字口縁、端部は指による面取り、垂れが明瞭、面は凹む、肩部外面に斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	接合痕あり
第84図 21	〃	〃	〃	外暗灰褐色 内赤褐色	口径20.2cm、〝く〟の字口縁、端部は面取り、擬凹線2条	口縁部外面ナデ、内面ハケのあとヘラ磨き、肩部以下外面ハケのあとヘラ磨き、内面ナデと指頭圧痕	
第84図 22	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径19cm、有段口縁、(受口状)	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第84図 23	〃	〃	〃	〃	口径17.5cm、狭い有段口縁擬凹線2条	〃	接合痕あり
第84図 24	〃	〃	〃	〃	口径16.3cm、有段口縁、擬凹線2条	〃	接合痕あり、肩部内面ヘラ記号2
第84図 25	〃	〃	〃	〃	口径14.8cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面ナデ	接合痕あり
第84図 26	〃	〃	〃	〃	口径14.5cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	
第84図 27	〃	〃	〃	〃	口径17.2cm、有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	外面スス付着、接合痕あり
第84図 28	〃	〃	〃	〃	口径17cm、有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケとナデ、内面ハケ	接合痕あり
第84図 29	〃	〃	〃	〃	口径17cm、有段口縁、擬凹線4条、肩部外面不規則な刺突	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	外面スス付着
第85図 30	〃	〃	〃		口径29.1cm、有段口縁、擬凹線4条	〃	〃
第85図 31	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径19.6cm、有段口縁、擬凹線4条、肩部外面に斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケのあとヘラ削り	〃
第85図 32	〃	〃	〃	〃	口径16cm、有段口縁、擬凹線3条、肩部外面に斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	接合痕あり、外面スス付着
第85図 33	〃	〃	〃	外褐色 内茶褐色	口径18.7cm、有段口縁、擬凹線3条	〃	接合痕あり
第85図 34	〃	〃	〃	淡灰褐色	口径16.3cm、有段口縁、擬凹線5条	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ナデ	外面スス付着
第85図 35	〃	〃	〃	〃	口径18cm、有段口縁、擬凹線5条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	接合痕あり、外面スス付着
第85図 36	〃	〃	〃	〃	口径12.4cm、有段口縁、擬凹線4条、肩部外面に斜行列点文	〃	外面スス付着
第85図 37	〃	〃	〃	〃	口径13.2cm、有段口縁、肩部外面に斜行列点文	〃	
第85図 38	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径14cm、有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面摩耗のため不明、内面ナデ	
第85図 39	〃	〃	〃	淡灰褐色	口径15.3cm、有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第85図 40	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径15.8cm、有段口縁、擬凹線4条、肩部外面に斜行列点文	〃	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第86図　41	長頸壺	P4G 第3層	密 並	淡橙褐色	口径13.6cm、外面竹管文スタンプ(3)	口頸部外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケのあとナデ	
第86図　42	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径13.6cm	口頸部ハケのあとナデ	
第86図　43	〃	〃	〃	外黒褐色 内淡黄褐色	口径15.6cm、有段口縁	口頸部ハケのあとヨコナデ	
第86図　44	〃	〃	〃	外淡灰褐色 内乳褐色	口径14cm、有段口縁	口頸部ハケのあとナデ	
第86図　45	〃	〃	〃	茶褐色	口径13.8cm、有段口縁、擬凹線3条	口頸部（ハケのあと）ヨコナデ	
第86図　46	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内暗茶褐色	口径15.8cm	口頸部外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケのあとナデ	接合痕あり
第86図　47	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径15.4cm、口縁端部外傾し、指による面取り、つまみあげ	口縁端部ヨコナデ、口頸部ハケ	
第86図　48	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径13.3cm、有段口縁	口縁端部ヨコナデ、口頸部外面ハケ、内面ハケのあとヘラ磨き	
第86図　49	〃	〃	〃	〃	口径14.6cm、有段口縁、擬凹線3条、孔(2孔一組何対かは不明)あり	肩部内面ナデ、他は摩耗のため不明	
第86図　50	壺	〃	〃	〃	口径15cm、有段口縁	口縁部ヘラ磨き	
第86図　51	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径15.4cm、有段口縁	口縁部ナデ、(外面一部にハケ残存)	口縁内・外面赤彩
第86図　52	〃	〃	〃	茶褐色	口径15.8cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ヨコナデ、内面ハケ	接合痕あり
第87図　53	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径12.5cm、有段口縁、擬凹線4条	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ヘラ磨き、内面不明	接合痕あり
第87図　54	〃	〃	〃	〃	口径13cm、短い〝く〟の字口縁、端部は指による面取り、垂れが明瞭	口縁部ヨコナデ、肩部以下ヘラ磨き	外面肩部以下赤彩
第87図　55	〃	〃	〃	褐色	口径11.6cm、胴部径17.9cm、底径2.5cm、器高18.4cm、狭い有段口縁、擬凹線4条	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ヘラ磨き、内面頸部ヘラ磨き、底部ハケ	外面胴部下位までと内面口縁部赤彩、外面胴下半スス付着
第87図　56	〃	〃	〃	茶褐色	口径14.2cm、有段口縁	外面と口縁部内面ヘラ磨き、内面肩部ヘラ削り	
第87図　57	〃	〃	〃	〃	口径14cm、有段口縁	口縁部ヘラ磨き	
第87図　58	〃	〃	〃	褐色	口径12.4cm、胴部径13.9cm、底径3.6cm、器高11.9cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケのあとヘラ磨き	外面と内面口縁部赤彩
第87図　59	長頸壺	〃	〃	淡褐色	口径9.6cm、胴部径16.6cm、底径3cm、器高17.2cm、有段口縁	外面口縁部ヘラ磨き、胴部上位ハケ、胴下半ヘラ磨き、内面口縁部ヘラ磨き、口縁下位ヨコナデ、肩部指頭圧痕、胴部にヘラ状具痕	外面と口縁端部内面赤彩、外面に黒斑あり
第87図　60	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径7.3cm、有段口縁	外面ヘラ磨き、内面口縁端部ナデ、他荒いヘラ削り	口縁部外面赤彩
第87図　61	〃	〃	〃	褐色	口径8.6cm、胴部径13.1cm、底径3.6cm、器高16cm	外面ヘラ磨き、内面口縁部ハケ	
第87図　62	〃	〃	〃	茶褐色	口径4.7cm	内面ヨコナデ	
第87図　63	〃	〃	〃	淡褐色	有段口縁	外面ハケのあとヘラ磨き、内面上位ナデ、下位ヘラ削り	外面と内面上位赤彩
第87図　64	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径8.4cm、有段口縁	外面摩耗不明、内面上位ヘラ磨き、下位ハケ	外面赤彩

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第88図 65	高坏	P4G第3層	密 並	淡茶褐色	口径31.6cm、有段、端部は外反ぎみの面をもつ	内・外面ヘラ磨き	口縁部赤彩
第88図 66	高坏 (脚)	〃	〃	茶褐色	筒状の脚、径4.6～4.8cm	外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り、裾端部はハケ	接合痕あり、外面赤彩
第88図 67	〃	〃	〃	淡茶褐色	脚部径15.4cm、透孔3径0.8cm	外面上位ヘラ磨き、下位ナデ、内面上位ナデ	内面上位絞り(痕)
第88図 68	〃	〃	〃	〃	脚部径9.4cm	外面ヘラ磨き、内面ハケ	
第88図 69	〃	〃	〃	暗灰褐色	脚部径12.3cm	内・外面指頭圧痕あり、外面一部ヘラ磨き	
第88図 70	鉢	〃	〃	茶褐色	口径14.5cm、擬凹線2条	外面摩耗不明、内面ヘラ磨き	口縁端部赤彩
第88図 71	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径10.2cm		内・外面赤彩(内面は文様化)
第88図 72	器台	〃	〃	茶褐色	脚部径10.8cm	外面ヘラ磨き、内面摩耗不明	
第88図 73	〃	〃	〃	〃	脚部径12.6cm	外面摩耗不明、内面上からナデ、ハケ、ナデ	
第88図 74	(脚)	〃	〃	淡黄褐色	脚部径18cm、端部はかえし風の面をもつ、透孔数は不明	内・外面ナデ	
第88図 75	〃	〃	〃	淡茶褐色	脚部径18cm、端部はかえしをもつ	外面ヘラ磨き、内面ナデ	外面端部他赤彩痕あり
第88図 76	器台 (脚)	〃	〃	〃	脚部径17cm、有段	外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り	外面赤彩
第88図 77	高坏	〃	〃	茶褐色	透孔3径0.8cm	外面ヘラ磨き、内面摩耗不明	
第88図 78	器台	〃	〃	淡茶褐色	脚部径14.2cm	外面ヘラ磨き、内面上位ヘラ削り、下位ヨコナデ	
第89図 79	鉢	〃	〃	褐色	口径18.7cm、底径3.7cm、器高8.5cm、有段口縁	口縁部ヘラ磨き、体部外面ハケ、内面ハケのあとヘラ磨き、外面指頭圧痕あり	内・外面赤彩
第89図 80	〃	〃	〃	〃	口径19cm、有段口縁	内・外面ヘラ磨き	〃
第89図 81	〃	〃	〃	〃	口径18.5cm、有段口縁	〃	〃
第89図 82	〃	〃	〃	暗灰褐色	口径20.9cm、有段口縁	〃	外面口縁部と内面赤彩
第89図 83	〃	〃	〃	淡橙褐色	口径13.9cm、有段口縁	内・外面ナデ	
第89図 84	〃	〃	〃	淡黄褐色	口径14.2cm、狭い有段口縁	内・外面ヘラ磨き	口縁部内面赤彩
第89図 85	〃	〃	〃	〃	口径14.6cm、短い〝く〟の字状口縁	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラ磨き、内面ハケのあと一部ヘラ磨き	
第89図 86	小形鉢	〃	〃	〃	口径10cm、有段口縁	外面ヘラ磨き、内面ナデ	外面と内面上半赤彩
第89図 87	〃	〃	〃	〃	口径9cm、把手(1)をもつ	内・外面ヘラ磨き	
第89図 88	小形台付鉢	〃	〃	淡茶褐色	口径12.2cm、脚部径5.6cm、器高7(推)cm	〃	
第89図 89	〃	〃	〃	淡褐色	口径10.6cm、脚部径4.6cm、器高6.2cm	内・外面ヘラ磨き、脚部指頭圧痕とナデ	
第89図 90	小形鉢	〃	〃	淡黄褐色	口径9.4cm、底径2.2cm、器高6.4cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラ削りのあと一部ハケ、内面ナデ	
第89図 91	蓋	〃	〃	淡茶褐色	口径12.4cm、つまみ部径3.2cm、器高6.2cm、天井部穿孔(1)径1cm	外面ハケ、内面ナデ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第89図　92	蓋	P4G第3層	密 並	淡茶褐色	口径19cm、短い〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	口縁部ヨコナデ	
第89図　93	〃	〃	〃	茶褐色	口径17cm、短い〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	口縁部ヨコナデ、体部ヘラ磨き	
第89図　94	壺	〃	〃	淡茶褐色	口径14.6cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、外面ハケのあとヘラ磨き、内面ヘラ削り	
第89図　95	甕	〃	〃	茶褐色	口径15.2cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、把手（個数不明）をもつ	口縁外面ナデ、内面ハケのあとナデ、肩部外面ハケ、内面ナデ	
第90図　96	（底）	〃	〃	淡黄褐色	底径7.2cm、底部下面凹む	内・外面ハケのあとヘラ磨き	外面スス付着
第90図　97	〃	〃	〃	〃	底径6.6cm	内・外面ハケ	
第90図　98	〃	〃	〃	淡茶褐色	底径5.8cm、底部下面凹む	外面摩耗、一部にヘラ削り、内面ハケ	
第90図　99	〃	〃	〃	淡橙褐色	底径5cm	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケ	
第90図　100	〃	〃	〃	〃	底径6cm	〃	
第90図　101	〃	〃	〃	〃	底径2.8cm	内・外面ハケ	外面スス、内面炭化物付着
第90図　102	〃	〃	〃	〃	底径2.6cm	内・外面ハケ、外面に一部ヘラ削り	外面スス付着
第90図　103	〃	〃	〃	淡黄褐色	底径3.4cm、底部下面やや凹む	外面ハケとヘラ削り、内面ナデとハケ	内面炭化物付着
第90図　104	〃	〃	〃	外暗灰褐色 内淡黄褐色	底径3cm、底部下面凹む	外面ハケ、内面摩耗不明	
第90図　105	底部穿孔土器（底）	〃	〃	淡黄褐色	底径3cm、底部穿孔0.6cm	外面ヘラ磨き、内面ハケのあとヘラ磨き	
第90図　106	〃	〃	〃	淡茶褐色	底径6.6cm、底部穿孔径0.6cm	内・外面ハケ	
第90図　107	〃	〃	〃	淡黄灰褐色	底径5.2cm、底部穿孔径0.6～1.2cm	外面摩耗、一部ヘラ削り、内面ハケ	
第90図　108	（脚台）	〃	〃	外淡橙褐色 内淡黄褐色	脚部径5.2cm	外面ヘラ磨きと指頭圧痕、内面摩耗不明	
第90図　109	〃	〃	〃	淡茶褐色	脚部径6.6cm	内・外面ヘラ磨き、脚部内面ヘラ削り	
第90図　110	〃	〃	〃	淡黄褐色	脚部径5.8cm	外面ハケのあとヘラ磨きと指頭圧痕、内面	
第90図　1	甕	P4G1号溝埋土	密 並	淡黄褐色	口径15.7cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れがある	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	外面スス付着
第90図　2	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径13.6cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第90図　3	壺	〃	〃	〃	口径12.9cm、有段口縁、擬凹線4条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ヘラ磨き	
第90図　4	（脚台）	〃	〃	淡黄褐色	脚部径8.4cm	外面ヘラ削りのあとヘラ磨き、内面ナデ	
第90図　5	（底）	〃	〃	〃	底径2.4cm	内・外面ハケ	外面スス付着
第91図　1	高坏	P4G青灰荒砂	〃	茶褐色	口径28.6cm	内外面ヘラ磨き	内外面赤彩
第91図　2	甕	P4青灰荒砂	〃	淡茶褐色	口径15.6cm、狭い有段口縁、肩部外面斜行列点紋	口縁部ヨコナデ、肩部ハケ	
第91図　3	鉢	〃	〃	外淡茶褐色 内茶褐色	口径15.4cm、口縁端部はナデによる面取り	内外面ハケ	
第91図　4	甕	P4G灰色砂最下部	やや不良 並	淡茶褐色	口径15.3cm、〝く〟の字口縁、端部ナデによる面取り、やや垂れあり	口縁部ヨコナデ、肩部、胴部ハケ	接合痕あり

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第91図　5	甕	P4G 灰色砂最下部	やや不良 並	淡橙褐色	口径13cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面ナデ、指頭圧痕あり	接合痕あり
第91図　6	〃	P 4 第 4 層	〃	淡茶褐色	口径16cm、有段口縁、擬凹線3条	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面ヘラ削り	
第91図　7	壺	P 4 青灰荒砂	やや良 やや良	〃	口径12.1cm、器高12.5cm、底径3cm、有段口縁、擬凹線3条孔（個数不明、直径0.4cm）	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラ磨き、胴部以下全てヘラ磨き	接合痕あり、外面と内面口縁部に赤彩
第91図　8	〃	〃	密 並	〃	底径2.7cm	外面ヘラ磨き、内面胴部ナデ、底部ハケ	接合痕あり
第91図　9	〃	〃	〃	外茶褐色 内淡赤褐色	底径2.2cm	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケのあとナデ	
第91図　10	〃	P 4 G灰色砂最下層	〃	淡茶褐色	口径13.2cm、肩部外面、斜行列点紋	ヨコナデ、肩部に指頭圧痕あり	
第91図　11	（底）	〃	〃	淡黄褐色	底径4.8cm	外一部ハケ、内ナデ、指頭圧痕あり	外面赤彩
第91図　12	〃	〃	〃	〃	底径3.7cm	外ヘラ削り、内ヘラ磨き	
第92図　1	甕	P4G第3層	密 並	外淡茶褐色 内淡黄褐色	口径18.5cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	外面スス付着
第92図　2	〃	〃	〃	淡赤褐色	口径12.6cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、つまみあげと垂れが明瞭	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第92図　3	〃	〃	〃	暗茶褐色	口径17cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れが明瞭	口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケ、肩部以下外面摩耗、内面ナデ	〃
第92図　4	〃	〃	〃	外淡赤褐色 内淡黄褐色	口径16cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、つまみあげと垂れあり	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面摩耗、内面ナデ	〃
第92図　5	〃	P 4 G P510	〃	明褐色	口径14.2cm、〝く〟の字口縁	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ、肩部以下外面ハケ、内面上位ハケ、下位ヘラ削り	外面底部付近スス付着
第92図　6	壺	P4G第3層	〃	茶褐色	口径13.6cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	接合痕あり
第92図　7	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内明茶褐色	口径13.4cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、胴部内面指頭圧痕	〃
第92図　8	高坏	〃	〃	褐色	口径12.8cm	内・外面ヘラ磨き	
第92図　9	〃	〃	〃	淡赤褐色		脚部内面を除きヘラ磨き	
第92図　10	〃	P 4 G P77	〃	淡茶褐色	脚部径12.6cm	外面ヘラ磨き、内面上からヘラ削り、ヨコナデ、ハケ、ヨコナデ	
第92図　11	器台	P4G第3層	〃	茶褐色	口径8.4cm	内・外面ヘラ磨き	
第92図　12	〃	〃	〃	黒褐色	口径9.6cm	〃	
第93図　13	壺	P 4 G P 4	〃	茶褐色	口径13.5cm、胴径17.6cm、器高22.7cm、有段口縁	口縁部ハケ、肩部以下外面ヘラ磨き、下位にヘラ削りあり、内面ハケ	外面一部スス付着、黒斑（2個所）あり
第93図　14	〃	P 4 G青色砂層	〃	外紅味乳白色 内灰褐色	口径9.3cm、胴径14.3cm、器高（17cm）	外面ヘラ磨き、内面口縁部ハケのあとナデ、肩部以下ナデ	
第93図　15	〃	P 4 G P54	やや不良	胴径12.3cm	内・外面ナデ	接合痕あり	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第93図 16	甕	P4G第3層	密 並	淡茶褐色	口径10.6cm、胴径12.2cm、〝く〟の字口縁、丸底	外面と内面口縁部ヘラ磨き、内面肩部以下ハケ	接合痕あり、外面と口縁内面ススト付着
第93図 17	壺	P4G P36	〃	淡褐色	口径10.6cm、胴径10.5cm、器高11.9cm、〝く〟の字口縁、丸底	口縁外面と肩部以下内面ナデ、口縁内面と肩部以下外面ヘラ磨き、外面底部付近はヘラ削り	外面黒斑あり、接合痕あり
第93図 18	〃	P4G P81	やや良 やや良	淡(赤)褐色	口径10.5cm、胴径9.9cm、器高9.1cm、〝く〟の字口縁、丸底	外面ヘラ磨き、ただし底部付近ナデ、内面ナデ	
第93図 19	小形丸底坩	P4G P520	密 並	淡茶褐色	口径10.2cm、胴径7cm、器高7.3cm、丸底	内・外面ナデ、ただし口縁内面はハケのあとナデ	
第93図 20	〃	P4G P42	〃	〃	口径12.2cm、胴径8.2cm、器高8.6cm、丸底	外面ハケのあとヘラ磨き、口縁内面ハケ、体部内面ナデ	外面黒斑あり、外面赤彩
第93図 21	小形壺	P4G第3層	〃	褐色	胴径9.2cm、丸底	外面頸部ハケ、胴部ナデ、底部ヘラ削り、内面ナデ、肩部に指頭圧痕あり	接合痕あり、外面黒斑あり
第93図 22	小形甕	P4G P80	〃	淡褐色	胴径8.4cm、底径1.9cm	内・外面ナデ、ただし外面底部ヘラ削り	
第93図 23	〃	P4G第3層 上部	やや不良 並	褐色	口径8.8cm、胴径8.3cm、器高7.9cm、丸底	内・外面ナデ、ただし外面頸部にヘラ削り、底部外面と胴部内面に指頭圧痕	外面ススト付着
第93図 24	鉢	P4G第3層	密 並	淡茶褐色	口径16cm、底径2.6cm、器高10.8cm	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り、内面口縁部ハケのあとヨコナデ、体部上からハケ、ナデ、ハケ	〃
第93図 25	〃	P4G P9	〃	外淡褐色 内褐色	口径13cm、器高6.9cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	接合痕あり、体部内面赤彩痕あり
第93図 26	脚台付鉢	P4G青色砂層	〃	〃	口径13.3cm、脚台径6.7cm、器高9cm	体部外面ハケのあとナデ、内面ナデ、脚台部ナデ	外面と体部内面赤彩、体部内面ススト付着
第93図 27	鉢	T4青灰荒砂	〃	〃	口径10.5cm、器高5.1cm	内・外面ヘラ磨き	内・外面赤彩
第100図 1	甕B8	T18	やや良 良	淡褐色	口径17.8cm、狭い有段口縁、沈線1条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	外面ススト付着
第100図 2	〃A2	T18 P59	やや良 並	橙褐色	口径17.4cm、胴部径25cm、底径4.4cm、器高30.5cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、胴部と底部ハケ	外面ススト付着、内面炭化物付着
第100図 3	〃A2	T18 P52	やや不良 並	褐色	口径22cm、〝く〟の字口縁、端部は面をもつ、つまみあげと垂れ、擬凹線3条	口縁部ヨコナデ	外面ススト付着
第100図 4	〃B8	T18	やや良 良	淡赤褐色	口径18.3cm、〝く〟の字口縁、端部は面をもつ、沈線1条	〃	〃
第100図 5	〃B3	〃	やや不良 並	淡褐色	口径16.5cm、〝く〟の字口縁、端部は面をもつ、沈線1条	口縁部ヨコナデ、頸部内面ハケ	〃
第100図 6	〃B8	〃	良 良	暗褐色	口径14.5cm、〝く〟の字口縁、端部は面をもつ、沈線1条	口縁部ヨコナデ	〃
第100図 7	〃A1	〃	密 並	淡橙褐色	口径15.4cm、〝く〟の字口縁、端部は面をもつ、擬凹線2条	〃	
第100図 8	〃A2	〃	やや不良 良	外淡赤褐色 内淡褐色	口径16.7cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	〃	外面ススト付着
第100図 9	〃A2	〃	良 良	〃	口径15.2cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	〃	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第100図 10	甕A 3	T18	並 良	淡褐色	口径14.2cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ	
第100図 11	〃 A 3	〃	やや不良 良	〃	口径15.4cm、狭い有段口縁、擬凹線2条、肩部外面に斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	外面スス付着
第100図 12	〃 A 3	〃	良 良	外褐色 内暗褐色	口径17.2cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ	〃
第101図 13	〃 A 2	〃	密 並	外黒、褐色 内淡橙褐色	口径18.2cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	内・外面ヨコナデ、下位はハケ	
第101図 14	〃 A 3	T18 P48	〃	〃	口径17.2cm、狭い有段口縁、擬凹線2条、胴部径19.6cm、底径2.4cm、器高25cm、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、体部、底部ハケ、底部外面下位はヘラ削り	
第101図 15	〃 A 2	T18 P46	〃	淡橙褐色	口径25.1cm、狭い有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	外面（一部）スス付着
第101図 16	〃 A 3	T18	〃	橙褐色	口径22.4cm、狭い有段口縁、擬凹線2条、肩部外面斜行列点文	内・外面摩耗のため観察不能、外面胴部一部ハケが残る	
第101図 17	〃 A 3	〃 P56	やや良 良	赤褐色	口径17cm、狭い有段口縁、擬凹線3条、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	外面スス付着
第101図 18	〃 A 4	〃	密 並	淡黄褐色	口径15.6cm、狭い有段口縁、擬凹線3条、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	
第101図 19	〃 A 5	〃	良 良	淡褐色	口径16cm、有段口縁、擬凹線4条	口縁部ヨコナデ	外面スス付着
第101図 20	〃 A 5	〃	密 並	淡黄褐色	口径16.2cm、有段口縁、沈線1条、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ、内面摩耗のため不明	〃
第102図 21	〃 A 4	T18 P58B	〃	淡褐色	口径17.2cm、胴部径22.8cm、底部径4.8cm、器高32.1cm、有段口縁、擬凹線3条、肩部外面斜行列点文、底部下面凹む	口縁部ヨコナデ、胴部と底部ハケ、外面底部ヘラ削り	
第102図 22	〃 A 6	T18	やや不良 良	褐色	口径19cm、有段口縁、擬凹線4条、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	外面スス付着
第102図 23	〃 A 7	〃	良 良	淡褐色	口径19cm、有段口縁、擬凹線4条	口縁部ヨコナデ	
第102図 24	〃 A 4	〃	良 並	濁褐色	口径16.4cm、有段口縁、擬凹線2条	口縁部ヨコナデ、頸部内面はハケ	
第102図 25	〃 A 4	〃	良 良	淡褐色	口径14.8cm、有段口縁、擬凹線4条	口縁部ヨコナデ	外面スス付着
第102図 26	〃 A 6	〃	〃	外濁淡褐色 内黄褐色	口径14cm、有段口縁、擬凹線4条	〃	〃
第102図 27	〃 A 4	〃	良 並	〃	口径14.8cm、有段口縁、擬凹線4条、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ、内面ハケ、ヘラ削りと指頭圧痕	〃
第102図 28	〃 A 6	T18 P35	密 並	淡褐色	口径15.6cm、胴部径15cm、底径2.7cm、器高20cm、有段口縁、擬凹線4条、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、胴部と底部ハケ、底部外面ヘラ削り	外面スス付着、内面炭化物付着
第102図 29	〃 A 7	T18	やや不良 良	淡赤褐色	口径14cm、有段口縁、擬凹線3条	口縁部ヨコナデ	外面スス付着
第103図 30	〃 A 6	T18 P35B	やや不良 並	褐色	口径17.6cm、有段口縁、擬凹線5条、肩部外面に斜行列点文、胴部径18.7cm、底径3cm、器高25.8cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、底部外面端部はヘラ削り	外面スス付着

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第103図 31	甕A 7	T18	やや不良 並	暗褐色	口径19.6cm、有段口縁、擬凹線5条、肩部外面に斜行列点文	口縁部外面ナデ、内面ハケのあと外面肩部以下と内面頸部ハケ、内面肩部以下ヘラ削り	〃
第103図 32	〃A 7	〃	〃	淡褐色	口径15.2cm、有段口縁、擬凹線4条、肩部外面に斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第103図 33	〃A 6	〃	密 並	褐色	口径18.4cm、有段口縁、擬凹線5条	口縁部ヨコナデ	〃
第103図 34	〃A 6	T18 P40	やや不良 並	淡褐色	口径16.2cm、有段口縁、擬凹線3条	口縁部ヨコナデ、他は摩耗不明	内面に接合痕あり
第103図 35	〃A 6	T18 P58A	密 並	〃	口径15cm、有段口縁、擬凹線4条、肩部外面に斜行列点文、胴部径14cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、胴部内面に指頭圧痕	外面スス付着
第103図 36	〃A 7	T18 P49A	やや不良 並	外淡褐色 内褐色	口径15cm、有段口縁、擬凹線5条、肩部外面に斜行列点文、胴部径15cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り、頸部内面はハケ	〃
第103図 37	〃A 6	T18 P50	密 並	淡褐色	口径16.8cm、有段口縁、擬凹線4条	口縁部ヨコナデ、頸部内面はハケ	〃
第103図 38	〃A 7	T18 P23B	〃	外淡褐色 内淡茶褐色	口径12.6cm、有段口縁、擬凹線2条、肩部外面に斜行列点文、胴部径11cm、底径3cm、器高10.9cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、内面1部ナデ、底部外面端部はヘラ削り	〃
第104図 39	壺C 2	T18 P30B	〃	外淡橙褐色 内淡茶褐色	口径12.8cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、胴部径17.8cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	体部内面に接合痕あり
第104図 40	甕B 1	T18	〃	淡茶褐色	口径18cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	〃	
第104図 41	〃B 1	〃	〃	〃	口径20.8cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	内・外面ヨコナデ	
第104図 42	〃B 2	〃	〃	外淡灰色 内淡橙褐色	口径19.8cm、口縁は強ひきだしにより外反、端部はナデによる面取り	〃	内面に接合痕あり
第104図 43	〃B 1	〃	〃	外黒褐色 内淡茶褐色	口径16.2cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第104図 44	〃B 3	〃	〃	外赤褐色 内黒褐色	口径15cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、つまみあげと垂れ	〃	〃
第104図 45	〃B 1	〃	〃	淡赤褐色	口径21.8cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りと垂れ	内・外面ヨコナデ	
第104図 46	〃B 1	〃	〃	外淡灰色 内淡橙褐色	口径14.8cm、片口口縁、端部はナデによる面取り	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケのあとナデ	内・外面スス付着、内面に接合痕あり
第104図 47	〃B 1	〃	〃	外黒褐色 内淡茶褐色	口径14.2cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りとつまみあげ、口縁部上位にヘラによる凹線1条	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第104図 48	〃B 1	〃	〃	淡橙褐色	口径16.4cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りと垂れ	内外面ヨコナデ	
第104図 49	〃B 1	〃	やや不良	淡褐色	口径15.8cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りと垂れ	口縁部ヨコナデ、内面下位はハケ	外面スス付着
第104図 50	〃B 1	〃	〃	〃	口径15.7cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りと垂れ	内外面ヨコナデ	〃

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第104図 51	甕B 3	T18	密 良	淡褐色	口径14.5cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りと垂れ	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第104図 52	〃 B 3	T18 P23	密 並	外暗茶色 内黒褐色	口径14.8cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りと垂れ、胴部径18.2cm、底径3.1cm、器高23.5cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、底部外面端部はヘラ削り	
第105図 53	〃 B 3	T18	やや不良 並	淡茶褐色	口径24cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りと垂れ	内外面ヨコナデ	外面スス付着
第105図 54	〃 B 6	T18 P20	密 並	淡橙褐色	口径17.6cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りとつまみあげ、垂れ	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第105図 55	〃 B 6	T18	不良 良	淡褐色	口径17.8cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りとつまみあげ、垂れ	内外面ヨコナデ	
第105図 56	〃 B 6	〃	不良 並	外暗灰褐色 内淡褐色	口径15.8cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りとつまみあげ、垂れ	口縁部外面ヨコナデ、外面下位はハケ	
第105図 57	〃 B 6	〃	〃	外赤褐色 内黒色	口径17.2cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りとつまみあげ、垂れ	内外面ヨコナデ	
第105図 58	〃 B 3	〃	密 並	淡茶褐色	口径14.2cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れ	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第105図 59	〃 B 9	〃	〃	〃	口径14.3cm、〝く〟の字口縁	内外面摩耗不明	
第105図 60	〃 B 9	〃	〃	淡橙褐色	口径16.2cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りとつまみあげ	内外面ヨコナデ	
第105図 61	〃 B 9	T18 P53	不良 並	淡褐色	口径24.4cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りとつまみあげ	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	外面スス付着
第105図 62	〃 B 6	T18 P28	密 並	〃	口径15.2cm、有段口縁、肩部外面に斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケのあとナデ、肩部、体部下位に指頭圧痕	
第105図 63	〃 B 6	T18	〃	外黒褐色 内橙褐色	口径11.8cm、狭い有段口縁	内外面ヨコナデ	
第105図 64	〃 B 8	T18 P41B	やや不良 良	淡赤褐色	口径13.6cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取りと垂れ	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面摩耗不明	肩部内面に接合痕あり
第105図 65	〃 B 5	T18	密 並	外淡茶褐色 内黒褐色	口径11.4cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、胴部径11.1cm	口縁部ナデ、肩部以下ハケ	
第106図 66	〃 B 6	〃	〃	淡黄色	口径15.8cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、外面頸部以下ハケ	
第106図 67	〃 B 6	〃	良 並	淡褐色	口径15.1cm、〝く〟の字口縁	内外面ヨコナデ	外面スス付着
第106図 68	〃 B 5	〃	やや不良 並	外淡赤褐色 内淡褐色	口径14.2cm、〝く〟の字口縁	口縁部外面ヨコナデ、内ハケのあとナデ、頸外面ハケ、内面ヘラ削り	
第106図 69	〃 B 5	〃	密 並	淡橙褐色	口径15.4cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、頸部ハケ	
第106図 70	〃 B 3	〃	〃	外黒褐色 内淡黄褐色	口径14.2cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、頸部以下ハケ	
第106図 71	〃 B 5	T18 P42	〃	淡茶褐色	口径14.9cm、〝く〟の字口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第106図 72	甕B 5	T18 P53B	密 並	外黒褐色 内暗褐色	口径13.8cm、〝く〟の字口縁、ナデによる面取りとつまみあげ、胴部径12.3cm、底部径3.2cm、器高13.7cm	〃	
第106図 73	〃 B 5	T18	〃	淡橙褐色	口径28.4cm	口縁部ヨコナデ	
第106図 74	〃 B 5	〃	〃	外黒褐色 内淡茶褐色	口径16.2cm、〝く〟の字口縁、ナデによる面取りとつまみあげ	口縁部ヨコナデ	
第106図 75	〃 B 9	〃	〃	〃	口径15.6cm、狭い有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第106図 76	〃 C 1	〃	やや不良	褐色	口径17.6cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	外面スス付着
第106図 77	〃 B 8	T18 P20	〃	淡褐色	口径17.1cm、狭い有段口縁、外面はやや凹む、胴部径18.6cm、底部径4cm、器高23.9cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第106図 78	〃 C 1	〃	密 並	外黒褐色 内淡橙褐色	口径18cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ	
第106図 79	〃 E	T18 P47	〃	外黒色 内茶褐色	口径14.8cm、有段口縁、外面に連続する斜行刻目	口縁部ヨコナデ	
第107図 80	〃 B 6	T18 P23B	やや良	褐色	口径17.6cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、つまみあげと垂れ	口縁部ナデ、肩部以下ハケ	外面スス付着
第107図 81	〃 B 6	T18	密 並	外淡橙褐色 内橙褐色	口径15.8cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れ	〃	
第107図 82	〃 B 4	〃	〃	茶褐色	口径18.5cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れ	〃	
第107図 83	〃 B 7	〃	〃	淡茶褐色	口径23.2cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れ	口縁部ヨコナデ	
第107図 84	〃 B 7	〃	〃	〃	口径24cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、つまみあげと垂れ	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	
第107図 85	〃 B 6	T18 P12	粗 並	灰褐色	口径13.1cm、〝く〟の字口縁、(片口)、端部はナデによる面取り、垂れ	〃	外面スス付着
第107図 86	〃 B 4	T18 P49D	やや良 良	淡褐色	口径14cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れが大きい、肩部外面斜行列点文	〃	〃
第107図 87	〃 B 4	T18 P49C	密 並	淡黄褐色	口径13cm、胴部径13.3cm、底径3.2cm、器高16.5cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れが大きい	口縁部ヨコナデ、肩部と胴部はハケ、底部外面はヘラ削り	
第107図 88	〃 B 4	T18	やや不良	暗褐色	口径13.9cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れが大きい	口縁部ヨコナデ	外面スス付着
第107図 89	〃 B 4	〃	密 並	淡茶褐色	口径15.3cm、〝く〟の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れが大きい	〃	
第108図 90	〃 D	T18 P26	〃	〃	口径15.3cm、胴部径22.1cm、底径4cm、器高27.8cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケのあとヘラ磨き、内面ヘラ削り	外面スス付着、黒斑あり
第108図 91	〃 C 1	T18 P 8	やや不良	淡褐色	口径15.7cm、胴部径20cm、底径4.6cm、器高24.5cm、有段口縁、端部はナデによる面取り、肩部外面斜行列点文、底部下面は凹む	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケとナデ、底部外面ナデ	外面スス付着

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第108図 92	甕C 2	T18	やや不良 良	淡褐色	口径20.4cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第108図 93	〃 C 2	T18 P57C	〃	褐色	口径19cm、有段口縁、端部はナデによる面取り	〃	〃
第108図 94	〃 C 1	T18	やや不良 不良	〃	口径16.5cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	
第108図 95	〃 C 1	〃	やや不良 良	外淡褐色 内茶褐色	口径18.5cm、有段口縁	〃	外面スス付着
第108図 96	〃 C 3	〃	〃	淡褐色	口径15.7cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第108図 97	〃 C 5	〃	〃	〃	口径17.5cm、有段口縁	〃	〃
第108図 98	〃 C 3	〃	良 良	〃	口径17cm、有段口縁	〃	〃
第108図 99	〃 C 3	〃	やや不良 良	褐色	口径17.8cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	〃
第109図100	〃 C 2	T18 P 4	〃	外淡茶褐色 内黒褐色	口径15.6cm、有段口縁、肩部外面斜行列点文、胴部径21.6cm、底径5cm、器高27.4cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、底部外面は不明	
第109図101	〃 C 3	T18 P 2	やや不良 並	黄褐色	口径16.4cm、有段口縁、胴部径18.9cm、底径4cm、底部はやや凹む、器高24.3cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ、底部外面はヘラ削り	外面スス付着
第109図102	〃 C 5	T18	密 並	淡黄色	口径24.4cm、有段口縁	摩耗不明	〃
第109図103	〃 C 2	T18 P35D	〃	茶褐色	口径15.3cm、有段口縁、肩部外面斜行列点文、胴部径14.2cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第109図104	〃 C 4	T18 P35C	やや不良 並	外淡赤褐色 内灰褐色	口径16.6cm、有段口縁、胴部径15cm	〃	〃
第109図105	〃 C 4	T18	やや不良 良	淡褐色	口径14.8cm、有段口縁、肩部外面斜行列点文	〃	〃
第109図106	〃 C 5	T18 P16	密 並	〃	口径16.6cm、有段口縁、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、頸部以下外面ハケ、内面ハケとヘラ削り	
第110図107	〃 C 3	T18	やや不良 良	黄褐色	口径16.6cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ	
第110図108	〃 C 5	〃	密 並	外橙褐色 内淡茶褐色	口径17cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	
第110図109	〃 C 6	T18 P57D	やや不良 良	外褐色 内淡褐色	口径16.6cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、頸部内面ハケ、肩部以下外面ハケ、内面ヘラ削り	外面スス付着
第110図110	〃 C 3	T18	やや不良 良	淡褐色	口径16.5cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	
第110図111	〃 C 6	T18 P54	密 並	淡茶褐色	口径17.2cm、有段口縁、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ハケ、内面ハケのあと一部ナデ	
第110図112	〃 C 4	T18	良 良	褐色	口径15.4cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	外面スス付着
第110図113	〃 C 4	〃	密 並	淡茶褐色	口径15.6cm、胴部径14.9cm、有段口縁、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部と胴部ハケ、底部付近ヘラ削り	〃

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第110図114	甕C 3	T18	やや不良	外 褐 色 内赤褐色	口径18.1cm、有段口縁、肩部外面斜行列点文	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ	〃
第110図115	〃 C 1	T18 P36	密 並	外淡黄褐色 内黒褐色	口径14.5cm、有段口縁	〃	
第111図116	長頸壺A 1	T18 P26B	〃	外暗灰褐色 内灰褐色	口径13.2cm、上位に穿孔1対径0.4cm（計2コ）、底径5.9cm、焼成後穿孔、径1.2cm	内・外面ハケ	
第111図117	〃 A 5	T18 P15	〃	〃	口径14.6cm、有段口縁、胴部径21.4cm、底径2.8cm、底面はやや凹む、器高28.4cm	口縁部外面上位と内面ヨコナデ、その他外面ハケのあとヘラ削り、内面肩部以下ハケ、肩部内面に指頭圧痕	
第111図118	〃 A 2	T18 P42	〃	淡 褐 色	口径14.4cm、端部はナデによる面取り	口縁部ハケのあとヘラ磨き、内面端部はヨコナデ	
第111図119	〃 A 5	T18 P48	〃	淡黄褐色	口径16.6cm、有段口縁	口縁部ヘラ磨き、端部はナデ	
第111図120	〃 A 5	T18 P18	〃	淡 褐 色	口径11cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、一部ハケのあとヘラ磨き	内面頸部に接合痕あり
第111図121	〃 A 4	T18 P29	〃	〃	口径9.8cm、有段口縁、胴部径15.8cm、底部径4.9cm、底部は凹む、器高16.5cm	口縁部ヨコナデ、体部内面上位ナデ、他はハケ	内面に接合痕あり
第112図122	壺B 1	T18	〃	灰 褐 色	口径14.2cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	
第112図123	長頸壺A 6	〃	〃	淡橙褐色	有段口縁	口縁部外面ヘラ磨き、他は摩耗不明	
第112図124	〃 A 3	〃	〃	外灰褐色 内淡茶褐色	口径13cm、端部はナデによる面取りと垂れ	口縁部ヨコナデ	
第112図125	〃 A 6	〃	〃	外淡褐色 内暗褐色	口径14cm、有段口縁、擬凹線2条	〃	外面スス付着
第112図126	〃 A 6	T18 P42	〃	淡 褐 色	口径15cm、有段口縁、擬凹線4条、屈曲部に連続する斜行刻目	外面ヘラ磨き、内面上位ヨコナデ、下位ハケ	内面に接合痕あり
第112図127	壺	T18	〃	外淡橙褐色 内淡茶褐色		外面ヘラ磨き、内面上位ナデ、下位ハケ	
第112図128	長頸壺A 6	T18. P 6	〃	淡 褐 色	口径13.9cm、有段口縁、擬凹線3条、胴部径21cm、底部径5.4cm、底部下面は凹む、器高30.4cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ヘラ磨き、内面ハケ	
第112図129	〃 A 6	T18 P 3	〃	〃	口径14cm、有段口縁、擬凹線3条、胴部径19.7cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケのあとヘラ磨き、内面上位ナデ、下位ハケ	
第113図130	壺D 1	T18 P26E	〃	明茶褐色	口径14.9cm、胴部径16.1cm、底径2.8cm、器高16.9cm、有段口縁、頸部に孔1対（2個）径0.5～0.8cm	口縁部ヘラ磨き、肩部以下外面ヘラ磨き、内面ハケ	外面と口縁部内面赤彩
第113図131	〃 D 1	T18 P44	〃	〃	口径14.6cm、胴部径15.4cm、底径2.5cm、器高14.4cm、有段口縁、頸部に孔1対（2個）、径0.6cm	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ヘラ磨き、内面ハケ	〃
第113図132	〃 D 1	T18 P39B	〃	淡黄褐色	口径13.4cm、胴部径14.1cm、底径3.8cm、器高14.4cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ、肩部と胴部外面ヘラ磨き、内面ナデ、底部外面ヘラ削り	外面赤彩
第113図133	〃 D 1	〃	やや良 良	淡 褐 色	口径15.4cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	外面スス付着
第113図134	〃 D 2	T18 P11	密 並	〃	口径13.4cm、胴部径15cm、底径3.8cm、器高15.1cm、有段口縁、擬凹線5条、底部下面やや凹む	口縁部ヨコナデ、肩部以下外面ヘラ磨き、内面ナデ	外面と口縁部内面赤彩、外面一部黒斑あり

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第113図135	壺D 1	T18	やや良 良	淡褐色	口径14cm、有段口縁	口縁部ヨコナデ	
第113図136	〃 D 1	T18 P40	やや良 良	淡茶褐色	胴部径14.2cm、底径2.7cm	外面ヘラ磨き、内面ナデとハケ	外面赤彩
第113図137	〃 D 1	T18	密 並	〃	口径9.6cm、底径2.4cm、器高9.5cm（推）、有段口縁、底部下面やや凹む	内・外面ナデ	
第113図138	〃 D 1	〃	〃	淡黄色	口径10.6cm、胴部径12.6cm、底径2.8cm、器高12.9cm、有段口縁、底部下面やや凹む	口縁部ヨコナデ、肩部以下内面ハケ、内・外面に化粧土	
第113図139	〃 D 1	〃	やや不良 良	淡褐色	口径10cm、有段口縁	口縁部ヘラ磨き	
第114図140	〃	T18	密 並	淡橙褐色		外面摩耗不明、内面ハケ	
第114図141	（胴・底）	T18 P20	〃	〃	底径4.4cm、底面はやや凹む	頸部ヨコナデ、内面に指頭圧痕、体部ハケ、内面に指頭圧痕、底部外面ヘラ削り、内面ハケ	外面スス付着
第114図142	壺C 1	T18 P 5	〃	淡褐色	口径15.4cm、〝く〟の字口縁、胴部径19cm	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケのあとナデ	
第114図143	〃 B 2	T18	〃	外茶橙褐色 内暗茶褐色	有段口縁	口縁部ヨコナデ、頸部以下外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り	内面頸部に接合痕あり
第114図144	〃 B 2	T18 P 8	不良 〃	暗褐色	有段口縁	口縁部ヨコナデ	
第114図145	〃 C 3	T18 P18	密 並	淡橙褐色	口径8.2cm、〝く〟の字口縁	口縁部外面ヨコナデ、他は摩耗不明	
第114図146	〃	T18	密 良	灰茶褐色		外面ヘラ磨き、内面ハケ	肩部内面に接合痕あり
第114図147	〃	〃	密 並	淡黄褐色		内面ヘラ削り	外面赤彩
第115図148	鉢D 3 （底部穿孔）	T18 P26C	粗 並	淡褐色	口径22.4cm、端部はナデによる面取りとつまみあげ、底径3.3cm、器高16.8cm、底部穿孔径0.6cm、底面は凹む	口縁部上位ヨコナデ、下位ハケ、他はハケのあとヘラ磨き	
第115図149	鉢D 4	T18 P42	密 並	褐色	口径17.6cm、端部はナデによる面取りと垂れ	口縁部上位外面ヨコナデ、内面ハケ、その他ヘラ磨き	外面に黒斑
第115図150	鉢D 4 （底部穿孔）	T18	〃	橙褐色	口径20.6cm、底径3.7cm、底部穿孔径0.6cm	内外面ハケのあとヘラ磨き	
第115図151	〃 D 1	T18 P57B	〃	外淡褐色 内褐色	口径18cm、底径3.4cm、底部穿孔径0.6cm、器高17cm	口縁部上位ヨコナデ、他はヘラ磨き、口縁下位外面はハケ	一部黒斑
第115図152	鉢D 4	T18	〃	淡茶褐色	口径15.9cm、端部はナデによる面取り	外面ヘラ磨き、内面ハケのあとヘラ磨き	外面に黒斑
第115図153	〃 D 4	T18 P41	〃	〃	口径20cm、端部はナデによる面取り	口縁部上位ヨコナデ、他はハケのあとヘラ磨き	
第115図154	鉢D 2 （底部穿孔）	T18 P50	〃	淡褐色	口径20cm、端部はナデによる面取り、底径1.6cm、底部穿孔径0.4cm、器高14cm	内外面ヘラ磨き	外面に黒斑
第115図155	鉢D 4	T18	〃	外赤茶褐色 内淡茶褐色	口径18.2cm	摩耗不明	
第115図156	〃 D 4	T18 P48	〃	〃	口径18.4cm	口縁端部ヨコナデ、その他外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケのあとナデ	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第116図157	鉢D 4 (底部穿孔)	T18 P48	密 並	橙褐色	口径22cm、器高11.5cm、底径2cm、底部穿孔径0.8cm	口縁部ヨコナデ、その他ハケ、底部内面はヘラ削り	
第116図158	〃 D 4	T18 P28C	〃	茶褐色	口径20.5cm、器高10.5cm、底径1.6cm、底部穿孔径0.7cm	口縁部ヨコナデ、他はハケのあとナデ	
第116図159	鉢D 4	T18	〃	淡茶褐色	口径19cm、端部はナデによる面取り	内面ヘラ磨き、外面口縁部ヨコナデ、体部ハケのあとヘラ磨き	
第116図160	鉢D 5 (底部穿孔)	T18 P57	粗 並	淡褐色	口径23.2cm、器高16cm、底径2cm、底部穿孔径0.4cm	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケのあとヨコナデ、その他外面ハケ、内面ヘラ削り	
第116図161	底部穿孔 土器 (底)D	T18	密 並	淡黄色	底径2.2cm、底部穿孔径0.5cm	摩耗不明	
第116図162	〃 D	〃	〃	外淡黄色 内淡茶褐色	底径2.4cm、底部穿孔径0.6cm	〃	
第116図163	〃 D	〃	〃	淡黄色	底径1.8cm、底部穿孔径0.4cm	〃	
第116図164	鉢C 2	〃	〃	淡黄褐色	口径17.6cm	口縁部外面ハケ、他はヘラ磨き	
第116図165	底部穿孔 土器 (底)D	〃	〃	淡茶褐色	底径4cm、底部穿孔径0.6cm	外面ヘラ磨き、内面ハケ	
第116図166	鉢C 3	T18 P40	〃	淡橙褐色	口径22.2cm、底径3.2cm、器高13.9cm	口縁部外面ヨコナデ、他はハケのあとナデ	
第116図167	〃 C 1	T18 P51	〃	淡褐色	口径14.1cm、底径3.4cm、下面は凹む、器高10.7cm	底部外面ヘラ削り、他はヘラ磨き	
第116図168	〃 C 2	T18 P54	〃	外淡褐色 内茶褐色	口径17cm、底径3.8cm、器高10.4cm	内外面ハケ	体部内面、底部外面に接合痕あり
第117図169	〃 B 1	T18 P11	〃	淡黄褐色	口径19.8cm、底径4cm、器高11.8cm、有段口縁、端部は面をもつ	内・外面ヘラ磨き	外面と口縁部内面赤彩
第117図170	〃 B 4	T18 P 9	〃	淡茶褐色	口径23.4cm、底径2cm、器高9.7cm、有段口縁、底部下面やや凹む	外面ヘラ磨き、内面摩耗不明	内・外面赤彩、外面に一部黒斑あり
第117図171	〃 B 4	T18 P10	〃	〃	口径25.8cm、有段口縁	内・外面ヘラ磨き	内・外面赤彩
第117図172	〃 B 3	T18 P34	〃	〃	口径18.6cm、底径3.8cm、器高8.5cm、有段口縁	外面ヘラ磨き	〃
第117図173	〃 B 2	T18 P 9	〃	淡橙褐色	口径19cm、底径2.4cm、器高7.5cm、有段口縁	内・外面化粧土あり	〃
第117図174	〃 E 2	T18 P60	〃	淡褐色	口径13cm、胴部径12.3cm、底径3.5cm、器高13.3cm	内・外面ハケ、ただし、底部外面はヘラ削り	外面スス付着
第117図175	〃 E 3	T18 P 1	〃	淡茶褐色	口径23.5cm、底径6cm、器高21.1cm、"く"の字口縁、端部はナデによる面取り、垂れ把手を1対(2個)もつ	口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケのあとナデまたはヘラ削り	
第118図176	(底)	T18 P38	〃	淡茶褐色	底径3.2cm、肩部外面斜行列点文	内・外面ハケ、ただし底部外面ヘラ削り	
第118図177	〃	T18	〃	暗灰褐色	底径3.2cm、底部下面やや凹む	外面ハケ、内面摩耗不明	外面スス付着
第118図178	〃	T18 P37	〃	淡茶褐色	底径4.2cm、底部下面やや凹む	内・外面ハケ	
第118図179	〃	T18 P15	〃	外茶褐色 内淡褐色	底径3.9cm、底部下面やや凹む	内・外面ヘラ磨き	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第118図180	(底)	T18	密 並	淡茶褐色	底径3.1cm、底部下面凹む	外面ハケ、内面摩耗不明	外面スス、内面炭化物付着
第118図181	〃	T18 P50	〃	外橙褐色 内淡茶褐色	底径3cm、底部下面やや凹む、肩部外面斜行列点文	内・外面ハケ	外面スス付着
第118図182	〃	T18	〃	灰褐色	底径4cm、底部下面凹む	外面ハケのあとヘラ削り、内面ハケ	〃
第118図183	〃	〃	〃	淡茶褐色	底径6.2cm、底部下面凹む	外面一部ヘラ削り、内面ハケ	
第118図184	〃	T18 P20	〃	茶褐色	底径4.3cm	内・外面摩耗不明	
第118図185	〃	T18	〃	淡茶褐色	底径3.8cm	〃	
第118図186	〃	〃	〃	淡褐色	底径5.2cm、底部下面凹む	〃	
第118図187	〃	〃	〃	淡茶褐色	底径2.8cm	外面ヘラ削り、内面摩耗不明	外面スス付着
第118図188	〃	〃	〃	外茶褐色 内淡黄褐色	底径4.4cm、底部下面凹む	外面ハケ、内面摩耗不明	〃
第118図189	〃	〃	〃	灰褐色	底径2.8cm	外面ヘラ削り	〃
第118図190	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内灰褐色	底径3.3cm	外面ヘラ削り、内面ハケのあとナデ	
第118図191	〃	〃	〃	淡黄褐色	底径4.4cm、底部下面凹む	内・外面摩耗不明	
第119図192	〃	T18 P57	〃	淡黄褐色	底径3.2cm、肩部外面斜行列点文	内・外面ハケ	
第119図193	〃	T18 P40	やや不良 並	淡茶褐色	底径4cm	〃	外面スス付着
第119図194	〃	T18	密 並		底径4.2cm	〃	外面スス、内面炭化物付着
第119図195	〃	〃	〃	淡黄灰色	底径3.6cm	外面ハケ、内面摩耗不明	外面スス付着
第119図196	〃	T18 P26	やや不良 並	淡茶褐色	底径2.6cm	外面ハケ、内面ヘラ削り	〃
第119図197	〃	T18	〃	灰褐色	底径3.4cm	内・外面ハケ	〃
第119図198		T18 P22	密 並	外暗茶褐色 内淡茶褐色	肩部外面、斜行列点文、底径3.6cm	外面ハケ、内面ハケのあとナデ、底部外面はヘラ削り	〃
第119図199	〃	T18	やや不良 並	淡茶褐色	底径4cm	内・外面摩耗不明	
第119図200	〃	〃	〃	〃	底径3.2cm	〃	
第119図201	〃	〃	〃	淡橙褐色	底径1.8cm	外面ハケ、内面摩耗不明	
第119図202	〃	〃	密 並	暗灰色	底径4cm	〃	
第119図203	〃	〃	不良 並	淡茶褐色	底径3.2cm	内・外面摩耗不明	
第119図204	〃	〃	密 並	〃	底径3.4cm	外面ハケ、ヘラ削り、内面ハケ	
第119図205	〃	〃	〃	茶褐色	底径3.8cm	内・外面摩耗不明	
第119図206	〃	〃	〃	淡黄褐色	底径3.6cm	外面ヘラ削り	
第119図207	〃	〃	やや不良 並	〃	〃	外面ヘラ削り、内面摩耗不明	
第119図208	〃	〃	密 並	淡橙褐色	底径2.2cm	内・外面摩耗不明	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第119図209	(底)	T18	密 並	淡茶褐色	底径5cm	外面ヘラ削り、内面ハケ	
第119図210	〃	〃	〃	〃	底径4cm	〃	
第119図211	〃	〃	〃	淡黄褐色	底径3.8cm	外面ヘラ削り、内面摩耗不明	
第119図212	〃	〃	〃	灰褐色	底径4.4cm	〃	
第120図213	〃	〃	〃	黒褐色	底径4.6cm	内・外面ハケ、下位外面はハケのあとナデ	外面スス付着
第120図214	〃	〃	〃	橙褐色	底径4.7cm	外面ハケ、内面摩耗不明	〃
第120図215	〃	〃	〃	暗茶褐色	底径2.9cm	内・外面ハケ、下位外面はヘラ削りのあとハケ	〃
第120図216	〃	〃	〃	淡茶褐色	底径4.2cm	外面ハケ、下位はヘラ削り、内面ハケのあとナデ	〃
第120図217	〃	T18 P15	〃	灰茶褐色	底径5.2cm	外面ヘラ削り、内面ハケ	
第120図218	〃	T18 P20	やや不良 並	外橙褐色 内灰褐色	底径3.2cm	〃	
第120図219	〃	T18 P25	密 並	淡褐色	底径4.8cm、下面は凹む	外面ヘラ磨き、内面摩耗不明	
第120図220	〃	T18 P48	〃	茶褐色	底径5cm	外面ヘラ磨き、下位はヘラ削り、内面炭化物の為不明、下位に指頭圧痕	外面スス付着 内面炭化物付着
第120図221	〃	T18 P20	〃	橙褐色	底径4.6cm	外面ハケのあとヘラ磨き、内面ハケ	
第120図222	〃	T18 P34	〃	淡灰褐色	底径8.4cm	外面ハケのあとヘラ磨き、下位に指頭圧痕、内面ハケ	外面スス付着
第120図223	〃	T18	〃	暗黄灰色	底径4.6cm	外面ハケのあとヘラ磨き、内面摩耗不明	〃
第120図224	〃	〃	〃	外灰褐色 内茶褐色	底径5.2cm、下面は凹む	外面ヘラ磨き、下位はハケとヘラ削り、内面ハケ	
第120図225	〃	〃	〃	外淡茶褐色 内灰褐色	底径5.1cm、下面は凹む	外面ヘラ磨き、内面ハケ	内面に接合痕あり
第120図226	〃	〃	〃	外淡赤褐色 内灰褐色	底径2.8cm、下面は凹む	内・外面摩耗不明	
第120図227	〃	〃	やや不良 並	外明茶褐色 内灰褐色	底径5.6cm、下面は凹む	〃	
第120図228	〃	T18 P42	密 並	灰茶褐色	底径6.4cm、下面は凹む	内・外面ハケ	底面にスス付着
第120図229	〃	T18	〃	外明茶褐色 内灰褐色	底径7.4cm、下面はやや凹む	外面に指頭圧痕、内面ハケ	外面スス付着
第120図230	〃	〃	〃	外橙褐色 内灰褐色	底径5cm、下面は凹む	外面ヘラ削り、内面ハケ	〃
第120図231	〃	〃	〃	茶褐色	底径5.4cm、下面はやや凹む	内・外面摩耗不明	
第120図232	〃	〃	〃	外淡赤褐色 内灰褐色	底径6.4cm	〃	
第121図233	台付鉢 A1	T18 P31	密 良	淡茶褐色	口径11.1cm、脚部径16.7cm、透孔4径0.8cm、器高23.7cm	内外面ヘラ磨き、脚部内面はヨコナデ	体部下位以下外面赤彩文様、その他の外面は赤彩、脚部内面に絞り(痕)

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第121図234	台付鉢 A 1	T18 P21	密 良	淡褐色	口径7.3cm、脚部径12.9cm、透孔2径0.7cm、器高22.2cm	外面ヘラ磨き、内面口縁部上位と脚部はヘラ磨き	外面赤彩
第121図235	〃 A 1	T18	密 並	橙褐色	底径11.2cm	内外面摩耗不明	
第121図236	〃 A 1	T18 P19	やや不良 良	淡褐色	底径14.1cm、透孔3径1cm	外面ヘラ磨き	口縁部外面赤彩 脚部内面に絞り（痕）
第122図237	鉢E 1	T18 P40	やや良 良	淡褐色	口径15.2cm、端部はナデによる面取りと垂れ	口縁部ナデ、肩部以下ハケのあとナデ	外面スス付着
第122図238	〃 A 2	T18	密 並	淡黄色	口径11.4cm	口縁部ヘラ磨き、体部一部ヘラ、磨きが残る。内・外面化粒土あり	
第122図239	脚台付鉢 A 2	T18 P30C	〃	淡橙褐色	口径14.2cm、脚部径10.2cm、端部は面をもち、沈線一条	脚部内面ハケ、他は摩耗不明	脚部内面に接合痕あり
第122図240	〃 A 2	T18 P45	〃	茶褐色	口径16.7cm、端部はナデによる面取り、脚部径8.8cm、器高11.3cm	口縁端部ヨコナデ、体部ヘラ磨き、脚部外面上位ヨコナデ、下位ヘラ磨き、内面ナデ	内・外面赤彩痕
第122図241	〃	T18	〃	外褐色 内淡茶褐色	底径9.5cm	脚部内面ヘラ削り、他はヘラ磨き	
第122図242	器台	〃	密 やや不良	淡黄褐色	口径19.2cm、有段口縁	内・外面ヘラ磨き	
第122図243	（脚）	〃	密 並	外淡茶褐色 内淡黄色	脚部径19.2cm、有段、擬凹線4条、透孔4径1cm	外面上位ヘラ磨き、下位ナデ、内面上位ハケ、下位ナデ	脚部外面下位に赤彩
第122図244	（把手）	〃	〃	橙褐色			
第122図245	高坏D 3	T18 P29	やや不良 良	淡褐色	口径12.8cm、有段口縁、脚部径11.4cm、擬凹線4条、透孔4径0.9cm	口縁部内外面、脚部外面ヘラ磨き、脚部内面ナデ、下位はヨコナデ	口縁部内外面、脚部外面下位に赤彩
第122図246	（脚）	T18 P26	密 並	淡黄色	脚部径15.6cm、透孔4径0.8cm	外面ヘラ磨き、内面ヨコナデ	外面赤彩文様、内面黒斑
第122図247	〃	T18	〃	淡黄褐色	脚部径17.6cm	内・外面摩耗不明	
第122図248	〃	〃	〃	〃	脚部径12.4cm、透孔4径1cm	外面ヘラ磨き、内面ヨコナデ	外面赤彩痕
第122図249	〃	〃	〃	〃		内・外面摩耗不明	
第123図250	高坏A 3	T18 P13A	〃	灰褐色	口径33.6cm、脚部径18.7cm、器高25.3cm、有段口縁、端部は内傾する面をもつ、体部に装飾的な耳（(2)、裾部に2孔3組(6)の孔、径1cm、脚端部はかえしをもつ	外面ヘラ磨き、脚部内面下位ハケ	口縁端部と脚端部赤彩
第123図251	〃 A 2	T18 第2層	〃	淡黄茶褐色	口径28.4cm、有段口縁、端部は引きだしによる面をもつ	口縁端部ヨコナデ、他はハケのあとヘラ磨き	内・外面赤彩
第124図252	〃 A 1	T18 P29	〃	橙褐色	口径31.8cm、有段	内・外面摩耗不明	
第124図253	〃 A 2	T18 P14	やや不良 良	淡褐色	口径29.9cm、有段、脚部径18.6cm、端部はかえしをもつ、透孔4径0.7cm、器高21.3cm	〃	外面、坏部内面赤彩脚部内面に絞り（痕）
第124図254	高坏A （脚）	T18	密 並	淡黄褐色		〃	外面赤彩 内面に接合痕あり
第124図255	〃 A	〃	〃	淡橙褐色		〃	
第124図256	高坏A 1	〃	〃	外淡橙褐色 内淡茶褐色	口径26.3cm、有段	外面ヘラ磨き、内面摩耗不明	
第124図257	〃	〃	〃	淡茶褐色	口径24cm、有段	内・外面摩耗不明	

土　器　観　察　表

図番号 図版番号	器種	出土地点 取上げ番号	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第124図258	(脚) D 2	T18 P27	密 並	淡褐色	脚部径14.6cm、有段、擬凹線3条、透孔は2個ずつ3個所（計6）径0.6cm	〃	外面赤彩 内面に絞り(痕)
第124図259	〃 D 2	T18	〃	淡橙褐色	脚部径17.6cm、有段、透孔は2個ずつ3個所（計6）径0.9cm	〃	内面に絞り(痕)
第125図260	高坏 B 1	T18 P24	やや不良 良	淡褐色	口径26cm、有段、脚部径16cm、透孔3径0.8cm、器高18.5cm	外面と坏部内面ヘラ磨き、脚部内面ハケ	脚部内面に絞り(痕)、脚部内面に接合痕あり坏部上位赤彩
第125図261	〃 C 1	T18 P17	やや良 良	〃	（口径23.6cm）、有段、脚部径15.5cm、透孔4径1cm、（器高19.3cm）	内・外面摩耗不明	外面赤彩、坏部内面下位赤彩文様、脚部内面に絞り(痕)
第125図262	〃 C 1	T18 P50	密 並	灰褐色	口径24.9cm、有段、脚部径17.6cm	外面と坏部内面ヘラ磨き、脚部内面ハケ	外面赤彩、坏部内面上位赤彩文様、脚部内面に絞り(痕)
第125図263	〃 C 1	T18 P40	〃	〃	口径24.2cm、有段、脚部径15.7cm、透孔4径0.9cm、器高平均17.5cm	外面にヘラ磨き、脚部内面にハケがみられるが、摩耗が著しい	脚部内面に絞り（痕）坏部、脚部に黒斑
第125図264	〃 C 1	T18 P24、P26、 P29	やや不良 良	淡褐色	口径23.3cm、有段、脚部径15.5cm、透孔4径0.8cm、器高19.1cm	脚部内面ハケ、他はヘラ磨き	坏部赤彩、脚部内面に絞り(痕)
第125図265	〃 C 1	T18	密 並	〃	口径25cm、有段	内・外面摩耗不明	坏部赤彩
第126図266	高坏	T18 P 9	密 並	淡橙褐色	口径27.6cm、有段	内・外面摩耗不明	
第126図267	〃	T18 P49	〃	〃	口径27cm、有段	〃	内・外面赤彩
第126図268	〃 B 2	T18 P28	やや不良 良	淡褐色	口径30cm、脚部径16.2cm、器高20.7cm、有段口縁、孔4、径1cm	内・外面ヘラ磨き（脚部上位内面を除く）	口縁部赤彩、外面一部黒斑、接合痕あり
第126図269	〃 D 1	T18 P39	密 並	淡茶褐色	口径24cm、脚部径18cm、器高22.6cm、有段口縁、有段脚、孔4、径1cm、擬凹線4条	脚端部ヨコナデ、他外面と坏部内面ヘラ磨き	坏部外面赤彩
第126図270	(脚)	T18	〃	橙褐色		内・外面摩耗不明	
第126図271	〃	〃	〃	外乳褐色 内淡橙褐色		〃	
第126図272	高坏 (脚) C	T18 P18	〃	乳褐色		〃	
第126図273	(脚)	T18	〃	淡橙褐色		〃	内面に絞り(痕)
第126図274	高坏 (脚) C	〃	〃	〃		外面ヘラ磨き	〃
第126図275	〃 C	〃	〃	淡黄褐色	脚部径14cm	内・外面摩耗不明	

図　　版

（註：遺物番号は挿図―遺物番号で表示する）

図版　1　遺跡周辺の環境

鹿首モリガフチ遺跡俯瞰　　（縮尺１：8,000 セントラル航業提供）

遺跡の遠景（上―南より、中―東より、下―西より）

台地部調査区全景（東より）

P 7 G調査区全景（遺構検出時—東より）

P７G調査区全景（遺構検出時―西より）

P７G調査区全景（遺構検出時―北より）

第１号掘立建物跡（西より）

Ｐ７Ｇ調査区遺構群

第2号竪穴住居跡（南より）

第3号竪穴住居跡（北より）

第4号竪穴住居跡（検出前）

第4号竪穴住居跡（検出後）

第5号竪穴住居跡
（南より）

第5号竪穴住居跡
床面よりの土器出土状態

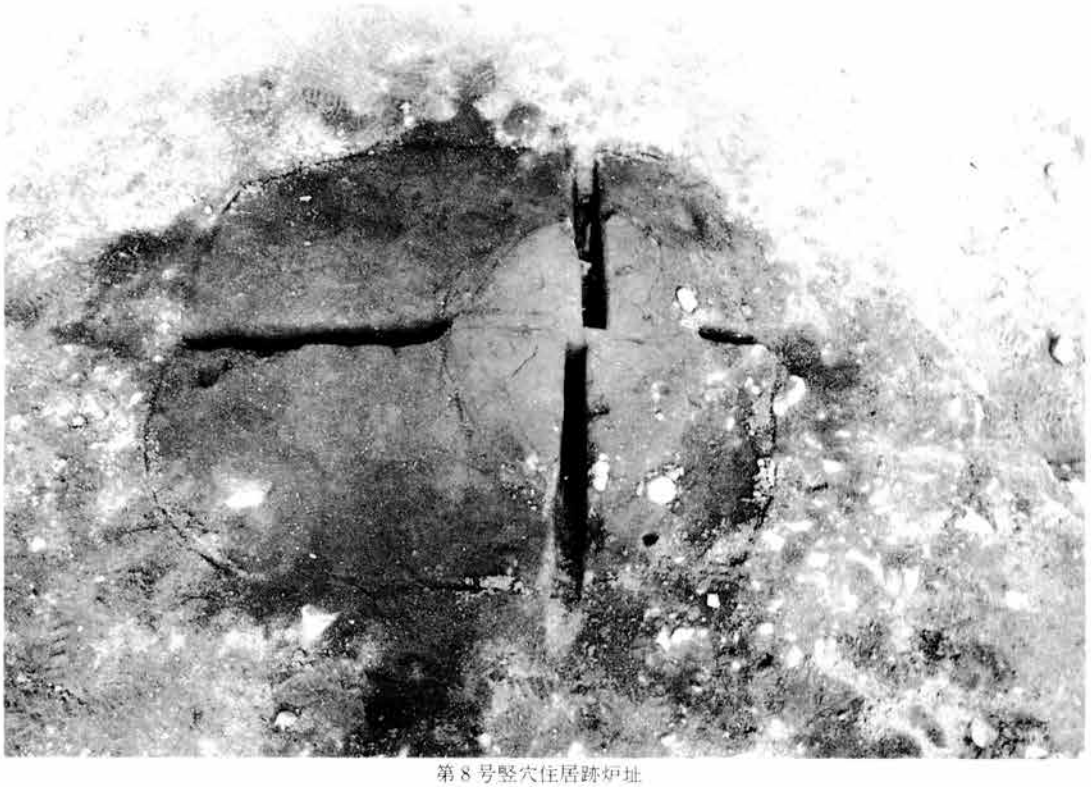
第6・7・8号竪穴住居跡（北より）

第6・7・8号竪穴住居跡（南より）

P６G調査区全景（東より）

第５・６・７・８号竪穴住居跡（西より）

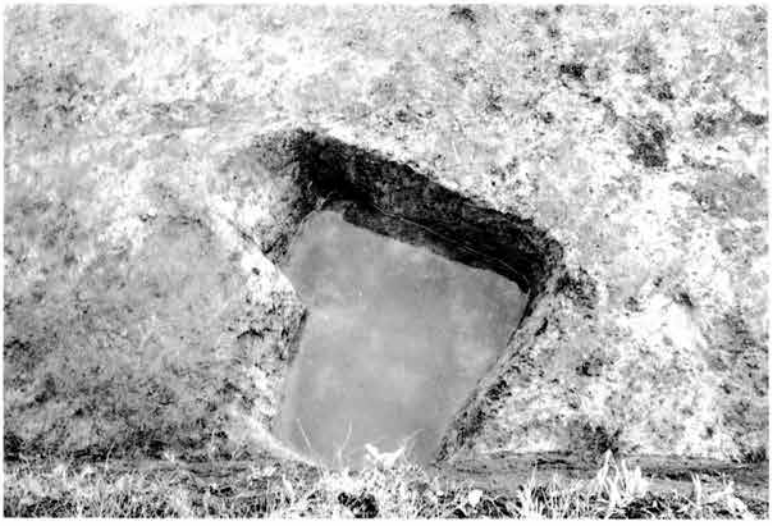
第8号竪穴住居跡石皿出土状態



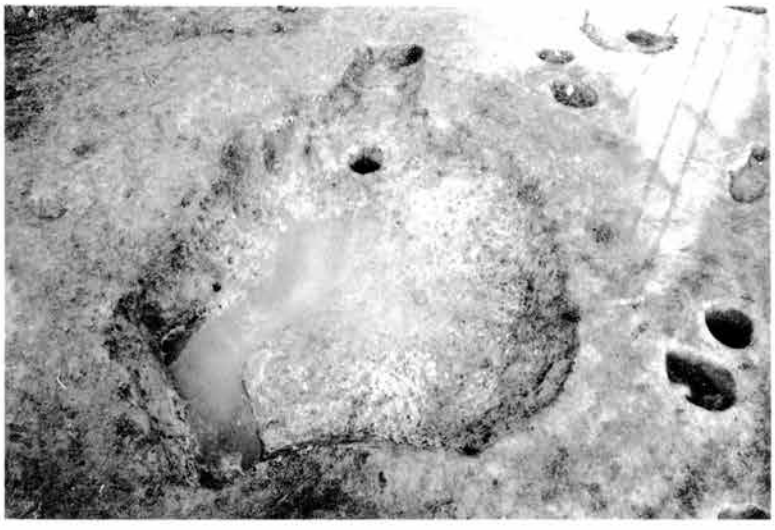
第8号竪穴住居跡炉址

図版 12　台地部調査区の遺構

第1号土壙

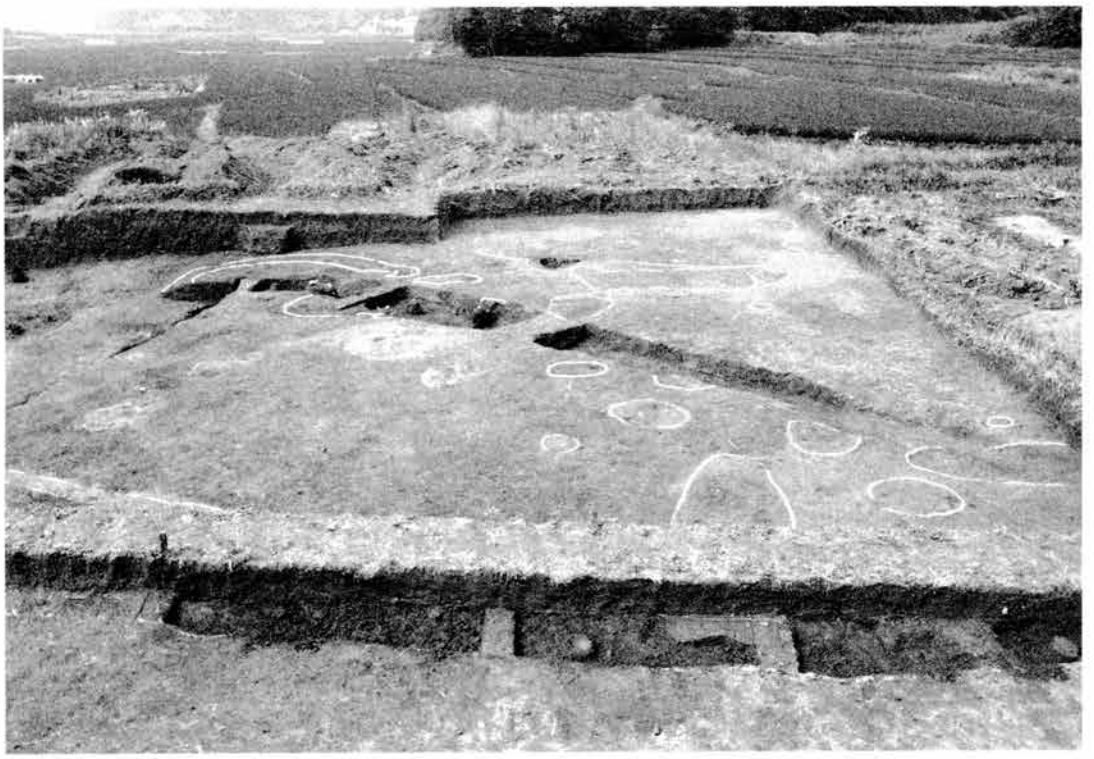


第2号土壙



第3号土壙

P７G調査区（南より）



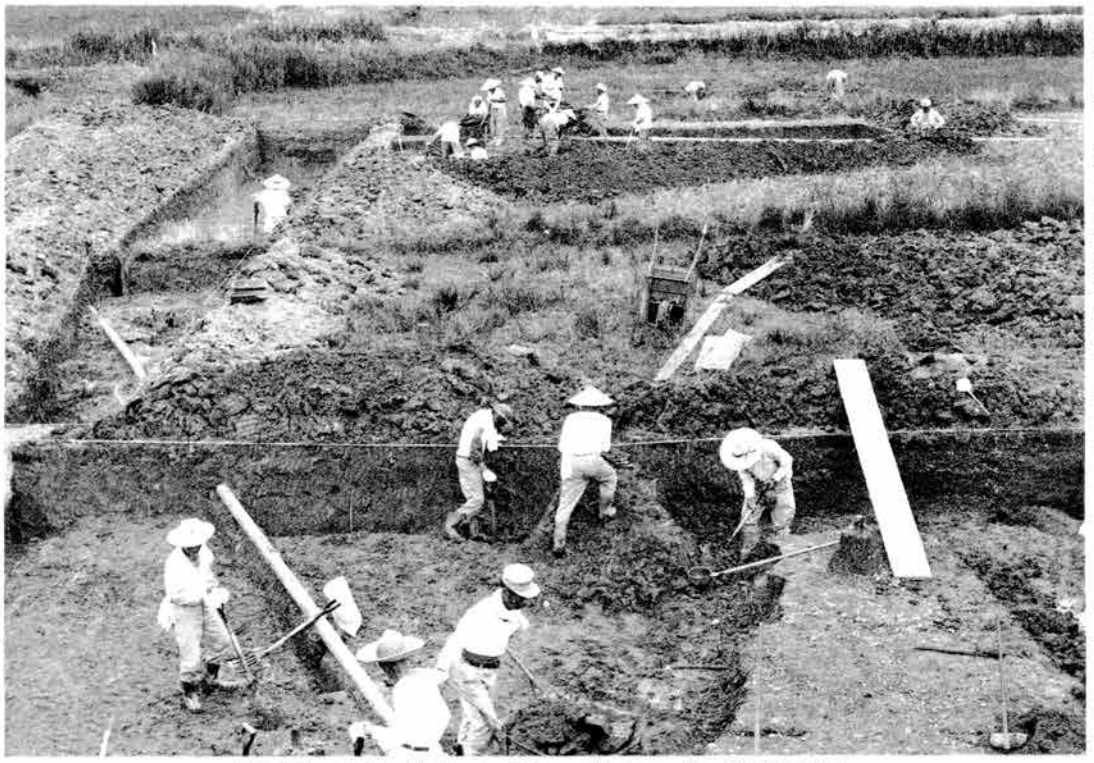
P６G調査区西側（北より）

P６G調査区西部分（南より）

P６G調査区中央部南側（西より）

図版 15 台地部調査区の遺構

P 6 G調査区
溝　跡
（上・下）



P5G区（手前）・T18区（左中）・P4G区（奥）発掘作業風景

同上調査作業風景（台地上より）

P４G調査区流路跡の発掘風景（西より）

同上流路底遺物出土状態（南側より一部）

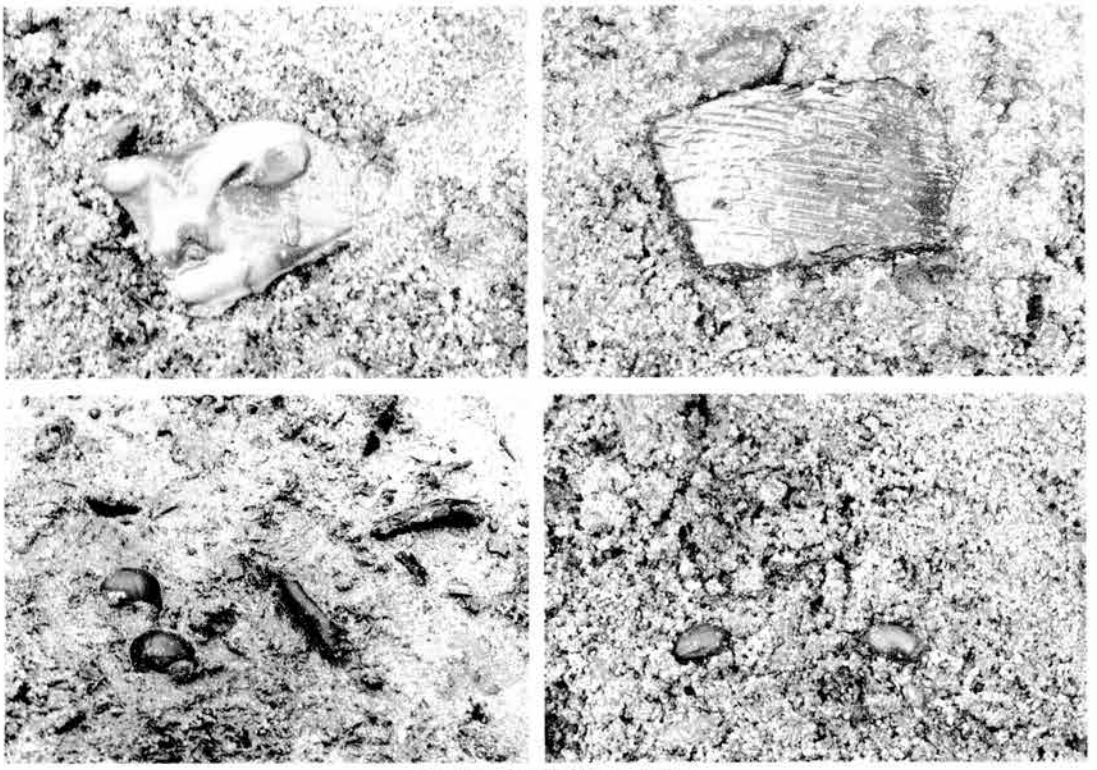
P４G調査区遺物の検出作業風景

同上流路跡底部での遺物等混在状態（西より）

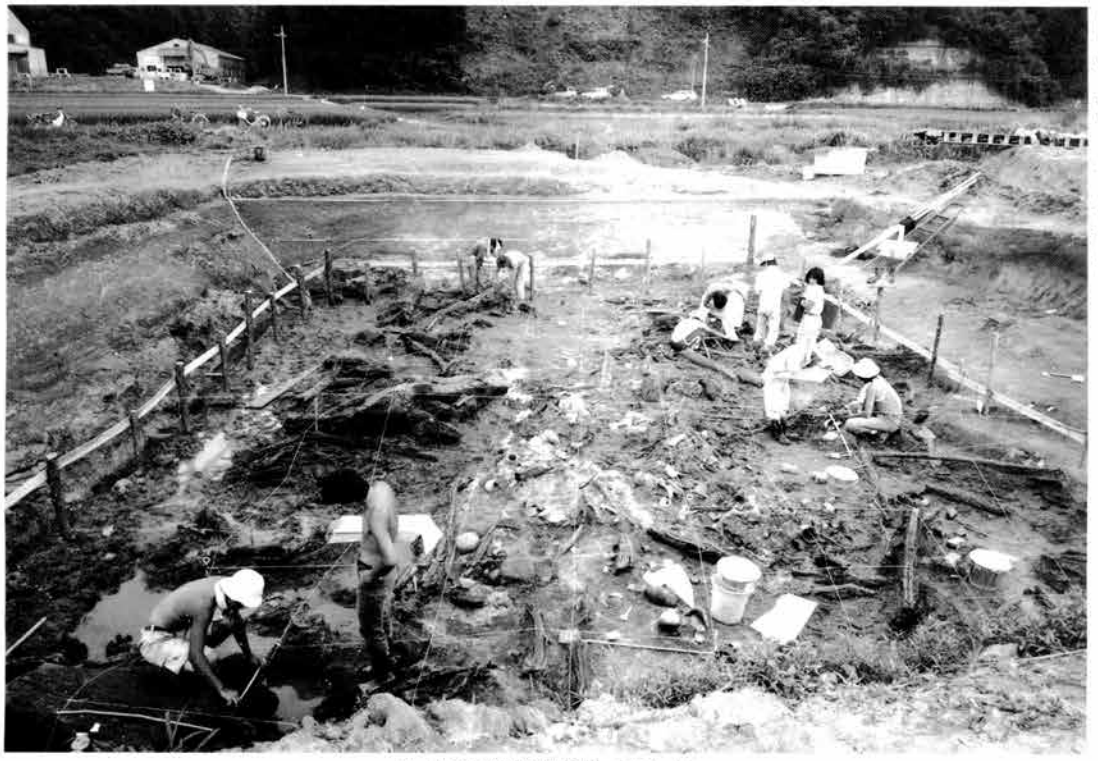
P４G調査区全景（西より）

P４G調査区全景（南より）

P４G調査区底面部の状況（東より）



P４G調査区底面部出土遺物



P４G調査区実測風景（西より）

同上流路跡土層（東壁）

同上（北壁）

P３G調査区試掘確認作業風景（東より）

P４G調査区最下部面の土壙（貯蔵穴？）

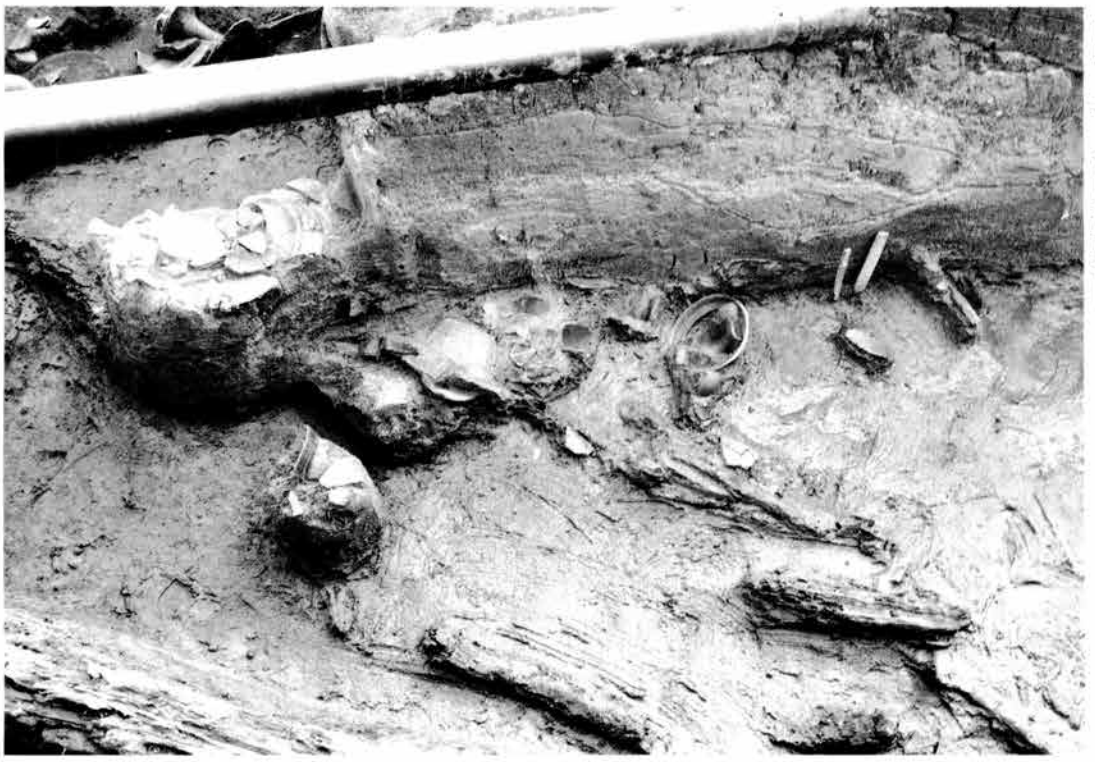
図版 23 遺跡からの遠望

遺跡からの遠望（左—北方面・右南方面）

T 18 調査区上層土器出土状態

T 18 調査区上層土器出土状態

T 18 調査区上層土器出土状態

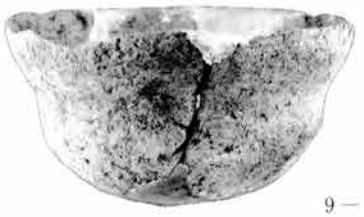


T 18 調査区下層土器出土状態

T 18 調査区下層土器出土状態

T 18 調査区下層遺物出土状態

T 18 調査区下層遺物出土状態



9－1

11－2

13－5

11－4

13－2

13－3

11－5

11－1

14－2

13－1

14－7

第２・３・４・５号竪穴住居跡出土土器

15－3

15－4

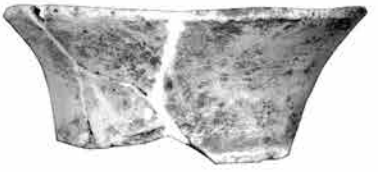
14－5

14－8

14－6

15－9

16－4



15－6

第５・６号竪穴住居跡出土土器

17—20

17—13

18—27

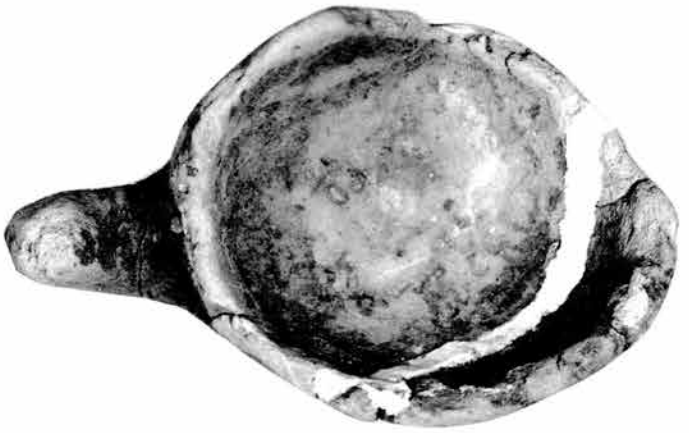
18—28

17—15

18—34

17—17

第7・8号竪穴住居跡出土土器



18—38

17—14

第7・8号竪穴住居跡出土土器

50—4

21—26

50—3

50—1

22—58

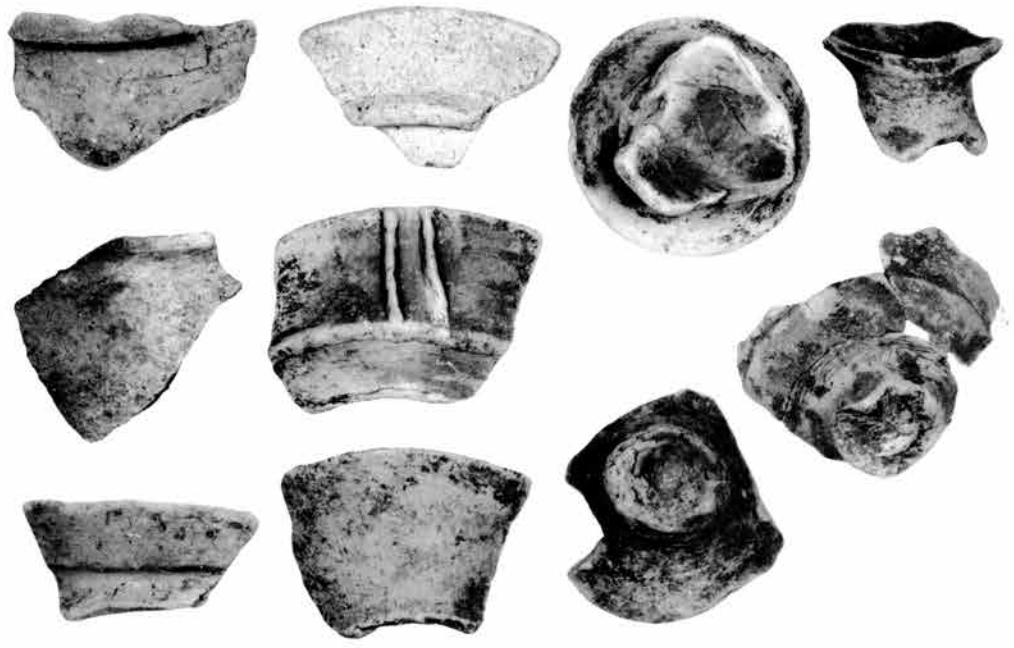
47—4

23—88

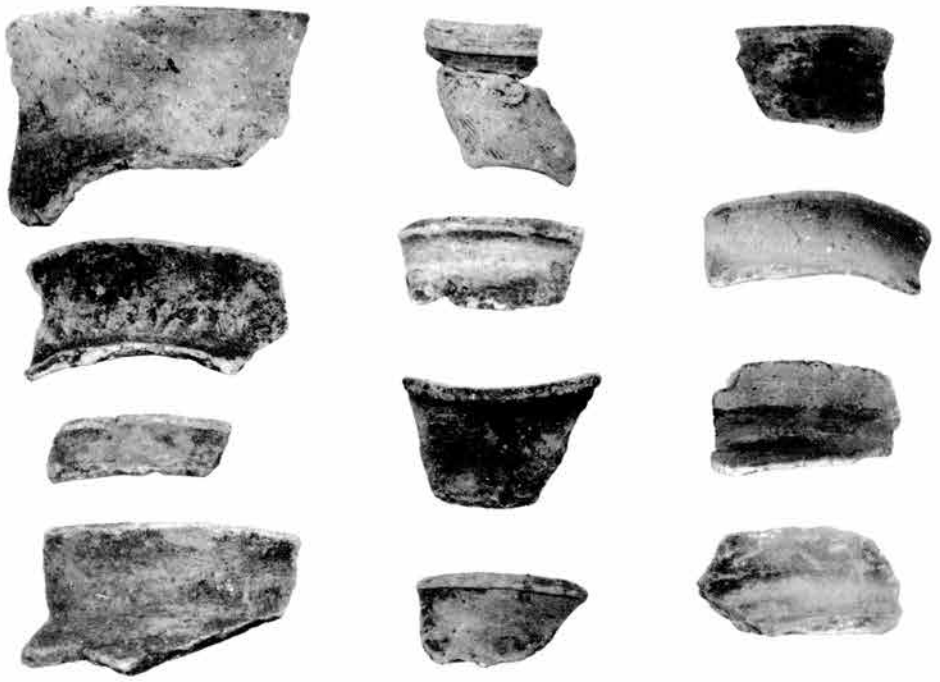
23—85

P 6 G調査区・第5号溝出土土器

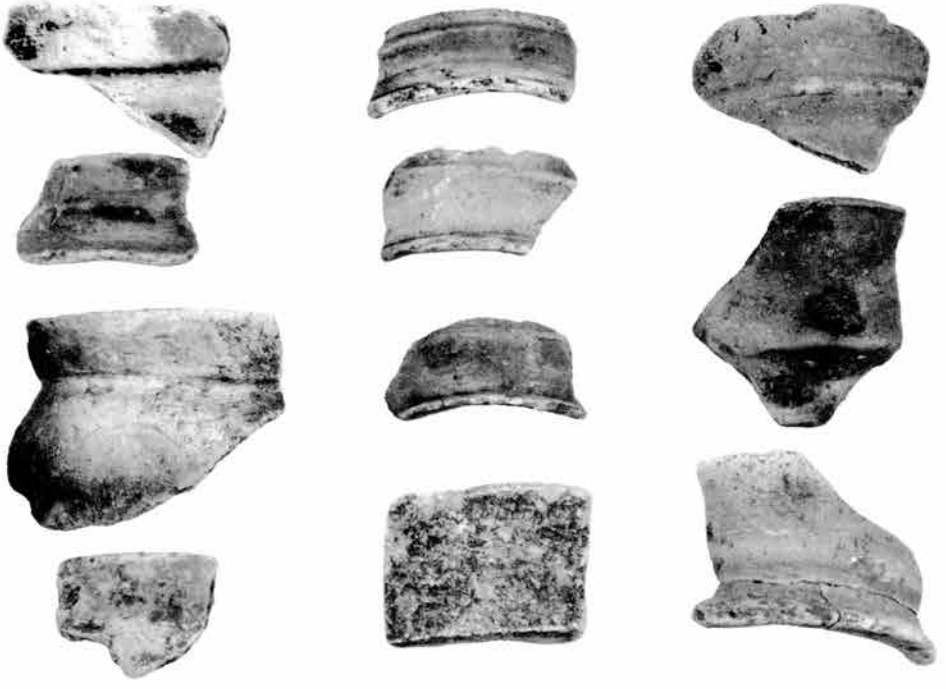
P６G調査区出土土器



P６G調査区出土土器



P６G調査区出土土器



P６G調査区出土土器

P６G調査区出土土器

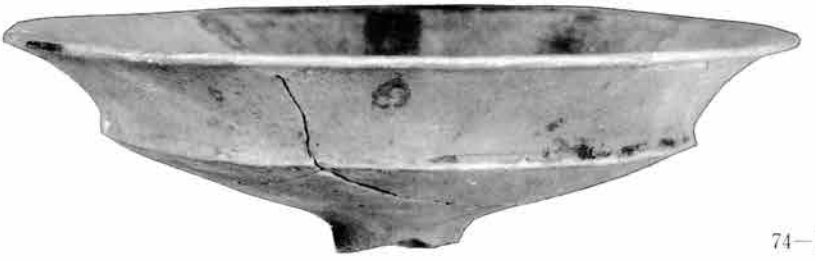
P６G調査区出土土器

P６G調査区出土土器

P６G調査区出土土器

74—102

74—105



74—105

P 6 G調査区出土土器

67—45

67—49

62—3

59—2

78—153

92—5

P 4 G調査区出土土器

68—52

68—51

61—5

81—17

P 4 G ・ P 5 G調査区出土土器

73—98

59— 7

72—92

81—18

P 4 G ・ P 5 G調査区出土土器

61—9

76—117

60—18

56—8

78—152

89—89

78—151

76—128

78—148

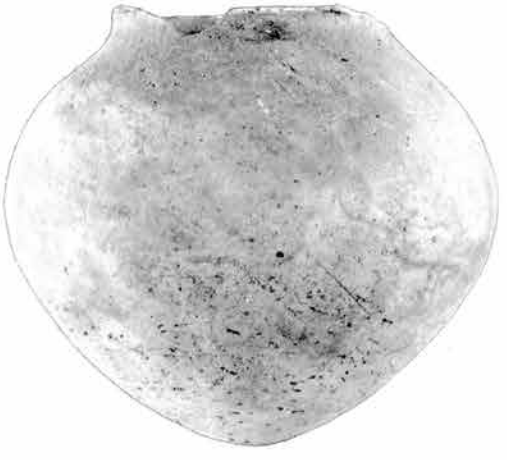
89—90

P 4 G・P 5 G調査区出土土器

71—87

71—85

87—59



73—98

93—14

87—61

P 4 G・P 5 G調査区出土土器

69—65

72—91

93—13

91— 7

87—55

72—89

72—90

87—58

P４G・P５G調査区出土土器

93—25

93—20

98—147

61—6

93—19

77—139

60—20

93—22

77—140

92—8

93—18

89—79

93—17

78—149

P 4 G・P 5 G調査区出土土器

100－2

101－14

102－21

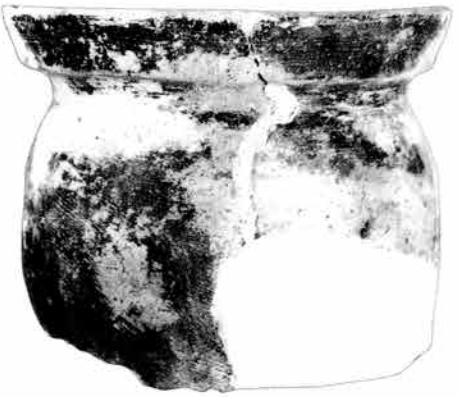
101－17

101－15

103－30

T 18 調査区出土土器

103—38

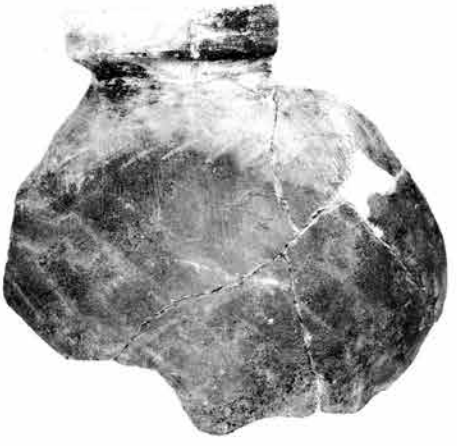


109—104

103—35

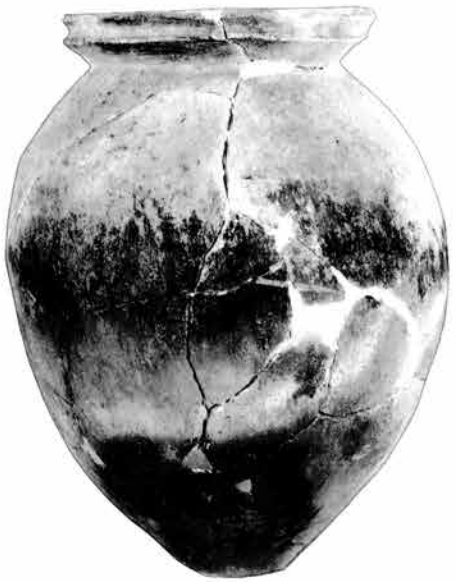
102—22

102—28



110—111

T 18 調査区出土土器



108—90

108—92

106—77

109—100

T 18 調査区出土土器

104—52

105—62

107—80

105—61

T 18 調査区出土土器

110—111

109—103

109—101

107—87

105—64

110—115

T 18 調査区出土土器

109—106

108— 97

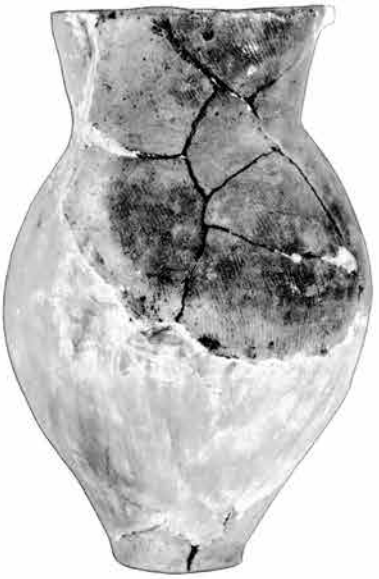
114—141

119—192

118—176

118—181

T 18 調査区出土土器



111－116

111－121

112－128

112－129

T 18 調査区出土土器

111—117

104—39

111—118

112—127

T 18 調査区出土土器

113—132

113—134

113—130

113—131

114—142

113—139

T 18 調査区出土土器

123—250

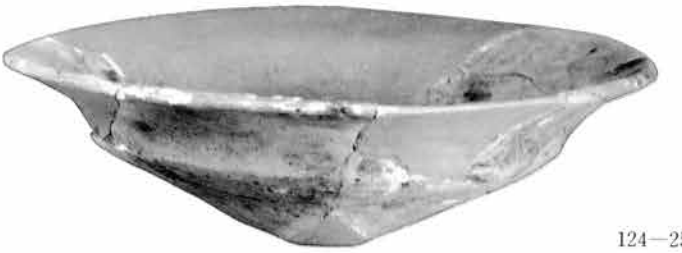
124—253

T 18 調査区出土土器

125—260

126—268

T 18 調査区出土土器



124—252

125—263

125—264

T 18 調査区出土土器

126—269

124—258

125—261

122—245

T 18 調査区出土土器

121—233

121—234

121—236

122—240

122—239

T 18 調査区出土土器

117—175

117—175

117—169

117—174

117—172

117—171

117—173

117—170

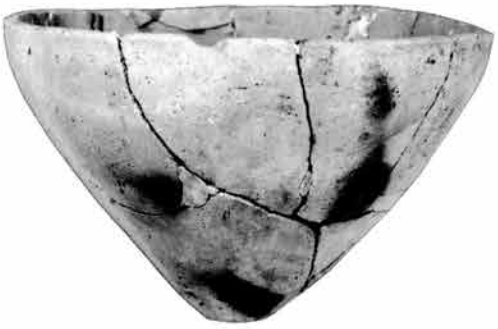
T 18 調査区出土土器

116—167

115—151

115—148

116—160



116—157

116—158

T 18 調査区出土土器

鹿首モリガフチ遺跡
能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書II
発行日　昭和59年3月
編　集　石川県立埋蔵文化財センター
発行者　金沢市米泉町4丁目133番地
印刷者　㈱橋本確文堂
金沢市大手町2番35号